女學世界



第八巻第十六號

博文館發行

美顏水と花の顏





女學世界第八巻

第拾六號目次



新製

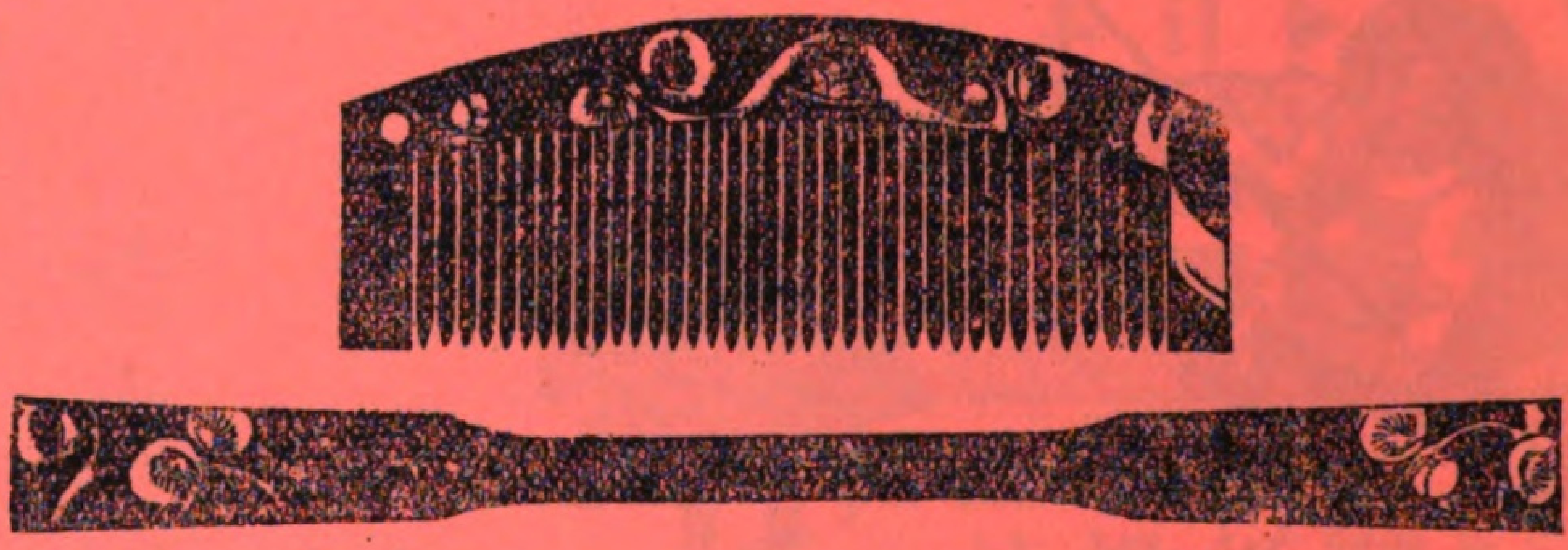
御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出でゝことしの冬こそ



◉お顔の荒る氣遣ひ御無用に候



光琳模樣御櫛笄

光琳の畫風を慕ひ當店意匠部にて汎く集めたる中よりうつりよき模樣を蒔繪又は貝象嵌にて優美なる御櫛笄に造り上げ初春の御挿料に進めまいらせ候

○一組の價　八圓　拾圓　拾五圓　貳拾圓　貳拾五圓　參拾圓

東京　京橋南傳馬町

大西白牡丹

成功紀念大賣出し

十二月一日より三十一日まで新形流行品大賣出し中は成功紀念の爲め紀念品を贈呈仕り候詳細は東京各新聞に廣告仕候間御一覽の上賑々敷御用向の程伏て奉願上候

○弊店雜誌　よそ弦ひ　第二卷出來　郵稅四錢御送附次第贈呈仕候

女（いの一）


◉東京樂器製造所製
オルガン（金拾八圓以上
◉山葉製オルガン（金拾八圓以上）
ピアノ（金参百卌圓以上）
◉鈴木製ヴァイオリン（金貳圓以上）
◉獨逸國直輸入ピアノ（金五百圓以上）
オルガン（金参百五拾圓以上）ヴァイオリン（金八圓以上）同上附屬品吹奏樂器
絃樂器各種
◉舶來樂譜
◉獨乙國製樂器
新荷着
目錄御入用の節は往復葉書にて御申越次第御送可致候
東京市本郷區湯島切通坂町二十七番地
南江堂樂器部
電話下谷一三三〇番　振替貯金口座一四九番

(その二)

到る處に吹聽せらるべき

◀日本一の女學雜誌▶

女子文壇の大發展

▲來る新年第一日を以て創刊五年第壹號を發行する女子文壇は紙面大革新と大擴張を實行す（創刊は去る卅八年一月なり）

▲壹號出る毎に全國の女子諸君の大歡迎を受けつゝある女子文壇は紙革新と共に更に深厚なる信用を博すべきは疑ひを容れず

▲紙數は大いに增加さるべし內容は愈よ充實さるべし、讀むべき分量と書くべき範圍は益々多かるべし

▲投稿の自由と選評の嚴正と懸賞の確實とは世擧つて女子文壇を第一位に推す

▲若き婦人の唯一の機關として文學と家庭の調和者として雜誌界無二の特色を存す

▲世の父兄たるもの子女の品位を高め、趣味を養はしめんとするには女子文壇を讀ましむるを以て最も好策となすべし

▲女子文壇は學校以外に於ける善き感化、美しき感化、淸き感化を與へんことに主力を注ぐ

▲女子文壇が中心とする文學的記事の如きも新年號以後の分は更に多方面に涉り、常に時流に擢んづるの用意を以てすべし

▲內容の實、體裁の美、相俟つて大革新を行ふと共に女子文壇の定價は次の如く改正さる、之を其實質に比すれば矢張此の種雜誌中の最も廉なるものなり（論より證據現品に就て試讀あれ）

女子文壇定價改正

定期發行（毎月一日發行）

○壹冊（壹回分）定價金拾五錢…郵稅壹錢五厘 合計金拾六錢五厘
○三冊（三月分）同前金四拾參錢五厘…同四錢五厘 合計金四拾八錢
○六冊（半年分）同前金八拾四錢…同九錢 合計金九拾參錢
○十二冊（壹年分）同前金壹圓五拾六錢…同拾八錢 合計金壹圓七拾四錢

臨時增刊（二、五、八、十一月）

○壹冊（壹回分）定價金貳拾錢…郵稅壹錢五厘 合計金貳拾一錢五厘
○二冊（半年分）同前金參拾八錢…同參錢 合計金四拾壹錢
○四冊（壹年分）同前金七拾貳錢…同六錢 合計金七拾八錢

（郵券代用壹割增）

女子文壇社の郵便振替貯金口座第壹七貳九參

發行所 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社 賣捌 全國各書店

女（いの三）

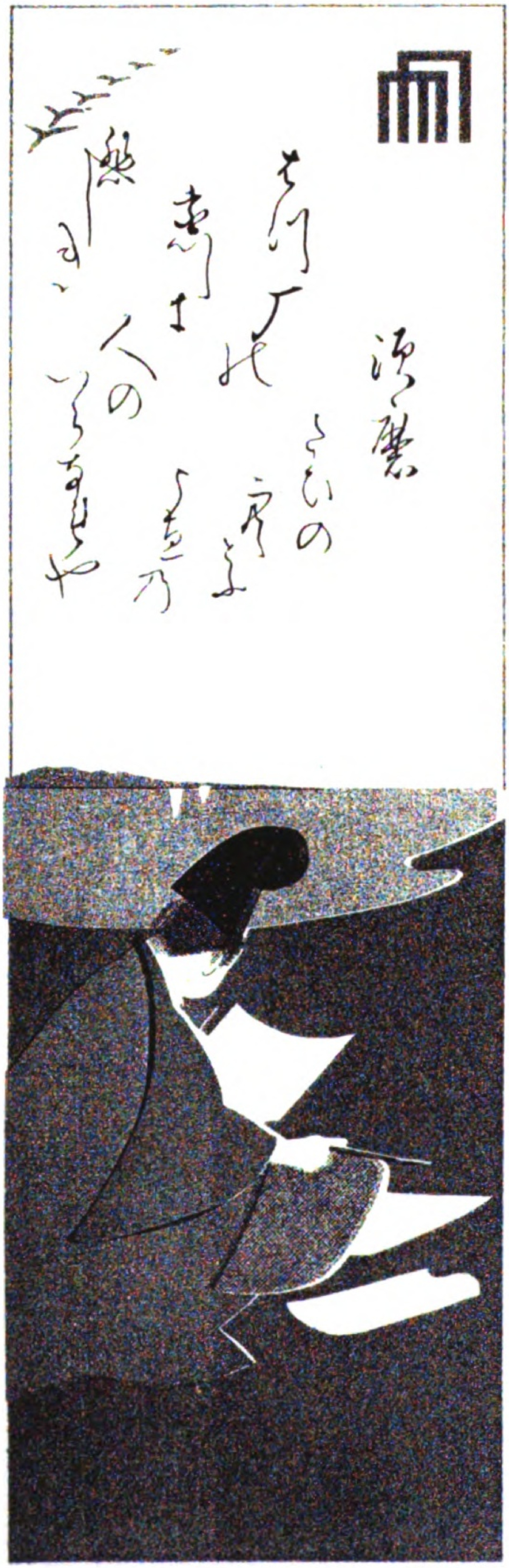

THE ゼム GEM
懷中良藥
衛生家必携
姉妹の作文
霜、氷、十二月は寒い。年の終、忙しい月。冷い空氣、風邪を引く、咳が出る、喉が痛む、聲も嗄れる『ゼム』を始終含めば、其を防ぎ、氣分が毎時も爽か。辛い此月、『ゼム』で凌ぐ。
「年子月子合作」
主効
◎氣分を爽にす ◎惡疫を豫防す ◎聲を美くす
◎消化を良くす ◎頭痛眩暈 ◎氣欝胸痞
◎食傷水傷 ◎口熱口臭 ◎惡醉宿醉
◎煙草害毒 ◎息切渇 ◎時候傷
◎船車醉
ゼム定價 七十五粒入十錢 百六十粒入廿錢 四百粒入五十錢 九百粒入一圓 容器入 二十錢

女(いの四)

花ちる里



須磨



一條成美画

星野天知書

●婦人の涙

（其原因は男子の罪なり）

近來何處の婦人科醫院にも常に澤山の病婦を見るが其最も多き病狀を聞くに下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顔色蒼白にて白澤なく從前の病歴を問へば始め必ず「せうかち」に罹りたりと云ふ凡そ是迄に局部の煩ひに經驗ある婦人は迚も一筋縄の治療で全治せぬ事と心得べきなり其病名か子宮病血の道などに云ふ程でも皆な病毒の爲めなれば現に永引きて治らぬが第一の證據である故に本病毒及梅毒・痳病・僂麻質斯等を根治するには必ず唯一丸に限るなり尚其病理、原因、病狀等を精密に調査し最も親切に調劑したる唯一丸の如きは世上未だ其類例なし而も其主藥は現世唯一の驅毒藥なれば實に面白き程効力あり

●根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓（內地遞送無料）

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上 藥劑師 **中西莊吉**（振替貯金口座千五百番）

最上醬油 キハク印

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハクスキハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

（ろの一）

女(ろの二)



ムレー及ランマン製「フロリダ、ウオーター」はハンカーチーフに撒らし又は化粧、沐浴等の使用に向つて最も高尚適當なる上品にして香氣優雅常に心身爽快を感ずるを以て洽く世界各國に高評を博せる香水なり

本品は芳香馥郁なる花卉及薫氣を蒸溜して採取せる純粋の原料を精選して釀造せるものなれば四時其香氣を變ずるの憂あることなし、是れ本品が殆ど過去一百年間貴紳淑女間に其聲名を認識せられ世界的流行の高等化粧品として賞讃愛用せられし所以にして決して偶然に非るなり



近時本品の成効を羨み粗悪品を僞造し廉價を以て之を市場に販賣せんとする奸商輩出し本社が古來貼用し來れるレッテル即ち蝶と小鳥とが花の飾環に息ひ中央の花壇上に噴水奔騰し右方には一青年の音樂を奏し左方には一少女の小鳥と遊べる等の繪畫を僞造し且つ英文にて印刷しある「フロリダ、ウオーター」、ムレー及ランマン、紐育市ランマン及びケンプ特製」等の文字の配置を巧みに摸倣するに至れり

之に依つて本社は前記の弊害を防がんが爲め玆に圖を以て示せる如く「ランマン及ケンプ登錄商標」と記せる白色のレッテルを各瓶毎に貼付せり御購求の際は深く御注意あらんことを希望す

本社製造の「フロリダ、ウオーター」は日本帝國の各都市に於ける化粧品販賣店及び西洋小間物店等にて販賣す

（ろの三）

年末年始の御進物に適す



大拾五錢
小拾錢
送料貳錢

『梅の花たが袖ふれし匂ひぞと
春やむかしの月にとはゞや』

この昔の名歌に因て造りたる、いとも高雅の匂袋なり

本品の一度世に出づるや東京、大阪、京都、神戸の名ある呉服店より多大の御注文に接し且つ取次販賣に快諾せられたり。

本品は優等なる芳香原料の外に最も有効なる殺菌、防腐、及、防蟲等の藥劑を配合せる故に寄席、劇場、汽車、汽船などの旅行、簞笥の抽斗、長持、書函、骨董等の間に用ひて大なる効あり。

東京、大阪
京都、神戸
各本支店

三越呉服店　白木屋呉服店　大丸呉服店
松屋呉服店　十合呉服店　高島屋呉服店
柏原呉服店　竹田呉服店　ぬたや呉服店
竹馬呉服店　報知社代理部

發賣元　象印齒磨本舗　安藤井筒堂
大阪代理店　藤森源之助

婦人の毛髪は如何にして黑く長く且つ光澤を出さしむべきか

御婦人方の髮の毛を如何にせば烏の濡羽色の様に黑く光澤あり且つ長く房々とすることが出来るでしようか。之にはどうしても毛髮の營養となるべきものを用ひなければなりません。そして毛髮の營養となるべきものは何であるかと申すと純粋の椿の油で精製しましたビユテーオイルが一番よろしいのであります。之れは村井弦齋先生が嘗て婦人日常生活法に詳しく書いてあります から諸姉が疾くに御承知の事と思ひます

價は壹罎四拾五錢（送料八錢）で少しく高い様で御座いますが御婦人方の毛髮を黑く長く光澤ある様に致すのには此のビユテーオイルが我國で一番よいと云ふことは確く信じて居ります

女學世界愛讀諸姉に限り特に定價の五分引にて差上可申候

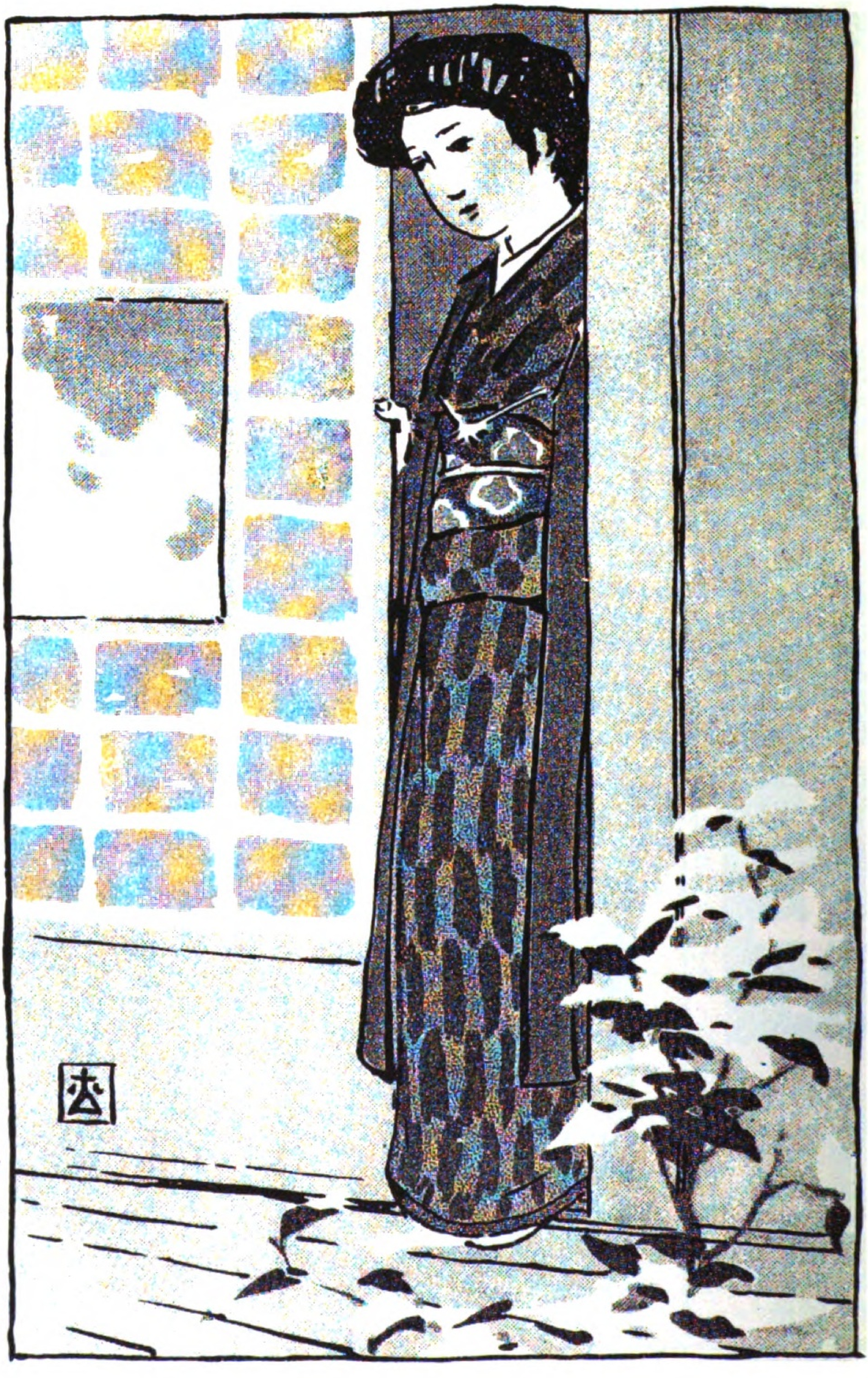
東京市日本橋區蠣殻町
水天宮前象印齒磨本舗　安藤井筒堂

日本橋區堺町　井筒屋



女(ろの四)

初雪



松林千里筆

登録商標



アクチナ

主治効能◎眼●耳●鼻●咽喉●船暈●汽車暈にて苦む人は本具のあるを知らぬ人なり

（説明書無代進呈）

一個を備へ置けば家族應用の便あり

●本具は携帯至便なれば何れの場所にても用ひらる

◎醫藥にて治せざる病は如何にすれば全治するか！

登録商標



サンデン電氣帯

主治効能
●神經衰弱諸症●神經痛諸症●中風●リヨーマチス●脚氣●脊髓炎●糖尿病●遺尿●胃擴張●胃下垂●消化不良●常習便秘●慢性腎臓炎●男女生殖器虚弱●不眠症●貧血●憂鬱●ヒステリー●月經不順……其他男女共各病後の衰弱

（説明書無代進呈）

懐中電燈

本具は卷煙草入の如く最も小形にして重量の輕きと携帯に便なるは本品の特色なり特に本品に裝置しある電池は何人にも容易く取替へ得らるゝが故に永久使用に耐ゆ。

定價最上金四圓、上等金參圓半、普通品金參圓、送料各拾貳錢　替電池各八拾錢、送料八錢

探見電燈

本具は圓筒形にして他の燈火の如く暴風雨の場合にも滅火するの憂なく旅行用其他寢室用として便利なるは勿論夜間最も安全にして輕便なる燈火を要する場合には最も妙本具あれば蠟燭の必要なし

定價大形最上金四圓半、同上等金四圓、同普通品金參圓半
小形最上金四圓、小形上等金參圓半、小形普通品金參圓
送料各拾貳錢、替電池各八拾錢　送料八錢

弊商會發賣の普通品と雖光力充分にして決して他の安價物と同一のものにあらず續々御注文を乞ふ
但し最上は耐久力永く普通品は稍劣る

◎營業品目

●電燈●電話●電鈴●表示機●電球●避雷針●探檢電燈●懐中電燈●電池類●其他一式●醫療器械●製糖分析器具一式●電球は各種共製造致居候間特約販賣仕候

本店　東京京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）電話新橋四一二二番
支店　大阪市東區心齋橋筋南久寶寺町四の七五
支店　横濱市相生町四丁目六十三番地　電話横濱一九三一番

サンデン電氣商會

（はの一）

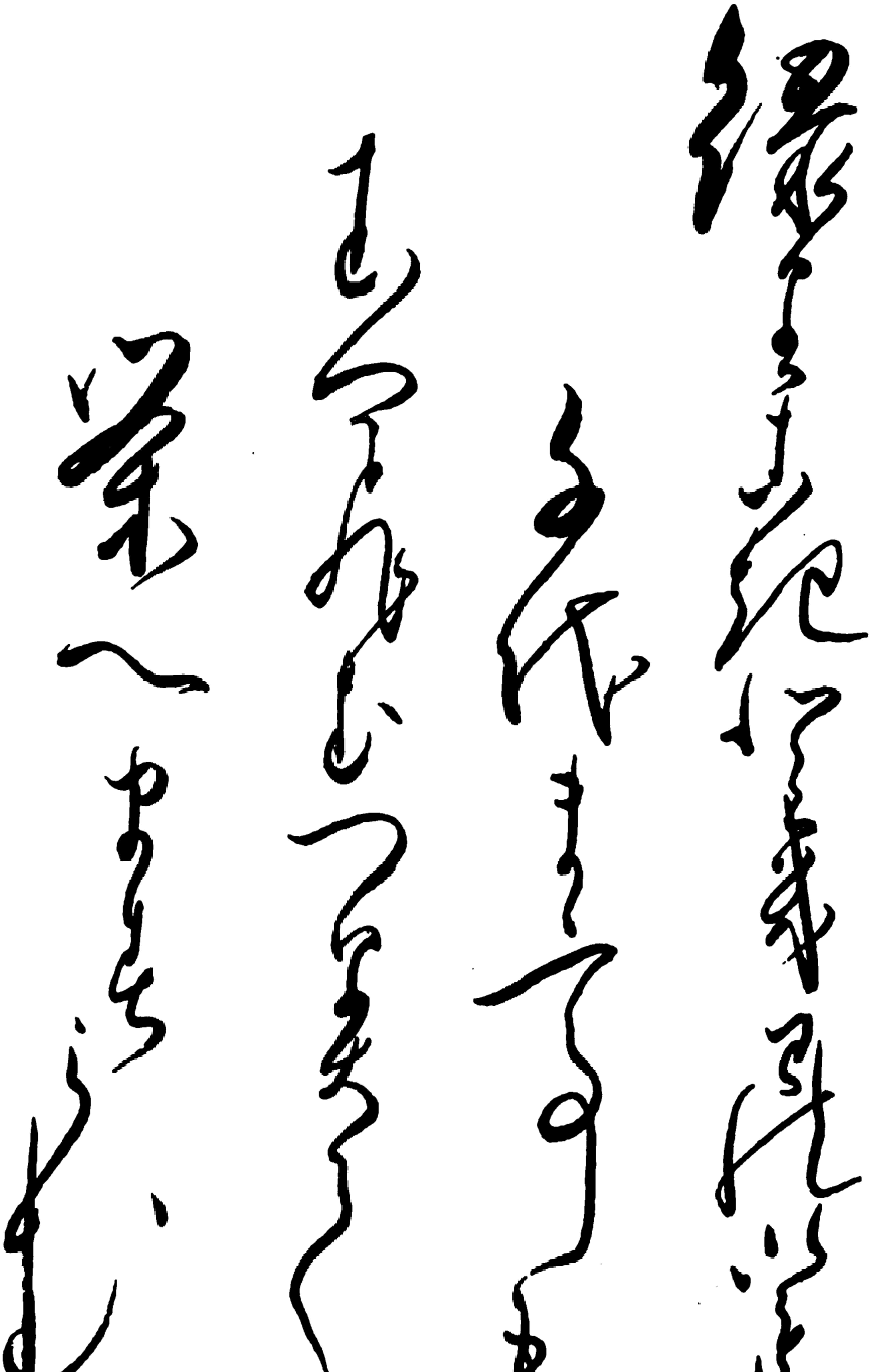
女（はの二）

女（はの三）

茶の花



河崎蘭香筆



澤口富士子

女(にの二)

家庭日常の寶典

◀博文館女學世界編輯局編纂▶

家事整理の墨繩

明治四十二年 家庭日記

總クロース金字入頗美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅拾錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規模を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

▲收入明細表
▲支出日計表
▲出納計算及殘高表
▲出納分類表
▲家計分類出納表
▲貸附契約一覽
▲保險契約一覽
▲諸關係掛金一覽
▲租稅一覽
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戸籍表
▲崇廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要目錄
▲衣類目錄
▲財產目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通俗日誌
▲親族名簿
▲傭人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

製本出來

附錄

家計安全法（月收百三十圓、七十五圓、五十圓、四十圓、三十圓にて見積りたる生活費の内譯）
● 交際の心得
● 音物贈答の栞
● 見舞の心得
● 物品の整理
● 火の要愼心得草
● 日用心得草
● 庖厨百事顧問
● 臺所の整理
● 料理節用
● 四季魚菜の眞味
● お彼岸の配りもの
● 臺所道具の取扱
● 飲用水の注意
● 一週間の仕事配り
● 子供の衛生
● 婿えらびの標準
● 嫁えらびの標準
● 妻の本領
● 美顏法二十五則

新案歌占ひ

▲本書內容の一斑▲

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜干支を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、食品、花暦の各項を抄記して月令の栞となし、次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき約二百頁に渉る家庭重要記事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼れて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識にして其他これに必要なる諸規則をも網羅せり。



家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり、秩序あり、教訓あり、趣味ある日記にして、眞に一家の重寶たる實質を具備せり。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（その二）

本年最終の雑誌界を飾る本誌の大盛装

記事親切

婦人世界

材料平易

十二月一日發行 毎月一回 三巻十四號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

◎結婚式は如何に改良すべきか……村井弦齋

◎子供を殘して離縁された所感

◎無邪氣な子供の言葉……長野女學校長 波多市松

◎本野大使夫人結婚當時の珍談

◎新年の重詰料理……弦齋夫人

◎婦人服の風に捲れるのを防ぐには如何にするか……女子高等師範教授 谷田部順子

◎私は斯くの如くして苦心して我が子を養育しつゝあり……陸軍中佐小山秋作氏夫人 小山みつゑ子

◎精神病の婦人を看護して全快させた實驗……愛生看護婦會長 金子貞子

◎私の長男は實子でありながら何故に母に親しまぬか……津山瀧子

◎最も感心した應接の上手な婦人……ドクトル川瀬元九郎氏夫人 川瀬富美子

◎子供が出來てから良人の性質は一變せり……宮西たけ子

◎跡見花蹊女史と武村耕靄女史……川村文芽

◎岩田帯についての注意……博士榊順次郎

◎齒の病氣はなぜ起るか……志村誠應

◎小説 人妻 ◎古今文藝

◎我が子の嫁に彼女を選びたるは何故か……鳩山春子

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (振替口座參貳六番)(電話新橋八七四番) 賣捌全國書店

女(にの三)


マツニホン
ウメニホン
改良醬油
お臺所の改良を念とせらるゝ奥様方は皆日本醬油の愛用者なり
市内及び全國各酒醬油店にて販賣致居候
日本醬油釀造株式會社
東京深川小名木川通
ヒシニホン
フジニホン



日高嶋助筆

冬の日



加藤南山筆


發賣御案内
最新式造花用鐵線
如何に本品の斯用として好適せるかは御試用の上
知り給ふべし郵券貳錢封入申込み次第直送す
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
美術造花材料商 天野卯兵衛
特電話浪花一六四三番
電信略號（アマウ）
振替口座四九七〇番
營業案内御入用なれば郵券四錢封入御申込みあれ

（ほの一）

安藤謙吉君著

●増訂福引集 附り歌かるた法 全一冊

洋裝全一册小判百四十四頁
正價拾貳錢 郵税貳錢

石橋思案君序文
加野孤雁君編

●新案福引種本

正價拾八錢 郵税四錢

本福引集は新案ハイカラ形裝釘優美にして滑稽の粹頓才の妙を盡したる數百題の福引を網羅し加ふるに珍趣向の一トロ噺を鼇頭に收めたる趣味多き種本にして一度之を繙けば春風駘蕩の感あらしむ。

坪谷善四郎君編

●日本女禮式大全

全二册 和裝美本蒔繪函入
正價壹圓廿錢小包料拾六錢

お正月は別けて禮式を貴びますよ、早く本書を讀んで置いて不行儀と呵られぬ様になさい、又おつかい物としてこんな結構なものはありません。

佐々木信綱君校註

●百人一首講義 全一冊

洋裝中判紙數三百頁
正價貳拾錢 郵税四錢

定家卿撰

●錦葉百人一首 全一冊

和裝大判錦繪刷美本
正價貳圓 小包料拾五錢

下野遠光君著

●百人一首略解 全一冊

洋裝菊判紙數百七十八頁
正價拾五錢 郵税四錢

販賣用電話本局二千六百廿番
東京本町博文館
振替貯金口座第二百四十番

女(ほの二)

女（ほの三）

女(ほの四)

德川慶久公と新夫人實枝子御方





名家の令孃



山本海軍大將令孃



加藤海軍次官令孃

毛髪を黒く長くふさくする
椿油にて精製したる
少女世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油



毛髮の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衞生大家及び毛髮を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらるる處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髮の營養に必要なる藥劑を加へロースバイオレットの高貴なる香料を以て彼の悪臭を防ぎ毛髮の助育を専一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店
電話西千六百壹番
振替口座六〇八六番

東京販賣所
日本橋區通鹽町 佐野大和屋
日本橋區横山町 森本支店
日本橋區横山町 脇田盛眞堂
神田區橋本町 松井號支店

色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる
兩種共一瓶定價各卅錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あること發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顔劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日焼け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり


御料
畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橋町四丁目
丸見屋商店
發賣元
ねり髮
御園白粉
水髮
御園白粉
こな髮
御園白粉
浮粉化粧クレーム
御園の蕾
高等化粧水
御園とき水
御顔あらひ粉
御園なでしこ
濃厚化粧水
御園四季の花
高等香水油
御園香油
高等練香水
御園香水
高等ほみがき
御園齒磨

(への四)

明治母の會英語部



月かげ



上村松園女史筆



近來お小供衆の新年用禮服は洋裝が年一年に流行するやうになつたのは蓋し洋裝が優美にして高尙に且經濟的なるが爲めでもありませうが斯く服裝が進步するは東洋文明國たるに耻ざる所と歡喜に堪えません而して弊店には澤山出來合が揃へてありますから御來店御一覽下されたく又東京市内御注文のお方は電話本局二九〇一番端書ならば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下さらば雛形と切れ地見本とを持參早速御伺ひ御容姿に恰好いたすやう調進いたすべく候

新年用男女小供洋服

出來合澤山あり

地方の御方は御年齡と豫算とを御知らせ下さいますれば最も流行なる形で作つて御送り致します。

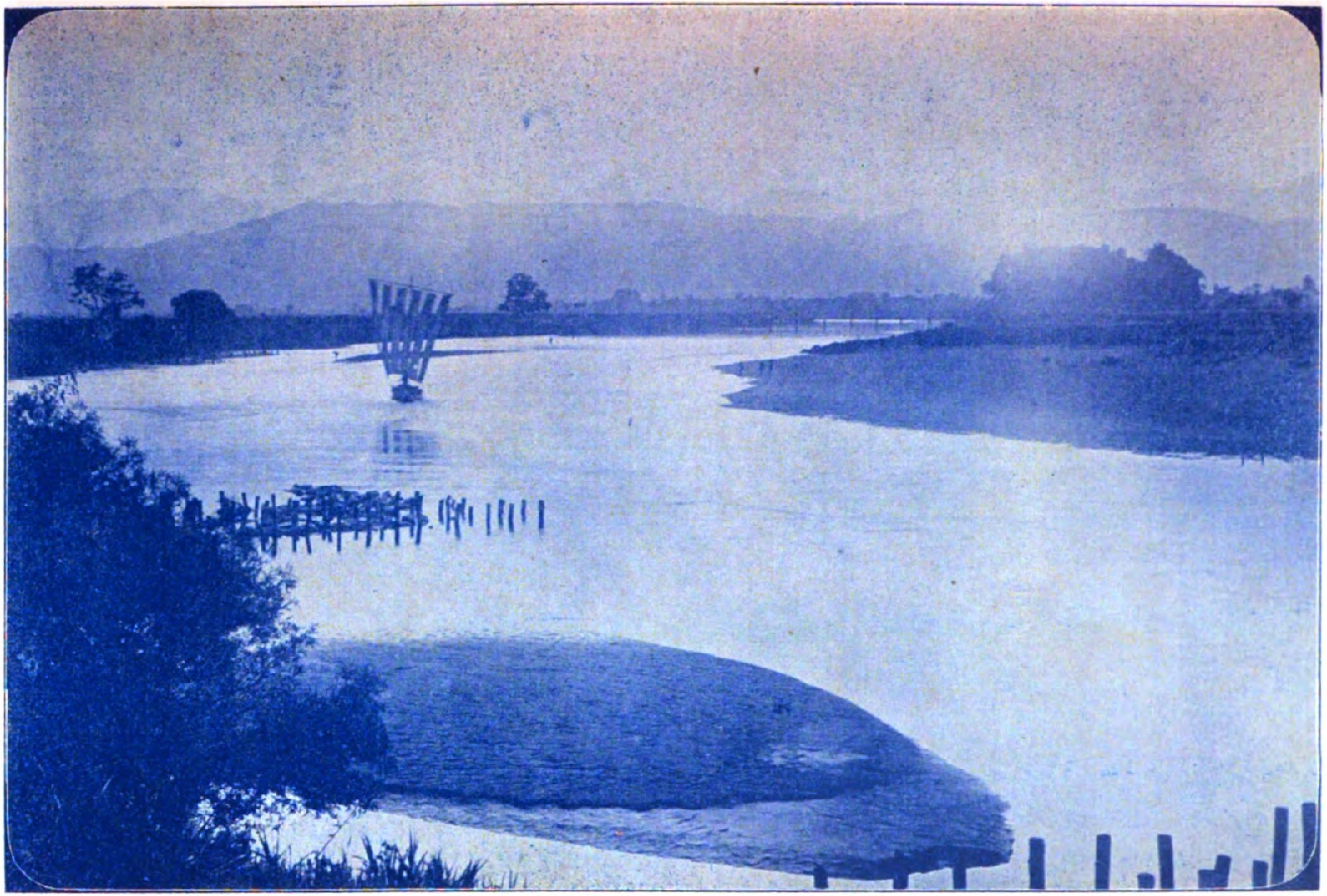
中野屋洋服店

（本　店）…横濱市辨天通り四丁目八十番地（電話三四四番）……

（東京出張所）…神田區鍛冶町廿七番地（電話本局二九〇一番）……

（韓國出張所）…韓國京城……

千曲の落陽



◎毛髪を美くする最新劑◎

如何なるチヾレ毛、白毛、赤毛も必ず一劑で美人となる

如何程お化粧が美く出來ても髪の毛が惡くては遂にお化粧の目的は達し得られません殊に近頃は髪の毛の黒きを尊ぶ日本人に不向きな香油を毎度見受けますが是れは一面から見ますると國粹破壞と云つてよい位で實に嘆はしき次第です

茲に於て當研究所は先きに其の弊を思ひ多年の實驗と經驗とを重ね調製した物が『高砂白毛染』で……此液は白毛赤毛を染むるは勿論ドンナちゞれ毛も一劑で必ず美しくなります處で發賣日尚ほ淺きにも不拘化粧品界の重要品として頗る高評を博して居ります

該品は在來品の如く御使用後手拭等を冠る不便はなく極めて輕便なる液體で衞生に關しては特に警視廳の無害證明を有します

◎有効禮狀日に增し多大なり

ちゞれ毛直し
白毛赤毛染 **高砂**

（定價）大壜四十錢 小壜二十錢 郵送料大小共一個ニ付 四錢

東京市神田區橋本町三丁目四番地

本舖 **東京化學化粧品研究所**

（電話浪花千百五十二番）

切取り線

女學世界割引券

（ちの二）

毎卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎卷洋裝菊判美本＝＝紙數各約百六十頁

口繪寫眞版數多挿入　正價毎編參拾五錢　郵稅六錢宛

（第一編）**一般救急法**　醫學博士　三輪德寬君述　全一冊

（第二編）**衛生學大意**　醫學博士　森林太郎君述　全一冊

（第三編）**藥物の大要**　醫學博士　沐　春雄君述　全一冊

（第四編）**姙產婦之心得**　醫學博士　緒方　正淸君述　全一冊

（第五編）**花柳病講話**　醫學博士　筒井八百珠君述　全一冊

（第六編）**耳の衛生**　醫學士　賀古　鶴所君述　全一冊

（第七編）**傳染病大意**　醫學博士　井上善次郎君述

●總論　●腸窒扶斯●赤痢●亞細亞虎列剌●發疹窒扶斯●痲疹●猩紅熱●痘瘡●丹毒●流行性感冒●百日咳●實扶垤里亞●麻拉里亞●破傷風●急性關節僂麻質斯●癩病●「ペスト」●狂犬病

正價三十五錢　郵稅六錢

（第八編）**婦人病講話**　醫學博士　佐藤勤也君述

本書は斯病に精通せらる佐藤醫學博士が婦人一切の諸病を平易に講話せられたるものなり　惟ふに婦人の性質として斯病に罹るも之を口にするを耻ぢ　益々重態に陷るものあり實に痛歎に堪へざる所とす蓋し婦人の健否は甚だ重大なる問題たるを以て常に斯くの如き講話を熟讀し　病理に通じ病源を絕つは唯に婦人一身の幸福のみに止まらざるなり

正價三十五錢　郵稅六錢

（第九編）**外科講話**　醫學士　桂　秀馬君述

●身體の一部分の充血及貧血●血塞及栓塞●出血●出血の所置●炎症●黴生體　●炎症の經過及轉歸●腫傷●消炎法●壞疽●身體の損傷●損傷の所置　●創傷傳染法●動物毒病●切創又打創●刺創●挫傷及挫創●銃創●火傷凍傷竝に腐蝕●電傷●骨折●關節の皮下損傷

正價三十五錢　郵稅六錢

★發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館★

女(ちの二)


千代田
白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶廿五錢 小瓶二十錢 水製 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

母のあつまり



明治母の會秋季懇話會

女りの二）

見よ壹萬圓の寳となる驚く可き出來事あり

夫は皮膚病専門藥セリールの發見である

セリールは生理化學の原理應用に依て發明されたる高等皮膚病藥にして皮膚の組織を根本的に變化せしめ如何程色黒き人もあれ肌の人も光澤悪しき人も一度セリールを用ふれば忽ち光澤を増し肌を柔かに色を白くす又ニキビ○タムシ○インキン○ワキガ○カユガリ○シツ○フキデモノ○エクヂエマ○ソバカス○イボ○ホクロ○シモヤケ等皮膚に現れたる疾病に對しては最も心持よく速に全治せしむ論より證據試して御覽

定價 小瓶拾錢、大瓶貳拾錢、別製金貳圓
送料 內地八錢 清、韓、臺灣、參拾錢

發賣元 大阪市博勞町一丁目 自然堂 福井藥房 振替口座一七五六二番

子を持つ親 病人ある家人は必ず讀め

定價 乳兒用九拾五錢 中人用壹圓貳拾錢 大人用壹圓九拾五錢 特別製品各貳拾錢上り

ね小便袋



衛生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば**小兒病人**老人の最も必要にして、ね、をき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

男女衛生用品

膀胱冷し嚢（代用） 特貳拾五錢 並拾八錢（送料貳錢）

つきやく世話いらず子宮帶 有名醫學博士の說明に因り考案したる品にして月經當時又は産後用として內外國人に信用ある婦人用品なり

● 定價 特製壹圓參拾錢 ● 並製九拾錢

子宮サック 特九拾錢 貳個入壹圓半 並七拾錢 貳個入壹圓拾錢

男用サック 拾貳個五拾 參拾五個壹圓 六拾個貳圓 百四十個四圓半

サックは男女用共世人の既に熟知御愛用品故玆に說明せず但懷姙を望む方は使用すべからず送料なきは總て拾錢引替は貳拾五錢

類似品あり

取次販賣 御相談可仕候 望の方は精々相働き

發賣元 大阪市東區內久寶寺町四丁目 振替貯金口座壹六五四六番 旭商會

女（りの三）

醸造元　千葉縣野田町　茂木佐平治

天下一品　最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

に歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き醫が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する贋若品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する沃度丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ等の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●●●●●●●●●取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

本舖　三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

●大取次左ノ通リ●　●大取次附近ノ各藥店ニアリ●

東京市

本鄕六丁目赤門前　瓜生藥局

麴町區紀尾井町三　齋藤藥局

日本橋檜物町十八　龜田藥局

京橋區八官町八　野田藥局

神田淡路町二の四　森田藥局

芝田町四の一二　加藤藥局

芝愛宕下町一ノ二　岩本支店

赤坂田町四の一　竹内藥局

同青山北町五　西井藥局

本所吉岡町廿五　小島藥局

四ッ谷大傳馬町二　永野藥局

高松市片原町　新明藥局

堺市大寺南門東入　一色藥局

京都市上京區寺町通り石藥師角

京都市下京區五條通り富小路行當り

大阪市平野町二　丹平商會

丸龜市本町　櫻井藥局

名古屋京町三丁目　飯田藤七

同　同區　荒川長太郎

同　鐵砲町三丁目　谷田藥局

神戸元町一丁目　西村關吏局

廣島市橋本町　萬代卷堂

神奈川靑木七軒町　水崎藥店

仙臺市新傳馬町　櫻井藥局

岡山市橋本町　加藤藥店

弘前市下土手町角　菊地藥店

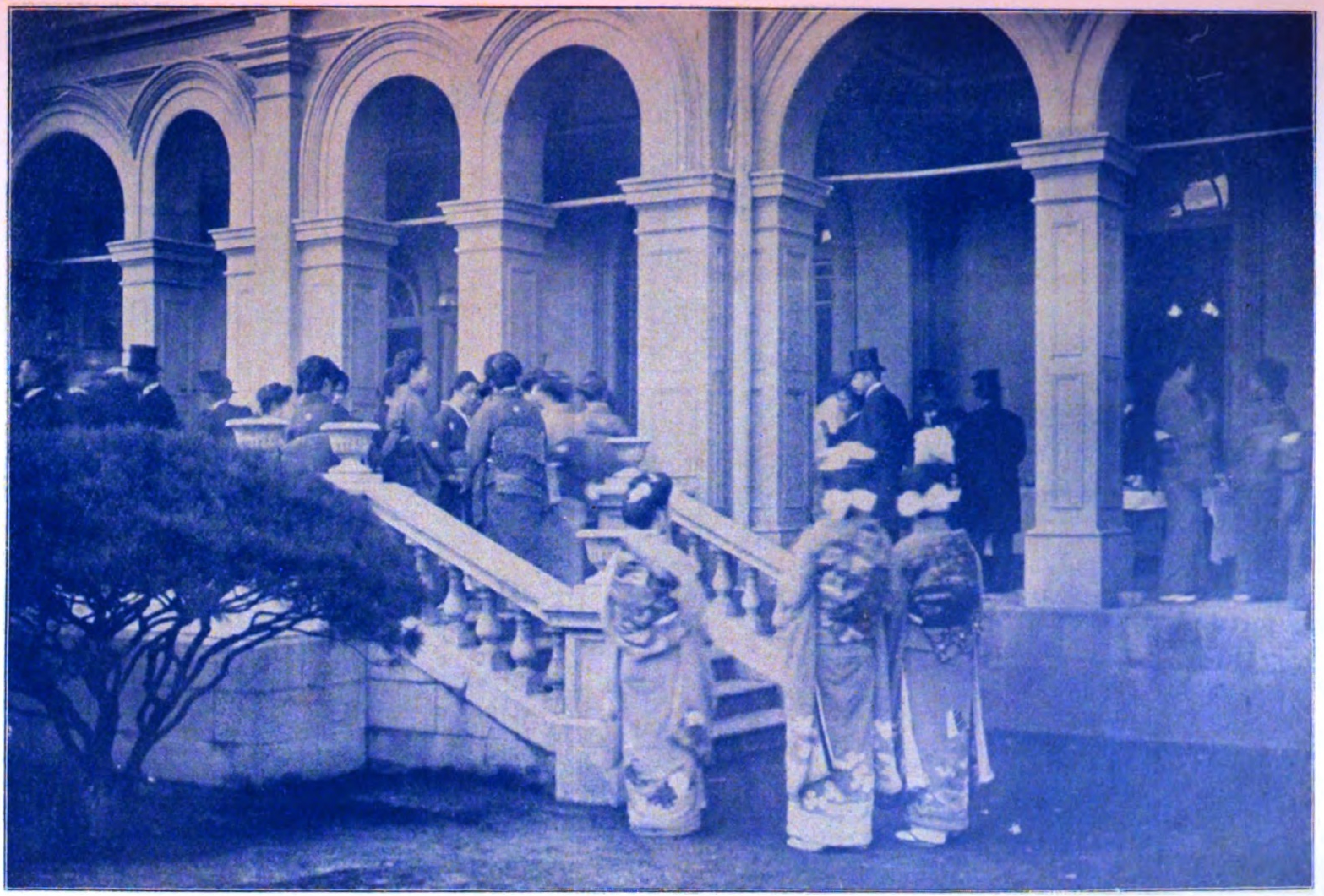
大津市菱屋町　磯崎藥局

福知　藥局

安江洋　反物店

女(りの四)

貴女のあつまり



華族會館に於ける鳩山氏結婚披露會


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、帶留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

女(その一)

通俗作文全書

全部廿四册洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一册三十五錢
郵稅一册六錢宛

記事論說或は紀行叙事等の雄編大作より尺牘葉書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般藝術の駸々進步するに反し作文の技のみ獨り退步の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。弊館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目次は下に列記す。

- 第一編 大和田建樹君著 ●文章組立法
- 第二編 大和田建樹君著 ●書簡文作法
- 第三編 田山花袋君著 ●美文作法
- 第四編 天城安政君著 ●商業作文法
- 第五編 青柳篤恒君著 ●評釋支那時文軌範
- 第六編 西村醉夢君著 ●紀行文作法
- 第七編 福田琴月君著 ●寫生文範
- 第八編 河村醉茗君編著 ●論說記事文範
- 第九編 西田敬止君著 ●女子消息文範
- 第十編 森田米松君著 ●書翰文範
- 第十一編 大和田建樹君著 ●日記文範
- 第十二編 石崎篁園君著 ●祝賀弔祭文範
- 第十三編 山川直五郎君編 ●中等學生文範
- 第十四編 生田星郊君編 ●明治時代文範
- 第十五編 堀江秀雄君編 ●言文一致文範
- 第十六編 太田才次郎君編 ●古今名家尺牘文
- 第十七編 武田櫻桃君編 ●古今名家文選
- 第十八編 河井醉茗君著 ●新體詩作法
- 第十九編 久保天隨君編 ●新體漢文軌範
- 第二十編 近藤正一君編 ●古今才媛文集

▲本書に掲載の古今才媛名▼

(記事文の部) 紫式部●中務内侍●讃岐典侍●菅原孝標の女●辨内侍●淸少納言●右大將道綱の母●和泉式部●荷田蒼生子●税所敦子●小池道子●大塚楠緒子●野中千代子●野口小蘋●下田歌子●樋口一葉●三宅花圃●小川直子

(紀行文の部) 中務内侍●右大將道綱の母●和泉式部●阿佛尼●菅原孝標の女●賴靜子●竹屋雅子●中島眞子

(日記文の部) 中務内侍●讃岐典侍●和泉式部●右大將道綱の母●紫式部●淸少納言●荷田蒼生子

(評、論、序、跋、贊、諸文) 紫式部●淸少納言●菅原孝標の女●小川直子●栂橋あや子●三輪田眞佐子●下田歌子●常樂庵暢子●荒木田麗女●三井鍼子

(消息文の部) 阿佛尼●平政子●松下の禪尼●一休禪師の母●小野通●巴女●俊寬僧都の媼●千利休の媼●淀の君●木村重成の妻●不徹庵妙融尼●美濃守のつま●よしの●八千代●高尾●千代女●野村望東尼●太田垣蓮月●鵜殿よの子●弓屋倭文子●下田歌子●江島細香●池野玉瀾●税所あつ子●片岡すむ子

(卷頭目次) 作者小傳●本朝名媛詞藻●作文の栞

(ぬの二)

女(ぬの四)

姉『モー着てしまつて？早いこと、モー少しで仕上るのですから一寸お脱ぎなさい

シンガーミシンですからちきに縫へますヨ



明細書

此雑誌名御記入の上御申越しあらば直に無代送呈す

家庭用
和服も縫へる

シンガーミシン

月賦販賣　裁縫書進呈

無料出教授　無月謝入學

横濱山下町六十一番地

シンガー會社中央店

銀座　東京支店
心斎橋　大阪支店

郵便爲換貯金事務競技會



第一級選手優勝者證據書獨算の光景。下の二名は優勝者









登錄商標

女(ろの一)

（その四）

幸田露伴君著

普通文章論

文章に二あり、一は美術的文章にして一は實用的文章なり、世の作文難を唱ふる者は畢竟文章に此二種あるを知らず、又た二種の特長如何を辨別せず、一種の混合文章を作成するに汲々として實用文章か美術文章か譯の分らぬ鵺的文章に苦心せり、其の到底滿足なる文章の作られざる所以怪しむに足らず、而して實用的文章の範圍は極めて廣大無邊にして所謂文章の七八分を支配し占領せりこれ其文體が淺近、平凡、庸常、容易、單簡にして然かも明晰なる人間に切實なる用途を與ふるものなればなり、幸田先生茲に感あり近時作文書の汗牛充棟なるも多く實用文章の性質を誤解せるを遺憾とし遂に「如何にして普通文章を作るべきか」といふ問題を最も明快に解決せられたり、作文難の士は必ず一本を机上に備へて先生の精論を熟讀せられよ

洋裝四六判上製

定價七拾五錢

郵稅八錢

モリス、ブロック著

前田越嶺譯

偉人の母

再版

全一冊洋裝菊判紙數百八十頁

正價金參拾八錢

郵稅金六錢

●1 羅馬の偉人グラッキの母●2 宗教界の偉人オグスチヌス(オーガスチン)の母●3 佛國の詩人アンドレセニエ兄弟の母●4 獨逸の文豪シルレルの母●5 獨逸の天才ゲーテの母●6 ナポレオン一世の母●7 佛國の文豪シアトブリアンの母●8 佛國詩人ラマルチンの母●9．佛國の博學者リットレの母●10 佛國の歷史家ミシュレの母●11 佛國武士の典型バイヤールの母●12 佛國の將軍チュレンの母●13 佛國博物學者リン子の母●14 普王フレデリック大王の母●15 ワシントンの母●16 瑞西の教育家ペスタロッチの母●17 蘇國小說家ウォールタースコットの母●18 獨逸の音樂家メルデルッソンの母●19 獨逸の詩人ハイ子の母

東京 博文館 本町

文(るの六)

伊國フローレンツ大學敎授醫學博士 パウル、マンテガッツァ氏著
在醫科大學 秋吉無聲氏譯

再版

醫學上の戀愛觀

全一册洋裝並製四六判紙數二百餘頁
正價金三拾錢 郵稅六錢

歐羅巴各文明國の敎養ある男女間に極めて質實なる眞面目なる研究として空前絶後の好評を博したるマンテガッツァ博士の戀愛論は今や秋吉無聲氏の忠實なる譯筆によりて錦上更に一段の光彩を添へて著はれたり。戀愛といふ人生の大問題の解決を得て神身の性的自然性を圓滿に發揮せしめんとする男女の必讀の良書は本書を措いて他に求め得られざるべし

農學博士 法學博士 新渡戸稻造君序
理學博士 石川千代松君序
澤田順次郎君著

自然界に於ける 兩性の秘密

一名人類性別學

全一册洋裝菊判頗美本
紙數約三百九十頁
正價六拾五錢 郵稅八錢

曩に「男女の研究」を著して社會の大歡迎を受け、次で「婦人論」「最新學説女子教育論」「人生之活路」「生物學と理想界」等を公にして、何れも喝采を博したる著者は今や積年の蘊蓄を傾注して玆に本書を成すに至れり。是れ男女の神秘を闡明して兩性に關する千古の疑團を氷解せるもの其内容の一斑を擧ぐれば、ルーにて男女兩性の異なる原因之に關する研究法を首とし男女は裁判上如何に其取扱を異にすべきか醫師は男女により治療法を異にする必要なきか其他美術教育文藝特に今の自然主義を論ぜんとする者等には缺くべからざる本邦唯一の新科學書なり。世の學生は勿論文藝、法律、教育、醫術に從事するもの其他苟くも人事の問題に趣味を有するものは是非共一本を座右に備へざるべからざる快著なり

販賣用電話本局二千六百廿番
東京 博文館 本町
振替貯金口座第二百四十番

女(るの七)

◉家庭必需の名著◉クリスマス最適の贈物！

トルストイ著　徳田秋江氏譯

【最上製函入美本】

生ひ立ちの記

定價九拾錢
小包料八錢

再版出來

『生ひ立ちの記』は、世界最高の偉人トルストイ翁が小説風の物語に托して自己の少年時代を叙したものです。それゆゑ此の書の中には世間や家庭に起る善い事悪い事に對して聰明慧敏なる少年が観たまゝ感じたまゝを遠慮なしに描いてあります。清潔なる家庭の讀物として、少年が精神修養の書として、歳末又はクリスマスの贈物には、此書に優ぐれた品は他にありません。

……すると、お母さんが、「ニコリンカ、おまへまた眠つて了ふよ、二階に行つてお休み」といはれる。

「でもまだ寢たかアないんですもの。」と言ひ〳〵、心持の好い朦朧した妄想が、ふら〳〵頭に湧いて、子供の癖として直ぐに眠氣がさして、間もなく何もかも覺えなくなつて、他の者が起すまでは眠つてゐる。夢の中にも誰かの柔い手が自分に觸る心地がする。手ざはりですぐそれと知つて、睡りながら思はず其の手を執つて、ひたと唇にあてる。

……「坊や、お起きよ、最早休むんだよ。」お母さんは片手で私の頸筋を捉へ、纖細な指で私を搖つたり、擽つたりなさる。其の手ざはり、聲、香水の薫、眠りながらも、それと知つて、自分はいきなり跳れ起きて、兩手でお母さんの首ッ玉にかぢりついて、自分の頭をお母さんの胸元に押付けました。（本文の一節）

東京神田區駿河臺袋町　東京國民書院　電話本三千四番　振替四千二百番

女（るの八）



十二月（師走）

行事――十三日煤拂ひ。新年を迎ふる準備として家の内外を掃除す。又此日より年末まで歳の市立つ。二十日頃より歳暮の廻禮始まる。二十二日は冬至とて一年中最も日の詰りたる時なり。此日湯屋にて柚湯を立つ。二十五日基督降誕祭。

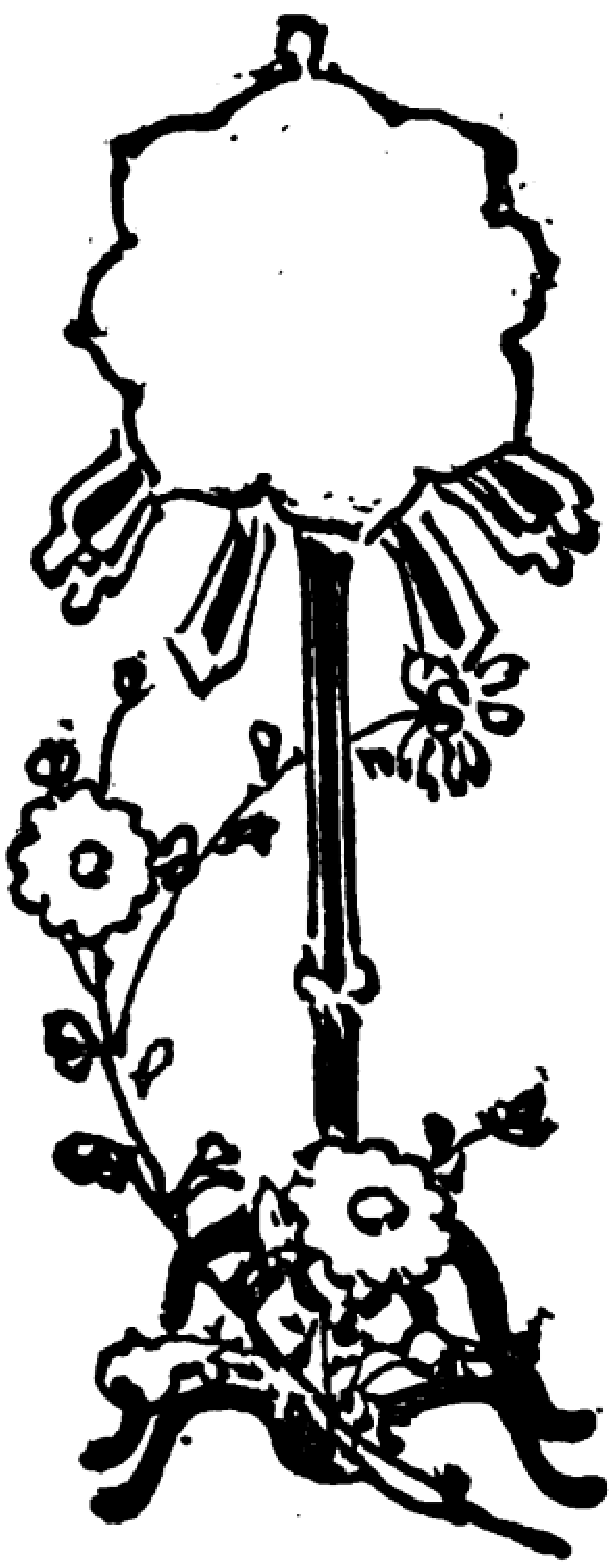
季節――大雪（上旬）冬至（二十二日）北又は西風吹すさびて氣温大に減じ、寒氣肌を襲ひ、時に降雪あり。

食品――白魚の吸物、ひらめの煮附、鱈汁、あんこう汁、おこと汁、小鳥めし、葱めし、蕪の千枚づけ、大根の淺づけ、鮭の新鹽、新海苔、雁、鴨、其他の小鳥類。

花暦――枯野――△向島、關屋の里、雜司ヶ谷。大久保、目黒、調布里、飛鳥山、日暮里、小豆澤、白子、△年の市――十五日深川八幡、十七八日淺草觀音、廿日、廿一日神田明神、廿三、四日愛宕山、廿五日平河天神、廿八日兩國。

日曜――六日、十三日、二十日、二十七日。





婦人の德と財產の關係

山路愛山

一

女子の風俗教育の事、近頃は色々の議論もあり。文部省を始め諸學校に於て十分世話を燒かるゝことにて我等の如き門外漢の橫槍を入るべき餘地なき樣なれども、諺にも岡目に八目の得ありとかや。我等を以て見れば諸君の論未だ拔本塞源の見解なきに似たり、史を見るに女の風俗も時代に依りて大に變じたり。源氏物語時代の情に長じて行に短き、鎌倉時代のたけく雄雄しき、德川時代のつゝましく、しほらしき、一個の女性も時と場合に依りて色々の變相を呈する樣なれども。其原因を尋ぬれば甚だ簡單なることにて畢竟、女の財產に對する位置を見れば風俗の變遷は自らそれに準ずるものと知らる。然るに世の女敎育を論ずる人、多くは此點を見落して懸空に唯だ眼前の是非を說くものゝ如し。我等の解せざる所なり。

二

名高き白樂天の婚議と云ふ古詩の意は「女の美しきは人の心を動かすものなれども、それも貧富に依りて差あり。貧しきものは人に棄てられ、富みたるものは人に諛らる。紅樓に住みぬる富家の女は黃金の縷にて羅襦に繡し、人を見ても憚る色なく、年二八にして嬌態あり。母兄未だ口を開きて婚嫁の事を言はざれども、媒人早く取もちて善き婿がねを得たり。綠の窓に育ちたる貧家の女は、二十を多く過ぎぬれども單身孤影寂寞として未だ良緣を得ず。荊釵錢に直らず。衣上

に眞珠なし。幾回か之を聘せんと欲する人もありたれども、其日に臨めば躊躇して終りぬ。此に子の爲めに婚を議する人ありて良媒を會し酒宴を開きけり。其時我歌ひけるは四坐の人、しばらく飲むなかれ。我が兩の途を歌ふて聽き給へ。富家の女は嫁し易し、嫁すること早くして其夫を輕んず。貧家の女は嫁し難し、嫁すること晩くして姑に孝なり。聞く君、婦を娶らんと欲すと。婦を娶るの意如何。いづれにせらるゝ積なりやと云ひたり」となり。此時は白氏文集にても殊に名作の内に數へられたるものなれば誰れも知り給ふべし。其頃は婚姻に財を論ずる習あり。所謂財婚など云ふ惡弊もありたれば樂天も深慨したることならん。女にても男にても、我は斯程の財を有すと云ふ自負心あるものと、我は三界に家なしと思ふものと、其行儀の上に自ら差別あるべきは申迄もなし。貴婦人の役者狂ひは鼻を向がたき醜態ながら、其本を論ずれば役者を買ふ錢があるからなり。小人罪なし、玉を懷て罪あり。女の風儀は女の財產と密接の關係あること明々白白。別段說明も要らぬ樣に存ずるなり。

三

大鏡を見るに藤原濟時の女は冷泉院の皇子敦道親王の妃なりしが、親王心を和泉式部に移し給ひしかば本意なくて小一條の第にかへり給へりとあり。又小一條院の御妹當子と申すが三條院の時の齋宮にて伊勢に下らせ給ひしに、上らせ給ひて後、三位道雅の君に浮名たゝせ給ひければ、三條院も御なやみの折。いとあさましきことにおぼしなげきて尼になり給ひきとあり。又三條院の未だ東宮にておはせし時、源宰相賴定、其寵姬に密通し浮名立ちければ女は里に出で給ひきとあり。又女の餘りに才賢きものは惡しと其頃にても申したるが高内侍貴子といひしは文才非凡の人なりしが後には、いみじう墮落せられしとあり。大鏡は信史に非ず。さりながら其頃の風俗は善く寫したりと覺えぬ。之を源氏物語などに併せ考ふれば京女の生活、今の世と大に異なるを見るに足る。漢學先生之を見て歎じ

て程朱の正學行はれず、女子皆婦德の何ものたるを知らず。故にこの通りの亂行あり。正學だに行はれば女子の行儀も直るべし云々と青筋を出して論ずれども、それは見當違なり。其頃は女子の白氏文集など讀みたるもの少からず。漢學も一わたりは濟したるものあり。然るに左樣の女が却て行儀殊に惡かりし樣なり。いや〱それは其學問が程朱の正學ならぬ故なりとの遁口上もあるべけれども、昔しの學問とて女の男狂ひを善しと敎ふるものはあるべからず。然るに其頃の女に限りて今の世よりは亂行と見ゆる樣なる仕打もありしは別に仔細あり。そは其頃は女にても父母より莊園を分け與へられ、相應に遺產を相續し、一廉の世渡りもなりし故、後の世の如く婚姻せねば女の身が片つかぬと云ふが如きことなかりし故、女の見識も自ら高く、自由に男を擇び、從つて自由に男を棄つるの風もありしなり。世に自由結婚は西洋の俗にて日本に無きことなりなど申す人あれども、これは日本の歷史と文學を知らぬ人の僻案なり。其頃の男女は自由に妻定めしたるものにて先づ男の方より艶書にて屢ゝ情を述べ、女の心弱くなりて、扨緣は定まるなり。但し我等の狹き讀書だけにては女の方より先づ艶書を送り、若くは情を述ぶると云ふは例少き樣にて、情を言掛るは男の役、女は男の言掛るまでは沈默せざるべからずと定まりしものゝ如し。此段「アングロ、サキソン」人種の風俗も同樣なり。男女の妻定め既に自由なること此の如しとせば、婚姻は是れ男女に取りては虎狩り同樣の冒險なり。さればこそ陸奧守倫寧の女は藤原の兼家に戀せられ、艶書など多く贈られしときの歌を集めてかげらふの日記と名づけ世にひろめたり。此女、兼家の通ひしとき容易に門を開かず、兼家をして其遲きに苦しましめ、兼家より怨の艶書ありしに、返しとて、

なげきつゝ獨りぬる夜のあくる間は
　いかに久しき物とかはしる

と詠みしと云ふ。春の遊の歌がるたにも此歌あり。是も日記に記して世に誇りたることならん。(大鏡)。戀の競爭。戀の勝利。善き夫妻を得たる誇。其冒險談。其

成功談が上流社會の談柄となりし其頃の世態人情、今も猶ほ眼前に在るが如し。是皆な女にも財產ありて稍獨立の生活を爲し得る世ならではなきことなり。さればこそ持參金に心を奪はれ、姿も心も美しかりし罪なき妻を去り、年老ひて、容わろき富裕の寡婦を娶りたる閑院の大將朝光など云ふ可笑しき人もありし。大鏡の作者之を記して この北方は練色のきぬの綿あつき、ふたつばかりに白袴うちきてぞおはしける。年四十餘ばかりなる人の、大將には親ばかりにぞおはしける。色黑くて、ひたひに花がたうちつきて髮ちゞけたるにぞおはしけると云へり。紅顏の美少年、四十の老女を娶る。是も女に財產ありしが爲めなり。

四

女の子にまで財產の分配行屆きたるは武家に在りては元龜天正までなり。其以後は武家にては總領の子は悉く財產を相續して總領ならぬものは男子と雖も父母の遺產に對して何等の權利なく、唯恩惠に何程かの据分をして貰ふまでなり。此時に方りては總領ならぬ二三男は事實に於て三界に家なきものなり。まして況んや女性をや。所謂若き時は父母に賴り、嫁しては夫に賴り、夫死すれば子に賴るの外、女性には何等の財產なきものとはなつてけり。尤も町家は武家程の集中主義に非ず、西鶴などの記したる所に依れば次三男以下相應に遺產の分配を受け、女子も何程か親讓りの財產を得るの仕掛ありしかども、社會の上流にして風俗の淵叢たる武家が既に其通りなれば町家と雖も女は自から肩身狹く、やはり三界に家なしと云ふが當然の事なりと思ふもの多かりき。扨斯樣に女が財產に對して權利を失ひし結果は如何にと云ふに女をして夫婿に依賴するの念を強からしめたり。あれは不貞のものなり。男好きなりとありては誰れもかまひ手なかるべく、誰れも相手にせざれば直ちに飢へざるべからず。昔しは貞節は唯だ女の美德なりしかども、今は貞節ならぬものは家なく食なき結果に陷らざるべからず。是に於て乎、女は愈ゝ節操を重んじ一に夫婿に依賴すること、

なりたり。或は此論大に違へり。武家に貞婦の多かりしは武士道の結果なり。武士の家庭に嚴重なる規律ありしが故なり。夫婿に賴らねば飯が食へぬ故自然に貞節になりたりなど云ふは神聖なる武士道の生みたる道德を輕蔑して慾得づくの結果なりとするものなりとて異論を云ふ人もあるべし。さりながら左樣の封建の時代にても自分に金廻り善く、男の手より獨立して渡世のなりさうなる女子は隨分男妾など云ふものを持ちし沙汰もあり。掟きびしき幕府、諸侯の宮中に檢束せられたる女子も、稍や勢力を得ればそれを賴みて男狂ひを爲すものありしは珍らしからず。三王外記に曰く月光夫人の傅母江島は年三十餘なり。外人與に姦するもの其數を知るなし。屢〻宮女の淫なるものと、勾欄に遊び、因て酒家を過ぎ、戲子を集めて飲宴す。或は厨櫃を以て戲子を貯へ、人をして杠を以て宮に入らしめ、房中に匿す數日、出入淫を縱にす。法吏敢て之を詰るなしと。御殿女中の不行儀は敢て江島に限るべからず、近き世にも延命院一件あり。不義は御家のかたい御法度と云ふ其下より、少しく自由がきけば直ぐ此通りなり。武家の、武士道のとて表向は立派なれども、舊幕の末に官軍江戸に入りし時、第一に迷惑したるは旗本家人の女子、容易に官軍の男振に靡き江戸女の蛾眉早く官軍壯士の膓を割かんとするの勢あることなりと南洲翁が海舟先生に語りたりとの事を聞きたり。飲食男女は人の大欲存す。女が男に靡き、男が女を懷ふは自然の情なり。武士の世界とてそれに相違あるべからず。然るに兎にも角にも多數の女をして節操を全ふせしめ德川時代は女德の盛んなりし時代なりと歌はしめたるは要するに女に財產の權なく、自然に男子に依賴せざるを得ざりしが爲めなりと謂ふべし、さりながら此論のみにては女の節操と云ふは畢竟飯が喰へぬから已むを得ず起りたるものにて餘り賞めたことのやうならねども、是れは傍因なり、正因に非ず。女の節儉を重んずべきは倫理道德の上、自ら然らざるを得ざることにて正因は別に存す。唯だ此倫理の大經大法も或は之を妨ぐる他の邪魔物あり、或は之を助

くる所謂傍因あり。舊幕時代の女子が特に節操を重んじたるは女に財産なかりし故、節操なければ飢へざるを得ずと云ふ傍因ありて正因を助けたるに因るなりと云はんに誰れか之を不可とせん。其上、習慣は性を爲すものなり。始めは女に財産なきより女の節操を堅くしたりとも、其習慣の久しきや節操が直ちに天性となりたらば、是れ實に尊むべく、敬すべき品性に非ずや。既に此品性を鑄成す。それだけにて武士道の功績は十二分なり。其動機の如何は深く論せざるも可なり。

五

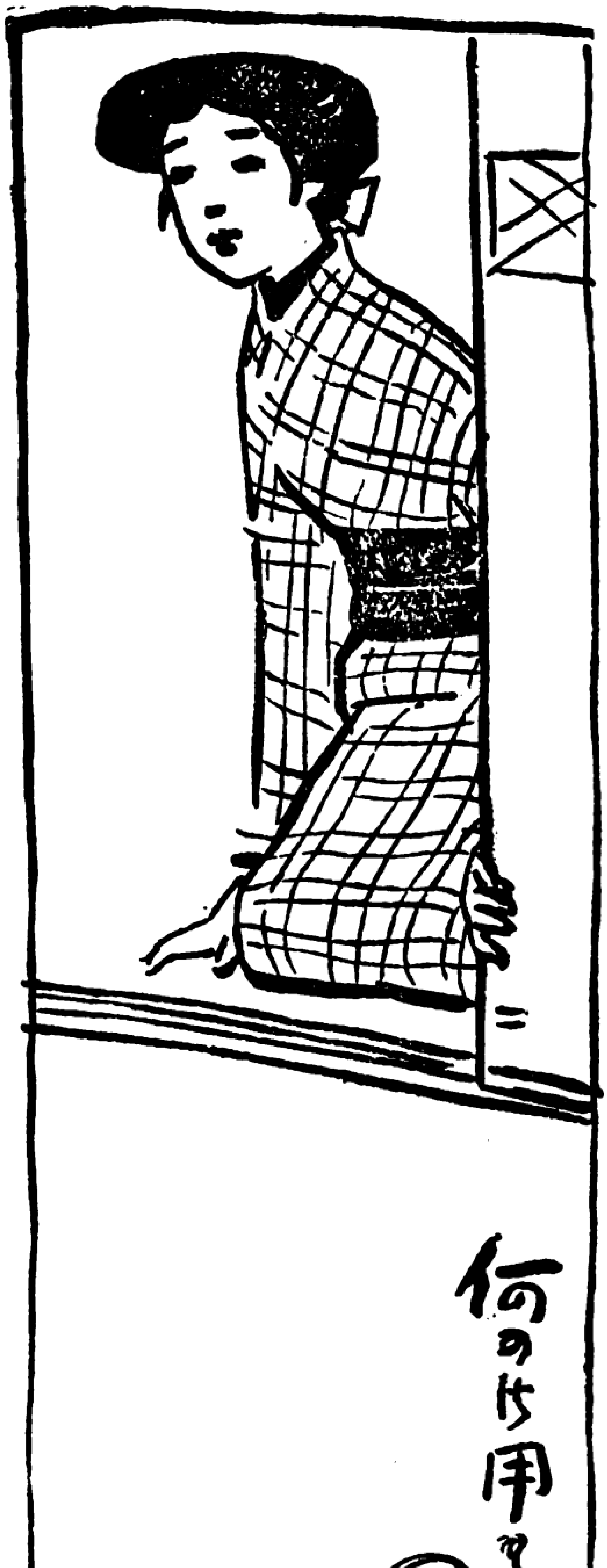
婦徳の變遷、財産制度の變遷に伴ふこと此の如しとせば今の婦徳を論ずるものも、先づ眼を着くべきは財産の事ならずや。今の教育家は賢妻良母主義に熱心にして此段我等に別段異存なきことながら學校に女を遣るものゝ腹に入りて考へたらば色々の問題あるべし、昔の世は武家は世祿あり。町人は株あり。尋常に世を送らば女は唯だ夫に從順ならば足りぬべし。さりながら今は自由競爭の世なり。大官、富豪の子ならば知らぬこと中流以上の家にては女にても、何か藝を授け置き、夫の身上安全の中は賢妻良母たるべし、夫の身上傾きたれば藝を以て身を立て夫を助け家道を支へさすべしと兩天秤に掛けて學校に子を遣るも多かるべし。學校は技藝を賣る人を作る所に非ず、賢妻良母を作る所なりと學校の先生、何程口を酸くして説法せらるゝとも、中流以下の親の心はそれにては濟むべからず。何となれば今の世は夫婦共稼ぎの世なればなり。聽衆を理會せざる演説者は下手の演説者なる如く、父兄の心を解せざる教育家は下手の教育家なり。今の父兄、殊に中流以下、(即ち日本人民大多數)の父兄は其女子に與ふる教育を以て無形の財産とし、萬一の時は夫婿を助け其家運を支ふべき資本となり得べきものなりと見る。是は當今の勢致方なきことなり。教育既に無形の財産、臨時の資本なるときは教育を受けたる女子に往々獨身を好むものを生じ、往々夫を凌ぐものを生じ、甚しきは夫の外に意中人を作りて恥ぢざるもの

を生ずるは敢て怪むべきに非ず。何となれば女子は此無形の財産、臨時の資本に依りて始めて無財産なりし從來の境遇より脱し稍や獨立の狀態に歸りたればなり。其上夫婦共稼ぎの世の中なるが故に妻は一から十まで夫に依賴して生活するに非ず。夫も亦獨り妻の死命を制したるものとして誇り難き事情あれば從順の德も昔の如くにはあるべからず。時勢の變遷已むを得ざることとなり。昔の嫁御寮と云へば年は二八を多く越えず。世故人情には未だ慣れず、諸事初々しく、愛らしく、しほらしきものなりしかば夫妻の情も父子の如く、天然に近きものありしが故に其愛情も始終濃かにして詩の如く歌の如くなるものありき。今の世は然らず。通例の女子、婚姻の前に先づ嫁資の算段を爲す。相應の持參金なければ善き婿がねを得難きを以て痛心大方ならず。次には婚姻の後、或は破鏡の患あり、或は夫家の零落することあるべきを豫期し、それが爲めに學校に入りて相應の技藝を修む。妻を娶るものも亦昔の如く樂天的ならず。先づ家を爲して安樂なる生活を爲し得べきや否やを思慮して其仕度を爲す。斯て男子は三十を過ぎて猶ほ娶らざるもの多く女子は徒らに其靑春をして寂寞に送らしむ。新婦の情は既に涸れたる泉なり、新郞の心は數學に滿つ。二者の愛は奚んぞ昔の花婿、花嫁の如くなるを得んや。財産の問題が人心に影響すること甚しと謂つべし。且今の世に本能主義、自然主義など云ひて埒もなきことを口にする靑年男女の多くなりしを咎むる人よ。今の世が黃金萬能の世にして多く金を得るが成功。成功したる人が賢人。仁義道德は實際世界に於てはへちまの皮ほども尊ばれず。不義にして富みたるものが崇拜せらるゝを見ば、靑年男女が此世に仁義など云ふ約束は無し、唯だ本能を滿足せよ。唯だ自然の指すまゝに動けと感じたりとてさばかり怪むべきに非ず。我等などは是又黃金萬能主義の影法師と存ずるなり。

六

大分議論がこぐらかりたり。要するに我等の論旨は

女德は女の財産に對する權利に關係すること多しと云ふなり。今の世に役者狂ひをする女は金の自由になる豪商の妻などに多し、昔は御殿女中、役者に狂ひ、今は富人の家庭、俳優の足迹多し。中流以下にても女子の節操を破るもの多きは女子に財産の權あるものに多し。教育とて必しも女子を貞節にするのみにはあらず。何となれば教育は無形の財産にして此財産は則ち女子に自負心を起さしむるものなればなり。是れ前論の大意なり。然らば則ち如何せば可ならん。女子には斷じて財産の權を與ふべからざる乎。女子教育は大に制限を加ふべき乎。それは蝶に責むるに昔の芋虫となれと云ふもの丶類なり。それよりは既に財産を有し、獨立を有する女子をして其位置相當なる社會上の責任を負はしむるぞ善けれ。力と責任は平均すべきものなり。力餘ありて責任足らず。是れ不德の生ずる所以なり。此說猶は長し。今は唯だ婦德と財産の關係を述ぶるのみなり。





喜ばしき婦人界の傾向

東洋婦人會幹事　清藤秋子

意外なる事實

一般に婦人界の氣風が今は浮調子になつてゐて不可不可といふ非難はよく耳にする事で、又實際然うでもありませうが、然し一方には又眞面目な御婦人が決して尠なくありません。――然も上流の婦人に然ういふ健全な傾向のあるのを發見して、私は實に意外なる事實とも思ひ、さては眞に喜ぶべき傾向とも思つて、非常に愉快に感じて居るので御座います。

それは他でもありません。この秋季に私共の關係して居る東洋婦人會で、染色法の講習會を催しましたが、そこに現はれたる事實によつて、深く感じたので御座います。

まづ事の由來を申しますと、元來何處の婦人會でも、月次會とか常集會とかを開くのに、大抵まづ三百人の會員ならば出席するものは三十人にも足りません。それが又漸々と月毎に減つて來て、終ひには出席者三人などゝいふ事になり勝ちなものです。唯の茶話會にすると其れだけでは纏まつた興味がなくて人が集らず、又その向々の、例へば家庭とか教育とか衞生とかの講演會としましても、一二回以後に最う振はなくなつて了ひます。それで私共の方の會で染物の講習會を開いたのも、實はまづ會員集合の一機會を造る位の考へで御座いました。『まあ其麽事でもやつて見たらば』といふ樣な譯だつたのです。

處が愈ふとなつて見ると、存外な好成績で、一日一日と申込が增加して行きます。それも華族のお孃さんや夫人方なので御座います。で、「何うか知らん。お續

き遊ばせば宜いが……。まあ〳〵二日三日でお止めになるにしても、全然爲さらないよりは宜い」位に思つて居りました。事實は豫想に反して、皆様なか〳〵の御熱心で、却つて驚かされて了つたのです。

喜ぶべき現象

講習期間は二週間で御座いました。その間一日も缺かさず被在して、それも實地練習をするのですから、時には慣れもせぬ苦勞な水仕事を皆様なさるのです。お氣の毒だと思ふやうな事もありましたが、誰方も實によく熱心に御講習なさいました。岡部子爵のお孃様――これはお二人、それから松平伯爵夫人、岩佐純夫人など、其の他總べて實に御熱心なものでした。

或は日本橋の方から被來しやる御婦人もあれば、或は高田の方から被入しやる方もあるといふ風で、其の他の處からにしても、本會は青山の奥ですから、何れ皆遠方からお通ひになるのですが、被來しやる時は御感心に誰方も皆電車で、電車を下りてからは御歩行になるのです。秋日和の強い日などには、恰ど午下りに被來しやるのですから却々暑い上に、お歩行に慣れないものですから全然汗になつて被來しやるのです。「オオ暑い！恁麽に汗になつて！」など〻驅け込んで被來しやる樣な風。それでも恁ういふ實地實益の講習に出るのに贅澤な事をしてはと言ふので、皆様決して人力車をお用ゐになりません。無論お歸りの時は人力車が迎へに參ります。それは最う毎時も散會が暮々になるのですから――。で、午過から毎時も夕方まで、全然半日切々と御講習なさるのですが、それを二週間缺かさずに熱心になさいました。

で、單の茶話會、常集會など〻違つた、恁ういふ眞面目な質實な催ほしに熱心に御出席なさつたといふのは、畢竟上流の御婦人とても――一寸考へれば中流以下には必要でも上流には不必要な事の樣に思はれるにも關はらず――恁ういふ實地實益の事柄には眼を注けて被來しつたといふ喜ぶべき傾向の證據で、「なか〳〵本氣な方が被在しやる！頼もしい事だ」と嬉しさに堪

へられぬので御座います。

指を眞青にして

講習の仕方もチッと思ひ切つた組織に致しました。口で説明したり、ホンの雛形だけを講師が机の上で演つて見せる位では、到底何の役にも立たないと思つたので、總て實習をおさせ申す事に致しました。

ですから貴婦人方でも何でも、他の普通の會員と同樣に、襷がけで、各自の盥を控へて、井戸へ行つて水も釣たり、一生懸命にバケツを提げても被來しやるのです。そして一寸と他の人が代つて爲て上げる樣では効がありませんから、監督者の數を多くして、自分の事は必ず自分で爲さる樣に組織みましたのです。ですから平生は箒一つお持ちになつた事もなく、御自分の室の掃除さへも爲さつた事のない方が、水を釣つたり提げたりなさるのですから、隨分御苦勞に違ひありません。二日や三日は面白半分にも續きませうが、一週間となり二週間となれば決と御苦勞で續かないに違ひない『けふは土曜日で何處々々に何ういふ會があるから』といふ樣な事で、決と最う御欠席かと思つて居りましたのに、前申す通り熱心に續いて被來しやるのです。そして能く手が荒れるとか指が太るとか言つて氣になさるのが常ですのに、其麽お厭ひもなく、指を眞青になどして、よく立働いて被在しやるのです。

面白い實驗

それに時々面白い實驗などが初まるので、愈々氣が乘つて被來したのです。お互に覺えのある事ですが、婦人の衣服について一番困るのは、チト儀式張つた時に整然として出かけると、唯さへ少し汗ばむ氣味ですのに、氣候が暖かであつたり暑かつたりした日には、何うしても最う兩脇に汗が滲み出し、其れが浸みて遂裏の紅絹が表へ透つて、まだ新らしいお召などの其處だけが赤味を帶び、實に困つて了ひます。會員の御婦人にもそれで困つたお方があつて、まあ仕方なしに紺屋へおやりになつたのですが、あれは却々取れず依然

として赤い痕が殘つてゐるので、紺屋でも『仕方がありません。これだけは何うも拔けません』と申すさうです。それで『一つ拔いて試て戴けますまいか』と講師へお話しになつたので、兎も角取つて見ませうと、講師が試みました處が、清潔に取れて了つたのです。

恁ういふ有益な、面白い實驗などがありますので、愈ゝ熱心に御講習さるのです。いかにも皆樣が御熱心なので、『ホントに皆樣が本氣で被在して賴もしい、其麼に皆樣が熱心にお習ひなさるのに、會を催ほした私は習はずに居ては申譯がないと』申して、それからは私も大事な時間だけは、無理にも繰合せて出るやうに致しました。



精神的の大利益

けれども單に染色法を覺えるだけでな

く、精神的の利益こそ實に大きいものと思ひます。平生爲さつた事もない立働き——言はゞ先づ勞働——それを爲さつて見る事が大裨益あるので、それは最う申さずとものことで御座いませう。その他召物などにも直ぐに影響が及んで行つて、華族の御婦人方でも會へ被來しやる時は縞の召物です。また實際立働きを爲さるのですから、其れでなくてはなりません。ですから一見したところ、地位の無い商家の御婦人なども殆ど同じやうに見受けられるのです。一つには又恁ういふ場合ですから、少しも格式振つて被在しやらずに、淡泊に平民的に、同じ樣に話して被在しやいますから猶更同じやうにお見受け申されるので、こゝ等は實に美事と申して宜しいと存じます。

そしてまあ恁ういふ實地有用な事を——たとへ心懸だけに留まるにしても——孃に習はせて置かうとか、自から習はうといふ思想に傾いて來たのが、前にも申す通り、これが第一に喜ぶべき現象だと思ひます。上流と言つても一概に華美を競ふばかりのものでなく、恁ういふ眞面目な、健全な、本氣な方々が被在しやるかと思ふと、そゞろに日本の婦人界がなか〳〵賴もしいと嬉しう御座います。西洋ではいかに上流でも何でも、裁縫と料理とを知らない婦人は婦人ではないとしてあるさうですが、これが眞正の所でせう。日本の上流の御婦人が恁ういふ眞正の傾向に進んで被在しやるといふ實例を目の當り見ましたので、私は近來の無上の愉快と思つて居るので御座います。

八年前の事共

料理と申せばそれに就いては感深い思ひ出があるので御座います。七八年前、私が大日本婦人教育會に關はつて居りました頃、松平さんの御夫人が、「私は料理のお稽古をしたくて〳〵ならないのです。どうか習ひたいものですが』と仰在るのです。私は其時『それはお止し遊ばせ』と一言にお止め申して了ひました。當時其の會で國文の講習をして居りました、松平夫人も被在しやいましたが、何時も二人挽の人力車で、そし

て家令といふ様な人か又は侍女かゝお伴なので、何時もお伴と車夫とで五人位待たせてお置きになる姿でした。

ですから私が、『貴女方が料理のお稽古など〻下様の眞似をなさるのは、それも一種の虚榮では御座いませんか。私共が洋裝をして夜會へ出たいといふ虚榮と畢竟同じ事では御座いませんか』と申しました處『清藤さん、まあ其麼酷い事を！虚榮など〻……。私は眞正に、何うか私たちも然ういふ事を心得ておきたいと眞正に望んでゐるのです』と涙ぐまぬばかりに仰在るのです。『然ういふ思召で御座いましたか！宜しう御座います其れならお敎へ申しませう』と申してそれから毎週日を決めて二日づゝお敎へ申しました處、熱心にお稽古なさるのです。そして何うもお出で毎に車夫が四人といふ樣ではと申して、やがてお伴の方も廢してお一人で人力車に乗つて被來しやる樣になりました。恰ど二月から七月まで全然半年お稽古でしたが、暑中に御不加減でそれが秋までも續いたので、遂それなりになりました。

けれども實に御熱心でしたから、その半年のお稽古でも餘程効があつたと思ひます。これが八年前の事實です。

して見ますれば何時の時代でも、やはり健全な本氣なお方はあるのだと思ひます。私は決して日本の婦人界を一概に悲觀するには及ばぬと存じますので、何時の世にも婦人界の元氣は其の一角に確かに存じて居ります。唯何うか其の好い傾向に自分が後れないやうにと思つて居るので御座います。



私が洋行中に見聞して痛切に感じた事柄

學習院教授　安井哲子

△美術を敎へし時の困難

私は美術とは最も緣の薄い方で御座います。昔から圖畫などの學科には一向興味を感じませず、從つて下手で御座いました。尤も英國の敎師達が私に美術の趣味を知らせようとつとめてくれました御蔭で、只今では人物畫の美といふ事など少しはわかつて來たやうな積りで、今度も英國の繪を少々求めて歸つたやうな譯であります。然しとにかく私は美術とは緣の遠い方なので御座います。けれども、私が參りました暹羅の學校では、刺繍とか、圖畫とか造花とかいふやうな學課を課して居りました。もとよりそれらの學課は一緒に參りました他の敎師の受持で、私自身直接に敎へたのではありませんけれども、それらの事を敎へるといふことの如何に困難なものであるかといふことは、つくづく感じたので御座います。實際暹羅に參りまして、まづ言葉からしてわからない生徒に、種々の技藝を敎へるといふ困難は御話の外で御座いました。それ故その方の知識のない私などまで皆出て、或は通辯をし或は手まねをするといふ風にして、共に〳〵敎授に盡したのでありますから、私は親しく其の困難を見また感じたので御座います。

△仕事に伴ふ苦痛と愉快

暹羅の人は非常に手が器用でありますから私共の學校など、普通の小學校位の程度なものでありましたにもかゝはらず、三年間の成績は大層見事なものでありました。尤も、それは敎師の熱心の結果もありますけれども、暹羅人の手際の器用な事は實に驚くばかりで御座いました。然しながら唯一つ私の殘念に思ひました事は、それらの生徒に、そのして居る仕事に興味

をもたせ、仕事に伴ふ苦痛を以て愉快なものだと思はしめることの出來なかつた事で御座います。それは暹羅人は成程手は生れつき器用でありますが、何うも仕事に直ぐ飽きが來て面倒になるのです。何んでも教師にのみ頼つて、早く仕上げたいとか、早く奇麗になつたものを見度いとか、たゞもう結果を急ぐといふ風でありますから、三年間の成績を見せる時なども、私共の骨折と申したらありませんでした。生徒をなだめたり、すかしたりといふやうにして、いろ〳〵苦心を重ねてこしらへ上げさせたので御座います。その時私はつく〴〵嘆いたので御座います。それらの子供に小さな仕事の一つ〳〵に興味をもたせる事が出來なかつたこと、苦痛に伴ふ愉快を感ずる子供をつくりえなかつた事を如何にも殘念に思つたのでありました。

△特殊學校に於ての所感

で、身體も病くいたしました處から、保養かた〴〵英國へ參つたやうな譯で御座いましたが、英國で方々の學校を參觀いたしますと暹羅に居ります時とは全然反對の感じを與へられたので御座います。私は小學校でも主に私立の特殊の學校を見て歩きました（倫敦の公立の小學校は無月謝故多く貧民の子供が入學し、特殊の學校は大抵私立であります）それらの學校には、私の友達などが教師をして居りますので、訪問かたがた參觀をして歩いた譯で御座いますが、最も感心いたしましたのは、七八歳の男女の子供廿人許りの一組を見に參つた時で御座いました。それは理科の初歩を教へる、と申しても極普通のもの、例へば動植物ならば毎日接近して居る鳥獸とか、庭にある樹木に就いてとか、物理ならば普通見る處の現象に就いてとかいふやうな事を教へ、かつ實驗をするのでありますが私が參りました時は、恰度硝子の曲管を造らへて居る處で御座いました。長い卓子の上には瓦斯の火が幾つとなく出て居つて、其一つの火を男女二人の子供で使用して居ります。一體曲管などを作ることは、日本では成人になつてから教へます事で、私共は學校で物理

の實驗をする時に漸と數はつたのでありますが、年をとつたものでもなか／＼巧く出來ないもので御座います。それを此處では八九歳の子供がして居るではありませんか。處で先生は莞爾な容貌をして其間に立ち、少しも理屈などを敎へません、たゞ瓦斯の熱は何うして出來るか、また其の焔のどの色の處に管をもつて行けばよく曲るかなどいふ事を、極平易に說明し、なほ一人々々に就いて、それは何うした方がよいとか、これは斯うすればよいとか、丁寧に話してきかせて居ります。それを見て私は大變に感心いたしました。

△兎に角經驗して見る

勿論其の仕事が上手に出來るといふ爲めではありません、中には上手なのもありますけれど、中には曲らないもの下手なものも澤山に御座います。たゞそれらの子供達が、よし隣の人が巧く出來て、自分のはよく出來ないにしても、決してあせるとか自棄を起すとかいふ事はなく、先生の說明をきいては、赤い顔をして熱心に何處までもそれを試み、とにかくこしらへ上げて見るといふ其の愛すべき態度に感じ入つたので御座います。それから私は後で敎師にもきいて見ました。何ういふ譯であのやうな難かしい事を小さい子供におさせになるのですか、見て居りますと殆ど半數以上も出來損ふやうでありますが、あれでは曲管も無益になり、瓦斯も不經濟になるではありませんかと、然るに敎師の答へは恁うでありました。いゝえ私の學校では瓦斯の消費や曲管の破れるのを惜みはいたしません。何事によらず熟練をしたのを見れば容易いが、實驗をして見るとなか／＼難かしい物であります。それで生徒が一人々々實際にして見て、成程こんなに難しいものであるといふ事がわかれば、それでよいのであります。それ丈けの考が子供の頭に入ればそれで十分に思ひますといはれました。私はそれを聽いて、ます／＼感じ入つたので御座います。英國人は御承知の通り保守的の國民で、信じた事はたとへ古い事でもやつて見る、やつて見て何うしても不可なければ、初めて新し

いものを採るといふ風でありますから、成程そのやうな國民には、このやうな敎育法が殊に適當であると思ふので御座います。暹羅の子供には、早く結果を見度いといふ考をして居るものばかり多く御座いましたのに、今此等の子供が、あくまで熱心に試みて居るのを見た私は、仕事其ものに興味をもつといふ事は、いかに美しく、また幸福な事であるかと感心



もし美しくも思ふたので御座います。

△話を聞いて繪にかく

とにかく英國の敎育は手でする處をいつでも精神に結び付けるといふ事を忘れません。高等女學校の專門科に參りますと、種々雜多な事をいたして居りまして、美術の事もありますが、何んでも出來る出來ないに係はらず、熱心にいたして居るので御座いま

す、日本の子供は一心に勉强いたしますから、せよといはれた事は上手に出來ますが、然し仕事の興味を養はれたのには到底及ばないのであります。英國では書を敎へますにしても、たゞ先生の御手本を見て書かせるのではありません。何か御話をして、それを書にして入らつしやいと申します。世間的の思想のない生徒に、それを工夫することは甚だ難いから、大變に苦しめられるのでありますが、縱令拙くともとにかく出來さうといふ氣で一生懸命に考へるので御座います。そして成績のよい人には其町とか其區とかいふ處から金を出して勉强させるのですが、そのやうな人には殊に難問題が多く出るのですから、非常に苦みます。然し苦しければ苦しいなりに、其の書の出來上りに伴ふ樂しみ悅びといふものが大きい譯でありますから、皆苦痛を愉快として、熱心に工夫を凝らすといふ有樣で御座います。

△不平だら〳〵仕事をする人

私はそのやうな風を見て羨しくてなりませんでした。何故なれば、たとへ如何なる仕事にせよ、自分の仕事を樂んでして居る人程、この世の中で幸福な人はありますまい。不平だら〳〵仕事をする人と、仕事そのものに興味を感じてする人とは、其の仕事の出來ばえに相違あるのみならず、其人自身の幸福に相違あることは、實に非常なものであらうと思はれるので御座います。それに英國でも内幕には隨分酷い處もあります、ことに下流の婦人などに至つては、日本の方が餘程まさつて居ると思ひます。彼地の下流の婦人は裁縫が出來ませんから、衣服など自分の身體に一向合はないものを買つて來て、ズル〳〵曳きずつて着て居る、長くつても上げをする事だも出來ない、其の不精げな事は御話になりません。或はまた、寒さを凌ぐために酒屋に往つて酒を飮み、それで暖をとるといふ有樣であります。そこへ參りますと、何うも日本の女の方が遙かに優つて居ります。しかし自分の仕事に興味をもつて、愉快にそれをするといふ事になりますと、日本人は到底英國の人に及びません。

△何うぞ助けて下さい

暹羅は御承知の通り、英佛の兩國から苦められて居りますが、ことに佛蘭西を恐れて居ります。ある時佛蘭西の軍艦が入つて來るといふ噂が立ちました處、立派な婦人達が私共のところに驅けて來ていはれるには、佛蘭西の船が入つて來ては誠に困るが、もし戰爭でも起つたら貴女方は日本の軍艦を呼んで助けて下さるでせうかときくのです。私は此時殆ど泣きました。この國でも上流の地位を占めて居る婦人達が、國を思ふ事は矢張り思ふのであるが、それでは自ら立ちませうといふ考が少しもなく、まづ他國に頼らうといたします、何といふ情ない事でせうと思ふて、私は返事が出來ない程で御座いました。日本人は戰爭をして、たとへ負けても逃げるものなどは一人もないのに、同じ東洋の人でありながら此の國の人はまだ戰ひもしない先きから、何うぞ助けて與れと依頼心を起して居るのであります。これは稽古をする時に、たゞ先生に頼らうとするのと、精神に於ては同じ事であります。

△責任を重んずる實例

英國などでは小さいから自分の仕事に興味をもつと同時に、各自の責任を重んずるといふことが大變によく出來て居るので御座います。それに就いて私が非常に感じた事があります。ある千人許りの生徒のある學校で、幼稚園から小學校、高等女學校迄ある大きな學校でありますが、其校の校長は、今は亡くなられましたけれど、私の先生のミス、ヒユーズなども敎はつた先生で、大層名高く、また偉い方で御座います。で、私は一度其方に御目にかゝつて、其の學校をも見せて頂き度いと思ひましたから、何日頃伺ひましたなら御都合が宜しう御座いませうかと、前以て手紙で御きき合はせをいたしましたので御座います。處が其の御返事は、夏休みは何日迄で、何日から始業であるから其の始業の日の朝入らつしやいといふのです。日本などでは何うでせうか、學校でも見度いといはれゝば、

始業から一週間もして、學校が整頓してから入らつしやいといふでせう。私はまづそれに驚かされましたが愈々其の日の朝時間をはかつて參りますと、校長はこれから生徒が講堂に入る處ですから私と一緒に來て御覽なさいといはれます、私はこれにもまた感心しながら、從いて往つて見て居りますと、千人ばかりの生徒が、秩序よく靜肅に入つて參ります。其時私が時計を見て居りますと、校長が、あなたはこれ丈けの生徒が入るに、何の位の時間を要するかを御覽なさるのでせう。今日は初め故十二分許りかゝりましたが、常には七八分で入つて了ひますといはれました。そして規則の行はれて居るか居らぬかを試めして御覽なさい。尤も十一時に十五分許り休みがありますから、其間は騷しいが、それから一時の辨當時間までは必ず靜肅になつて居る筈であるから、其の積りで何處でも貴女の好きな處を御覽なさいと仰しやるのです。(彼地の學校では朝が早くて、晝のお辨當が一時頃なのですから、十一時に一寸休んで牛乳とビスケット二つ位食べて、お腹を空かないやうにするのです、それは大抵の學校が同じ事であります)。私は校長の言葉に肝膽を拔かれましたが、實際歩いて見ますと、敎師は別段かまひませんのに、生徒の方で、今度は何の時間で、今度はどの敎室といふ風に、何十何百の生徒が廊下で行き違ふので御座いますけれど、一切無言でまことに靜肅を極めて居るので御座います。其の敎師から見られる見られない、參觀人のあるなしに拘はらず、表裏なく責任を重じて居る有樣は、如何に私の心を感動せしめたでせうか。人間が凡てに於て、このやうであつたならば、何んなによい事であらうかと、つくゞ思はれるので御座いました。

△上中下共皆な同じ事

英國人の責任を重んじます事は、啻に學生や上流の人ばかりではありません、下層の勞働者でも同じ事で御座います。例へば停車場で荷物を一寸預けて用達しに出かけます。そして暫くして汽車の出る間際に歸つ

て參りましても、荷物は少も心配がないやうになつて居ります、いつか先の文部次官の木場さんへ上つた時で御座いました。貴女は英國で停車場に荷物を預ける時チエツキを呉れない其の不思議の解決が出來たかと御訊きになりましたが、私はもうそれに慣れて了つて、別に不思議とも思つて居りませんでしたが、御言葉で初めて成程と氣がついたやうな譯で御座いました。全く彼地ではチエツキなどいふものがありません。荷物を驛夫に頼んで、幾らかのお錢をやり、入れて呉れたかときいて、えゝどの函に入れましたといふ言葉さへきけば、もう大丈夫なので御座います、何千哩の道を途中で幾度乘り換へても、先方に着けば安全に其荷物を受取ることが出來ます。勿論英國にも盜賊はありますけれど、普通の場合は、それで安心な旅行が出來るのであります。要するに驛夫は驛夫、下女は下女とつまらないものに至るまで、各自その責任を重んじて居りますから、知らぬ所を旅行いたしましても至つて氣樂なので御座います。さういふ風で御座いますから私は暹羅で惡くした頭を英國に養つて、すつかりよくして了つたやうな譯でした。

△蜜柑を送つて驚いた話

つまり學校社會家庭のいづれを問はず、英國の教育の根底は唯一つ各自の責任をもつといふことにあります。私が日本に歸つて皆さんに御話をして、つとめて頂き度いと思つたのは即ち此事で御座いました。日本の社會では疑ふまいと思ひましても、疑はざるをえないといふ有樣で御座います。つひ先達も歸朝早々其の例があつたのです。何處かで私に蜜柑を澤山贈つて呉れましたのですが、新橋に着いてそれを受取つて見ますと、函の上の方が二層ばかり失くなつて居るではありませんか、驚いて驛夫にたゞして見ますと、えゝ食品は皆斯うで御座います。これ位の事は普通ですと平氣でいつて居りますのには、ます／＼驚かされて了ひました。折角樂しんで歸つた戀しい懷しい日本の而も東京の入口で、まづこんな事に出逢ひまして、私は非

常に不愉快に感じたので御座いました。暹羅はまあ他の國ですから我慢も出來ますけれど、自分の國で懲んを事を見るのは悲しくてなりません、學校に往つて見ても矢張り一向責任を重んずる風のないのは殘念で御座います。

△私の勸めやうと思ふ事

日本人は縱令戰爭には强いと申しましても、戰爭はいつまでもあるものではありません、各自の責任を以て仕事をし、誠實眞面目を旨として國民は相互に信用し合ふやうでなければ、到底一等國民たることは出來まいと思ふので御座います。自分を信じ人を信じ得られないやうな國民では仕方がありませぬ。私の考では藝術學問などは、畢竟何うでもよい。要はたゞそれをする誠實にあると思ふのであります。すべき事を一生懸命にして、それで滿足をするやうでなければなりません、それで私は、これから何んな事でもせよといはれたならば、必ず責任を以て悅んでそれをしよう。かつ自分がつとめるのみならず、自分に接近する人達にも大に勸めやうと思ふて居るので御座います、暹羅の事を思ひ、英國の風を考へ日本の有樣を見ますと、結局それを努めることが非常に大切であると感ずるのであります。

これは女史が谷中の日本女子美術學校でなされたお話の趣意でございます。



常識のない女の悲しむべき實例

常識の缺乏を補ふ方法

女子高等師範學校教授　宮川壽美子

△機會は身邊に纏ふ

常識の缺乏と申せば私なぞは好い標本で、誠にお恥かしき次第ですが、これは現今の女子が只學校に於て學科を學ぶのみで實際に乏しいのが其の一原因であらうと思ひます。學校では專ら學說と理論とを敎へますが、家庭に於ては家事を手傳ふことが少なく、且暇もない爲め、授かつた學藝の應用されることが稀れで日本の女子は常識を養ふ機會が甚だ乏しいやうであります。英國抔では之と趣を異にしまして、來客ある時は兒女等まで皆其席に出て、父母の客やら兒女等の客やら分らぬ位です。從つて家庭に在つても自然社交上其他の知識を得ることが出來ます。其上學校の敎授法なども日本と異なり、作法と云つても、單に禮式のみを敎へずに力を實際に注いで居ります。例へば食事の際には、寄宿舍と家庭とを問はず、卓上には必ず白布を覆ひ、兒女等を客人同樣に扱ふて飲食させますから、特に作法敎授とては無いけれ共、孰れも整然と慣れて居ります。而して隨分微細なる事にまで注意が届きます。

△常識に乏しき一例

我國の女子は右の樣な事に慣れて居らぬ爲め、時としては誠に無愛想なもので、他人の前に出ても只默然として坐つて居る人があります。曾て私を訪ねて來ました或る女學生の如きは、たゞ默つて來て坐つたまゝ何の挨拶もしませんでした。私も誠に工合が惡う御座いましたが、其中『貴女はお幾人のお兄弟か』と質ねますと、始めて口を開いて『六人でございます』と答へましたが、二の句が續きません、更に一二の問を發しても只一言の返答だけで、取付く術がありません。

やゝ暫くして僅に「何か御意見を承りたい」と謂ひました。で其の話をして歸しましたが、何しろ只私のみが談話をしましたので、大變不愉快に思ひました。常識に富んで見聞が廣ければ、談話の資料も自ら豊かで對客の氣を外らす樣なことはありませぬけれど、此の女學生の樣に只默然と坐つて居られたのでは、第一他の氣を惡くする上に、貴重な時間を空費させます。是等は只だ理論のみを學んで、實際に疎かな結果でありますそれ故學校の敎授法を今少しく實際的にする事も必要ですが、他方に於ては家庭に於て成るべく實務に親しむ事が肝腎です。

△食卓上の威儀裝飾

作法の敎授の如きは、作法敎室のみでは事足るものでありませぬ。自習する時でも又食事する時でも威儀を紊さず、而かも食事の際などには、相當に談話を交へて飲食するといふ風にしたならば、大に効果が擧らうと信じます。日本では作法の時間中こそ嚴格にしますけれども、其の外は割合に無頓着で、食事の際にも食卓に只茶碗を列べたのみで、威儀裝飾などは構はず、そして臺には、土瓶の痕が着いたり、茶が溢れたりして、實に見苦るしいので御座いますが、英國抔では別に作法と云つて敎へる譯ではありませんが、家族の食事にも、寄宿舍の食事の時にも、着衣を着換へ、手顏を淸め、容儀を正し、お客を待遇する時と同樣に、食卓には白布を被ふて淸潔にし、花瓶等を置いて裝飾を加へ自ら衣紋を正さしむる樣になつて居ります。從て他の陰口などを言ふこともなく、面白き談話を交へ乍ら行儀正しく、愉快に之を濟ますのであります。家庭寄宿舍等にても此の樣に規律正しくして居りますから格別に禮儀作法の敎授を施さずとも、習慣が第二の天性を作つて、好結果を收めて居ります。

△母として採るべき方法

又家庭敎育上、母親が家事を兒女等と共に相談して處理し、萬事實驗の方法を採りますと、特に力を勞せ

すとも兒女等の常識は養成さるゝのであります。例へば金錢の事にしても、之を銀行へ預ければ五朱の利になるとか、不動產にして置けば一割になる上安全であるとか、又株劵を購へばどうとかいふ風に、學校で算術として敎はる外に母親が之を實際に應用せしむることを努め、食後などに種々自分等の實驗談や失錯談、或は成功談等を試みたり、又は日々の家事に就て世間の實例を引いて、誰はどんな工夫をして居るとか、誰は如何程の勞苦に堪へて居るとか、或は信用を親族間に失ふものは社會に出ても何事も成就するものでないとかいふ事を懇々と說き聞かせますと、それが兒女の常識を養ふ一手段となるのみならず、社交上の事情慣習までも了解せしむる方便となるのであります。然るに若し家政科を學校に於て學ぶのみで、之を實地に應用することを勉めませぬならば、其學ぶ所は所謂机上の空論に止まり、臨機應變の處置を取ること能はず、遂に常識外れの事を行ふ人とならざるを得ないのであります。

△難產の手術に敷島十個

曾て私の聞いた話の中から常識を缺いた實例を擧げて見ますが、其人は或る高等女學校の敎員で、評判の儉約家でありました。或る時其細君が非常な難產で、產婆だけでは處置に窮したから、生徒の親に醫師のあるのを幸ひ其人に賴みました。然るに其の醫師は、我子の敎師の事であれば、特に大事を取つて自己以上の有名な醫師を紹介しました。其人は斯道の名醫の事とて難產も無事に濟みましたが、此敎員は市外に住んで居ましたので、醫師は汽車で往復しました。斯る名醫の往診を乞へば、相當の診察料、汽車賃等を要するは解り切つた話で、此の醫師の診察料は豫じめ幾干と定つて居たさうですが、其敎員は診察料を拂はざるのみか、停車場まで見送つても行かず。車賃抔も出しませぬ、唯だ年末になつて敷島煙草十個計り入つた函を持て行きました。醫師の方では最早忘れて了つて居て、何の用事かと尋ねると、愚妻が出產の際には種々お世

話になりましてと謝辭を陳べたので、醫師は始めて當時の女學校教員たる事を知りましたさうで、其無常識の甚だしいのに驚き、多數の女子を預つて教育しつゝある教育家の所業としては實に不都合である、自己は施療した積りなれば、別に診察料などは望まぬけれどもと話して居つたさうであります。此等は眞に無常識なのか、又は常識の缺乏せる眞似をしたのか解らぬけれど兎に角學校教員の所爲としてあるべき事でないと思はれます。

△識らぬと云ふ事を知らぬ人

次に學識の修養が足らぬ爲めでせうか、自分が知らぬといふ事を識らぬ女子が我國には少なくありません。少しく學識があれば自分の腦力の程度は解かるものですが、それが解らぬ人が多いから困ります。英國杯の女子は學識にも富んで居る上に、家庭の組織も異つて居て、讀書、實驗等の時間が多く得られる爲め己の足らざる所を研究し、又知らざる所は遠慮なく質問して覺えますから、我國の女子に比ぶれば著るしく常識が發達して、且智識が豊富であります。平素力めて之を養はんことを心掛け、政治家に會へば政治上の事を質ね、植物學者に逢へば植物の事即ち菊、薔薇等の栽培法を問ふといふ風に、其接する人物に應じて種種の質問を試みる故、益々智識を擴むることが出來ます。それが日本の女子では何分自己の知らぬといふ事が解らぬから、質問を發することが出來ぬし、又之を聽かうといふ考も起りませぬ。

△感心せる新智識の得方

英國留學中、私はある聰明な女教師と共に一寸汽車に乘つて用達に參つて、僅か三四十分間の中に深く感心した事があります。汽車に乘ると、乘客中に魚屋の女が居りました。教師は其女に向ひ、『貴方は魚屋さんですね』と問ふ。魚屋の女は左樣でございますと應へる。又『此頃は魚がよく賣れますか』と質ねる。『どうも一向賣れませぬ』と答へる。更に『魚が賣れぬと腐

敗しませうが、其時はそれを何うしますか」と訊く。『賣れませぬ時には、夫れをフライにして工夫等に賣ります』と云ふ。倘種々の問答を試みましたが、一寸した機會をも利用して、其地の人情風俗や、下層社會の狀態等を知るやうに努めて居ります。又汽車を降りて市中を歩く際などでも、遊んで居る子供に對ひ、『只今は學校が休みですか、學校があるのと休みと何方が宜いですか』と質ねる。すると兒女等は『學校がある方が宜い、面白い話が聞かれるから』抔と應へます。更に『只今歷史では何なお話を敎はつて居りますか、日本と露西亞と戰爭の話を聞きましたか、何方が何うして勝利を得ましたか』、抔と種々の談話を試みつゝ、其間に兒女の學校に對する觀念を知り、同時に學校の狀況をも察すると云ふ風であります。心ある人は、男女を問はず日夕汲々として新智識を得ることに骨折つて居りまして、一寸散歩する間にも注意を懈りませぬから、見聞が自然廣くなる理であります。

△臺所に居ても機會はあり

要するに我國の女子は、學問が淺いのと、見聞が狹いのと、自己の智識が足らぬといふ事を知らぬのと、又一方に於ては學校の敎授法が理論に偏して實際的でない爲め、自然常識の發達が鈍いのであらうと思はれます。男女の別なく、誰でも少し心掛けさへすれば、研究の機會は澤山あります。鷄卵屋が臺所へ來たならば鷄卵の保存法を訊き、魚屋が來たならば調理法や魚類の用途抔を觀察するといふ風にして、女子は徼細の事まで注意して智識を得ることが必要であります。然るに冷々淡々として何等の智識を探さんとする希望もないから常識が足りなくなつて參ります。故に私は現今の家庭と社會の實況に鑑みて、力めて如上の陋習を除き、之と共に英國風の常識修養法を行ふやうに勸めたいのであります。

家庭に於ける防火操練

廣瀬彦太

一家の主人として外出中の心配事項は多々あるべきも、就中「火の用心」なる感念は各人を通じて常に念頭を去らぬものである。

而かも火災は細小の不注意より起るものであるから、主婦たる人は平素使用する人々を戒飭して、之を未然に防ぐを要すると共に、若し不幸にして火災を起したる時は如何に所置するかを常に研究して置かねばならぬ。それには平素余が所謂「防火操練」なるものを家庭に於て行ひ置けば、事に際して狼狽せず、適當に處理する事が能きようと思ふ。此の操練は月に二回若しくば一週間一回位行へば、數ケ月を出でずして機宜を誤らず爲し得る樣になつてくる。

これを詳しく云へば一家庭即ち老人、主婦、小兒を始め下男下女等に到る迄豫め一定の配置を作り置き、イザと云ふ場合には其の配置によつて事を爲すのである。其の配置法等は家屋の構造、人員家具等の多寡等にもよるから一定する事は能きぬが、一寸雛形を示せば次の如きものである。

第一、火災を發見したる者は大聲にて『火災』と叫ぶと同時に之を主婦（主人）に報ず。

但し演習の時は鈴又は適當なる鳴物を以て火災の合圖となす。

第二、主人（主婦）は直に現場に馳せ來り適當の處置をなす。其の配置は次の如し。

（第一期）火災未だ微々たる時。

主婦　現場に到り諸事萬端を指揮監督す。

下婢　消火器（備へあらば）を火災場に運ぶ。

下僕　給水運搬其他命により消火に盡力す。

（第二期）火災劇しく到底自力にて消し能はざる時

主婦　老人小兒を避難せしめ貴重品、重要書類を携帶す。

下婢　某々の物品を携帶す。



學僕　某々の書類搬出、警察署及び主人に報告。

車夫　主人を迎へに赴く。

右は唯概念を與ふる爲め架空の事を記せしに過ぎず。讀者は宜しく細密なる研究をなし、適當なる配置を構成し、應急の處置を定め置かれるならば、時に臨みて大なる錯誤なく、常に主人をして外出中と雖も後顧の憂なからしむる事を得るのである。

演習を行ふには、先づ定めたる配置を十分會得せしめ置き、突然一下婢に命じ鈴を打ち振らしめて「火災」なる事を報じ、各自定められたる配置に就くか否やを監督し、若し誤りあるときは一々之を正して滿足なる結果を得る迄行つて見る。而して火災場を厨房若しくは風呂場と假定せば極めて都合が宜いであらう。操練終りしときは、主婦たる指揮官は、皆の働き振りや何かに付批評を試み、不注意の點をば指摘し矯正して、次回の操練に於ては誤りを再び繰り返す事の無い樣に導く。

此の防火操練を毎月、日を定めて（例へば月の第一の土曜と云ふが如し）行ひ、同時に屋内大掃除を行へば更に妙であらう。即ち此の副產物として家屋を清潔にし、精神を快活ならしめ、知らず〳〵の間に適當の運動をなす事が能きるのである。たゞ急いで事をなす事なれば兎角要點を破損する等の憂があるから此點には十分注意が必要である。全國幾萬の讀者の家庭中若し余が微志を容れて幾人にても之を實行する人があれば自分は甚だ滿足に思ふ。



卒業生のゆくゑ

秋雨女

會へばかならず、その日のことをくりかへします。おもへばわすれようとしてわすられぬ四月十一日、四十の姉妹が螢雪三年の證書を手にして、あすは散る、今宵を人世の花といふ朧夜、互に胸の書圖を見せ合ふて前途の光明に微笑むだことを追想すれば、無量の感慨に胸は一杯になります。何とはしれず涙に咽びます。此の涙！　嗚呼此のなみだ！　歸する泉は一とつで御座いませう。寂しい夕、かなしい夜、元氣蓋世の朝、みな此のなみだに慰さめられ、いたはられ、ふるひ起されるのでは御座いませんか。

かぞへてもう半年餘りになります、土地に皆樣がおそろひなればまたおめにかゝる折もありませうが、級メードのおほかたはよその故山のお人なり、ともすればお筆の跡も絶ゆるとはなく、うとくなるもので御座います。まして境遇でもお變りになるともうそれきりつまりは匆忙極まりなき人世ではありませうが、また果敢ないちぎりとよりおもはれませぬ。もとより心はかはらずとも馴れては脱しにくい習慣で御座います。第一形の上からいふても淺薄なことゝよりおもはれませぬ。

それが口惜しさに、せめては皆樣の御墨のあと、よしや一筆づゝなりとも送らせたまはゞ、集めて七草の花の種々、さぞ思ひ出の多い秋ともなりませうかと出すぎた仕方とはためらひましたけれど、ともかく草籠をおまはし申しましたが、一と月と七日を日本中はせまはつて昨日手許に届きました、見れば、ゆきがけ秋雨が入れた寂しい野菊のふたもとが、紫苑、なでしこ、

萩、桔梗、なかにはめづらしい西洋花もまぢつて、秋とはおもはれぬ賑やかさになつてもどつて参りました。これを見ました私のよろこび！なまじ書く丈け口にする丈け野暮と存じます。

ならば、かけて玉はりし露のきえぬうちにとこゝに新らしい草籠を編みました次第即はちこれを以てはしがきにいたします。

（以下いろは順）

京の秋　京都にて　りう子



おめづらしき御便り、むかし偲ばれ、なつかしく存じ参らせ候。

扨も當地は今を日本中にて誇る可き最好時期に御座候。紅葉とならば嵐山、高尾、栂尾、槇尾、いづれも満山錦を織りて、さわらば袖に色やそみなむ風情に候。きのふ迄は稲荷あたりの茸狩に家路わすれし人々のけふはまた、大堰の川にうつる紅の水をすくひてよろこび居り候。

かくもさわがしき都をさけて嵯峨野の秋の虫きかばやと、ある夜さすらひ出て候ひしが歌によまれし昔しはしらず、今はさるあとかたもなく候、それよりは我家の方が餘程ものゝあはれはまさり居り候。何故とや、

風寒き暮秋のまどに身を凭らせて、すぎし二十年の月日人事を走馬燈の樣に胸にくりかへすとき黑谷あたり智恩院あたり、韻を引いてきこゆる鐘の音にはふるめかしけれど諸行無常を感せずには居られず候、感じて轉た懷舊の念に堪へず候。

十月の運動會が十二月にのびて、寒天の霜の曉、半泣きになりてクラスの人の練習を指揮せし勇氣、今もありやと尋ねたまはゞ、否とは申さず候へども、あたたかき床のうちにゐて歌おもふかたに熱する樣に相成候。あのとき用ゐしタオル、今もなほ毎夜の枕邊を去らず候。以下少し土地の人情風俗を申さむ。

どこまでも暢氣なるは京の人に候。餘り暢氣すぎる所爲か、全身の筋肉が何處となく、弛み居る樣見うけられ候は僻目か、第一に其目が少しも活らき不申、眉と眉との間一寸もはなれ居る男が多く候、女は名にし負ふ本場だけに綺麗なることは無類に候へども、どこやら氣が利かず、歌祭文のお染然だる女がたく山に候これを東京のに比べてむしろ私の趣味は東京のにむかひ候、即はち京の羽二重肌よりは東京の晒はだをよろこぶものにて候、これにつき先日あるまとゐに美人論が出でゝ甲は前者の長所のみをならべ乙は後者の短所をいはぬといふ風にて却々の議論に候ひしがつゞまる處見る人の好尙なれば何とも判斷のつけ樣なく、つけた處で自れの御面相が右左自由になるものにもあらざればそのまゝお流れになりて候ひしが、實際わたくしならば東京の女となりたくと存じ居候。抑ゝ世に美くしき人はおほかれど、心底惚れたき女は却々に見つからぬもの、これ獨りその容貌をいふにあらずして、其人の心意氣、むづかしく申せば人格の反映より來れる美くしさならでは滿足が出來ぬ故に候可きか、故によしや下賤なる界の女なりとも此の條件にかなひたる人を私は美人と申候、成程ふりかへる樣な女は腐るほど拜見いたし居候へど、かれ等より白粉と衣裳と髮飾りを取りて何等うつくしき所ありと申さる可き、結局金を離れての價値は存外みじめなるものに候はずや。しかしこれは私共仲間丈けの岡燒論なり、若しわれに

天稟の美貌と驚くほどの財とを與へられしめばかゝる提出案はとても出ざりしならむと存候思へば何が幸か不幸か標準もなき空相場に飛だことを申上候、但し執念くいふと衛生的美人丈けはさながら燒鏝の香りに聯想が參りてどうしてもきらひに候。

人情の點よりいひても關東の人はどこやら俠なる骨が多分にある樣なり從つて圖太き處あり、これに反して關西の方は才子肌にして從つて外見榮坊のうち火の車が多き樣に見うけられ候、それでゐて却々に吝なる方なれば、到底煮ても燒いても食ひこなせぬ部類に屬することゝ存候。



腕もなき脛かじりの東京よりこゝに歸りて感じたる丈けにてもすでにこれに候、まして經世の士が觀じての當地は果して如何の位置に候はむ、人才とても一もなし。

只有り美術國の名を以てすべての醜を覆ひつくすより外に手段なきものとはあまりに〳〵情なく存せられ候、しかしこれも單に机の上の議論なりと鼻で笑つて風と消すほどの膽のあるかたが半分もあらば幸このうへもなく候、己が住む土地丈けに惡くは言ひ度くな

けれど、可愛い丶丈けにまた小言もつひ〲多くなり候。

過去をいふは野暮なりとの御批評もあらむさらばしづかに將來の發展を鶴首いたし候はむかな。

末ながら同窓の御人々の御健在を祈る早々

小學教師

栃木にて　くみ子

最少し自分に力があつたら女學校の先生に、など丶の大望を美ごとはづして、こ丶の小學に職を奉じてからもう五ヶ月になりますが、全く小學校の方が私に適當してゐたこと丶今になつてさとりました。

片田舍なのです、でも豆腐屋へは一里もありませう魚屋はお隣りにあります。私のうちはその魚屋のとなりのランプ屋の二階ですまことに親切なお女房さんが居りまして萬事の世話をしてくれますので家をはなれてゐても何の不自由なく毎日と送つて居ります。

とは申すもの丶雨の日曜など話し相手もなく、好きな全集もよみあきて欠伸が六つも出た日などつく〲きのふが戀しくなります、無理では御座いますまい？たとへ一日物言はなくても、友のあつた昨日は心丈夫でした、依頼心かもしれませむ、けれども一概にさうはいはれませむ、淋しいといふ情にふたつはないのですもの、實に學ぶ時ほど樂しいことはなく、敎へるときほど苦しいことはないと思ひましたのは、私一人でもないでせう、と同時に此の小さいこどもに向つて敎へられたことをも感謝してやみません、この罪のない無垢な、しかも事々物々におどろきの眼を見はり詩人の如なこどもを敎へ樣となせ始めからおもはなんだかと今更の樣におもはれてなりません、俗物を以て自重して居た私も此の頃はこの子供に由て大分詩化されました。

ことに秋天高く澄むで、野に肥馬の嘶きをきくの日二級ほどの生徒を連れて近所の森に散策に參りました時などは殆どこの世の快樂ではない、全く人間界の者でない樣におもひます。嬉々として草に戯むれる子供しづかに私の話しを迫る子供、徒歩競爭に夢中になる

子供、何せよ尋常四年と五年の大切な時期の子供ですからちつとも油斷はなりません、實地の教育は學理その儘から、ずつとはなれて居りますから、字に書いたノートは參考にするので、あたまの中のノートが非常に大切なものであるといふことを、ほんとうに味はふとが出來たのです。すべてこれらの子供等を相手に教へつ、教へられつ愉快なる日を送つて居りますから御安心下さいます様、郷里からも歸れと申しますが今しばらくかうして居りたいと存じます、猶土地人情に就ても申上たいのですが餘りながくなりますからやめませう、皆さん御機嫌よろしくさよなら。

女店員

静岡にて　妙子

『入らつしやいましさあどうぞおかけ下さい』
『お日和つゞきて結構で御座います』
これ等の言葉を毎日繰返し、さうして得意なると失意なるとを問はず、始終元氣のよい笑顔を以て來客に應接する我々の商賣はまだ皆様の御經驗にはならない所であらうと思ふ。

東京に本店を有する雜貨の商會である、可成大きいものである。勤務時間は午前八時から夕の六時迄と夕の六時から翌朝の八時迄との二通りに分れてゐる、故に一日交代の様になつてゐるので樂なことは樂であるが、その勤務時間の骨の折れることは、つまり氣骨を使ふことが非常なのである。これが自分の家ならば何のことはないが、人に使はれる身である、しかもその遣方に由ては客を他に走らすの恐れもあるし、また飛んでもないものを背負込まねばならなくなる、一言一行が算盤に乘り信用に關する其の責任の重いことは、なか〳〵級に居てアンケラカンとしてゐた時分とは大きな差である。その時分に「明日まで」との作文の課題にすら無責任であつた自分は今になつて甚だ當時の行爲を悔いる。今店員になつて最初に感じた點はこれであつた、事責任の大小はあり、といつても盡す可き誠に於て變りはない、當今の日本商人がこの點に注意すると否とで一國の經濟を左右するものであるといふ

ことも漸やく實地に識ることを得たのである。

　扨色々の經驗を得ることを得たが、今迄の處の結論をつけるならば、正、誠、和、以上を自分は三戒として常に心懸けてゐる正は即ちいつはりなきこと、誠は只頑固なる正直にあらずして臨機應變の才より出たる誠である。和は即ち人との關係に必要なる調和常に笑みを含むで綽々たる餘裕を存す可き事目下の境遇としてこれ丈けはどうしても忘るゝことが出來ない戒めであるとおもふ。獨り店員となつたからでの戒めでなく、將來の目的に對しても此の心は異らぬのである否自分一個に止まらず誰れもが家庭に於てこの心は忘られぬことであらうとおもふ。

　これにつく〴〵感ずるのは談話上の秘訣である。それは人をして話しそのものに興味を持たせることである、世には自分ばかり饒舌くりまはして人にちつとも話しをさせぬ人がある、かゝる人に對しては決して其の話しの腰を折らぬ樣にすることである。またさきの人が同じことをくりかへしてもそれを始めて聞く樣に先きの人に耻をかゝせぬことは最も大切なことでありまた取る可き謙遜の態度であらう、それをまた始まつたといふやうな顔を假にも見せるといふことは信用を落すこと非常である、要するに頭の低い人でなければならぬ、頭の低いといふても阿諛佞辯するのではない自分の品位は整然と持つてゐてさうして先方を尊んでやることである。故に今の世の中で、腕のある人格の高い人ほど謙遜で叮嚀である樣に思ふ、他人に對する態度といふものが、琴の師匠でもさうである、腕の冴えた人ほど出來ぬ樣な顔に見える。そして他に對して甚だ叮嚀である。萬事がさうともいへまいがとにかく馬鹿に見えたら偉いもんであらうと極端かしらぬがさうおもはれる。

　話しが傍にそれて大變長くなりました。如上自分は目下勢一杯である。前述の三條件の二つは、却々その餘裕が出ない、この頃は大分に人間がカス〳〵してゐる。しかしこの草籠がまはつて大分露を頂戴した、益益勵んで朧夜の契ひを實現し樣と樂んでゐます。

多言御許容下さいませ。

終りに女子の職業の新生面を開くに就ての御同志が御賛助を祈ります。

野田の朝

千葉にて　とよ子

妙子さまの様な御活動は薬にしたくも出来ないのですよ。あの時嫌つて逃げを張つた演藝會の立役でも引きうけて、檜舞臺のうへでゝも啖火がきつて見たうござんすね。

とは申せ、霧にはれゆく野田の朝は、



君にわかれてまつ原ゆけば
松の露やらなみだやら――

と詠ふて通る馬子衆のふるいつく様な聲も耳にします

紅葉に情けのさんざしぐれも三日おきくらゐには窓をうちます、銚子あたりへお越しなされたらどうぞ杖で

はない蝙蝠傘をもわが家に立てたまへとおまち申します

わが庵は往さ來るさの道人を
むかへいたはる夕顔の宿。

今は七草がさきみだれて居りますよ。

白墨の塵　武生にて　とも子

一世に私しほど都を戀しがるものはありませんでせう。

一目下の狀態は略くみ子さんと似てゐますから、もう二度申さず。

一異なる所は、風土、人情、健康！　私しは脚氣に惱まされて小ひどい目にあひました。

一近頃は髮も美くしく結ぶ樣になりましたから御安心下さい。

一富山の宅から柿を送つて來ましたのよ、學生時代なら樂しい會が開けるけれど。

一白墨のちりに埋まつて白髮になるのかとおもふとメレーライオンの偉大なる人格におもひ及ぼす。

何をしても同じ畑に二人は這入れぬと自重してをります。

一折々は異鄉の孤客に文おこせて下さい。

其の面影　東京にて　たま子

まだ素浪人です！

一家の政權を左右する主婦ともならず、さりとて文壇の流行兒になるには素養鍛錬が足らず、從つて目下元氣頗る銷沈の姿である。

昔日の飛將軍といふとお株が出たと笑はれるが、實際理屈屋の飛將軍、今やその面影は灰色の雲に蔽はれてゐる。帷幕にめぐらす策士は散り〳〵バラ〳〵でとんと目から目に物言ふことが出來ぬ。

何の因果か吾々の四人は連中と呼ばれてゐた。どういふ意味からかは今以て正當の判斷が下らぬが、あの時分の元氣がなつかしい。今から考へると可笑しくなる、われながら其のづう〳〵しさ加減に呆れずに居られない。

しかしよく學課には忠實であつたつもりだあの時分の勢で來たら今はも少し物の判るものになつて居られたゞらう。が散漫たる頭に何時の間にか成つてしまつたらしい。五月頃からとね子氏の紹介である雜誌の寄稿を遣つて見たが、どうも思ふ樣に筆がうごかず、とう／＼失敗にしよげて夏中鹽原の山中に膽を洗ふたそれでどうやら人間らしくなつて九月には呑む樣な元氣を以て歸京した。

がそれもしばらく、また意氣銷沈の有樣に螺旋がもどつて引つゞき今日に及んでゐるそこでつく／＼自分はかうおもふ、吾々今日の職務は深く勉强し、深く考がへる、それが唯一の慰安たるものであらうと。

昨宵とね子氏の處にかう手紙を書いた。

――前略――私は愈ゝ以て意氣銷沈、面白をかしきこと塵ほどもなし、かくして月日は遠慮なしに流れ／＼て無意味に自分を塚穴に運び去るかとおもへば少々ばかり心細き次第に候、何か御書になりしや、何だか近頃は更に馬鹿らしくて書く氣にもなれず、またいくら面白い本でも我れを忘れて讀むこともなく殆んど自分の身體は空氣の流通する空管に異ならぬ樣な氣がいたし候、かくては生命の歸趣もあつたものにあらず、さながら砂地に大建築をなすがごとき現今の社會現象に律せられ居る吾々は實に愚またみぢめなるものと存じ候下略。

返事はまだ來ぬが仕方のない奴だと思はれたらう。もう自白もこれくらゐにして置かぬと猶のこと自分が無價値偶然におもはれる。

但しこゝに一とつおたまさんが破天荒の企がある。いよ／＼實行する迄は發表すまいと定めてゐるが、自分の机上に簿記の新らしい帳とインクスタンドに二色のインクが充ちたことゝ算盤の可愛いゝのが載つて居ること丈けを豫告しておく。

あすは目黒の栗飯でも味はいに往かうと樂しんでゐる。

客觀なこともいひたいが皮肉屋のとね子氏も居られるからこれに御讓りして自分はこれで御免を被る。其の面影瘦せたといふのを最後の言として。（以下續出）

今後の婦人に必要なる頭腦

靑山學院　本多貞子

世の中の人といふ觀念

これは斬新な説でも何でもなく、よくお話もし、又他樣も仰有る事ですが、今後の婦人に必要な心懸けは自分も世界の一員であるといふ自覺を持つ事だらうと思ひます。從つて又子供を持つたならば、その子供も亦世界の一員であると思ひ、その心で育てゝゆかねばなりません。唯家内の事さへすればよい、經濟衣食の事がよく出來て、唯自分の家さへ旨く行けばよい、といふ樣な頭腦ではなるまいと思ひます。最つと頭腦の中が廣くなつて、我も世界の一員であると眞正に思ふやうにならねば不可ません。

よく申す島國根性で、何か計畫する事でも或は考へ方でも、日本人のは何うも總て小さう御座います。殊に婦人の胸中や眼の及ぶ範圍といふものは、實に小さいと思ひます。殆ど家庭あるを知るのみで、其以外に對する婦人の關係や職分などは、全く問題にならないと言ふ樣ではなりますまい。けれど夢にも廣い事ばかり考へて家庭の事を疎そかにせよなどゝいふ意味ではありません。固より家庭には小さい事が多いので、基督が『一杯の冷水を我に與ふるものも亦神に嘉せられん』と說かれた通り、その小事をよく務めるのが立派な行で御座いますが、然しその小さな事を爲ながら大きな事を考へてゐるのが肝要で御座いませう。冷水一杯の務を一方で盡すと共に、一方では宇宙、神、人類の一員といふ樣な大きな問題にも頭腦を傾けねば、進歩せる婦人とは申されますまい。

大體の智識と理解力

今後の婦人には學識が必要だとは誰も申す事で、そして現に女子の學問が進みつゝあるは事實ですが、然し未だ却々男子には及びも付かぬ狀態で居ります。將

來は最つと女子の學識が進んで、一分とは行かずとも略男子の話し相手になれる位にはならねばなりません。

　尤も女子には男子の負擔せぬ負擔——裁縫とか料理とかいふ種々の仕事があります。その上に猶男子と同じ様になれとは無理な注文で御座いませうから、何でも大體の智識を得て大體の理解が出來る樣にと心懸けるのです。精細に亘つた事に一々通ずる事は出來ずとも大體の理解と興味とさへ持つて居れば、相應に男子の話し相手になつてそれを慰める事は出來るものですこの「大體」にといふ心懸が一つの肝要な事であらうと思ひます。

　そして斯かる心懸も、根本の「世界の一員」といふ自覺のある處から自づと出て來るもので、その自覺が自然に智識を廣め世界を知るの導きともなるので御座います。何事も此の根本の考が大切であると思ひます。

定つた見識

　然るに近來の御婦人は兎角定見が無いやうです。結婚についても或は徒らにその樂を空想したり、或は又結婚を面倒がつて、寧そ自活して行かうといふ樣な御婦人が多くなつて參りました。つまり少し世間が分つて來て、却々結婚問題や家庭生活も難かしいものだといふ事を知り、又一方には何うなりとも自活位は出來る技能が出來て參つたゝめに、寧その事氣樂にしてゐようといふ考になるのでせうが、誠に憂ふべき傾向と思ひます。

　これといふも世の風潮に漂はされて、自分に確乎した定見が無いからです。元來嫁に行つて樂をしようといふのが根本の間違ひで妻となり母となつて家庭のうるさい仕事を扱ふのは婦人と生れたものゝ務めと思つて致さねばならぬのです。そりや最う家庭の女の仕事といふものは際限なくあるもので、幾程行つても盡きないものです。樂をするつもりでは到底出來ない事です。

　結婚のみではなく、何事にも定見のないのが今の婦

人の弊ではありますまいか。家事の整理にせよ子供の教育にせよ、例へば私共で御座いますと基督教主義を教へられて居りますので、それによつて自から標準が立つて參りますが、その一定の標準といふものを持たずに行つて居る人が多くはありますまいか。

家庭の事を處置するにも、子女を取扱ふにも、人と交際してゆくにも、總て自分は世界の一員又お互に世界の一員といふ考を以て行つて行くだけでも、其處に又一つの標準が出來る譯です。つまり今後の婦人は以上申す樣な自覺、學識、さては一定の主義定見があつて、それで萬事を處置應對してゆくやうにしたいものと思ひます。

讀書頭腦の開拓

將來の婦人は妻となり母となつた後までも、常に讀書を忘れぬやうな傾向にならねば不可と思ひますが、さて私の實際を申すと殆ど讀書をしないと申してよいのです、それは私は家事といふ家事は何でも致すからで、これは母の感化で御座いますが、最う場合次第で風呂の水も汲めば隨分草取でも何でも致します。それにお客樣が輻輳んで、例へば子供の看病で徹夜して、曉方から代つて貰つて少し休まうと、一寸横着を決めて朝寢坊をしてゐると最うお客樣、大狼狽に起きて顏を洗つてお目に懸つてゐると、生憎にお客樣が續いて遂々正午過までも朝御飯を戴かないと言ふやうな事が此間もありました。

何方も先づ這麼風で隨分家は持つてゐるとお互に隙はないものですから、私のやうに讀書の出來ないお方が多い事と思ひます。尤も何かお話しなどをお賴まれました時は、必要に迫られて大急ぎで書物を調べる事もありますが、其の他はやう〳〵新聞を讀む位な有樣で御座います。幸に基督教に屬して居りますので、日曜の集まりなどによつて頭腦を新たにする事が出來るので、これが讀書の補ひになつて居ります。一般の御婦人も、却々自分だけの考では讀書が出來ますまいと思ひますから、其の點から考へても敎會にお屬しなさるが利益かと思ひます。兎も角も常に頭腦を開拓して目前の家事にのみ囚はれて了はないやうな御注意が極めて肝要と思ひます。

婦人を推薦する標準

三輪田元道

縁談に就て

若し人から嫁を世話してくれと依頼があつた場合には私は左の條件に適つた人を推薦する。

一　純潔なること

取り立てゝいふほど才學秀いでずとも、つまり平凡でも純潔でなければならぬ。

二　役に立つこと

學問は相當にあつても役に立たない婦人が幾らもある。妻として、母として己が職責を全ふすることの出來ぬやうな婦人はいけない。

三　健全なること

身體が弱くては如何に智惠學問があつても、又他に何程の長所があつても、妻としての本分を盡すことは不可能である。家庭に春風を送ることも出來なければ健康な兒を擧ぐることも出來ない。

私が妻を貰ひました時にも右三條件を充したものといふのでした。併し私の見方が誤つたかどうかは知らぬが、健康であるといふことは確な事實で、高等師範に居る四年間に一度も服藥したことがないといふのでも分ります。斯ういふ丈夫な身體なのですから、妻は庭球の選手であつたのです。

私はよく方々から申込みを受けますが、其都度右の三條件に適つた婦人を推薦して居ります。所がをかしい事にはいつでも私の考と申込の條件とは違つてゐます。兎角世間では美人であること、娘の門地の高いことを條件として持つて來る、美を好むは人間の性情でありますから私とても美人は惡いといふのではない、けれども美人といふものはさう澤山あるものでない、まあ十人に一人もなしで見ると、皆が美人を美人をと望む結果は、百組の結婚者中で九十人までは失望者となる譯である。是れは結局不能を望むことになるのである。況して美貌と健康とは一致しないやうであ

ります。

それから門地の高いといふこと、即ち爵位があるとか、高官であるとか又は富豪であるとか、何んでも娘の里の能ふ限り地位の高からんことを望むやうであるが、女は自分の里がよければ高慢になり易い、同情がない、困難に打ち勝つ氣力がないといふ欠點があるから私は地位のあまり高くないものゝ方がよいと信ずる、又時には單に問合をしてくる人がある。斯ういふ場合には私は其婦人の長所短所を悉く答へる、此の婦人は學問はどうだ、性質はどうだ、癖がないかあるか赤裸々に答へるのです。斯ういう風にして置けば其人が後で失望することもあるまいし、又婦人の方にしても買ひ被られる恐れがない。相手方に買被られたり考違ひをされたりするほど辛いことはないもので、例へば馬鹿な婦人が怜悧な婦人と間違へられるほど苦しいことはない。

最後に賢といふ條件を出す人はあまりないが、怜悧なものは、不德を働くものではありません。それから百人が百人迄條件として來るは、健全といふこと、誰れでも身體の弱いのはいけないと見えます。其他道德品性といふやうなこと、是れは人類としての必要條件殊更に云ふべき必要はありますまい。

就職に就て

學校、銀行會社、新聞雜誌社其他から人を求めて來たなら私は左の條件に適つた人を推薦します。

一　仕事の出來る者

仕事の出來ない者は何をやつても成功するものではありませぬ。然らば仕事の出來る人はどんな人かと云へば頭腦が明晰で、判斷力に富み、事に當つて迷はず、而して迅速に事を處理することの出來るものであります。

二　淡泊なる者

、、、スラリとして、癖のない、片意地でない、氣六ケしくない、角のない、野心のない人間を云ふのです。

三　親切で綿密なる者

粗暴でなく、叮嚀親切で、綿密に、熱心に事に當る者でなくてはならない。人はよく婦人は綿密であると申しますが、男子の方が遙に綿密であります。男子の社會は廣いが爲めに、氣を方々へ配らなければならないに反して女子の社會は甚だ狹い、それゆゑに氣を廣く散ずる必要もないし、一寸見ると綿密で執着心があるやうですが、本統は男子よりも粗雜であるから、よく氣をつけねばならぬ。



四　人格を自覺する者

己が人格を自覺し、責任を自覺するものは職責を全ふする人であります。

五　職業に適切なる者

即ち氣風の合つたものであります。好こそ物の上手なれで、性質が其職業に適切であれば、その道にかけては一種の天才であります。嫌々事に當つては好果のあがるものではありませぬ。

婚約後煩悶し居る處女の述懐

女學校を一緒に出た友の一人が、近頃結婚なさろと聞いて、祝ひの手紙を送りました、すると其の返事に餘りの御喜び、餘りの御冷評し、人には然まで幸福らしう見え候かと、さりとてもこの涙の恨めしう候……、等と悲觀的の文字、何が不足で此樣な事を被仰る、人はどの樣になつても滿足と云ふ事は出來ぬ者かと冷やかに思つたものゝ、又どの樣な不滿を包んで居らつしやるかも知れないと、例の心から其れとなく御訪れすれば、取次の女中が、今日は御風でふせつて居らつしやいますと言ふ、兎も角もと御目にかゝれば、能う來らしつて下さいました、彼の手紙は御覽なすつて、此節ぢや、御目出度うとか御祝ひ申しますとかつて煩さくて／＼今日なんかも寢る程でもないんですけど、わざとふせつて居りますの、いえ哲學の方ですよ、だからられ、いつも／＼人は何の爲に……なんて言ひさうな顏をしてますわ、仲人に立つた方が叔父樣でせう、そりや眞面目で、何處かに優しい暖味があつてと、話は卻卻甘いんですもの、私もうつかり嫁く氣になりましたの、見合の時に何だか風采の揚らない、丈の低い、至つて眼の小さな、學者の樣でもない方と思ひましたけれども、そんな容姿で以て彼是言ふ樣な私ではありませんわ、只れ、約婚後一月ばかし交際なして見ますのに、私怎うしても自分の良人と云ふ樣な染み／＼嬉しい情が出ないで、卻つて其の人の前に出れば身體中が冷たくなつ了ひますの、そして之が私の一生を倶にする人かと思へば、悲しくなる樣です。そりやもう結納も濟んでる以上、那麽勝手な事は言へないと思つて見ても、嫌だと思ひ込んだら爲す事云ふ事尙嫌ですの、第一性質が合はないぢやありませんか、御承知の通り私は快活な方ですのに、彼方は又何だか妙に考へ込んでゝ始終哲學の理論でも調べて居る樣ですの、父は彼の通り學者好きですから只々眞面目だとか學者肌とかつて、自分の良人にでもする樣に氣に入つてますし、母は又父を一番賢い人の樣に信じて居ますから、私の言ふ事等には耳も貸しちや吳れません、御樣子は幾分か不足だらうけれども、人間は顏よりも心と知れきつた事を言つて叱りますの、三度目？に此家に來らつした時、勝手の方で女中が面白い事を言いましたから、遠慮なしに例の通り聲を出して笑ひましたわ、するとあんな笑ひ方は無心者の樣だから御愼みなさいなんて言ふんですの、尙々嫌氣がさしましたわ、一緒になつたら朝から晩迄べそかいた樣にして沈み込んで居なけりやならないんでせうか、考へて見ると私の同組の方等夫々立派な旦那樣を御持ちですわ、學識の點は勝るとも劣りやしないでせうけれども、あんな唐變木の風采の揚らない人はないでせう、だから皆樣が御祝ひなすつて下すつても卻つて腹が立つ樣ですわ、母なんぞ、妻となつて一緒に住む樣になれば、又今の樣ぢやない、きつと善く思へるよなんて、ホヽヽまさか、今だつて妻となつてからだつて人間が違ふのぢやあるまいし、嫌な人は何處迄も嫌ですわ、だから私もう決して人を御世話する者ぢやないと思ひます、私はもう一度自由な處女となれないんでせうか、とそれは／＼不平の數々を聞かされた。



今の世に行はるゝ不完全な結婚を防ぐ方法

佐々醒雪

事新らしい申條ではあるが、現今の結婚の風習は、何とかして多少の改良を加へたいものだ。去年弟の嫁をもらふ、今年は又近親に婚約の成つたもの、將に成らんとするものが各一人宛ある。かゝる間に處してつく〴〵、今日の風俗の不都合を感せざるを得なかつたのである。昔の樣に早婚が流行して、男女ともに、未だ意志も固くなく、趣味も定つてゐないといふ場合には、双方互に同化せられることも容易で、氣心も知らぬ間柄でも、存外に圓滿な結果を見ることが多かつたのであらう。今日では普通の教育を終る頃には、男女ともに一廉の見識も出來てゐる、趣味も略定つてゐる、從つて同化作用が甚だ困難なことが多い。

加之、封建の時代には、個人の運命は十の八九定つてゐる、一家の家憲や格式が、その妻を支配するのみならず、その夫をも支配してゐた、その父母の舉動性行運命は、多くの場合に、そのまゝ子供に繼承せらるべきものであつた。だから、その父母を十分に觀察し、一家の狀態を見極めさへすれば、先づは、嫁入してから意想外の感を懷くことも尠なかつたので、よしや新郎が稍頓馬であつても、家祿を取り上げられるまでゝなくば、辛棒もならう。必竟は人に嫁するといふよりも、家に嫁するといふ有樣であるから、仲人口に多少の割引をして、少しばかり近傍を問ひ合せる位でも、先づ〳〵濟ましておくことが出來たのである。

ところが、今日ではさうお手輕には濟まされない。

だといつて、西洋風の男女交際も、今日の所、一寸行はれ難いし、餘程のお轉婆でない限りは、新郎の候補者と、喃々と意中を語り合つて、果して意氣投合するや否やを確めるといふことが出來得るものではない。若し又、婿にならうといふ人の近親が、女にあつて見たところで、唯眞赤になつて伏目勝に、もぢ〳〵してゐる所を、どんなに久しく觀察しても、公園の見合ひとたいした異同はないではあるまいか。そこで止を得す、友人間の噂を聞いて廻るか、舊師の觀察を叩くか、そんなこんなで、お互に暗中摸索をやつてゐる。それもまづ先方に口をかけてから問ひ合して見て、中途で破談にするのも可笑しいとあつて、大抵は無斷で他人の身上の偵察を初める。ところが、親しく觀察してさへ、容易に見定め難い特質や長所や短所を、無責任な他人の口から聞くのである。ことにこれを語る人は、或はその人の最も親しいものとなるかも知れない人間を批評するのであるから、十の八九はよらずさはらずのお座なりを云つておくのが當然である。彼の女にはかういふ缺點がある、あの男は不攝生な亂暴家だなどと口外して、萬一その縁談が成立しようものなら、終生怨まれねばならぬ。かるが故に、成るべく口を緘まうとするのを強ひて開かせて、その不完全は談片から、多くは長々しい小田原評定、種々雜多な宛推量をする若しこの記錄が殘つてゐようものなら、大抵の新婦は嫌氣がさして逃げ出す位であらう。

かくの如くして娶つて見る、嫁いで見る。見ると聞くとは必ず一致しない。夢の如しといふ蜜月が未だ終らぬ間に、どうかすると失望の嘆聲が起る。しかもその嘆聲を、三十年も五十年も持續して行かなければならぬとは、何といふ因果であらうぞ。手に取つて見て買つて來た時計でも、一週間は無償で交換が出來る世の中に、問ひ合せの行き違ひから、思はぬ二の町にとり當つたと見たら、お互にとり代へた方が德用ではあるまいか、とさへ思はれるのである。

△懸想文と約婚

こゝに於いて、ゆくりなくも思ひ起すのは平安朝頃の風俗である。飛鳥奈良の昔はさまでゞもなかつたが、平安朝に入ると、女が男に顔を見せるといふことは非常な大事件で、從つて、「見し女」といふと關係のあつた女といふ意味であつた。かくまでに、男女の隔てが嚴重であつたに拘らず、男女間の手紙のやりとりは甚だ自由であつた。苟も評判のよい娘があると、四方八方から爭つて懸想文を送る、勿論、最初には他人が見たならば、懸想文とも何とも解らぬ



樣に、朧げに仄めかすのみである。女の方で氣が無ければ、取りつぱなしでも宜しいのではあるが、相當の身分の人とでも思ふと恥をかゝしてもよくないと云つて、態と空とぼけた返事をする。枕草子に手紙の返事をせぬのを氣に喰はぬものに數へて、「懸想文は如何はせん、されど、それだに、折をかしうなどの返り言せぬは心つきなし」と云つてあるのがそれである。例へて言へば、男から、「根岸の里の美しい花にあくがれ

て、この頃は氣もそゞろになつてゐる」と云つてやる。女の方からは「御尤で御座います、入谷の植木屋は上手で御座いますね」といふ風にとぼけるのである。これを歌で行くと「知らず讀み」といふので、伊勢物語などに、その適例が見えてゐる。

△文通を中止の例

これは失敗の例であるが、女の方でも、先は相應な緣だと思ふと、母親や乳母などいふ人々を初め、親しいものが相談して、とにかくに返事を書かせる。墨つきほのかに、ほんの一行りか二行、否とも應とも判斷し難い樣な、思はせぶりが必要で、源氏などに往々その趣が見えてゐる。男からは少し望があると見ると、追つかけ〳〵手紙を贈る、女も漸次に打とけた手紙を書くといふ樣になれば、いよ〳〵婚約が成り立つのであるが、この間にお互に氣心を試しあふので、何か氣に入らぬことがあれば、何時でも文通を中止する。これが結婚の普通の順序であるから、決して恥づべき秘密でも何でもない。だから、その贈答の歌などは、よく出來てでもゐると世間に傳唱せられる。光源氏が槿齋院に與へた懸想文は、遂に不成効に終つたのではあるが、しかもその歌は帚木の中川の宿の女どもまでが知つてゐた。それのみか、世の才子佳人の贈答の戀歌は麗々と勅撰集を飾つてゐる。御堂關白道長が紫式部に與へた歌、式部が御免蒙ると答へた歌までが、矢張り羅列してあるのはこれが爲である。

△厭な心持のする身體の探偵

私は竊にこの風俗が面白いと思ふ、文字や文章といふものは、その趣味や人格を頗るよく表すものである。人に見せられない樣な手紙の交通は深く誡めねばならぬが、既に婚期に達してゐる女に、その父母兄弟に示しても差支のない手紙を送る、互にその意中を語り合ふ、かくて眞に意氣が投合し、一家の人々も同意してこゝに初めて婚約が成り立つといふことにしたならば、幾分かは後の失望落膽を輕減することが出來るで

はあるまいか。その手紙の往復中に、互に幾分か相信じて後、更に問ひ合すもよからう。見合をするのもよからう。今の樣に先方の少しも知らぬ間に、先づ身許の探偵を初める、申し込んでから、先方が又探偵をやるといふのが、既に厭な心持がする、ことに見合といふ一瞬間に、お互の一生の運命を定めるなどは、勿論沙汰の限りである。



△最も都合のよい約婚

平安朝には、更に都合のよい風俗があつた。手紙の婚約が略成り立つと、先方の侍女が心得て、そつと、女を覗かせることもある、男の姿は屢〻簾外に顯はれて女の見ることは自由である。かくてもなほ、面會して見て氣に入らないといふことがないでもないので、男が通ひ初めてから大抵二日間は、全く秘密にしておく、父母兄弟を初め總て直接には婚事に關らない。唯侍女等に萬事を取り計らはせて、内々で指圖をしてゐるのみである。彌々婿君の氣に入つて、三日目まで續いて通つて來るに至つて初めて「ことあらはし」といふ公然たる婚儀を擧げるので、それまでに、何か行き違ひでもあれば、唯秘密

のまゝに終る。いはゞ一週間無償御取替の格である。

この通りでは、男の方の我儘が過ぎるが、この精神を應用して、婚約が略成立したら、男が公然と女の家へ遊びに行つた姿で、一週間か十日逗留することにしてはどうであらう。父母兄弟の監督の下に、極めて短期ながらも、多少相知ることも出來る、豫ねて手紙の交通を重ねてゐるから、初對面であつても、新しい敎育を受けた女ならば、少しは談話も試みるであらう。これ位の手數は、一生の浮沈に關する問題に對して盡して置いても、必しも徒勞ではあるまい。私の親戚には、十餘年前に、既にこの通りに結婚前の嫁の家に逗留してゐた男がある。又女の方も男の家庭に暫く逗留して見るのもよろしからう女が男の家に逗留することは、現に多少行はれてゐることではあるが、それが殆んど皆女ばかりが試驗せられてゐるものゝ樣に見える、實際上も亦多くその傾があるが、若しかくすることが一般の風俗になつてこの交際中はお互に全く自由で、氣心の合ふか合はぬかを試みるばかり、若し中途で解約をすることがあつても、決してお互に恥辱にはならないといふことになつたなら、極めて結構であらうと思ふ。

△武家時代の弊習

一體が今日の結婚の風俗は、武家時代の習慣で、個人よりも家を重んじたところから來たものである。武家の爭闘には勢力の團結が最も肝要であつた。勢力を團結させるには個人を犧牲にしても一家を守るといふことが必要であるから、例へば、財產なども平安朝の諸子分配法が廢せられて、長子獨占即ち總領制度が出來る。その總領といふものも、家名を守るべき任務をもつてゐる。いはゞ一家の役人で、自分のものながらも、自分の自由にはならぬ財產を、監理してゐる心持ちでゐた。だから家の爲に都合のよい女ならば、如何に自分の氣に入らなくても、これを愛せねばならぬ。そこで家の爲になるかならぬかは、經驗のある父母の方がよく知つてゐる、子供の分際でその決定に抗議を

申し込むべきでないといふのが一般の論理であつた。一般の國民の今日の樣な結婚の風俗が馴致したのはこれが爲である。だから、比較的家名を重んじない農民の風俗は、餘程自由結婚に近い。

しかし、貴族ことに皇族や攝家などになると、餘程古くから、不思議な結婚法がある。それは所謂る御添ひ寐しと稱へて、漸く加冠をするかせぬかの頃に、三四歳も歳上の女を侍らせるので、その女に申し含めて、幼主を傀儡にしようとする藤原氏の權略から起つて、一般貴族社會の風俗になつたものらしい。元來極めて身分の高い人は、父や兄が親しく示導することが出來ないので、極めて若い主人に我儘を働かせない樣にするに、稍分別のある女を後宮に置いて、これに制肘させるのが最も妙であつたと思はれる。光源氏の葵上なども、この面影が見えてゐる。藤氏から出た有力なる女御樣方には、ことに主上よりも御年上な方が多い。

つまり、親同士の婚約であるとか、さもなくとも、當人同士の意氣の合ふか合はぬかを見極めずに結婚するといふ風俗は、決して純良な日本固有の風俗ではない。若し武家時代といふものがなかつたならば、我の社會と歐米の社會とは、恐くは大に軒輊のないものであつたであらう。

家を重んずるといふのは、良い風俗ではあるが、これが爲に全く箇人を犧牲にするといふことは、世襲制度の國でない限りは、決して出來得ることでない。私の當面の苦心は或は讀者諸君の御同感を得ることもあらうかと思つて、聊か昔譚の一片を述ねたのである。





氣まづく暮さねばならぬ母と娘の中

片破月

今日は亡母樣の命日……皆はすつかりと忘れて仕舞つてるよ、父樣迄が忘れて居らつしやるのだものを……もし覺えてなら昨日はもうお寺參りもして仕舞つてるのだけれど、私一人蔭で氣をもんで計り居たつて仕方がない、せめて祖母樣でも居らつしやれば、こんな事はないのだけれど、昨年祖母樣が亡くなつてから以來は、佛樣も臺なしだワ、私が氣にしてお花を替へるつて皆から婆ア見た樣だつて笑はれるけれども佛樣なんか氣にしない樣な境遇なら本當に好いんだけれど……生きてる中こそ何の彼のつて騷がれても、本當に死んで仕舞ふともう駄目だワネ……

昨夜なんかも一人で縫物しながら、思ひ出したらそれからそれと一つとして好い事は考へられず、泣いてつまらないから眠りませうと床へ這入つても眠られずいろ〳〵な事が胸に浮んで、涙が止度なく出る、一時打つのを聞いた、その故か今朝は頭痛が激しい、今思へば、本當に下らない、何だつてあんなに泣いたんだらう……それに私はやせ我慢が強い故か、どうも人の前では悲しい顏や、涙なんか見せ度くない、定めて顏色も惡いし、目もはれて居るだらう、ひよつと何とか云はれはすまいか、と思ふと何だか起きるのが大儀でならない、だつても仕方がない、何時迄寢ても居られないから早く起きよう。けれども、『何うかしたの』なんて訊いてくれる人があらうか思ふ丈けまだ私が自惚れてるのだワ、誰も氣にしてくれる人なんかありやしないもの。

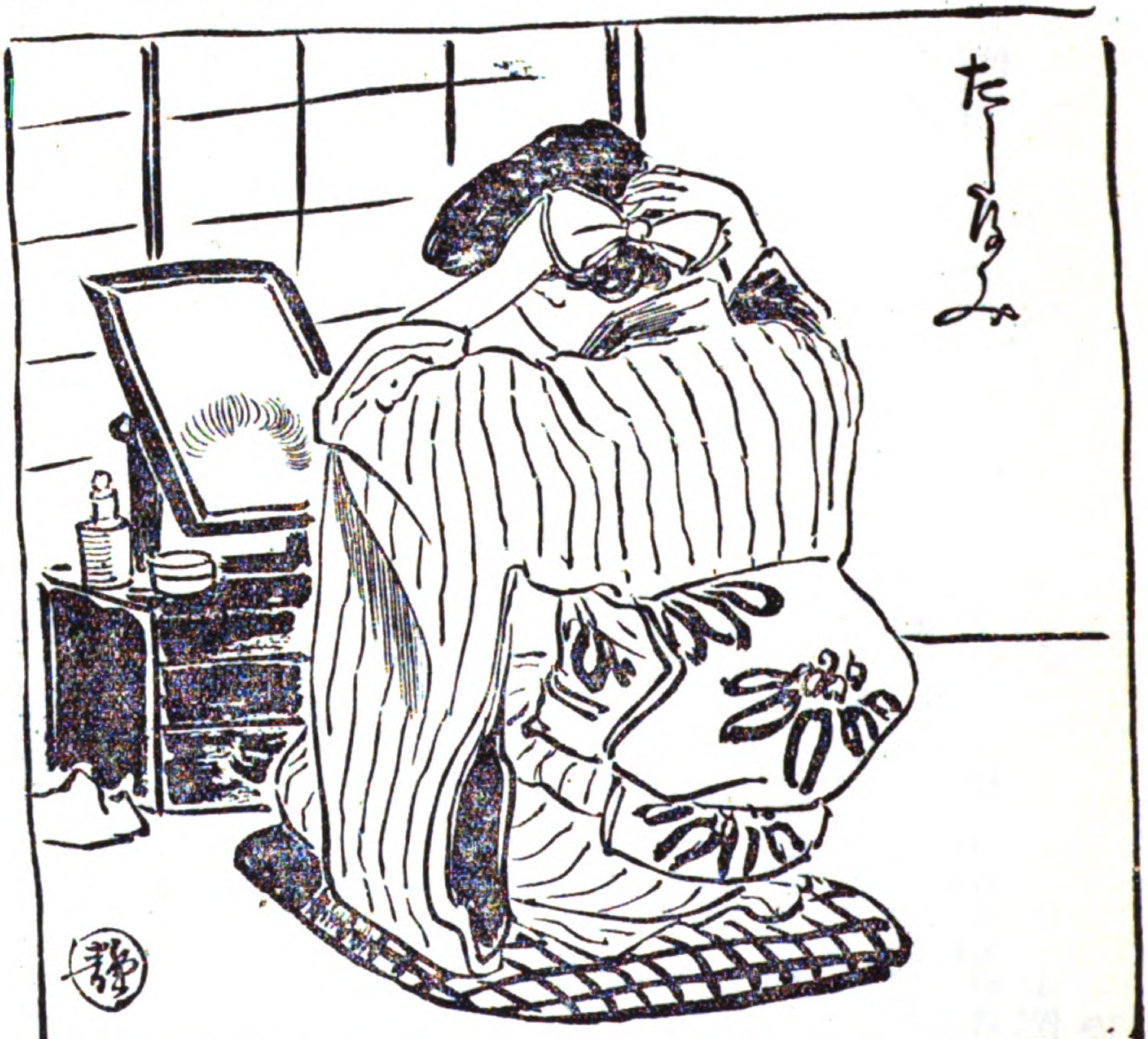
鏡を見ると眞青な顔、血走つた目、……もしもこれが美ちやんや、治さんであつたなら、マアどんなに騒ぐだらう……

併し私はそれを人に見られぬ樣に秘して居なけりやならない身の上だ、私からまづい顔なんかする事を許されぬ身體なんだから情ないわ……よしやどんな辛い悲い事があらうとも、笑つて暮しませう、決してもうそんなひがみ根性は出しますまいと、昨夜もそれでこんなになる迄泣いたのに、矢つ張り女だから仕方がない、皆が起きない前きにお化粧でもしておきませう、ア、さう／＼私の櫛は折れてたつけ、美ちやんのを一寸借りておかう、アラもう美ちやんが起きた樣だワ、美ちやん今朝は大變に早いこと、何してるだらう、一寸のぞいてやらう、あのまア嬉しさうな顔して、昨日の彼の友染を裾に當てたり、肩にかけたりして居るワ、嬉しいのだらう、私も本當の母樣だつたら同じのを買つて頂けたらうに、何てまあ好い柄だらう、着物にするんださうだけど、着物には派手だ、私なら長じゆばんにして、袖うらはとき色ちりめんか何かをつけるけど……、私着て出るものが澤山ないのだから……せめて父樣のお土産に頂いたお召、アレでも仕立てられると好いけれど、お簞笥から一寸出してさへ母樣のお顔の色がちがうから、もうそんなに何時迄も怒つて下



さらなくつても、あれのかはり位のものはいくらだつて美ちやんには出來て居るのだけれども……父樣も父樣よ、あの時に限つて何故私計に下さつたのでせう折角下さつても着る事もどうする事も出來やしないワ、あんなにしておく中に、柄も派手になるし、損んで仕舞やしないかしら、好いから仕立て着樣かしら、だつて裏も裾も買つて頂かなくてはならないし、彼れの事と云ふと一言も快く仰有らないんだから、云ふのも不可まいし、それに何も好んで嫌なお顏を見るにも當るまいから……アヽ〱ぼんやり考へてた處で仕方がない、愚痴を云ふまいと覺悟した心の下から又愚痴を云ふてるんだよ、……それよりお引き受けの座敷のお掃除丈してをきませう……あゝすつかり亡母樣の事忘れてたワ、何て親不孝でせう、なんぼ母樣が忘れてお出だからと云つて、私の口から云ひ出したら又惡からう、好いワいつそ今日は七の日でお活花へも行くんだから、歸りに一寸拜んでもらう樣に、何處のお寺へでもたのんでおきませう、でないと後で吊ふ子で居ながら、あんまりすまない樣な氣持がする、でもいつそかう〱とさう云つた方が、內所で秘して立てする樣な事するより好かないかしら、だけど母樣が惡くお思ひ下さらなければよいが、もしひよつと變に思召すと反つて不快な御心持おさせ申して、私も何だか變になるから、惡いかも知れないが矢張りソッと拜んでもらつておかう、亡母樣々々つて思ふけれど、そのくせ私亡母樣のお顏も何も知らないのですよ、けれども肉身の親と云ふと、只何となしになつかしいのよ、私の想像では色の白い細い……きつと早く死ぬ樣な人だから弱々しい人だつたに相違ない、聲のやさしい始終にこにこして怒つた顏なんかお見せなさつた事のない、お亡りなさつたのは私の三歲の時だから、宅の時ちやんと同じだ、さうすれば步けたのだらう、白い細いお手で私の小さい手を引いて下さつたらう、アヽおなつかしい影でも好いから一度逢ひ度いワ、此間も磯山さんの奥樣のお話を承ると、此家の樣にまゝしい中だのに、赤い顏一つしないで居る家は珍しいつて仰有つた

が、成程高い聲してお叱りなさつた事はなしましてや叩いたり打つたりなどゝいふ事は決してない、外の話を聞いて見ると隨分ひどい辛抱を遊す方もあるさうだけれども、幸ひに私はそんな目には逢はないそれでも私のひがみかもしれないが、辛い悲しい思ひをする事は、始終中ある、けれどそれは私のわがまゝも手傳ふし、ひがみと云ふものでせうと、成丈



自分をつめて、ふくれた顔や泣顔や、まして不平らしい言葉などおくびにも出さないで注意して居るのです。

まあこんな事計り考へて居ないで、サアこれから皆の學校行きのお辨當づめをして私も仕度して、お活花へ行く仕度をしませう。すると美ちやんモスの縫ひ返しの袷が褪て居るから、嫌だと云ふし、母様は、

『見つともなくないよ、僞だと思へば姉さんに訊いて御覽。』

と仰有る、美ちやんは、

「姉さん見惜いッ。」

ツッて同情を求める様な目色、さうチ、私の女學校通ひの頭の事思へば結構な話だと思ふが、まさかさうも云へず、さうかと云つて美ちやんを怒らせるでもなし、又母様に逆ふ譯にも行かず矢張何時もの様に、

「私はそんなにも思はないけれど、嫌だつて云ふなら母様云ふ様にしておやんなさいな。」

つて云ふと遂々、

「姉さんは又美ちやんに加勢したチ。」

と仰有る、美ちやんは力付いて、

「ソウ御覧なさいチ姉さん誰だつて今こんなハゲッチヨロケたのを着てる人つてないワチ母様、ダカラ黄八丈を出して頂戴よ。」

「アレだつてつぎが當つてるよ、いゝかい。」

「エ、柔いものゝ少し位悪いのはまだ見よいワ。

母さんも意地悪チ、そんな當てつけ仰有るもんぢやないのよ、早く出して下さいよ。」

遂々母様負けてお仕舞なされた、併し御機嫌は悪くはない……

皆ドヤ／＼出してやると、後は火の消えた様に靜かになる、その中お父様もお出ましで、私もお活花へ行かうと、何時もの琉球の袷がひどくなつてるから、キハッ油で一生懸命汚れた衿を拭いてると母様が、

「大分損んで見つともないからも一つの銘仙を着て入らつしやい、その中白木屋へ行つて一つお前にも何か買つて上げよう、その着物より美代の袖が短いと云つて着ない糸織の方がましだらう、よければ上るから洗張にやつて縫なほしてお着。」

つて仰有る、から仰有りさへすれば買つて下さる事はキットだから何を買つて下さるかそれは分らないが、ほんとうに嬉しいワ。

妹のお古……之も人は姉の古を妹が着るといふけれど、私のは妹の古を姉が着るので、今ある米澤も銘仙も縞のバッチリしたのは皆妹の着古し。

お古だつて何だつて數の中だから、何とも思はない

ワ、ありがとう頂いて、御禮を申して出かける、先生の處で半日は何つてことなしに呑氣につぶれる、かへりにいそ子樣と一緒にかへる、途中で私が、

『何處か眞宗の御寺は御座んすまいか。』つて云つたら

『嫌な方、お寺きいてどうなさるの。』とお笑ひなさるんだもの……何も人に云ふ事ではないから、好加減にお別れして、仕方がないから近所できいて、遂々一軒見すぼらしい小さなお寺を見つけて、お布施を上げて頼んで來た、何か私の責任を盡した樣な氣持がして、せい／＼として心持が好い、家へ歸つて又午後は長唄とお琴のおけいこ、四時頃に歸つて來ると、

『美代の櫛使つて使ひはなしにしておいたのは貴女でせう、人のもの使はずに各自にあるのだから自分のをお使ひなさい、折れたから使つたのだつて、折れたら折れたと仰有れば買つて上げます、これからは氣をおつけなさい、美代はやりつ放しが大嫌の子ですから……。』

つて御小言をうけた、遂朝は常さへルーズな私、考へ事したり、美ちやんのお部屋のぞいたり計りして居たものだから………

よくおわびを申上げて、これも日課のお臺處番、婆やに教へてもらひながらお菜ごしらへして、大根かのお夕飯がすむと、例の通りの一家團欒……私がオルガンで美代さんのヴァイオリン、伊佐雄さんと百合ちやんの遊戲……私は何だか氣が浮かない、すると美ちやん伊佐ちやんが、

『大姉さんはしづんでるよ。』なんて云ふと父樣も、

『顏色も悪しどうかあるのか。』と案じて下さる、母樣はジロリと上目で御覽なさる、もしや先刻のお小言を根に持つてスネたと思はれては大變と。

『イヽエ何ともないのよ、沈んでる樣に見えて、……ジヤアもつと賑かなのを彈きませうか。』と笑つて彈きかけると父樣が、

『もう止せ、西洋の樂器は八釜しくてならん、サア此度は謡をやらう。』

と仰有る私は知らないから聞き役、母樣と美ちやんと、

父樣と懸合に松風に俊寛、鉢の木、草紙洗ひなど、伊佐ちやんの猩々……すました、スタイルが振つてる……御兩親の御自慢ながら美ちやんの聲は實に好い、何でも同窓會で隱し藝に謠をうたつて美代さんの謠つて評判ださうな……九時が鳴つたので皆お部屋へ下る、父樣母樣に御挨拶して私も行かうとすると母樣が。

『それぢやアこれを上げませう、ほどいてお置き。』

と朝お話の美ちやんの糸織を下さる、傍に居た美ちやんと母樣にお禮を云つて部屋へ歸る、ほどいて寢ようか、すぐ床へ這入らうかとボンヤリ机にもたれて考へて居ると、ガラリと障子を明けて父樣が、

『もう寢るのか、何を考へてる、今日亡母さんのお墓參りに行つたか。』

と仰有る、アヽ忘れずに居て下さつたかと嬉しかつたので、目に涙が一パイ出た。

『イヽエ行く機會が御座んせんでしたから、他處のお寺へ頼んでおきました。』と申上げると、

『さうか、さうだらうと思つて今日己れが社の歸りに、青山へ廻つてお前の分も拜んでおいたぞ。』

といつてジーッと御覽なされた父樣のお目にも、思ひなしか露が宿つて居た、私は聲がつまつて、

『ありがとう』と口のうちで申上ると、

『早くお寢みよ。』と仰有つて出てお出でなされた後姿を、思はず伏し拜んだ、アヽ私は餘ッ程ひがみ根性が出來た、今の今迄、此の父樣を心の底では恨だり、不足に思つたりした、勿體ない、もうこれからは人の事羨やんだり、そねんだりしますまい、少しでも父樣に御心配をかけぬ樣にしませう、もう〳〵決して不足には思ひますまい、どんな苦痛があつたとて、思ひなし樣ではどうでもなるのだものを、アラもう十一時明日から笑つて暮しませう。



誤れる事のいろ〳〵

萩　花

◎八十二錢の交際費

筆不性よりか、心なきよりか、禮を缺きて迄親しかる可き友が一年の交際を、只、元旦の葉書一枚にてすます人あり。殊に卑屈なる婦人に其の多きを見る。

斯かる人は還暦の祝と稱する六十一歳の高齢迄生を保つとし、尋常小學校の初年級なる七歳の時より交際し初むるとも、一生涯一人に要する交際費は僅かに八十二錢五厘也。

然れども人生變事多し。一度事起つて或は其友の力を借らざる可からざるの時來らんか、初めて八十二錢五厘の餘りに高價なるを感ずるの日なる可し。

◎逃げたる魚

今釣り落した魚のまあ大きかつた、と釣好きの老爺は云ひ、幼少にして逝きし兒の母親、あの兒は眞實に悧悧でした、と泣く、故國を出でゝ放浪する人、無暗に故山の自然人情を稱揚し、一年の將に暮れ終らんとする時、人は過去を追懷して、又一つお婆さんにならねばなりません、と心細さうに云ふ。

將來を思ふよりも、より以上過去の事物に戀々して人の顏さへ見れば下らぬ愚痴許り云ふ人あり。過去を追憶するも好き事なれど程度問題なり。

斯かる人は事にあふ時、自が心の試煉に與へられし賜と感謝せずして、輾轉反側し、奮勵一番其の境より脱出して、勝利者たるを得ざる可く、刻々進歩する社會の潮流に伴つて向上し能はざるは勿論、知らぬ間に人と百歩の差を生じて、時代に埋沒さるゝ悲しき運命に遭遇するに至る可きなり。

逃げたる魚を追ふよりも、來る可き凡ての魚を獲んと努力するこそ幸福ならめ。

◎矛　盾

一友來りて、『少し音樂をしたいと思ひますが何が好いでせう。』といふ。『矢張り貴女のお好きな物が好う御座いますよ。』と前提して、『お琴とバイオリンと、どちらがお好きですか？。』と問へば、『お琴の方が』といふ。『其れぢあ、バイオリンとオルガンとでは？』と訊けば、『そりや、バイオリンの方が好きですわ。』といふ。更に、『お琴とオルガンとではどちら？。』といへば、『さうね、オルガンも面白うござんすね。』と答へぬ。之れは未だ少なる事なり、かゝる矛盾の行爲して自ら氣の附かざる人世間に多し。

◎無意識

『洋服のボタンが附けてない、早く直して呉れなきや出勤時間におくれる。』と出勤前の良人に叱られて、『まあ、すつかり忘れて居りました。』と細君は周章て、臺所のおさん大事の湯呑を破つて、『まあ奧樣、すみませんでした、つひ放心いたしまして。』とおづ〳〵いふ。

近頃評判を惡うして會社を出されし友に向つて、『いけませんわね、もつと注意して務めて下さいませんぢや。』といへば、『エ、惡い心でしたんぢやありませんけれど、遂、無意識に。』と辯解しぬ。

『つひ無意識にね。』と一言にいへば、如何にも體裁よく聞きなさるれど、實は拔けて居りしを自白するもの也、氣のつかざりしなり。頓馬なりし也、ポッカリして居りし也。

無意識は一面人の譴責より脫れんには好個の避難所なれども、實は社會の秩序を亂すべき元にして、法律を超絕せる恐るべき犯罪と知るべきなり。何となれば、其の原因は故意ならざりしとも、現はれし結果は同一の形式なればなり。

◎自信と謙遜

確固ある自信ある人はよく謙遜す。

困つた揚句、事の解決を附くるに當つて、自信なき文學者は『シルレルの言ひしを見よ。』と言ひ、女學校の生徒は、『先生が斯う被仰いました。』と云ひ、漢學者

は『古人曰へり。』と叫び、自信なき妻は、是が非でも、『良人が斯う申しました。』といふ。

之れ立場なく、グラ〱常に落ち附かざる人の言、自信より墜落して、而も謙遜の地盤よりはね返されたるものぞ。

人は凡て眞實の『自我』を自覺する時、初めて虚榮、奢侈、傲慢の影より脱して、謙遜の美を見能ふべし。

眞の自信と、眞の謙遜とは相伴ふものなり。

『我れらしく』それ以上に人より見て貰はんとの野心より、心なき婦人の社交を見ること多し『我れその者』を以てせば社交上に一つの苦痛を減ずべし。



小兒の冬季衞生

醫學博士　瀨川昌耆



「風は萬病の本なり」と昔から云はれてゐる通り、すべての病を引き起す原因と云へば、大人でも小兒でも皆感冒からであります。ですから、冬季の衞生法といへば、先づ何よりも此の風邪を引かないやうに心掛ける事が肝腎なのは今更ら申すまでもありません。併しこれが大人ならば自分で暑い寒いの加減も分るし、それ相應に用心すれば、感冒は防げるけれども、小兒、殊に生後一年未滿の乳呑兒あたりでは、寒くてもそれを口に出して云ふことは出來ないし、その上に皮膚はまだ發達しない故弱いものであるからホンの一寸した寒さにもすぐ感じ易く、いろ〳〵な病をも惹き起すことになります。だから、これ位の子供を持つた母親は注意の上にもよく注意して、小兒が感冒に犯されないやうな豫防法を講じなければなりません。

△感冒の種類

で、先づ小兒の感冒はどういふ經過に依つて進むものかと云ひますと、一口に感冒と云つても鼻かせもあり、咽喉を傷めるのもあり、氣管支を傷ふものなどいろいろありますが、これは風邪を引く場合や樣子に依つて異るわけではなく、小兒各自の體質に依つて進むのです。だから一度肺炎に犯された子供は風邪さへ引けばすぐ又肺炎になるといふ風に、同じ病氣ばかり繰り返すことが小兒にはよくあるものです。處でこの感冒の中でも、

△鼻加答兒、即ち俗に鼻かせと云ふのは誰にも最も輕く見られてゐるもので、大人ならさして大事でもありませんが、乳呑兒に取つてはこれがまた危險でありま

す。何故かと云ふに、まだ乳で育つてる位の小兒には、口で呼吸をするといふ事が充分に出來ないのです。だからもしそんな幼兒が鼻加答兒にかゝつた場合には呼吸が充分に出來ないために乳が呑めなくなります。その時に無理に呑ます事は出來ず、と云つて呑まさなければ小兒は衰弱してゆくのみですから、重症に陷らない前、速かに鼻の通路の塞らぬやうな處置を取らねばなりません。

△咽喉加答兒、咽喉を傷めたもの、これも鼻加答兒と同じわけで、咽喉が腫れると乳を呑む事が出來なくなるから、構はずに置いた場合は鼻兒答兒と同樣な結果に陷ります。

△氣管支加答兒、これも普通の大人ならばさして氣配ひはないが、老人や小兒には最も危險な病症です。殊に小兒には、この病にかゝるが早いか直ちに深く廣く擴がりて、一寸の間に重症に陷り、遂には肺までも犯すことになるのであります。

△肺炎、にもまた二通りあります。その一ツは前云つた通り、感冒から氣管支になり、氣管支から漸次進んで肺を犯すものと、今一ツは感冒から突然に肺炎となるものゝ二つで、各ゝ程度によつて何方をどうとも云はれませんが、どちらかと云へば突然來るものよりは氣管支の方から漸次に來るものゝ方が割合に經過もよく、治療の方法も容易であります。併しいづれにしても恐るべき病には相違ありません。

△經過が非常に早い

小兒の感冒はまづ大體右云つたやうな結果に陷るので、これを素人の療法としては、感冒に犯されたらすぐ熱の取れるやうにするより外はありません。そして熱を取つてもまだ快復せず、少しでも異つた徵候の見えた場合には、速かに醫師の診察を受け、相應の手當を乞はねばなりません。

すべて小兒は何の病でも、經過が非常に早く變化の烈しいものですから、一寸の油斷で手後れになり、取り返しのつかぬことにならぬとも限られません、だから

どのやうな場合にも決して自宅療法で間に合すやうなことをしない方が可い。それゆゑに感冒に犯されぬやうに豫防することが最も肝要です。

△冷い外氣に當てるな

豫防法としては平素から身體を鍛へておくのが何よりで、身體を充分に鍛へて皮膚さへ丈夫にしておけば滅多に風邪などに犯されるものではありません、だから、少しでも弱いと思はれる兒は、必ず暑中には海水浴にでも連れてゆくやうにし、出來るだけ皮膚を丈夫にするやうに平素から母親たるものは注意しなければなりません。



併しこれは少くも一年以上經つた子供の事で、まだ一年以下の乳呑兒位にはさう皮膚を鍛へるなどいふわ

けにはゆかないから、決して寒中は冷い外氣にふれさせないやうにするより外はありません。尤も中以下の家庭などでは絶對に出さぬといふわけにはゆきますまいが、可成に間數も廣い家ならば決して戸外へ出すといふとなく、なるべく温かい部屋の中で、温かにして置かねばなりません。

かういふと、それでは室内の空氣がにごつて衞生上惡いかのやうに思はれるかも知らぬが決してそんなとはありません。元來日本の家屋は西洋作りの家のやうに密閉されてるものでない、閉め切つて置いても障子の隙間なり雨戸の隙間なり、何處からか新鮮な空氣は絶えず流通してゐるから小兒の身體に害を及ぼすやうなとはありません。それよりも小兒の皮膚は實に弱い柔かい一寸した事にも感じ易いものであるのに、あの肌を刺すやうな冬の冷い外氣にふれようものなら、それこそどうして直ぐ犯されずにはゐられません。だから稀に極く暖かな日和位なら格別、平生は絶對に戸外へ出さないやうにして欲しいものです。

△厚着をさせるな

併し又いくら温かなのが可いからとて着物を無暗に厚着させるのは不可ません。何事にも程度といふものがあるから、その度を過しては却つてこれが爲めに他の病を招く基となるのです。昔の人などはよく、着物さへ重ねれば可いやうに思つて、考へもなく厚着させるのがありますがあれは大にいけません。中にも甚しきに至つては汗を出してゐるのさへ構はずにゐるが、これでは折角温かにとの心は無駄になつて、却つて小兒の體中の營養分を絞り出すやうなものですから、程度も何も考へない愛し方や衞生法では却つて小兒の害になるばかりです。

△温度の不平均

それから又感冒は温度の不平均より來るものですから、程度をはかると共に常に適當な温度を均一に保たねばなりません。又身體の一部分だけ冷へるのが最も

危險です。例へば大人にしても足袋をはかずに厚着してゐるやうなもので、これ程厚着してゐれば足の先が一寸冷へる位は何でもないだらうと油斷してゐると却つて風邪はその隙に付け込んで來るものです。ですから其樣な事をしてゐるよりは、却つて全體に薄着をした方が自身にも警戒するし、從つて風邪の方にも付け込む餘裕はなくなるわけです。

それから感冒に犯される時間は決して長いものではなく、ほんの二分か三分位の短い間のものです。これは大人でも子供でもさうで、一時間も二時間も寒い風に逢つたからとて必ずしも犯されるものではありません、だから自身に何も云へない乳吞兒なら猶更らのと一寸した起居動作にも怠りなく注意して母親が警戒しなければなりません。

△檢温器の備へ

要するに感冒の豫防法としては、

(一)寒い目に逢はせぬと、(二)厚着をさせぬと、(三)常に適當な温度を保つて不平均のないやうにすると、これだけを始終心掛けて怠りさへしなければ可いのです。

で、もし過つて感冒に犯された場合には速やかに熱を去るとが必要なのですが、若しもそれ以上に惡い傾向が見えた時には決して自宅療法などしては不可ないとを繰り返して云つておきます。醫師にしても初めて診察する小兒ならば日に一回診たのみでは當にならぬ位質に變化の甚しいものですから、病いと思はれたら假令宵でも夜中でも可いから最寄の醫師の許へ驅けつけるのが何よりです。

そして子供を大切に育て度いと思ふなら家庭では、是非共檢温器の一個位は備へておいて、母親はその使用法位心得て居て貰ひ度いものです。



嬢を嫁入らするに就て
父母の苦心

加納子爵夫人

私共の二女が十八歳で阿野家（子爵）へ入輿致しました。これは極幼少の頃先方から望まれたのですが、幼少からの約束と申すものは、何樣も固く參らぬ勝で御座いますから、堅い約束は致さず、本人が成長してから、善く性質を見て戴く方が宜いと申して居りました。嬢が年頃になりました時分、先方から此縁談が御座いましたが、未だ學習院へ通學中の事ではあり、有耶無耶に致して居ました處、一昨年十月の初旬になつて、突然來月十三日に結婚式を擧げたいと申込まれました。私共では主人の制定致した家憲に據り嬢達の衣類は悉皆綿服の筒袖に致して御座いますから、イザ結婚となりますと、何も彼も一時に新調致さねばなりません。先方では主人の主義を承知して居ると仰しやるのですけれども、マサカ猫の兒を遣すやうな次第にも參りませず。何處から手を着けて宜しいか途方に暮れまして『餘り火急の事ですが支度が間に合ひますか知らん』と主人に話しますと、主人は平氣で『今から來月の十三日まで五十日足らずも餘裕があるでは無いか、實にゆつくりしたものだ、ナニ準備――それは雑作はないよ、紋付は幾らでも呉服屋か古着屋にぶら下つて居るし、箪笥は傳馬町へ行けば好きなのが出來て居る、明日だつて困りやアしない』と申して、澄して居るので御座います。私が『それは左樣で御座いますが、マサカ紋付一枚限と申す譯にも參らず、品は粗末でも黒の禮服に。かはり色紋付の着換、それに更紗か

何かを一かさね、帶の二筋くらゐは拵へて遣はさねばなりません。餘所樣とは違つて平生から持ち傳への衣類が無いので御座いますから、本當は夏物も二三枚拵へて遣はしたいので御座いますが、今一時に左樣々々は大層ですから、夏物は又後からと致しても、夜具蒲團だけは要りますし、それに私は仕事を外へ出さぬ習慣で御座いましたから、今度の準備も何卒宅で間に合せたいと存じましたので、婚禮日の迫るのが氣になつて堪りませず、私が三越へ參つて好い加減に見繕ろひ、なんぼ構はぬ者でも一生一度の晴着の事ですから、色氣や柄を本人にも一度見せたいと存じ、二三品持ち歸つて見せました處、本人も父親同樣で一向無頓着、母樣の宜しいやうにとばかりですから、何だか張合のない心地が致しました。

▲頭髮の手術

餘所樣の御孃樣方は御束髮でも周圍を恰好よくお結ひになつて居らつしやいますが、私共のは皆キユーツト引き詰めて、宛然荒熊のやうな體裁で居りますので、武田へ緣付いて居る姉も、一二度は島田を結つて髮を慣して置かなければと心配致しますので、初めて島田に結はせる側に主人が見て居りまして『忍耐するなする心持が惡るければ直ぐ毀して了へ』と申しますものですから、當人は得たり賢しと、直ぐに毀して了ひました。愈々婚禮の當日に笄や後指を挿して遣はしますと、『御母樣痛くつて〳〵』と申して酷く辛さうに顏をしかめて居りますので、私は『お前宛然手術でも受けるやうな顏をして居ますネ、併し今日だけは如何に辛くても忍耐して居なければなりません』と申し、主人は『日本の習慣は實に困るナア、痛いのを忍耐しても其樣な髷に結はなければならぬのか』と申し、本當に可笑しう御座いました。

▲化粧の教育

阿野家は京都の出で御座いますから、親戚も京都の人が多く、殊に小倉家からは御所へ御奉公に上られた

方があり、どちらを向いても御化粧上手の御家ばかりで御座いますのに、私共の孃は前申し上げた通りの始末で御座いますので、家扶の後家が奥方の樣では仕方がないと大層心配致し、毎日付きに付いて御化粧を致して呉れました。孃の結婚は未だ學習院の卒業に半年程前であり、結婚後は通學の出來ない校則ですから、加納家の名義で通學致す約束で參り、昨年三月まで通學致したので御座いますが、私共の宅から通學致すに較べると、阿野家からの通學は餘程朝がゆつくりと致すであらうと存じた處、



孃は毎朝婆やが世話焼いて御化粧に一時間もかゝるので、唯今市ヶ谷から通學する方が大森から通學致した時より却つて忙しいと申して居りました。それで今日では御化粧や着物の着こなしが獨りで上手に出來、以前から懇意の奥樣でさへ途中で擦れ違つたぐらゐで一寸分らず、孃が挨拶致すと漸と御氣付き遊ばすと云ふ程に變りました。

▲近所に手本

私共のやうに子供が多勢ございましても、孃を一人縁付けた當分は、何やら寂しい感じが致し、毎晩臥せる前に子供達の寢間をズーッと見廻る折、今まで四つの束髮が列んで居つた

のに一つ缺けたと思ひますと、今頃は何樣して居るだらう抔と考へましたが、近所に御住居の大佐夫人がお一人の令孃を臺灣へ御嫁に御遣はしなすつた事を考へましては、私の心弱きを耻ぢ入りました。其大佐の御夫人は却々確乎した御方で、一粒の令孃を善く御仕込みなさいました、折々令孃に結婚後の心得を御尋ねなすつたので御座います。『汝は獨り子ではあるが、御父樣の御考へで他家へ緣付ける事になつて居る、天緣で何樣な生活向の處へ行くかも知れぬが、私は平生巡査のやうな薄給の者でさへ、何樣にか妻子を養ひ體面を保つて居るのを見て感心して居る、良人の品性さへ立派であれば、私は否と言はぬ積りであるが、汝の考も一應聞いて置きたい』と御尋ねになると、令孃は『緣あつて嫁いだ家が如何に貧乏であらうとも、品性の立派な良人ならば決して厭ひません』と答へられました。夫人は重ねて『當今は個人主義が蔓つて、相應の家柄でも舅姑のある家は斷られる向が多いと聞くが、汝は何樣考へる』と御尋ねになると、令孃は『私共の年頃の者が嫁入る家に御兩親のあるのは當然の事、舅姑は實の父母と思ふて仕へる覺悟で御座います』と答へられたので、夫人は『それを聞いて私も安心しました』と仰しやつて喜んで居られましたが、臺灣に住はれる立派な方から御緣談がありましたので、早速其處へ御遣しになりました。良緣とは申しながら、一人の愛孃を遙々臺灣へ御遣しになつた夫人の御決斷には熟々感服致して居ります。此母君に仕込まれなすつた令孃は模範的賢夫人となつて、立派に家庭を治めて居られます。初めて御姙娠の際、兩親が御心配なすつて、當方へ來て產をしては如何かと仰しやつたのですが、汽船や汽車で搖られて身體を害ふよりも、醫者なる良人の側で分娩致す方が安全で御座いますと斷られた位で、却々確乎して居らつしやるので御座います。

▲婚禮の支度を學校で

『着物や道具を嫁入らせるのでは無い、人間を嫁入らせるのだ、披露なんて面倒臭い事は要らぬ、是非必要

ならば牛屋でも何んでも宜い』と申す樣な主人の趣意で御座いますから、私共の支度抔は實にお粗末なもので、ホンの禮を缺かぬ丈に揃ましたので御座いましたが、それでも目立たぬ細々物まで積りますと案外費用の掛るもので御座います。前申し上る通り、主人は極極暢氣無頓着なので、私一人で彼れ是れ氣を揉むのですし、平素裸同樣の孃共に一時に支度を調へるのは、隨分困難な塲合が御座いますから、私は種々工夫致してボツ〳〵と



嫁入支度を調へる考で御座います。長袖は主人が禁じて居りますので、双子なぞ後で胴着に致して下婢達に遣しても宜いと存じ、筒袖に裁ち切つて了ひますが、少し性立つた品は一尺六寸ぐらゐに裁ち切り、片寄せて縫ひ込み、元祿袖に縫ひ上げて置くので御座います。それから女學部の裁縫試驗に用ゐます原品は博多の女帶とか銘仙の重ねとか云ふ風に布地が定つて御指圖が御座います。孃共は洗張物でも何でも品質さへ其物なら宜しい

のですと申しますが、私は出來るだけ新らしい品を調へて遣します。併し成るべく後來の爲になる物を選びますので、餘所樣では能く令孃のお年頃相應な緋博多帶地なぞ御持たせになりますが、私は三四年後に締められるやうな少し地味な柄を選んで置きます。左樣致せば、試驗に用ゐた帶が嫁入支度の一助となると云ふ考へで御座います。否最う手前共なぞ御承知の通りの財政で御座いますから、被服なぞは成るべく消極に致す積りで御座いますが、それでも多勢の孃ですから却却嵩みます。先達ても孃達の襦袢が皆小さくなつたと申すので、取り出させて見ましたが、私共では三人とも皆一歳違ひで身體の大きさが殆ど同じ位ですから、姉のを妹に順々下ろすと申す譯にも參らず、三枚一度に拵へる事に致し、胴は緋メレンス位にして、袖だけ絞りの絹にモミ裏ぐらゐで濟す事に積り、柄なぞには構ひませんから、三越の賣り出しで紙付物を取り集めて精々節儉に調へましたが、それでもざつと三枚二十圓程掛りました。それですから襟だとか袖だとかを少少好みました日には、如何致して襦袢とも申されません。御話は橫へ外れましたが、嫁入支度の中で一番無益な習慣と存じますのは、夫婦前の膳椀で御座います。これはホンの儀式の時限りで後は必要のない物、特に當節は一家食卓を圍むのが流行ですから、實は無用の長物だと存じます。其樣な膳椀を調へる費用でテーブルの良いのを一脚持參致した方が何位後來の爲になるか知れません。これは何樣か改良致したら宜しからうと存じます。

▲不自由な習慣

孃達を學習院へ入學致させる時、主人は孃達に向つて『我家は質素なる生活を主義としてあるから、他の貴顯の令孃と着物持物を競ひ、氣を揉むやうな卑しい心が微塵でも有つてはならぬ、己は他よりもズーッと飛び離れた消極的な女學生生活を勵行させる積りであるから、若し忍耐が出來ないと考へるならば、他の高等女學校へ通ふが宜い』と申しました處、孃達は『縱

令何樣な服裝でも宜しう御座いますから、是非華族女學校へ入學させて頂きたい」と申しました。それで衣服は御揃ひに更紗の筒袖、汽車は三等と定め、襟卷は風邪の外は一切用ゐさせませず、蝙蝠傘なぞは實にひどい物を持たせましたから、學校ぢや汚い傘と云へば加納さんのだと申す具合に札付になつて了つた位です。私は『若し汝達が華美粧の令孃方を羨んで自分達の粗服を恥ぢ通學が出來ないやうになれば他の風習に負けたのであるし一言も苦情を述べずに押し通したなら勝利を得たのです私は汝達の克己の力が何位あるか見て居るのです』と始終申して居りました。併し偶偶學校の運動會に參つて見ますと、令孃方の華美な御服裝に眼も眩むばかり、蝶を列べたやうなリボンの美しさは年取つた私でさへ見惚れる位で御座いますから娘心には定めし辛い感じもあるだらうと存じますが、當人達は平氣なもので、唯の一度も愚痴がましい事は申しません。平生身の周圍を華美にさして置きますと、人樣から御土產にリボンなど戴いても『斯樣な田舍じみた物は掛けられない』なぞと申すものですが、宅の孃達は何樣な品を戴いても、大層物喜びを致しまして、緣付いた姉が粗末なリボンでも持つて來て遣はせますと、各自大切に保存して置くので御座います。

東京割烹女學校

神田三崎町三丁目の同學校に於ては、今度生徒の便宜を計り、從來の規則を改正し、學科を專修科、速成科、普通科の三科に分ち、專修科は小學科卒業位の年齡の女子を完全なる主婦とし又敎師の資格を有せしむる準備を爲さしめ、速成科は一般女子の爲め和洋料理を一週三回三ヶ月間の敎授にて卒業せしめ、普通科は修業期六ヶ月にして、之れは各學校に通學中の女子の便宜を計り毎日曜日の午前中に敎授をなし、又都下各種の學校を卒業して歸國する者の爲め特に短期講習會を設け、日曜日を除くの外毎日敎授して三十日間に終了の便宜を得せしむる事と爲したりと云ふ。尙ほ同校にては以前より寄宿舍を設けありて、他學校へ通學の女子をも收容し、香取千代子女史之れが舍監として取締りつゝあるが、寄宿料は一ヶ月六圓五拾錢、舍費金五拾錢なり。校長秋穗氏を初め講師、舍監、事務員等孰れも熱心に敎授しつゝあり。

女子大學校寮舍の火災避難演習

婦人記者

△先頃女子大學の寮舍では、火事の際に於ける避難演習を施行致されました。これは寮舍が萬一の場合を慮つての用意であること素よりいふ迄もありませんが、之れに對する學校の考へは、たゞに學校として寮舍の生徒が無事に避難し得る練習をなさしむるといふ丈けではなく、これに依つて寮生の心身を鍛錬修養せしむるといふことに最も重きを置いて居るやうです。即ち不慮の災難に際して如何に處すべきかの判斷力を養ふこと、而してうろたへず騷がずなすべき道を行ふ處の沈着の態度を作ること、併びに危險の場合によく身を全うし得べき敏捷なる動作の練習をなすこと、斯くの如くして平常無事の時に於てもよく事物を整理し身の周圍を整頓して、非常の際の用意を怠らぬ習慣を養ふといふことは、この火事演習に於ける主なる目的といつてよいでせう。

然らばそれは何ういふ風にして行はれたでせうか、記者はそれに就いて聞いた處見た處を次に書いて見ようと思ひます。

△先づ火事の演習を行ふに當り、豫め打合せをして置いた避難者の心得べき事柄といふのは、

(イ)敏捷なるべき事、
(ロ)沈着なるべき事、
(ハ)容儀をとゝのふべき事、
(ニ)團體の上に留意すべき事、
(ホ)手荷物は最も大切なる品たるべき事、
(ヘ)火の粉を防ぐ爲めに濡れ手拭を各自用意すべき事、
(ト)立ち退き後の室内も見苦しからぬやうあるべき事、
(チ)寮舍の戸締りに注意すべき事、

等で、其他は各寮の寮風に依つて特長を示さるべきものとせられました。そして演習の時刻に就いては種々協議もあつたけれど、とにかく之れは練習でもあるこ

となれば、成る丈け翌日の授業の妨げにならぬやうにしなければならぬ、かつは校内とはいふものゝ餘りに夜深けて大勢が戸外に出ることは如何なものであらうかといふ心遣ひもあつたので、結局夜床に就いてから間もなくか、さもなければ曉方起床少し前にした方がよいといふ事になつたとのこと、いかにも尤もな注意であります。

△打合せが濟むと、さあ何時不意に演習があるやら分りませぬ、寮々では其用意に就いて工夫を凝らし相談をする、火元が勝手ならば洗面所の方から出ようとか、風呂場ならばそれを避けて何う逃げようとか、避難所は何の邊にしようとか、寮監は後に殘つて立ち退き後の見苦しからぬやう、居殘りのないやうに見廻りをするとか、寮の高張提灯は誰れが持つて出るとか、さて身仕度は如何にすれば最も迅速に出來るとか、もうチヤンと避難の方法手順をとり定めて、我が寮こそは天晴な態度を示さむものと待ちまうけて居るといふ有樣。

△一體女子大學の寮舍は家族制度で、各寮は凡そ卅人ばかりの家族を有する一家庭となつて居るのであるが、是等の家がまた幾つかづゝ集つて更に大く四つに別れ各々一村を形造つて居るのです。即ち校内に於ける内寮といふのを初めとして學校の表通りを隔てゝの華山村、學校の横の小路を隔てゝの豊明村、學校の裏手にあたる高臺の晩香村、この四ヶ村はいづれも四ヶ寮乃至九ヶ寮から成立つて居る村ですが、火事の演習は一村づゝ次ぎ〳〵と行ふことゝし、お互に他の審判をつとむることにしたのなさうです。で、最初に施行せられたのは内寮で、審判方は晩香寮。

それは恰も十月廿日の夜、時は十時半、就床は九時半の規定だから、實に寢入際といふ時刻です。何處かでヒユ――と呼子の笛が鳴つた。と何時の間にか内寮の軒下に忍び寄つて居つた晩香寮方の審判者はドンドン雨戸を叩いて「火事です〳〵火元はお宅のお勝手ですと呼び起した、すると間もなく、眞に間もなく各寮の寮生は避難し初めた、其の速かつたこと！　これが

眞實の火事ならば周圍が明るくて嘸賑かなものであらうけれども、折柄の廿日宵暗を照すは僅かに提灯の點點のみ、其中をば一言の聲を出すものなく、たゞスタスタと避難所さして走りゆく。見て居ると凄いやうに思はれました。

△さて避難所の模樣はといふと、避難者はそれ〴〵自寮の高張提灯の下に參集すると、直ちに番號をかけて人數を調べる、洩れて居らねば初めて安心といふ段になるのですが、其の働きの機敏であつたこと。初め合圖の呼子笛が鳴つてから所定の避難所に揃ふた迄が二分三十秒であつたを初めとして、最も晩い寮でも六分を過ぎなかつたのです。而かも避難者を見ると、大方キチンと袴を着けて足袋に草履をはき、髮の亂れた人さへ少いといふ有樣。持出したものも銀行の通帳とか、兩親の寫眞とか、家鄕よりの訓戒書とかいふ可然もの多く、外に主婦は寮としての大事なもの、衞生係は救急手當に用ふべき繃帶や、藥品など迄携へて居つたほど、審判者の方からいづれ一週間以内には位の話はあつたにしても、もとより今夜とは知るよしもなかつたのです、流石に周章まごつくことであらう。隨分面白い喜劇なども演ぜられるに違ひないなど〻見物人の心には内々面白半分の想像を描いて居りましたに、結果は案外に好成績なので、たゞ〳〵感心の外はありませんでした。それに避難をするに當り、長幼手を取り合ひ、始終團體の上に心を配つた態度などはことのほか床しく思はれました。

△然し審判者の注意觀察はなか〳〵嚴しい先づ沈着の度は如何、機敏の度は如何、團體心の度は如何といふやうな事に就いては先づ第一に注目するのですが、其他、何寮には手拭を濡らすことを忘れた人があつたとか、何寮の人には足袋のコハゼをかけないのがあつたとか、何寮には避難しながら笑つた人があつたとか、眞面目なるべき時に怪しからぬ事であるとか、或は着物の着樣が何うであつたとか、或は髮の亂れが何うであつたとか、それは〳〵仔細な點檢を施されるのですが、之れ等の報告はやがて審判會に於ける審判の材料

に供せられるよし。一體この學校ではすべて批評といふ事を重んずる。運動會のあとにも批評會があり、文藝會の後にもまたそれが開かれる。そして善い事は奬勵し好ましからぬものは、改良を促すといふ風であります。

△晩香、華山、豊明三村の演習は、此後幾日づゝを隔てゝ行はれたが、火元や、時刻や、避難所が違つたばかり、其の狀況成績に於ては略ぼ同じやうなものであつた。たゞ華山村に於ける曙寮には、幼稚園や小學校の可愛らしい生徒が居るので其の模樣は一寸面白い。

「近頃に火事のお稽古がありますから其の時には、よくお姉様方の仰しやる事をきいておとなしく外に連れ出して頂くのですよ」

と豫め先生のお母さんから御話があると子供達もなかなか必死です。朝起きるとまづ「昨夜は火事のお稽古がありませんでしたか」ときく。なかつたといはれて「では今晩あたりにも知れませんね」と床に入るまでは氣にかゝつて話して居れど、一旦頭を枕につけるが最後、もう何も忘れて無心に寐入つて了ふのです。愈々其の晩などなか〳〵目を覺さないので困つたとのこと、二度も三度も呼ばれて辛と目をこすり〳〵起き上つては見たものゝ、何うやらまだ夢中である、火事のお稽古と氣がついては周章て却つて何も出來ないといふ有樣、それでもさすがに日頃の敎へを忘れずに、泣いたりわめいたりするものが唯の一人もなかつたは感心、姉樣達の御手傳でいつの間にか寢衣も着更へ足袋も穿けたから、背負をしたり、手を引かれたりして目出度避難所へ出たといふ。



配偶者の撰擇に苦む女

落葉

木枯の風に庭の紅葉も散り初め申候。昨日今日のお寒さ。お障りもお在しまさず候や。

御新婚の樂しい御明け暮れ、定めて此の秋は、月に淋しさをかこち給ふ御暇もお在しまさゞりし事と、御察し申居り候。

毎度御便りを頂き乍ら、梨のつぶての、とんと御無沙汰のみ致し候て、何卒御免し被下度候。懷しの都、わけても心の友の澄子樣を何とて、忘らる可き事には候はねど、實は虫の音細りし頃より、小さき胸を亂す事ありて、心ならずも此の怠り今日になり申候。『まあ、水臭い。其れならさうと、何故もつと早く、私には言ふて呉れざりし。』と、屹度すみ子樣の御恨みを受けんは必然の事と覺悟は致し居り候。さればぞ今日はすつかり、恥かしさを拔にして、心の内の有りつ丈けを申上ぐ可く候。

空想の甘き高樓より、俄かに現實の苦き地上に落ちんとして、大なる不安と恐怖と希望とが、亂れて心に充滿いたし居り候。何時やら、すみ子樣にも御心配相掛け候て、將に整はんとせし有賀氏との話をよしてより以來、餘り思はしき事も候はざりしが、此の程俄かに同じ樣な話が三つほど、同時に持ち上り候て、何れに歩まんか、分岐點の道の眞中に私一人行き惱み居り候。今樣の煩悶とは事變り候へど、御笑ひ下されまじく、私が初めて感ぜし苦みに候。私が長所も欠點も、性質の凡てを御ぞんじのすみ子樣、何卒御批判頂き度候。

先づ第一に人づて以て申し込みしは、今年廿八歲の

陸軍中尉と思し召せ、日露戰役の折り軍神の名を殘して討死されし、彼の有名なる某大佐の遺子に候。性快活、豪放、前途有望敏腕の靑年士官として上官の寵も殊の外の由聞き及び申候。二人の妹弟あり、上は妹にて十七歲、女學校へ通學致し居り、下は弟の尋常小學校四年生とか。中尉の母なる未亡人は今年未だ三十五、餘りの若さを不思議がり候へば、實は、中尉が繼母に當り候由、中尉が三歲の時より初めて呼びし母と承り候。これだけの事にて圓き家庭ならば言ひ分は之れ無く候へど、其繼母なる人の素性を洗へば、嘗ては新橋に媚名を唄はれしそれ者の上りなりとか。其れかあらぬか、大佐の戰死後も變りなき贅澤。我儘奥樣、むづかしやとの世人の評を聞いて、心弱き此の胸は先づふさがり申候。

次は去年文科大學を出でし某文學士。年齢は三十歲の由に候。勿論血統は正。幼少の折父母を失ひて、二歲上の兄なる人が矢張り學士にて家を繼ぎ居り候ひしが去年急病にて死去されし由、從て多少の遺產は此の文學士の手に歸したりと聞き申候。されば、何等の係累は之れなく候。且つ近頃自然派の文士として創作界にも大分名を賣りだし候樣子。雜誌の上にて多分すみ子樣も御存じの事と思ひ申候。雅號は何々と申す人に候。尙性質は溫厚、風姿端正、と聞き候へど、何も標準なき事なれば能くは分明ならず候。

玆に一つ思はしからぬ事の候は。彼の所謂の自然派文士として、心ある人より筆誅致されし事ある、某氏とは淺からぬ親友の交りの候由。チラと之れをきゝてより、云ひ知らぬ不安と恐怖の思ひを覺え申候。

第三は未だ在學中の人。今年廿七歲にて醫科の二年生、中學卒業後家の都合にて三年間小學校敎員に費し候由、中學校時代の兄の親友に御座候。三年學校生活を遲らせしには大なる理由の之れ有り候。

此の家、元は士族のさる家柄に候ひしが、維新後十幾年かを經て父なる人が一旗上げんと、立派に菓子屋を開業いたし候が誤りにて、根が經濟にはうとき人の數年ならずして、美事失敗し、遂には苦に病みて大事

の生命まで失ひしと申し候。殘りしは高のしれた財產、母一人子一人に候。斯る事情のもとに三年の月日を送りしが、子の熱心と母の勇氣によつて、再び學窓の人となりしとか。今年大學卒業せし兄が何時も申し候。『某君はあんな事情が無かつたのなら、僕と一緒に卒業するんだつた。二年遲れてたとて矢張り僕の畏友に相違ない。』と。

境遇よりか餘り快活の人には候はねど、泰然と、義俠心あり、爲す可き事は必ず爲す人に候。幾多の苦勞を知りし母なる人も、極優しき扣へ目の人と申候。當人の性格に就ては何物も缺點を擧げつらふ可き事は之れ無く候へど、私の僞りなき心を申し上ぐれば、財なく、位置なく、資格なき家。唯一人の母が、一人の息子を賴みにして細々と煙を立て居り候暗き家。其の家が何とやら心耻しく心辛うぞんじ候。

倘當人は未だ妻帶の早きを申し候へど、母を始め親戚の人々等が頻りに進め候を、無下に斷み難くてと聞き申候。

話はざつと、以上に述べたる如くに候。何處とていづれ知らぬ他家へ參ること、さう〳〵思ひ通りになる物には之れ無く候へど、少しにても多く、心の幸福を望んで、分らぬ未來の事迄も取越苦勞して、案じ迷ひ居り候事、我れ乍ら可笑しうもなり申候。

例の遣りつ放しの父は、かの敏腕なりと言ふ中尉其の人を好みてか、果た財產を思ひてか。

『いつそ、某氏へ遣つたらどうだなア、高がむづかしいと言つても一人の女ぢや。エ、何だと。其れッ許りの事がやつて排けられない樣な花子ぢや、ない積りだつたが。』と昨日も母に申居りしを、ソッと立ち聞き致し候。

若うして父に嫁し、むづかしやの舅姑に仕へて、而も多くの小姑に氣兼せし母は、只安氣な處をと、例の姑息の愛よりか、無暗にかの係累なきといふ文學士を望み候て、

『獨り者の文學士の方の方が、お前どれだけ氣樂で好いだらう。』と申候。

兄は頻りに自分の友なる醫科の某氏を推撰して、

『僕は一番第三が好いと思ふね。花さんお前財産に嫁す積りぢや無いだらう。權門に嫁す積りでもない。ね、僕がお前だつたら、嬉んで某の處へ嫁んだがなア。ハハ……。』と申し候まゝ、私も少しじれて見たく、

『だつて兄さん。お隣りの松子さんだつて某會社の社長さんの處へ被入しやつたし。お友達の浪子さんだつて。』と言はせもせず。

『馬鹿な！　だめだ〳〵、お前は虚榮心の幽靈だ。ひどいつて？　だつてさうぢやないか。幽靈女は僕あ、大嫌ひだ。』と吃驚する程、大きな聲して叱られ申候。

然しすみ子樣、私とて多少の考はこれあり、迷ふ中にも又思ふ事も之れあり候。

第一の方は、『女一人位。』と父は申し候、固より其の氣質をすつかり呑み込んで、眞心もて仕ふれば、誰れにも良心は候もの、左程の困事には候まじくとは存じ候へども。かの御存じの仲子樣。去年お嫁き遊ばして、御夫婦のお仲はお睦じう候へど、お姑御樣一人の爲に、それは〳〵強い御苦勞。思ふと餘りにお可愛想にて、人の事の樣にも思はれず候ぞ、中尉の繼母といふのも又仲子樣が御苦勞の母上の樣にはならぬかと、心配いたされ申し候。

されば次なる文學士は。母も申し候通りわづらはしき係累なきが何より嬉しく、殊に文學好きの私には、願ふても無き良緣と思はれ候へど、只、性行が案じられ申候。又好個の引き合はせともなるは、かの同窓の友なりし杉見樣の御上に候。新進作家の秀才に嫁し給ひて、初めの程はお羨しき迄、御多幸に見え候ひしが、本能主義といふか、自然主義と言ふか、お互に思ふ儘、仕たい儘の、あの秩序なく、亂らなる御家庭、自然主義實施の家庭とや申すべき。あゝいふ御氣質の杉見樣なればこそ、滿足もして御出遊ばせ、とても意氣地なき私にはむつかしき事に候ふべしと恐ろしう存じ候。

一番後の第三の話に候。學績及び性行に就ては、何も言ふ事は之れ無く候。全く甘き空想の高樓より墜落ち切つて了つて、穢いと言ふか、美しいと言ふか、私

の此の虚榮心さへ無くせば、卽時、心の滿足も得られ候べし。或は好配偶に候べきか。

馬車を夢み、眞珠の玉にあこがれし如き無望の虚榮は、固より之れなく候。

兄の申し候通り、物質的幸福のはかなさは私だとて、能く知り居り候。私の心はよく、すみ子樣ならねば分つて居ては下さらず候。然し、此處が婦人のはかなさ。春のお花見や、秋學校の運動會には、何時もお揃ひの着物つけて遊び候御存じの登喜子樣、今は某華族樣の新夫人として、御立派にすまし給ひ、一番級の困り者なりし白木樣は、かの有名なる實業家の某樣へ。すみ子樣、お笑ひ下されまじく、何とやら思ふて時に、胸轟く事も少なからず候ものを。

不得要領なる心の亂れを、包まず、隱さず亂し書き致し候。何卒御判讀被下度、御多忙恐れ入り候へども、御一考煩はし度く、御願ひ申上候。末筆ながら御主人樣へも、宜しく御傳言被下度。

先は右まで。　早々　かしこ

澄子樣へ　花子

同返事

あさしも

風凉しくなりし秋の初めより、そよとの御便りさへ無きまゝに、如何遊ばし候ひしかと案じ過して、幾度か主人に笑はれ候迄、時には御恨み言も申し居り候ひしを。神ならぬ身の、扨もまあ、此の秋をお苦しみの月日なりしとは、思ひもよらず。

昨日夕ぐれ、何時になく暇さうに、ポンヤリ小窓に佇み居りし時、例の小女があはたゞしげに、『奥樣、よく御噂遊ばします花子樣から御座いますよ。』と、何の嬉しさぞ、我れを忘れて胸轟かせ候ひし。御心籠りし細々の御手紙、くり返し〳〵して人事ならず、御尤の御苦しみと、深く御察し申上候。

私とて此の上山へ參り候迄には、隨分花子樣にも御困らせ申し候程、苦しみも致し候。幸にも樂しき家庭

の主婦となり得られ候今日、私の唯一の願ひは、花子樣にもより以上御理想の御家庭を、との外之れ無く候。
然し花子樣、さう〳〵微笑みてのみ居らる可き浮世ならば。矢張り私にも涙の出さうになる時も少なからず候へど、其れに打ち勝つ可き程の樂しさが一方に有れば、こそ却て勇氣も百倍すると言つた樣な譯に候。小さき自己を良人の胸に沒却して、初めて大なる自我は見出さるゝもの。扨こそ、不平さり、不安ゆき、自己を捨てゝも、この健なる心も起り候べし。などゝ知つたか振りして御免し下され度候。
委しき御手紙に人事ならず、昨夜は思ひあまし候、さればとて私が、第三の内どれこそは、とは申し兼ね候へど、何よりも、何よりも、良人となる可き人の人格が、今更ならず一大事と考へられ申し候。唯一時の事ならず、添ふは己れ一生涯、生命終らん迄の事にて候へば。
如何に氣樂なりとて、財あればとて、若しも良人の家を外なる行ひに候はゞ、妻の身の如何に口惜しう、心苦しき事にて候はん。妻にして頼む良人の愛なくば、一日も微笑みて生きて居らるべきものならず候べし。
もう先達、主人の出勤致し居り候會社へ、御入社遊ばし候とて、私宅のつひ並びの社宅へ御移轉遊ばし候若御夫婦。初めの内は何も存じ申さず候ひしが、稀に御目にかゝるお美しい奥樣がいつも御心配相な御樣子を、不思議に思ひ候て、或る日ソッと主人に、
『まあどう遊ばしたんでせうね。御隣家の奥樣は。』と申し候へば、
『美人薄命とは能く言つたものだ。澄子なんぞは仕合せの部類で幸福さ。』と例の惡口を前提にして、
『ナーニ、ありやあ、亭主の方が一體いけないんだ。』と事もなげに申候。
相きけば尙御憐しう存じ候ひしが、御親しうなりし今日此の頃、辛とすつかり御樣子は知れ申候。何でも他所に面白き處が候よし。只今にては妻が心よりの諫めも、友が誠實のアトバイスも、一向耳へは入らず、

會社の受けも餘り宜しく候はぬ由。固より最初は妻の手落ちより、輕からぬ罪に候べけれど、矢張り當人の性質にもより候事、疑ふ可からざる事に候ふべし。よし、不倫の行爲は候はぬ迄も、瞭然と男らしからぬ男子と、聞々見受け候事、之れも心痛き一つに候。男らしき男子こそ、良人として妻が一身を捧ぐるに、誰れしも嬉しき誇りには候まじきや。

又、如何に財あり權威ありとて、自由ならざる位置ならば、さぞや辛く候はん。虚榮の爲めに見えを張つて錦衣を飾らん事、自ら求むる心の束縛に候ふべし。何とてそれが、樂しく嬉しき事にて候べき。

『まあ、あの心から樂し相な、馬丁の妻に一度生れ變つて見たい。』とは、某伯爵夫人が嘗て御邊の侍女に、太息してさゝやき給ひし御言葉なりとか聞き居り申し候。

廣き御邸内の小さき平家に、夫婦樂しう火鉢圍んで、五勺の酒に陶然と、一日の疲れを忘るゝ良人。一つ食卓につゝき合ひの牛鍋も、僞はらぬ心と心なればこそ。囚れし我が身顧させて、さぞやと伯爵夫人の思し給ふも、無理ならぬ事に候。

今朝も花子樣、可笑しう候。昨晩の思ひあまりし夢の名殘、餘りに心に掛り候まゝ、朝餉の卓に向ひし時、私フト、此の樣な事を申し候。

『若しも貴郎が女でしたらね、何んな處をお好みなさいませう？』

自分には十分に、一人呑み込んで申せし事なれど、知らぬ人には餘り不意な、餘り不得要領な此の問の、可笑しうや候ひけん、主人は驚いて笑ひ乍ら、

『何だつて？　俺かい！　女になんぞ成れつたつて仕樣が無いぢやないか。』と申し候まゝ。

『イヽエね。斯うで御座いますの、昨日花子さんから相談して參りましたのよ、エッ、先輩振るなつて？　ホヽヽヽ。それでね、若しも貴郎が女で被居しやいましたなら、どんなお家へ。』

『分つた、分つた、ハヽヽヽ、こら一番困つた問題が起つて了つたぞ。然うだ、俺が若しや女だつたら、乾

度立派な實業家へ嫁したに相違ないね。ワハヽヽヽ。』と、仰山に笑ひ候まゝ。

『アラ、戯談處では御座いませんわ、其れで其の立派と申しますと？』と、眞面目に私尋ね候へば、

『立派は立派ぢやないか。』

『さうですのね。』と、一寸分らない樣な事、申せば、

『エツ、分らないの？人格さ。』と無造作に申し候。

可笑しき今朝の會話、今思ふと滑稽さに微笑まれ候へど、然し私の考へと、同じ樣なりしが何より嬉しく存じ候。

元より無きよりは有つた方がよろしくは候へど、財產や、權門や、偏固なる知識など、餘り女の賴みにならぬ、はかなき物に候べし、只生れ稟けて敎育に磨かれし人格こそ、終始變らぬ寶と申す可きか。

只々、捧ぐるの一字に於て、凡べての不平は無くなり、いらぬ苦痛は忘られて、眞の愛は生れ出づ可く候、之れ私が家庭の人となりて初めて得たる賜に候。尊き宗教的關係の第一步は、將にそれから開かるゝ者と、謂ふを得可くと存じ候。

花子樣、半年ほど前に主婦になりたりとて、餘り知つた樣な風して、好きな事許り申し候。然し心置きなく、隔てなき者なればこそ、何卒御ゆるし下され度候。

同級の方の內にても、御出世の樣に御見受け申す方も候へど、誠實の御心の內に扨どうかは分り申さず候。此の程人傳もて承はり候へば、皆が一時羨みし谷川樣、御離婚遊ばし候とや。原因は存じ申さず候へど、御氣の毒な事に御座候。

何卒此の上、能く御取り調べ御熟考遊ばし、御兩親樣はじめ御兄上樣とも、篤と御相談相成り候樣、祈り上候。

いつも乍ら、書かんとならば限りなく候へど、四時には主人の歸來候筈、只今は丁度三時、そろ〳〵夕餉の支度に取り掛らねばならず候間、今日はこれにて、惜しき筆とめ申候、餘は後便にて又。

澄子

花子樣



嫁ぐ姉

妹、ゆかり

十一月一日

今日はいよ〳〵姉上の、お嫁入の日である、いつになく、朝早く目がさめた、家内はしんとして、松やが勝手で働く音ばかり、私と床を並べて寢た姉上は、向ふをむいて居られて、身動きもなさらない、目がさめてお出かしら、姉さん……、なあに、と、いつて、すぐこちらを、お向きになる。

△『おきてゐらつしやつたの。』

▲『エ、さつきから目がさめちまつたの。』

△『もう今日がいよ〳〵お別れね、殘つた私は、どんなに、淋しい事でせう、どうしませう。』

▲『それより姉さんこそ、向ふには、姑も居られるしほんとに心配で〳〵、ならないのよ。』

△『そんな心配なぞしないで、氣を大きくもつて、內へしよつちう、遊びにいらつしやいよ、私今迄姉さんのいふ言もきかずに、我儘いつて、濟まなかつたが、勘忍して下さいよ。』

もう姉さんは淚をこぼして居られる。

あゝつまらぬことをいたつと、感付て、機嫌を直さうと務める、もう起きませうよと、自分は元氣よくはねおきて、姉上のお床も今日をおさめと疊んで片付けて、みんなで朝餐を濟ました處へ、仲人の山本の、御夫婦がお出になつて式場の事から、萬事萬端の打合せをする、內の者は兩親と賢チャン(弟)が列席の事になつて、私は留守番だ其方が氣樂でよい、が、大神宮で結婚式三々九度の盃つて、どんな事をするのだらうと思ふと行て見たい、けれ共姉さんより品のおちた着物を着て出で、皆に見られるのも氣がきかぬ故、もう出ぬ事に斷念する。

山本さんはお歸りになる。

姉さんのお婿さんは立派な醫學士で先生と立てられて居る人、三年前迄は、本郷の叔父さんの内から、角帽被つて通學された人で、内には母さんと弟が一人居られる。まんざら、知らぬ縁ではないお二人、どんな顏をして御祝言をなさるかと思ふと、をかしい樣だ。

日比谷の大神宮は午後三時に式をはじめるとの事、姉上のお仕度には、もう朝から取掛る、髮は新式で束髮なのだから一人で結つた方が顏に似合ふとて、至極念入で揃へられたら、いつもより、ぐつと、よく出來上る、お午にはお祝お頭附のお膳にすわつて、一同でいたゞいた、母上は氣ばかり、あせつて、早く〳〵と仕度を急がれる故、もう一時頃には、ちやんと、おつくりが出來て、時計や衿止迄も飾られた、何たる美しい姿だらう、いつもの姉さんとは殆で別人のやうだ、細面の、どちかといへば、色は青白い方故、今日は肉白粉をほんのりと櫻色に匂はせ、思ひきり派手な江戸褄模樣に、茶がゝつた帶の配合、一般の美を添へて居る、此間天賞堂で買つたのと、前



から有のとを、指へはめると母親が結納の時の、指環を出して來て、これは、この指にはめるのだよと、お婿さんの名のほつてあるのを無名指におはめなさる姉さんは眞赤になつてうつむかれた、あゝ此時姉上のお姿は、殆で天人の樣に、氣高く、我目に映じて、これほど美しかつた事はない、もうそろ／＼出掛けても、よからうと父上が仰有る。

アレマダ賢が歸つて來ませんよ、今朝あれほど、いひつけたのに、何をして居るのでせう。

併しまだ時間はあるわと、父上はニコ／＼と立つたり、居たりして、ゐらつしやると、門の戸がガラ／＼と賢チャンが學校から歸つて來て、さあ早く飯だ／＼やあ姉さん奇麗になつたなと、いきなり御飯をたべる。

十七歳にもなつて時間もわからないのかえ、こんなに遲くなつてさ、と母上が仰有つても、返事處でなく大口でやつて居る、紋附に着かへるも面倒だと、いふので、學校の制服に、カラーを取かへて着せてやるとすぐ、僕あ、お嫁さんと一しよに車で行くのは嫌だから電車で先へいつてるといつて、飛出してしまつた、男は世話がなくてのんきなものだ。

それでは御機嫌よう……姉上の目には涙が一杯、たまらなくなつて、つゝぷしてしまはれた、何ですねいい齡をして、阿母さんなどは十六の年にと、又々お株が出たり、松やが引立てたりして、門前迄送り出すと待つて居た車夫が、勇ましくひき出す、あゝ姉さんはもう園田の人だ、幸多き家庭を作り給へと祈つた。

十一月十日

姉さんのお里歸りもすんで、今日は園田へ一同が招かれて行くので、私は一同に初對面だから極りが惡いどの着物にせうか、無地紋付も極りきつてゐるしと思つて、私の大好な、紋織お召の重ねに、姉さんと一しよに、今度買つて貰つた厚板の帶を、矢の字にしめて髮をマガレットにした、脊が高いからと母樣が仰有た、けれ共思ひきり若く作つた。

時間をちやんと守つて、午後四時に園田へ行く想像して居たよりは、却々大きな立派な家で座敷等もハイ

カラに裝飾が行屆いて居る。

お客は山本の御夫婦(仲人)本鄕の叔父さんと私の內の者が四人、園田の親類五人(名はまだよく覺えない)其中に靜子さんといふきれいな令孃も、御出になる、義兄さんの從妹だつて、目がさめる樣な華やかなおつくりだが、惜しい哉、、、きりやうが少々二の町なので、さういふ自分もそのお仲間のくせに……一同御挨拶も濟んでお話がはじまる。

義兄さんと弟君貞雄さんが、接待につとめて居られる、「僕のとこは庭が廣いから、チト散步しませんか、靜チャン、いつもの樣にテニスは、どうですサア貴孃もお出なさい、と私に仰有る、なか〳〵おもてなしがお上手だ、靜子さんと二人で庭へ下りる、一面の芝生で西洋式の庭である、隅の方には花壇が有て菊やコスモスが眞盛りで却々キレイだ、貴孃はどこの學校、お茶の水アスコは活潑でいゝですね」と、貞雄さんが仰有る、學校自慢の私だから、いつもながら嬉しまぎれに色々吹聽する處だけれ共、今日は極りが惡くて、少しも言葉が出ない、貞雄さんは、いろ〳〵なお話を、なさつたけれ共、只ハイ〳〵と、御返事するばかりで、頭がボーッとして、胸がどきついて、自分ながらはがゆくてたまらない。

靜子さん方、もうお席へおつき遊ばせな、と姉さんが迎へにお出になる、ぐつとハイカラの庇にして少しの間に急に奥樣じみた態度で、却々元氣がよい、ニコニコして居られる、私は窮屈な饗應の宴に連るよりも貞雄さんと、かうしてお話をして、居たいと思つたがそんな譯にはいかない、ズラリと座ぶとんの上にのせられてしまつた、けれ共、何だか夢の樣な心地で、澤山の御馳走も何も口に入らない、母樣が傍からお前の好なキントンでもおあがりよ、と仰有る、はしを持つたが、何もたべたくない、お刺身を一寸つまんだり、吸物をすつたりして居る內に、御飯になつて、漸く一杯食べておしまひにする、食後は貞雄さんの富士登山の滑稽談で、一同がお腹の皮をよつたり義兄サンのお自慢の、謠曲が出たりして今度は姉上と靜子サンと、

静子サンの母上との三人で琴と三味線の合奏、前日から、お稽古が積んである故、却々面白く聞かれる、サア今度は春子サンも一曲、如何と園田の姉様が仰有るので、こんな時には、どうしてと、堅く辭退したが、手並は豫々、聞き及んで居るからとて、義兄サンと、貞雄サンが、面白半分に、私をひつぱり出してしまふしかたがないから、姉上にたのんで、越後獅子につけてもらふ（實は私の一人天狗の得意ものなので）無事に一曲を總つた、三味線がはいつてるから引立つて自分乍ら面白く感じた、藝人のお揃ひでほんとに面白う御座いましたと、賞讃される、藝人などゝ云はれるは氣に入らぬが、今日は何でも嬉しく思ふ、十一時頃にお開きになるそれ〳〵お暇乞をして歸る、玄關で貞雄さんが、又お出なさいよと、仰有た言葉が、耳に殘つて忘れられない。

寢床に入てからも、今日の事を色々思ひ出して胸の動悸ばかり高く成て、十二時迄もねられなかつた、自分乍らわけが分らない。

十一月十七日

小春日和のよい日曜で父上は賢チャンを連れて百花園でも行かうと、いつてお出掛けになる、私もお供をする處なのだけれ共、昨日から母上が少し頭が痛むとて寢て居られるから、見合せた、母上が一番すきな白菊の花を庭から手折つて來て、床の籠花いけにさす、清い香がする、母上の熱が出たやうだから、お醫者をよびませうとすゝめると、イヽエ、今日中には、キットなほるよ、と、いつて承知なさらぬ、いつも醫者がおきらひで困つちまふ、お午には、おせうはんに玉子の半熟でごはんを食べる、枕元で新聞をよんであげて居ると、松やが園田樣からお使ひが參りまして、御返事をと、手紙を持て來た。

なつかしい貞雄さんのお筆で、

今日の日曜はめづらしく家に居ります母と姉とは親戚へ招かれて行き兄と二人で淋しいから遊びに來給へなテニスでもしませうよ待つて居ます。

貞雄

春子樣

あゝかの日以來忘れようとしても忘られぬあの方よりのお文、私は飛立つやうな嬉しさで、一時に眞赤な顔に成てしまつた、母上は封筒を見ながら『貞雄さんから何といつてきたの。』私はハッと我にかへつて、お手紙をお目にかける。

『母樣どうしませう……』マア生憎こんな日で迚も出られぬとは、思ふものゝ、未練らしく訊て見る。

『今日は行かれないから、よく申譯をして、お斷りなさい。』と仰有る、折角々々親切に使までよこして下さつたのに實に〳〵殘念でたまらない、事情を認めて何れお目に掛つてお詫を申上ると御返事をする。

あゝ物事はなぜかう意地が惡いものだらう、折惡しくこんな時に……此間姉上からも、貞雄サンの御氣質を伺つたが、なか〳〵人格の高いお方だ、去年學校を終へて、今は會社に出てお出になるが、獨力で社會に立て行ける迄は、妻帶しないとの御持論ださうで、財產の分配もこばんでお出になるつて、何もそんなガンコな言を仰有らなくともよさゝうなものだが、そこがあのお方の、價値のある處で、又母上や兄弟などにも却々柔しく、よくおつくしになるとの事、實に今時めづらしい方よと、姉樣がさん〴〵ほめて私に話して下さつた。

あゝ慕はしい其お方が私に交際を求めて……と思ふと何事もいはれぬ、嬉しさが身にしみて、今度お目に掛つたら何と申上ようかとそれからそれへと、空想にかられて、水車のめぐるがやうにはてなきおもひ……ふと氣がつくと母上はすや〳〵おやすみになつて居るのでそつと自分の部屋へ行て又さつきのお手紙を出して胸に抱く……。

（作者の住所を報知あれ）





霜月日記

千代子

十一月一日　日曜　はれ

六時起床、一昨日結つた桃割の根が、つれて〳〵堪らないので手早く直して花壇の菊を、冷たい露のまゝ一輪さし例の通りお優ちやんを誘つて裁縫に行く。しばらく束髮にしなかつたので、稽古場にはいると皆が珍らしがつて人の髮ばかし見て居る。だが矢張日本髮の方が似合ふさうだ。かう廂にすると、何だか看護婦じみてるつて評判だ。馬鹿にしてるわ。

お優ちやんの綿入は十時過ぎ見事に出來上つた。今度も亦、御自分のお羽織をお縫ひに成るんだつて。紫紺縮緬の三ッ紋に白羽二重の裏は、なか〳〵振つたものである。まあ〳〵いゝねいゝねと皆が口も利けずに羨むのを、こんな物しようがないわ。お母さんがいけないと言ふのを無理に買つて了つたんですもの、まだね長襦袢もこしらへて貰ふの、ほんとに温順しくして居ちやきりがないわ。だから私何でも無やみにねだつて、おどかして遣るのよなんて笑ひ乍ら氣樂な事を云つて居る。お晝の休み時間にも、

『鳥渡、これはね私のお友達よ。昨日寫眞を送つて下すつたわ』とそつと私の袖を引く。

見ればブロマイトの半身。帝大の制帽制服眉の濃い鼻の高い口もとのしまつた凛々しいお方。角帽も一寸惡くはないねと恍惚見いつて居ると、

『オホヽヽヽ、お氣に召して。その方は文科でゐらつしやるのよ。嬉しいでせう。だが文學士なんか厭だわね年中ピイ〳〵風車で銘仙一枚むづかしいんだわ。私なら實業家へ嫁き度い事よ。オホヽヽヽ』

まあお優ちやんの十八番で弄かひかける。お優ちやんは私がなけなしのお小使ひを、小說と雜誌にばかり

つぎ込むのを冷笑つて、その癖自分はもう白粉や化粧水の選擇に、笑止な程氣をもんで居ながら私の事を、文學狂ひだと言ふ。それはまあ可いが、私何時文學士の處へ嫁き度いなんて云つた。私はいくら好きだからつて、自分が詩人や文學者の妻にならうとは思はないわ。海軍オホ、、可いわ、どうせ理想ははかないものよ。その美しい影にあこがれて居る中が花なのだから——あの不如歸の武男さんの樣なのが可いんだわ。私こそ商人なんか大きらひ。お優ちやんは實業家々々つて口ぐせの樣に云ふけれど。

四時に裁縫をしまつて藤澤へまはる。

何より先にまづ中央舍へよつて女學世界を買ふと、今まで待つて〳〵待ちこがれたのであり乍ら、いよ〳〵手に入つて見るとまた一種不安な念にもおそはれて、我知らず顏が熱くなる。がそれも時の間、矢張り堪へ切れず通を歩き〳〵そつと短文の部を開くと、えエえエ今度も賞にもれた。口惜しい。恥かしい。家へは何と言つて歸らうかしらと、何か非常な過失でもしたやうな氣がする。もう歩くのも厭だ。この本をそこらへ投げつけて遣りたい。こんな事ばかり思つてふら〳〵足も地につかず、買物をすませて町を出るとお日樣は西におしづみ成すつて了つた。驚いて淋しい山路をかけぬけてホッと息つけば、五日あまりの月がさやかに光をはなち出した。

夜はもう夢中になつて女學世界を讀む。一番面白かつたのは「苦勞を知ぬ娘の日記」。翠子樣はまあ何時もどうしてこんなにお上手だらう。わけて今度のなんか、まるで私の心を見すかされたやうで恥かしくなる程である。して見ると輝く前途を夢み、甘き理想にあこがるゝ、盛春の乙女心は誰もこんなものかしらと思ふ。すればお優ちやんはさしづめこの中村さんである。

同じ裁縫の師匠に通ふ生徒三十七人。何れも農家の娘ばかりで、鍬持たぬ家のは私とお優ちやんだけだから、無理もないのかも知れないが、まあ一同の品性の下劣な事、嗜好の野卑な事。こんな人達とは口を利くのさへ恥のやうに思はれる。たゞ其の中で語るに足る

のはお優ちやん一人。それすら氣性が違ひ趣味が合はず、まだ眞の友の味と云ふもの知らぬ私は、こゝに私と同く文學の花の香に醉ふて居る方を、かぎりなく慕はしく、しばしは魂の體を飛んだ。

二日　月曜日　晴

まあ朝の寒かつた事。いくら十一月に成つたからつて、かうまで現金でなくつたつて宜ささうなものだ。もう冷たいと云はうより、足の裏がピリ〳〵痛くつて堪らない。おまけに今朝は髮が出來損なつて、散々癇癪をおこしておそく一人で出かける。歌など考へ乍ら靜かに歩くと、半里の道も物の苦にならず、切角湧いた興趣を途中で破られるのが惜しくて一層先生のお宅が、もつと遠ければよいと思つた。

葱畑。菊の花。梢に赤らむ柿。色づく蜜柑。さては大根の干してあるのも稻をこいて居るのも、一ッとして詩に歌にの種ならざるはなく、

億兆の雀肥へたり稻の出來

はかなさは人も同じか桐一葉

今日は妹の袴を一日で縫ひ上げて、大得意で家へ歸る。と、木村さんからお手紙が來て居た。流石にまだ私の事を、忘れては下さらなかつたかと思と、嬉しくて抱きしめて、そと懷に深くをさめた。

夜はこのお返事を書くため、お部屋へ引こもる。今宵は松の琴も聞えず、訪ふ人もなき小窓に落葉のみ音づる、靜かな夜である。お手紙をまたくり返し讀んで見る。お千代さま其後文學上の作物、さだめての名篇續々御脱稿の事と察し奉り候、思想の豐富なる趣味の高尚なる實に感佩の外これなくなんて厭におだて上げて——憎らしい、散々お冷かしなすつた事もある癖に。

ランプを明るくして墨を濃くすつて、奇麗に書き始めたのもほんの五六行。それからはもう甘へたり我儘やお怨みやら筆に任かせて書き下し、ふと氣がつくと卷紙は、已に机のはしをたれて四尺餘りも長く疊に曳いて居る。不足税なんか餘り色けしたから可い加減な處で切り上げて、俳句を二ッばかり書きそへた。

まあこれを裁縫の一同が聞いたら何と云ふであらう

實に田舍者の氣の狹いにも困る。少し男子と口を利いたり、まして手紙のやりとりなんかしようものなら、直ぐ妙な關係でもあるやうに思つて仕舞ふ。私はまた見聞の狹い口の多い嫉妬深い女友なんかより、異性の友の方がどんなに賴もしいか知れやしない。たとひ何百里の海山は遠くはなれて居ても、せめて御手紙での御交際ばかりは、一生決して絕すまいと一人で定めた。先方では私の事なんか忘れてお了ひなさるかも知れないのに。

木の葉がしきりに雨のやうに雨戶を打つ。こんな晩に心行くまで、物思ひに耽けりたいと思つたが、母樣から度々うながされて仕方なく床に入る。丁度十一時。

十一月三日　火曜日　曇後はれ

妹にせめたてられて早く起きた。まあ情ない今にも泣き出しさうなお天氣。東京ぢや團子坂なんかさぞ人が出るであらうにせめて今日一日だけは降らし度くない。當鵠沼尋常高等小學校においても今日天長の佳辰を卜して、運動會を開かれたのである。

私も生徒の父兄としての招待を受けたので、お優ちやんをすゝめて十一時頃から行つて見た。四海にあまねき君の稜威にはさしも空一面をおほふて居た雨雲さへ、はらはれて嬉しい靑空が顏を見せ、和らかな小春日和となつた。何處の軒にも黑ずんだ日の丸がヒラリヒラリ。場處は學校の運動場。まはりには見物の人山をきづき、お定まり萬國々旗が蜘蛛手に張り渡されて、日章旗竿頭高くハタリ〳〵羽ばたゝいて居る。

左手に瀟洒なよしずばりをしつらへ白布をかけたテーブルをすへて、二個の花瓶に菊花があふれ賞品うづ高くお頭の禿げた校長さん始め、村長や村の名譽職なども羽織袴でひかへて居らるゝ。

折々空に轟く合圖ののろせ。りよう〳〵たる音樂隊の奏樂を聞くと、私でさへ胸がをどるのに、まして生徒の心は何んなであらう。今尋常四年生の妹は、黑キヤラコの筒袖紋付の襟に級長の徽章の白リボンをからませて、蝦茶袴を胸高う、靴音かろくそこらを飛びまはつて居た。お午にはお辨當が出る。午後から數十番

の遊戯競走。中には生徒と同じく夢中になつてる親や姉兄もあつたが、私には別に珍らしいものもないのでつひ見物人のアラばかし搜すやうになる。と直き傍に立つてる、豫て見知越の養蠶教師の娘。草色の紐つけた、小紋縮緬の被布とだけでは、何となく伊香保の浪さんを思出されるが、これはまた異形な高襟美人まあ前髮を出したも出したも、まるで笠をかぶつた樣で日よけのつもりかは知らないが、眼の上へおつかぶさつてさぞうるさからう。皆なもう目引袖引きこの娘を見ては笑つて居る。私もふつと失笑し度く成つてつとお優ちやんの肩をつくと、振りかへつて笑ひ乍ら小聲で『はー何でせうあの風は。まるで淫賣婦だわね――』お優ちやんの評語も餘りだが、兎に角みつともない。私もこれから餘り廂は出すまいと思つた。

どうしても鳥渡目を引くのは女生徒の遊戯や體操である。クワドリール。球竿體操。萬國旅行。みな見事な出來榮であつた。殊に尋四女生の蝶逐競走。何れが蝶かや、下げ髮のリボンひら〳〵と紅白のたすき勇ましく、咲きみだれた花のやうに可愛く美しかつた。

終りに尋常一年女生の破鈴がある。てんでに紅葉の樣な手で、いくら投げつけても〳〵一ツとして命中するのはなく、只赤白の毬が中空に入りみだれてとんで居るばかし。その中白の組が勝利を占めて、銀の鈴がパツとわれると、ハラ〳〵降る色紙の中から美しいゴム風船が二ツ、長く〳〵尾を曳いて雲井はるかに舞ひ上る。手を叩いて萬歲とさけんで何時までも何時までもその行方を見上げて居る無邪氣さ。誰だつて心から微笑ずには居られまい。お優ちやんは運動會を見に來たのか、人の服裝を見に來たのか、それとも自分を見せに來たのか。絕えず襟をついたり、振りをそろへたり、結立ての髮を氣にして撫でたり、でなけりや恍惚何處かを見て居るから、その視線を逐ふと必と自分より美しい人。服裝の勝い人でとまつて居る。

お優ちやんにも似合ぬ人格を下げるわ。

やがて校長の閉會の辭あり、萬歲聲裡に會を閉ぢた。時、日は早く西山にうすづき初めたので、妹をうな

がして大急で歸途につく。すると母樣へのお土産だつてわづかなお小使ひの中から、少しばかり金米糖を買つて、學校で頂いた菊桐のお菓子と共に大切さうにハンケチに包んだ。私は何だか胸が一ぱいになつた。

貴女御褒美はと妹はお優ちやんに訊かれて、

『私ね、競走はしなかつたのよ。學課のならだけれど競走の御褒美なんかそんなに欲しかないわ。そして若も級長がまけると耻だから』

と妹は例の眼をパチ〳〵させ乍らこんな生意氣な事言つた。家へ歸つたのは灯ともし過ぎ。くたびれ切つて居るので直ぐお湯に入る。一日立づめも苦しいもので足が棒の樣になつて了まつた。

あゝ今宵この菊の香高き夕を、花の袂や羅の裳ひるがへして舞踏に明す貴婦人達もあるのであらう。私は早く寢た。頰をうづめた黑天鵞絨の夜具の襟にも寢白粉の御そめの香がたゞよふて、春の花野を遊ぶ思ひ快く夢に入る。





苦勞を知りそめし娘の日記

杉浦翠子

四日　曇。

ゆふべ一夜歌聞かざりし心許なさに、秋の伶人松蟲の君恙もありてや、と今朝小さき竹の住居訪へば、こは如何に御姿見え參らせぬ。

『清やお前昨日松蟲に餌を遣るときにどうして？　松蟲が居ないことよ。』

『オヤ左樣で御座いますか、今朝お隣の女中さんと井戸端で逢ひましたら、何でも昨晩珍らしくお隣の庭で松蟲が鳴いてたと申ましたから、それでは逃げて行きましたかも知れませんね。』

と清が行くと、木戸を明けて下さつたので、私は庭傳ひにお隣へと行つた。ゆふべの靄が露に凝つて、珠と輝き、今朝は美しう詩人が庭を飾る。

『何でも此邊でしたよ。』とお隣の女中が道案内に着いて行つて、私は秋海棠の叢をがさ〳〵さして居ると、直ぐ頭の上の窓がガラリと明いた。克己さんだと思ふと私はハツトする。ちらりと顔を見られたが、今朝は幸ひお化粧をして居ることを、私は新に思ふた。互に默禮すると『何です。』と訊かれる。

『ねえ、坊樣ゆふべこの邊で松蟲が鳴いて居りましたでせう。あれはお隣のが逃げて參りましたのですつて、御孃樣が卵から丹精遊ばしたのださうで御座いますよ。』と女中が說明する。

『それはお氣の毒ですな、見付かりませんか、僕も搜して上げませう。』

と云て緣側から下りて、草叢を搜して下さる。花野の中に公達が蟲撰みして居る土佐繪にさも似たる君が趣。

『どうも見付かりませんが、小さい蟲の事ですから、

遠くへも行きますまい……。』
と快活にお笑ひなさる。
『夜になりましたら鳴きませうから、さうしたら見付りませう。』と女中がいふ。私は手持無沙汰で困つて居る時、清が來たのでそれを機會にして、私は何か話をしたい感情に背いて『失禮致しました。』と云つて本意なく別れて了ふた。
午後は秋山さんのところへ行つて、終日オルガンを彈いて遊で居た。西洋音樂は私はあまり好かぬ。矢張り尺八や琴の方がいゝ、月の夜の尺八なんかと云つたら死に度いほど良い。
今夜は厭に蒸熱くて低氣壓が襲つて來さうな晩だ。氣持が惡い、空は昨夜に似合はず、魔のやうな雲が大きな翼を擴げて眞暗である。月は無くて、原宿あたりの家の灯が點々と赤く見える。赤は煩惱の色である、情慾の色である。見て居ると頭が鈍くなる、厭な感になる唾を吐き度くなる。生温るい南風が吹いて頭が重い。こんな晩には夢に惡魔が襲つて來るかもしれないから太刀を枕の下に入れて邪氣を拂ふて寢たい、と思つた。

五日　晴。
今日は裁縫を休んで小石川の姉樣の家へ行く。
丸髷が稍々ほつれて、秩父糸織の羽織を着た姉樣は薄日の當つてる縁側に、編物をして被居る。
一針毎に編みゆく絲の行衛は、刻一刻と靴下の形となつて、下へ下へと垂れる。五本の指が細く働いて、四本の鐵の編棒は、閃々と小さい電光を走らす。
『姉樣、こんな面倒な事を成さらずとも、買へば宜いぢやありませんか。』と私が云ふと。
『でも毎日義兄樣が穿いて被居るのに、買だのは直ぐ穴が明くのよ、手編の方が餘程得よ。』
姉樣は廿八歲だけあつて、損得を經驗から得て居る。
『いくら得だつて百圓と一圓程の損でもないでせうに、こんな面倒臭い思ひして厭だわね。』
『まあ、美いさんだつて世帶を持つて御覽。そんな氣樂な事は云て居られなくなるから。』

私が昔、敏さんに靴下を編んで上げた時、面倒だが自分が親んで編んだ、この手編には誠が籠つてますよと云て贈つたが、姉様のは、面倒臭いが手編の方があなた利得ですよ。と云て良人に穿かせるのだ。戀人と夫婦は是丈違ふのかと思ふ。

「姉様、今度の△△會には被入らなくつて、○○さんや○○さん方が澤山集まるんだから、乾度趣味がある會に違ひないわ。」

「會費が要るのでせう。」

「さうね三圓位かもしれないわ。」

「つまらないわ、三圓もあれば糸坊の着物が買へるわ。」

「オ、厭だ糸ちやんの着物と△△會と一緒にされちやお堪らないわ。そんなだから姉様の頭は漸々古くなるばかりよ。」

「まあ〳〵何日までもお前は若いことを云てるのね。」

と姉様は首も動かさず編物をして居る。

文明の世には機械といふ物が出來てゝ、こんな靴下など一時間に何ダースも造るといふのに、姉様は遲々と牛の歩みの手編の仕事で、文明に遲るゝ事を羞とせぬ。

「第一、小兒にばかり、着物を拵らへてやつて、姉様は自分のはちつとも造らないのね。女と生れてそれぢやつまらないぢやありませんか。」

「でも親ばかり奇麗にして子に汚ない姿をさせては、みつともないわ。」

「私、構はないと思ふわ。子は親よりも目下のものぢやありませんか。」

と私と姉様の談話は何處までも並行してゆくばかりで、結ばれぬ。

「なにお前だつてお嫁に行つて赤坊でも出來れば、殆で考が違つて終ふから、そんな事を云てる内が花なんだわ。」

「本當に花でせう、姉様なんかそして毎日編物して居て何か樂しみがあるの。」

「そりや、みいさんのやうに男の出る會へ出たり、お

化粧したりする、浮氣ぽい樂みはないが、もつと大きな口では言はれぬ樂しみがある。』

と姉様は洩す可からざる程の偉大な考を持つた口吻である。私は口で逆はないが、なに樂しみなんがあるものかお墓が待つてる計だと笑つて居る。



『そりやさうと、みいさん母様からお話がないこと。』

『なんの話？』

『お前さんの御嫁入りのことよ。』

『エ、！』

『何も驚く事はないわ、もう十九だもの私だつてお前の齢に決定つたのだもの、お前もその積で井上の伯母様が媒妁で小松といふ法學士とかで、もう大概話は定まつてる筈よ。』

『そりやひどひわ、私、嫁かないから。』

『ホ、、、何が酷いの、あんな立派な方、結構ちやありませんか。お前には過ぎ物だと私は思てる位よ。乾

度、美いさんの理想通よ。』
『でも、いやだわ。』
『それに、一雄さんが歸て來ればお嫁を娶るでせう。さうすればお前は鬼千匹の小姑になるのよ。それでも自宅に居たいこと、厭だなどゝ云はずに被入いよ。母樣だつていくら安心なさるか知れやしない。』
こんな事を聞かされて夕刻歸る。
あゝ、私も愈ゝ結婚しなければならぬのか、厭だ、厭だが時機を失して終つて老嬢で、男に捨てられた女の廢物となるのも厭だし、それぢや矢張り結婚するのか。あゝ齢さへ重ねなかつたらよかつたらうに、いつか路を歩行いてる内に面倒臭い關所にぶつゝかつて終た。
私の一足前には廿歳の齢が、結婚といふ穴を掘つて待つて居る。私がその中へ這入ると、もう高峰の櫻も、谷間の百合も見る事が出來なくなる。一寸でも穴より外の色の世界を覗いたり憧れたりするものなら、不義者だと云はれなければならぬ。家庭のクインとなるのぢやない、男の捕虜だ。家庭に葬られて終ふのぢやなからうか。
姉樣だつて、何が樂みがあるのだらう。女は愛が生命だと云ふ。眞く愛があつてこそ生きて樂しくもあるのである。それは姉樣だつて良人や子に愛があるといふかもしれぬが、如何だらう。新婚の當時ならいざ知らず、五年六年と古くなつて、時々夫婦喧嘩したり睨み合ふところなんか見ると、愛があるなどゝ大言は出來ぬ。さらば子供か、あゝ、子に對する愛の爲に、神樣は女に長い黑髮と、美しい肌を賜はつたのであらうか……。
要するに三々九度の盃を交す時に着る、あの白無垢は、今までの胸の情火を掻き消して、かういふ色のない灰のやうな生涯に入れといふ謎ではなからうか。詮するに結婚は戀愛の墳墓である。
あゝ秋は逝く、芙蓉は衰へる。私の妙齢の時期は一日一日に老いてゆく。いつかは結婚が來るのに、人にも憚らず書いた、この心の日記を、扨てどうせう。私

めて隠して持つて嫁がうか。然しもし良人に見られたら何と言はれよう。こんな多情な浮氣女かと蔑まれるに定まつて居る。戀人でないからには胸の扉の鍵は渡されぬものを。さらば反古としようか、灰としようか。

嗚呼、花は散つてもまた來ん春には枝に匂へども、私の青春は追ふてもまたと歸らぬを。たゞひとつ殘つたこの形見！を勿體なくて惜しまれて、如何して燒かれよう、破かれようか。

乙女心を棄てよとならば、島田も抛げよう、振袖も切らうが。あゝこの日記ばかり……は。



貧血病の治療法

但し病氣にあらず

家庭醫者

貧血の說明

貧血といふことを詳しく解釋すると、甚だ六かしくなるが、之を素人的に言へば、血液の全量が減少することになるし、醫師の方では、血液の全量が減少することも貧血なれど、それよりも寧ろ其の性質が變るを云ふ。殊に血液の主成分たる赤血球の減るのを指すのである。而して同じ貧血にも、其の原因に依り、其の種類が澤山あつて、甚だ重いのもあれば、甚だ輕いのもある。中には健體であるか病的であるかの分らぬのもある。

斯る人に至つては其の皮膚色が蒼白くて艶無く、可惜花の顏色も何と無く萎れて見え、筋肉は瘦せてゐて食慾も普通人程に進まず、唯何處と無く活氣乏しくて、仕事をしても、書物を見ても、疲勞し易く、時々頭痛に惱むことがあると云ふ位で、敢て床に就いて臥るでも無く、左程苦しい譯でも無く、唯不活潑に此世を送るのである。

これは男子よりも女子の方に多くあつて、殊に裁縫の師匠、女工、女學生、女教師などに多い。又一時的から言へば往々產後にもある。乃で其の原因を察するに女工の如きは榮養食物が不足するのであらうし、其他は坐居的なると、且つ精神を過勞せしむるとで大切なる赤血球が十分に製造せられぬからであらう。產後の一時的貧血は論せざるも了るでせう。（今爰に述べる貧血は健體病的何れか判らぬ位なのを指す）

貧血には如何なる食物が宜いか

一言に之を盡せば、貧血者には蛋白質に富める動物性の食物と、及び鐵分を含む食物が最も宜い。動物性の食物は血液製造の機轉を促し、新陳代謝を活潑ならしめ、從つて諸器の運營を盛んならしめ、赤血球の數を增し、以て血液の性狀を良くし、體重は殖え、身體

は強壮になり、精神が爽快活潑になるものである。
鐵は常に血液中の赤色素と結合して存するもので、血液と共に肺臓中を流るゝ間に、酸素を吸收し、之を身體中の諸組織に運び、其の酸化作用を媒介し、これが爲に皮膚の色は宜くなり、食慾も進み、消化力も强くなり、筋肉、心臟作用悉く活潑に、精神も亦爽快に赴くものである。

されば貧血者は是非共是等の食物を取らねばならぬ。併し動物性の食物が宜いからとて、猫や犬の肉乃至は蛙の肉でも可いかといふに、然うは行かぬ、然らば如何、それは次章に。

貧血者の飲食物としては、肉泥、肉茶、鰹節煎、鰹節越幾斯、麥羹汁、米羹汁、牡蠣スープ、半熟卵、白色魚の刺身、お茶碗、珈琲、麥酒、綠茶殊に菠薐草などが上等である。されど是丈申し上たのみでは其の名前が符牒的であると言はるゝかも知れぬ、されば其の製法を左に。

貧血者の飲食物の製法

△肉泥――の製法は牛肉の脂肪や腱（俗にスヂと云ふ）を取り除き俎の上に載せ、鉈を以て細に挫き、更に擂鉢に入れて能く擂り、其の粉末になつてから、篩を以て篩ひ、これに砂糖少許と味噌とを加へたもので、己れの嗜好に依つては、之へ更に芥子なり山椒なりを入れても差支無い。

△肉茶――の製法は牛肉二百五十匁を水三合の中に、二時間浸しておいて、之を更に文火にて三時間温め、終りに五分時間程强き火にて沸騰せしめたるもの。

△鰹節煎――は土佐節約三十匁を温湯壹升に入れ、三時間程煎じて之に醬油適宜を加へ、更に十分時間程煎じ、絹漉にしたるもの。料理屋蕎麥屋が客の舌鼓を鳴らさせるのは之を用ふるのだ。

△鰹節越幾斯――は右鰹節煎を漉さぬ中に、更に文火にて煎じ詰め、水分を殆んど蒸發せしめたるもので俗に之を田麩と名づく。

△麥羹汁――は大麥三十匁、細挫牛肉百二十匁、馬鈴薯八匁に食鹽適宜、胡椒少許を加へ、之を水八合に四五時間浸してから、武火にて沸騰せしめ、然る後絹漉しにした汁である。

△米羹汁――の製法は、最初に普通のスープを製してかゝらねばならぬ、スープの製法は鷄肉(牛肉でも宜い)を細かに挫き、之を罐に詰め、封をして湯の中に入れ、文火にて煎ずること三時間以上經つてから、更に武火にて煎ずること五分時間にして、罐を湯より出し、封を取れば、肉中より自然に出てゐる液體が即ち眞のスープである。乃で此のスープ三合と米飯一合とを五分時間乃至十分時間煮てから、之に又沸騰せしめたる牛乳一合を加へ、徐々と攪拌せ、然る後卵黄二個を投じ、又、攪拌せ、火より下して食鹽を適宜に加へて食するのである。甚だ手數ではあるが滋養の王と言つても可い。前の麥羹汁でも此の米羹汁でも食べたことの無い人に食べさせると、旨しいには旨しいですが、何を煮たものか、さつぱり了りませぬなど言ふに違ひ無い。

△牡蠣スープ――は右スープに、牡蠣と水、醤油各〻適宜を加へ、沸騰せしめたるもの。西洋料理には敢て珍らしからねど、スープの製法が斯の如く上等になつて居らぬ。

△半熟卵――は卵を沸騰せる湯の中に入れて、半熟にしたるもの。白色魚の刺身とは鯛鰈などの如く其の肉色の白きを薄く切りたるもの。

△お茶碗――とはこれも鯛、鰈、鱚などの白色肉を約百匁を細かに挫き、之を溫湯約三合に投じ、文火にて三時間以上煎じ、之に食鹽少許を加へ、絹漉にしたるもので、日本人の口にも誰にでも適する。料理屋のお茶碗も之と其の製法が粗同じけれど、料理屋のは千客萬來の食殘の肉なり骨なりを煮たので、其の秘密を發いたら、食ふ氣にはなれますまい。

△珈琲麥酒――は說明せずもがな。其他綠菜即ち菠薐草とか鶯菜とかの如きは、凡てサラダ的にして食ふ方が宜いのであるけれど、我國では人糞を肥料にするから、生では寄生蟲の恐れがある、されば煮る方が安心

です。

食物が何故に貧血を癒すか

肉泥は脂肪も腱も取り除いたる純粹の蛋白質で、蛋白質の貧血に効あることは前述の如くなれば、今更に説明するの必要なからん。

肉泥は溶解性の蛋白質で、其の消化吸收のし易きことは勿論である。

鰹節煎、鰹節越幾斯も亦殆んど肉茶、肉泥と同樣なるのみならず、其の味は日本人の口には能く適ひ、而も神經を鼓舞し、氣力を活潑ならしむる効がある。

麥糵汁は動植二物の混合物で、筋骨を肥し、血液を佳良ならしむる効を奏するは論ずるまでも無からう。

米糵汁は消化を進め、赤血球を增し、皮膚の色を佳良ならしめ、筋骨を太らす所の極上滋養品である。

牡蠣スープは非常に消化吸收し易いもので、啻に貧血を癒すのみならず、胃腸病者、老衰者にも一方ならぬ滋養品である。

刺身お茶碗は共に前述の肉泥肉茶に比す可きものであるが、我國の人には肉泥肉茶よりも淡泊とした味にえも言へぬ旨さがある。

半熟卵の貧血者に奏効ある譯は、啻に蛋白より成るばかりで無く、其の卵黄中に鐵を含んでゐるからである。

又綠菜殊に菠薐草も鐵分に饒かであるし、珈琲も亦尠からざる鐵分がある。

麥酒は幾分酒を嗜み、酒を飲めば精神が愉快になり、且つ食慾の進むといふ人が酒の代りに用ふると、麥酒中には越幾斯分を含んでゐて、爲に精神を爽快にし、且つ身體を太らしむる効益がある。されど過して害あることは言ふまでも無い。但し貧血者には右の如く列擧したる中の食物に限る譯では無い、唯茲には其の例を擧げたるまでだ。且つ貧血を癒さんには食物ばかりの注意で無く、日光、空氣、藥物等の療治も勿論必要であれど、食物が貧血の療治上に於て主眼なるものなることは間違ない事實である。

德用なる子供の正月着

（經濟と便利と美觀を備へたる）

お正月が近寄りましたから、奥様達は、お子供衆に何んな着物を着せたら好からう、何んな柄、色合が能く似合ふだらう、如何したら經濟で外見よき服裝が出來るだらう、などゝ御心配をなさるでせうが、それは實際洋服に限る樣で御座います、只今のところは、洋裝をおさせなさるのは、まづ中流以上の御家庭で、それより下のお方は餘程少ない樣でございます。と申すのは洋服は見た所大變格好が好いものですから、定めしお金がかゝる事と思召してからかも知れませぬが、それはお考へ違ひでございます。一寸お嬢様方をお誘れ遊ばしてお歩きになるのを見ますと、友禪縮緬か何かの立派な被布をお着せになりますが、あゝ云ふお召一枚の代價で、洋服ならば、帽子から外套、上衣、下着、靴など迄一切揃つて出來るのでございます。そして大人ならば兎も角ですが、お子供衆は服の寸尺が寛やかに出來て居りますから、其れを着たまゝで學校へ行かれようが、お家で活動遊ばさうが、少しも不便で無いどころではない、非常に便利でございます。つまり經濟で便利で見て格好がよいのですから、一度お召しになれば、もう和服を着る事は出來ません。そして子供の洋服は大人のとは違つて、さう立派な物を製るには及びません。私共のお花客樣で見ても、常に洋服をお用ゐになる御家庭に限つて、極く經濟的なあつさりとしたものを御撰みになりますが、それで十分美しく見えます。斯樣にして一度揃へて御拵へになるとすれば、其の次からは、上衣、胴着、袴と別々に時に應じて御造りになれば、何程もかゝるものではありません。それに泥が着いてもブラッシュで掃へば除れるし、手數のかゝらぬ點から見ても、矢張り洋服をお勸め致します。或は洋服は手數がかゝらぬ代りに、一年間しか用ゐられぬとか、一旦古くなつたら、石鹼拭にでもするより外もう用途が無いと仰有る方があるかも知れませんが、それは失禮乍らまだ御用ゐになつた經驗の無い方かと思ひます。子供服は大抵少し大き目に製つてあるから、まづ二年は其の儘で着られますし、其の上縫込や折返しを多くして置けば、どれ丈でも大きくなります。又一體に子供服は飾りの多いもので、いよ〳〵縫込が無いとなれば、其の飾りの方で遣繰しますし、そして古くなれば洗濯が利きますから、同じ服でも三四年間は確かに着られます。殊に、時節柄、洋服では寒いだらうと思召す方もありませうが、それは唯日本服を見慣れた目に寒さうに見える丈で、服にはグロースと申して寒氣を防ぐ毛織物の股引の、下着に附屬したものがありますから、和服よりは餘程暖かで御座います。尤も兩腕と兩脛は隨分薄着にしてあるけれども、之れは西洋の風習で、皮膚から成るべく空氣を入れて、子供の發育を助けるのださうで御座います。（神田鍛冶町中野屋洋服店員岩崎銀子談）



一日氣の休まらぬ妻の境遇

蒲生梅子

△火曜日──もう幼稚園から子供等が歸る時分と、思ふ間もなくチリン〳〵と門の音、やがて玄關の明くかと思ふと母あさま只今と、兄妹が同時に手をつく愛らしさ。『さあ御ほうび』と、紙に包みし風船あられ嬉しさうに頂く。こんなに音なしくかわいゝものを、昨日はなぜあんなに喧嘩をした時に叱つたのかと、子供ながら氣の毒で、かわいさうに思ふ。

モウ少しで出來上る縫物、一生懸命縫ふ内、四時をうつ。五時には夫の御歸りなれば、そこらあんまり取散してあつてはとかたづける。夕食の御馳走は何にしよう、あまり肉の續くのもいけないから、今日は御さしみの新らしいのにしようか、さうすれば母上も子供にもいゝから毎日の事とてほんとに、種がつきてしまふ。

キヤツと云ふ子供の泣聲、ビツクリして縁に出づればブランコの取りやりして妹がぶたれしとて。今母上が御だまし下さる處、ほんとにどうしてこんなに喧嘩をするのかしら、やつぱり御互ひにへだてなく仲が、いゝせいだらうと思ふ、其内漸く機嫌もなほりもう二人で樂しさうに遊んで居る、ほんに子供位ゐ罪の無い正直な者はないと思ふ。

夜になつて子供等もやすみ、母上も夫も御寢みに成りし故、まづ新聞でも讀まうかと思ふ内もう十時、下女は何をして居るだらうと、臺所に來て見れば、感心に縫ひものして居る、もう、やすんだらよからうと、そこらしまりなど見あるく。あゝもうこれでいゝと思ふと心がやす〳〵として、初めて我からだのやうな心もちがする。

△水曜日‖ふと目を明ければ四時半、まだあんまりまつくらゆゑ下女を起すも早からう、五時になつたらと、少しうと〳〵として、まあねすぎたと、時計を見ればもう六時、急ぎ着物をきかへる夫はもう目が覺めて、『ほんとにねばうだね、お前からそんなだから下女までもねばうする』と、いやみをおつしやる、あんなに子供が夜中に起るのを、知つてゐらつしやるのに、少しは察して下さりさうなものをと、云ひたいけれど口へんとうするのは、御きらいゆゑ默つて居る。

午後夫と同じクラスの方御出になる、何か御用事があるとの事、夫の歸宅を御待ちになるとの事、男の方の御相手なれぬ事とて、なんだかきまりがわるい、よく雜誌など御目にかくれど、ぢき話しがたえてだまつて居る、今のハイカラの方なれば御上手に御話しも出來るだらうけれども、私などは女の方に御相手するやうには、すら〳〵と御話しも出來ない、早く夫が歸つて來て下さればよいがと、心の内に思ふ、其内、『やあ御待たせ申した』と、夫の聲、やれうれしやと、ホツト息つく後を夫に讓つて引さがらうとすると、『おい、今に伊藤と、大山とが見えるからそのつもりで、例のお前の御じまんの、手料理を御馳走せい』、との御命令、はいかしこまりましたと、いつたものゝ、ほんとにいつでも御客樣にあんな事おつしやるから、人樣はどんなに上手かと、おぼし召すだらう、きまりがわるいたつてない。お氣の毒ながら、母上に子供を御願ひ申、下女と料理の仕度に取かゝる。

御客の御歸りは十二時過ぎ、後かたづけを下女に云ひつけて夫と子供の床をのべる。子供はどうしたらうと、母上の御部屋に行けば、最早子供は夢の中、枕元に母上はなにやら縫ひものをしてゐらつしやる。

『おかあ樣、子供等は、音なしう御座いましたかさぞ御勞れで御座いませう』と申上げれば、母上は、『皆わりに、音なしくねました、もう御客は御歸りかえ忙がしかつたでせう』と、御やさしい御言葉、ほんとにうれしいと思ふ。

『御寢み遊ばせ』と小さき子供をいだき、ふしどに來

て見れば夫はもうよく眠むつてゐらつしやる、ほんとに男はのん氣なもの。下女はまだ臺所で、がちや〱かたづける音、あれも嘸勞れたであらう、まだ日比谷公園を、見ないとの事なれば、明日は見せにやらう。

△木曜日――今朝から兄の方、例の小兒ぜんそく少しおこる早速醫者につれゆく、吸入せよとの事、いやがるをむりにさせる、幼稚園に行きたがるを、やう〱休ませる。

電報と一聲、ビックリして見れば、御國の夫の兄上より「ゴゴ一ジシンバシツク」とある、まあ御出京になるとは御手紙で承知していたけれども、こんな急に御出にならうとは思はなかつた、ともかくも母上に御目にかける、夫のお勤め先にも電話をかける、母上も一度はあまりの急なのに、ビックリなすつたけれども、御喜びの色が御顔に表はれる、時計を見ればもう十二時、一時間しか間がない、とても夫は間に合ず義理として私が御出迎ひに行かねばすまずと思ひ、母上に申上る一方ならず御よろこび、何卒さうしてくれとの御事、いそぎ仕度もそこ〱新橋へと行く。

はじめて御目にかゝる、兄上なんとなく氣のつまるやうな氣がする、兄上も大そう御喜びに成る、兄弟とて夫とどこか似て居らつしやる、しかし夫の方活溌のやうに思はる。

兄上は御先へ御歸し申上、後より荷物など手落なきやう調べ、さぞ母上と下女とにて御困りならんと急ぎ歸れば、思ひし如く下女がまご〱して居る處、さだめて正午の御食事はまだで居らつしやる事と、早速仕度をする、夫はもう御歸りになつて荷物など色々御世話して居らつしやる、なか〱よく細かい事まで、御氣が御つきになる。三人樂しさうな御話し聲、時々兄上の御國の御言葉下女がわからず、笑ひ出すを叱る。

子供が夜に成つて、ひどくせき出で、熱少し出る夫が時々心配さうに目がさめる、ほんとに不注意して居たやうですまないやうな氣がする。

考へれば妻と云ふ者は、ほんとに役の多いもの、御さんどんもすれば、子守もする、また奧樣然とすます

時もあれば、交際もする、裁縫もするまた會計にもなる、なか〳〵これは一家の總理大臣だと思ふ、たゞ學校に居る時分、私し等が試驗の心配して居るのを、先生が御覽になつて『皆さん方は、今一番樂しい氣樂な時代ですよ、將來に一家をもつて社會に出れば、なかなか人に云はれぬ心配がありますよ』とおつしやつた事を覺えて居るが今ほんとに、其言葉が眞であるとつくづく思ふた。

▲十千萬堂日錄

故紅葉山人遺著
左久良書房發行

これは小說の大家紅葉山人の日記なり。明治三十四年一月一日より筆を起し、同十二月まで全一年間の日錄にして同君が日常の有樣、交友間の出入、家庭に於ける生活の趣味等すべて其日々々に起りたる事柄を仔細に記述したるものなり。

凡そ日記といふものは尋常平凡の上にも却々面白味のあるものなるが、まして一代の文豪が、自家の日常生活を有のまゝに記したる事なれば、趣味の饒かなるは言ふまでもなく、この日記によりて此の文豪が日頃の交友間の情誼、門人に對する親切、小說執筆上の苦心、并に平素如何なる點に趣味を持ち如何なる點に嗜好のありしかを知るを得て、讀者は無限の興味を覺ゆ、殊に此年頃よりして重患の胃病稍く其徵候を示したれば、病敵と戰ひつゝ筆削に從事されたる樣など讀ひ浮べてそゞろに同情の感に堪へざるものあり、曩に出版されたる紅葉書翰抄と併せて見れば、以て紅葉山人の眞面目を窺ふべし、蓋し近頃の珍書　定價八十錢。

お歸りを待つ心もち

竹蘭

昨日電報で、今日お歸りなさるつて、山形からかけてよこしなされた。何だか曇つた日だ事。今日一番でお立との事だが、新莊からは車か汽船でなければならないし。どんなにつかれてお出なさるだらう。お風呂でもわかさせておこうと思つて、おひるから火を入れる樣に下女にいひつけて、お居間の掃除にかゝつた。此四五日ふかないで置いた。しつかりお掃除をして、一輪ざしにさす花を尋ねに花壇に行つて見ると、豆菊がまさかり。右手のすみの方に、なでしこが二本計。あまりいぢらしいから、之をさす事にした。庭口から入

つて茶の間の硝子戸棚からアルコールランプを出して一寸根をやいてさした。どこに置こうかしら、と考へて居ると、南むきの縁から疊の上に斜にパツと日がさした。マー嬉しい事。花は、三角棚の手鞠石の置物のわきにおく事にした。床の掛物は華山のかいた人物のにとりかへたが、置物は矢張今迄のまゝにして置かう秋だから俵がにあつて居る。誰の作だかわからないがしんちゆでこしらへた十俵の俵を三段につみ上げて、四疋の銀のねずみをそこゝにはなした樣が、よほど面白く出來て居る。

マア之でいゝと恍惚とながめて居ると、『奥樣　髮結さんがきました。』と下女がよぶ。『さう、では道具を出して下さい。』

といつて、出で行くと、お金さんが茶の間の火鉢のわきに坐わつて居た。私を見ると、『奥樣、今日は又疊つてきましたねえ。』

『しばらくでしたねえ、此間はどちらへかいらしつたの。』

『ハア、田舍の親類で婚禮がありまして參りましたものですから、遂御不沙汰致しました。』

『それはおめでたかつたのねえ。』

下女が運んでくれた鏡に向ふと、お金さんは例の白い前かけをして、後にと立ちて、

『マーお一人でお結ひなすつたの、お上手です事、束髮が大變お似合なさいますねえ、とくのが惜しい樣です、と鏡にうつる私の姿を見ていふ。やがて、くせのしをかけて、今日は何に致しませう ねえ、さうねえ丸まげにして下さい。』

いろ〳〵の話のうちに大形のまげが頭上にのせられた、束髮もお似合なさるけど、まげの方が、又一段と奥樣ぶりが上りました。といつものおせじをいふ。束髮にしてたのでびんはどうかと案じたが、ふつくりとでた。何だか今日はよくできたやうだ。有難うつてふりむくと、もうあたりはかたづけられた。

ぢき又あがりますからつてお金さんは歸る。まもなく奥樣、肴屋が參りましたと下女が云ふ。ではとつて

置きませうと、うら口へ行つて見ると、いつもの肴屋奥様今日は、今日は大變新しい所をもつて參りました小鯛に甘鯛、あらに、いなだ、鰯を少々ときかぬうちからべら／＼しやべる。さう今日は小鯛と甘鯛とあらを一つ貰ひませう、あらだけおろしていつて下さい、旦那樣はうしほ煮がおすきだから後までと早速鹽をかける。もうおひるになつたから、あとは御飯後にする事にした。又淋しい下女と二人のごはんをすませ、一寸女學世界の晩餐料理を見た、珍らしい物ばかりで何にしようかと心がまどふ。今日は鮭がないから小鯛のあん掛としよう。甘鯛をフライに、栗蒸もこしらへようと、目算をたてゝ、そろ／＼かゝり初めた。栗をむき、魚にかゝつたが、とげをさすやら、自分ながらをかしい程氣がいら／＼してる。餡をこしらへたが、何だかこど／＼してゐる。何とした事かとかきまはしたが、いくらかきまはしてもなほらない。とう／＼しくぢつてしまつた。時計が二ッうつ。旦那樣は三時頃にはお歸りなさるだらうに。

又かけ直す。こんどはよく出來た。フライはいつになくよく出來た。きつとおほめにあづかるだらう。小鯛もうでる。今ぢきにかへるぞとやうに時計がひゞく急にいそがしくなつた樣な心地がして、シチリンに栗むしをかけ、鹽をかけて置いたあらを程よくきり、鍋に入れ味醂をさして煮る計りにして火鉢のわきに置く汚れた道具を下女にかたづけさせて、お居間にいつて見たが、さつきの掃除したあとがあり／＼と見えて、實に氣もちよくきれいになつて居る。机によると、窓からでも入つてきたのか、赤くなつた木の葉が一つ、ふいた所にと思つたが却々きれいですてる心になれないから、旦那樣の俳句のたねにと其まゝにして置く。お風呂がわきましたと下女がくる。

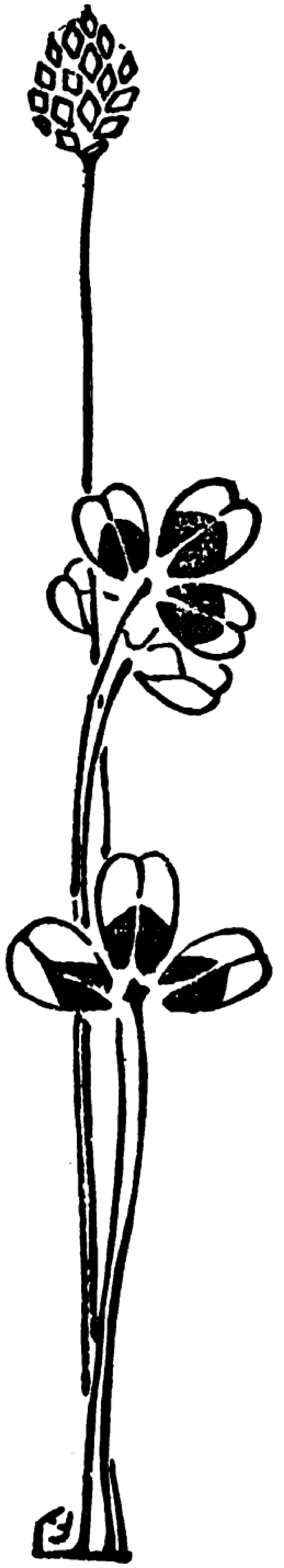
もう四時近くなつたのに、お歸りなさらない。あつちこつち見渡すと、三角棚の上にたてゝある新婚當時の寫眞が目についた。

三年前、生家の、兄樣が始終居なさる、あの六疊で、

俊ちやん、僕のところに時々遊びにくる岩屋を知つてるだらう、あれが非常にお前をのぞんで居る、お父樣とお母樣とにも話したらあの方ならよいが、俊の心はどうかといつて居らした、今年の春に大學が出來るし心はお前も知つての通り、といはれし時のはづかしさ。其年の夏、おとう樣お母樣と鹽原にいつた時、兄樣と旦那樣とが遊びにいらしつて、一緒に川端を散步し、嬉しい樣な、はづかしい樣な思ひをした事、結婚式をあげた時の事や、或華族樣から結婚を申込まれたが、俊さんの方がよかつたと、きいた時の嬉しかつた事、此春になくなられた母樣や、お友達からも、つとめなんかしなくつてもと、とめられたのを、何道樂半分にと却て田舍につとめする事になすつた時の事などがそれからそれと、走馬燈の樣に浮んでくる。指にひかつて居るエンゲージリングに、目がつく、と、車の音が玄關さきに、はつと我に歸つて夢中に走り出た。

十五日

昨日は一日曇つてたが、今日は此頃にないいゝお天氣。朝日がひか〳〵とてつて居る。お目ざめなさらない内にこしらへて置いた松茸の浸物と、八ッ頭芋のお汁、旦那樣とさし向ひで朝はんを頂いた。何だか御飯の進む事、自分でも驚く。お茶をのみながら夕べの話の殘りや、東京の友達の事などをきく。と、朝日のさして居る障子に、とんで行く鳥のかげが二羽ちらとうつた。





當世奥様の社交的態度

花子

▲外出際の來客

朝の八時半旦那様が社へ御出かけになると直奥様は御召替へ『時計やハンカチーフは私しが出すからおまへ車をいひつけてお呉れ』と鏡臺の前に再び坐られたお姿を見ると赤いてがらの爲でもあるか未だ花嫁さまの樣、お齡はもう廿七で五人のお子持とは見えぬ、私しが御部屋を出るとたん、ガラ〳〵と御玄關に車がとまる、御取次に出て見ると目白臺にお住ひの久我様の奥様、此四谷へ今頃お着になるのには御宅を餘程早く御出かけでなければならぬわけ、いつもながら御熱心な事だと思ふ『奥様は？』と訊かれて『はい只今あの……』御出かけの處ともいひ兼ねてよどんでゐると『まあ久我様お早い事、どうぞ御上り下さいな、いゝえかまいませんのですよ、昨日の御話しの寄附の事でね二三軒あるいて來ようかと思ひましてね、未だ早いのですからお上り下さいましさあどうぞ』奥様の御出迎ひで御一緒に御座敷へ通られる『よくまあこんなにお早くね』と家の奥様が仰有ると。

『これでもね最早一軒寄つて來ましたの』と久我様の奥様は御自慢らしい『左様ですかまあ本當にあなたはお働き遊ばすのね、私しは迚もかないませんわ』どう致しまして私しなど子供がありませんから何にも用はないのですものあなたこそおたいていではありませんわ旦那の事も遊ばしたり、御子様方も大勢ゐらつしやるし御家の事も何やかとお一人で御指圖あそばして其上社會の爲に御盡しあそばすのですもの、失禮ですが毎時でもね、瀧川さんの奥様こそ本當にえらいお方と皆でお噂して居ますのですよ』まあいやで御座います

事、思つてゐる半分も出來ないのですから本當に殘念で御座いますわ、お宅の旦那樣はもう御出かけ遊ばして？」「いゝえ夫は未だ居りましたのですが慈善の爲ならば早く行つたらよからうと申ますのでね」「お宅の旦那樣は本當にわかつた方ですわね宅でも社會の爲と云ふ事ならば私しの歸りが少々夜更けになりましても默つて子供を相手に遊んで居ますのですからまあ幾分かは働ける樣な物ですけれどね、それあの町田さんの旦那樣。奥樣が慈善會の接待員などで働いて居らつしやつても矢張御自分の御歸り頃に先へ歸つて待つてゐないと御機嫌が惡いと云ふのですからね、奥樣には充分な御働きが出來ませんわ、又あの奥樣が何事を措いても夕方になれば大急ぎで御歸りになつて旦那樣を待つてらつしやるのですよ」「さういふ方が本當の良妻なので御座いませう」「さうで御座いませうかね」私しがお茶をさし上げて立うとすると奥樣が障子の外まで御出になつて花や一寸と御呼びになる「はい」と手を支へると『車は如何なつてゐるの？』と小聲で仰有る『あの未だ申つけませんが如何致しませう」「矢張春やにでも行つて來てもらつてね待たして置いてお呉れ」「はい畏まりました」

▲慈善切符の賣つけ

次へ下つて臺處のお春さんに其事を頼むお茶菓子のカステイラを切つてゐると仲働のお初さんが女中部屋の横の上り口の板の間に腰かけた伊勢屋呉服店の番頭と切りに談判をしてゐる『その位買つて呉れてもいいだらう丸屋などお前さんの處から見るとチットも御用はありはしない、夫だのに三等を十五枚引受けて呉れたよ、だから奥樣も大變喜んでゐらつしやるのさ、斯樣な時に力を入れて呉れゝは夫が矢張あなたの處の得になるのだわ」「へい御尤で」「此度のお孃樣のお七歳の御祝だつてそつくりおまへさんの處へ頼うかなんて仰有つて御出の處なんだから猶更働いて呉れないぢやならないわ、度々の事ではなし此度はうちの奥樣が發起人でゐらつしやるから賣らないとお面にかゝはると

云ふ場合なんだからね』『へい御尤で』だからさ二等の五枚や十枚少しお華客へ賣つて呉れゝば何でもない事ぢやないか』『然し夫が何で御座いますよ、それに主人もその暫時留守になりますので頂戴致しましても拜見に出る事も出來ません樣なわけで、へい、一枚程ならば頂戴致して置ましても』『一枚ぢや餘り少いぢやないかおまへさん處の御主人が行かれなければ親類に廻したつていゝでせう、指圖する譯ぢやないけれど慈善會なんだから寄附するつもりで買つてもらひたいのよ』『へい成程御尤で夫では今一度主人に左樣申して見ませう何と申しますかわかりませんが』『成たけ買つて呉れる樣に話しゝて下さいな狂言も忠臣藏だから面白いわ、おまへさんも三等の二三枚如何?』『へい手前などはもうエへ、、、經濟界が大分その、へ、、へ、先御預けに致して置ませう今日は何ぞ御用は?』『今お客樣でね御覽になつて居らし



やれないから」

「左様で御座いますか、では又主人に申ましてさよなら」と風呂敷脊負つてそこそこに歸つて行く。『あすこの家なんか一等を引うけたつていいのだのに」と獨語いひながらお初さんは自分の行李のある戸棚をあけて御預りの入塲券の數をあらためる、私しは奥へ御茶菓子を持つて行く、『左様ですか夫はよう御座いましたのね、私し方は根つから捌けませんの未だ五十枚も殘つてゐるのですもの」とはうちの奥様『でもあなたなぞ御交際が御廣いのですもの賣るとなれば直ですわ、私しなぞは五十枚が三十枚でも容易な事ではありませんよ、『まあ久我様は本當に惡い方ですと逆な事を仰有るのですからね」奥くのお話しですよ夫は兎に角此方にも其日どりのがないとなると私し一度事務所まで行つて如何にか都合してもらはなければなりませんわ、あなた何方へお出かけ遊ばすの？』『麻布から三田の方へ



廻らうと思ひますの何しろ切符の事もありますし貧民學校の方もあゝいふ決議になつたのですから暫くはいそがしくて何も出來ませんわね』『本當に御察し致しますわ、では少しでも早い方がよござんすから一足御先へ參りませうどうせ方角がちがひますからね』『左樣で御座いますか夫では明日音樂會の方で御目にかゝりませう實に失禮致しました』久我樣の奥樣が御歸りになると、うちの奥樣も肩かけ引かけ待つて居た車に御乘りになる。『靜也と梅子は何處へ行つてるの？』『あの今朝ほどばあやさんが御一緒に御車へおのせ申して出ましたが何方で御座いますかつひゝゝ』『歸りは少し遲くなるからね氣をつけてお呉れよ』『畏りました』毎日の御出かけだからお車にも乘りなれて反身になつたお姿のよいのに韋駄天とか綽名のある三公のお供だから見るから爽快さうな、坂を下る時などはどんなだらうと想像しながら御座敷の後片づけして部屋へ來るとお初さんは御預りの大金を大事さうに風呂敷から出して勘定をとりに來た魚屋に拂つてゐる、責任の重い役だとつくづく思ふ、聞けば奥樣から御預りした總額は貳百五拾圓計りとの事、萬一紙幣の一枚でも讀み違ひしたならば如何申譯するだらうと氣の小さいものはお初さんの平氣でゐる大膽さに驚かれる、それよりも萬一預つてゐる人の心がふつと變つた時は奥樣は大變な御損、旦那樣にもゝゝ『お花さん一寸』とお初さんに呼ばれてあらぬ事考へてゐたので思はずパッと赤くなる、用事はお春さんがお芋買つたから來ておたべなさいと云ふ事だつた、坊ちやまとお孃樣が乳母車で歸つてお出になつた、何しろ五歳と二歳の稚どし、寄るとさわると御喧嘩ばかり、ばあやさんも大抵の事ではない、おひるも過ぎ午後の三時になると上の御子達が御三方學校から御歸りになる、これからが又大騷動、泣くやら、笑ふやら、唱歌を高くうたふやら、お廊下は鳴り響く、おきびしい御母樣の御留守といふ我儘のしはうだい。

▲夕方の來客

五時頃旦那樣が御歸りになつてすつと奥へ御入りになる、もう每日の事なので奥樣の事は御訊きにもならず『どうだね』と靜也樣のお頭をたゝいて『さあ〳〵みんな寄つて來たり、父樣が御みやげを買つて來たぞ』と仰有ると大きい坊ちやまもお孃樣も御急ぎで御出になる、一番下の梅子樣も同じ樣に旦那樣の御膝による、旦那樣はそれ〳〵御みやげをわけてあげて『あゝ腹が空いた、花すぐ飯にして呉れ』と仰有る

『はい、あの奥樣よりも御先へで御座いますか』と私しが伺ふと『あゝ先へたべちまうよ』と外の方をながめて、居らつしやる、御心のうちでは待つて御出になるに違ひないと御氣の毒に思ふ、私しが此方へ上つた時奥樣が御家附のお娘子で、旦那樣が御聟樣だと計り思つて居た、さうではないとお初さんから聞いて、奥樣は何と云ふ御幸福な方だらうと思つた、大急ぎで御飯のお仕度をして御膳を其處まで持つて來ると御玄關へ車が着く『御かへりつ』

『御歸り遊ばせ』とお初さんの聲、私しも急いで御出迎ひする、奥樣に續いて二人の男の方が御上りになる此間から貧民學校の事とかに就いて三四度見えられた御客樣。

『さあどうぞ御通り下さいまし、瀧川で御座いますかはあ、最早歸つて參つたさうで御座います、いゝえよろしいので御座いますよ、どうぞ此方で御一ぷく遊ばして私し一寸失禮致します』お初さんが御客樣を應接間へ御通しする間に奥樣は旦那樣の處へ御出になる、

『あなた只今、何時御歸りになつて？私今日は貧民學校の事でね、色々相談したり何かして最早くたびれて終ひましたの、御飯ですか、私しお午もたべないのでお腹が空いて仕方がありませんでしたからお壽司をたべましたの、もうよしませうよ、夫に未だ重要な相談がありますので、幹事が二人あちらへ來て待つて居りますの、ですから一寸話しをすませて歸して來ますわ、本當に此頃の樣にいそがしくては、あなたとも坊や達とも遊ぶ事も出來なくて詰りませんけれどもね、是も社會の爲ですから』奥樣は次の間に今およつた梅子樣の可愛らしい御寢顔を一寸のぞいて、頰ずりして又直に應接間へいらつしやる、旦那樣はお獨で御飯をめしあがる、私しが御給仕してゐると奥樣の華かな笑ひ聲が手に取る樣に聞えた。

簡易家政術

櫻井ちか子

ソース（掛け汁）

菓子にかける汁も、魚或は肉にかける汁も、甘のも、辛のも、みな掛け汁の總稱ですが、其內肉類と魚類等にかけるソース三種紹介いたします。

第一　ドローン、バタ、ソース

材料

バタ　一合入茶碗三分目
沸騰湯　一杯半
メリケン粉　大匙三杯
鹽　茶匙半杯
胡椒　少量

製法

バタ半分を溶かし、それに粉と鹽及び胡椒を加へ、それに少しづゝ沸騰湯を注ぎ込み、五分間煮て後殘りのバタを小片にして加へる。

DRAWN BUTTER SAUCE.

1/4 cup butter.
1 1/2 cups hot water.
3 tablespoons flour.
1/2 teaspoons salt.
1/8 teaspoon pepper.

Melt one-half the butter, add flour with seasonings, and pour on gradually hot water. Boil five minutes, and add remaining butter in small pieces.

第二　ブラオンソース

材料

バタ　大匙二杯
ソツプ　一合入の茶碗一杯
玉葱　半分を沸く切りたるもの
鹽　茶匙四分の一
メリケン粉　大匙三杯
胡椒　少量

製法

バタの中へ葱を入れ、茶褐色になるまで煮て後葱を取り去り、更にバタを攪きまぜながら煮、茶褐色になりたる時に鹽と胡椒と粉を入れ、其粉も亦茶褐色になりたる時を度として少しづゝソツプを加へる。

BROWN SAUCE.

2 tablespoons butter.
1 cup stock.
1/2 slice onion.
1/4 teaspoon salt.
3 tablespoons flour.
1/8 teaspoon pepper.

Cook onion in butter until slightly browned; remove onion and stir butter constantly until well browned; add flour mixed with seasonings, and brown the butter and flour; then add stock gradually.

第三　シン、ホワイトソース

材料

バタ　大匙二杯
熱き牛乳　一合
メリケン粉　大匙一杯半
鹽　茶匙四分の一
胡椒　少量

製法

鍋の中へバタを入れ、其バタが溶けて泡の立つまで攪き混ぜ、鹽と胡椒と粉を加へ、充分混和するまで混ぜたる後牛乳を少しづゝ入れ、又よく混和するまでぐろ〳〵攪きまぜ、それを更に滑かになり光澤の出るまで打つ樣にして混ぜる。

THIN WHITE SAUCE.

2 tablespoons butter.
1 cup scalded milk.
1 1/4 tablespoons flour.
1/4 teaspoon salt.
Few pepper.

Put butter in saucepan, stir until melted and bubbl-

ing; add flour mixed with seasonings, and stir until thoroughly blended. Pour on gradually the milk, adding about one-third at a time, stirring until well mixed, then beating until smooth and glossy.

フアネルケーク(鍋焼菓子)

材料
パン　乾きたるパンを水に浸して絞りたる物　一合入茶碗一杯
メリケン粉　一杯
焼粉　小匙山盛一杯
牛乳　大匙四杯
玉子　一個
砂糖　大匙一杯
塩　一撮み

製法
パンの乾きたるものを水に浸し、柔かになりたる後水に上げ、よく壓しつけて水を切り、其の一合入の茶碗山盛一杯の中へメリケン粉一合と焼粉小匙一杯とを篩ひこみ、玉子と牛乳を加へ、能く攪きまぜ別にフライパン或は鐵の焼板(キンツバ又は大福等を焼くに用ゆる板)の上にバタを溶し、其の上へ前記の材料を大匙にてすくひ載せ、適宜の大さに焼き、下皮の焼けたる頃裏返して又焼き、蜜又は砂糖をかけて食する。

(注意)其の混合物の柔さ加減は、匙で掬ひてボトボト垂れる位がよけれど、パンの絞り具合で少しは牛乳の加減があります、牛乳の代りに水で溶いても出來ます。

FANNEL CAKES.

1 cup soaked bread.
1 cup flour.
1 teaspoonful baking powder.
4 tablespoonfuls milk.
1 egg.
1 tablespoonful sugar.
1 pinch salt.

Put pieces of stale bread in a dish, pour some water over them, and let stand until soft. Press in a cullender to drain, and put in a bowl. Stir in the flour with the baking powder: add the egg, milk and salt.

Drop this mixture by spoonfuls on a griddle or a frying pan. When puffed, turn and cook other side until browned serve with syrup or sugar.

フキッシケーク

製法
馬鈴薯を洗ひ、皮をむき、二時間位水に浸し置き、後之を茹でゝ柔かになりたる時水を切り、よく蒸氣を立たせ、熱き内に馬鈴薯ツブシ、ポテトマシヤー、或はスリコギにて壓し潰し、後鹽鮭を焼き骨や皮を取りこまかにむしりて其中へ混ぜ込み、扨て之を玉子なりにむすび、その全く冷へたる後、フライ鍋にラード或はバタを溶き、キンツバが焼く様に兩面狐色に成るまで焼く。

(注意)ジヤガ芋と鮭との割合は、まづ馬鈴薯五合には鮭二片位なれど、鮭の鹽加減によりて違ひます。即ち鮭の鹽氣でジヤガ芋が丁度好い加減に成る程入れるのです。又は白の處へ赤みを添へて見榮よく又味も好いものです。熱き時食する方がよいのですが、冷へた後でもかまひません。之には三杯酢を添へて出し、適宜に掛けて食します。又此フヰッシケーク二三個位を小皿に盛り、菜の浸物を付け合せにすれば一寸一皿出來ます。之れは惣菜にもよく、又子供の間食などにも好う御座います。焼く時は、脂肪を一時に多く入れずに、追々少しづゝ加へる方が焼き易う御座います。

FISH CAKE.

Wash and pare potatoes, soak two hours in cold water. Boil until soft, drain and mash. Broil salt salmon and remove skin and bores; break it into flakes with chop sticks.

Mix the fish and the mashed potato and tnen shape in balls. When cool, fry in shallow fat until browned underneath; turn and cook on the other side.


水仙



衣裳展覽會

藤井瑞枝

二階は將にこれ、綺羅錦繡の花盛り、宛然百花爛漫眼も昡むばかり古代模様を織り出したる帶地もあれば、最新流行圖案を染め拔いたる長襦袢もある、紋御召もあれば、壁市樂もある、紅梅織もあれば、好貴織もある、何んだか、斯んだか、一々見盡しも出來ないのです。もしもこれが、御若い方であつたならば、一品を御覽になる毎に、頭腦中の大問題で御座いませうが、何がさて、浮世はなれし、木の片同様の身にとりましては、唯、上野や向島へ御花見に往つたと同じく、漫然美しいとおもつて見るばかり、決して其木を我庭へ咲かせたいなどいふ慾望は出ないのです。つまり繪にかいたおだんごでも見る様な氣持で、格別垂涎もたらさず、すつと横目で見て通つたばかり。さるほどに、久子さんが、外國へ御土産にする絽友禪の浴衣地が欲しいと被仰つたので、即ちその區劃の所へたどつて參つたのです、久子さんの御注文は、一寸まあ、粗筆の文人畫とでもいふ様な、氣品のある洒脫なものをとの事であつたのですが、それがなか〳〵ないのです。さすがに一流の店の事なれば、絽友禪といつても、五反や十反では御座いません、實際、おまけなしに百反以上も出して見せたのですが、一向、適當といふのが見當らないのです。やつと一反竹の模様の、極あつさりしたのがあつたかとおもへば、幹が疋田になつて居るといふので、御氣に召さず、瀧に紅葉でも在る様なのは如何でせうと、差出口をいへば、颯と擴ぐるおあつらへの一卷、あはれや、紅葉の色が濃厚に過ぐるとて、これも落選、とう〳〵、此所は不得要領に立ち去るの巳を得ざる次第となつたのです。然るに、私達が絽友禪を品評して居る間に、本野さんが、何所からか御自身用の夏帶を一本求めて居らしたのです、堅は、白無地の太節糸で、横には、一寸棕梠の毛の樣な茶色の糸が織り込んで在るのです、それが、如何にも、粹で、上品で、人柄で、代價はたつた〇圓△十錢―

「さすがに、外交官樣の御見立は、違つたものですね。」

と御賞め申せば、

「イナ、これは御母さんの御撰擇です、僕は、唯、贊成をした丈です。」

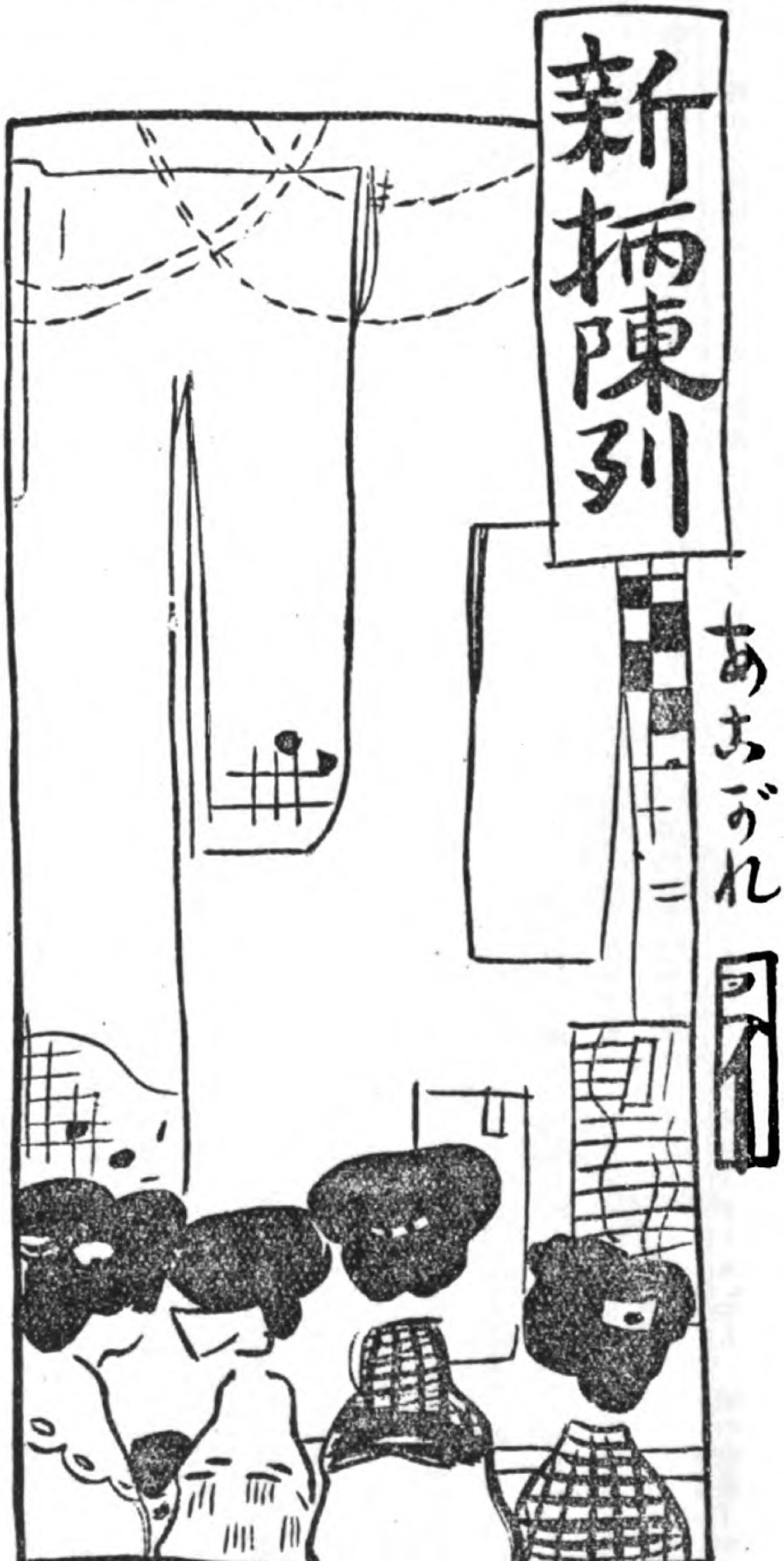
オヤ〳〵、不慣の者が、偶々、御世辭の矢を放つと、外るゝ事、大方此の如しです。

「併し、これは何んといふ織物でせう？」

と、つひ、後に立つて居る若い番頭さんに尋れますと、
「手前は存じませんが、どうぞ、あちらに居ります者に御聞き下さいませ。」
成る程、番頭さんの力も「デパートメント」になつて居るのだなと、領きながら、今度はわざ〱、あちらの番頭さんにきゝますと、
「松葉絹」ださうです、而して、此松葉絹の事をきかせてくれた番頭さんは、染色、地合、紋形、寸法、何んの事でも詳しい様子でしたが、大方、越後屋時代の、小僧から仕上げた人でゞもあるのでせう、尤も、此事はあとで紋附を注文する時に、氣付いたのですけれど……。
こゝで、ごた〱して居る間に、久子さんの御頭の上を、例の送金機の電線を傳つて、領取書が、ツウ〱〱と來て、向ふ側に居る番頭さんの頭上に、キチンと止つたのです、すると久子さんが、
「アヽ郵便!!」「郵便ぢやありません、金庫から受取が來たんですよ、さうら、よく御覧遊ばせ、蜘蛛の巣の様な電線を傳つて、お金と、受取が、彼方此方往復して居るではありませんか。」
「ほんとにさうね。」
「巴里には在りませんか、日本では、三越ばかりでなく、白木屋なんどにもあるさうですよ。」
「左様ですか。」
「巴里あたりにないとすると、これは何所から、流行して來たのでせう。」
「大方米國からでせう、彼地は電氣工事が非常に盛んださうですから……。」
「マア!!」
久子さんは、日本に送金機の在るのに驚かれ、私はまた、佛國に送金機のないといふのに驚いたのです。尤も最近に歸朝した人の話に依りますと、巴里にも、全く無い事はないさうですが、長く居らした久子さんが御存じない位だとすると、兎に角、巴里では、あんまり普通のものではないのでせう、まして況んや、露西亞なぞでせう。
それから、今度は、久子さんの夏の、御紋附が御入用との事で、
「地合は霞絽、色は錆深川」
と極つたのです。
扨、御紋附を注文して居る所へ、先刻捜しても無かつた、絽の浴衣地を持つて參りましたが、もうチヤンと、着物の様に仕立上つて居て、水面に墨繪の鯉が躍り上つて居るのが、如何にも、あつさりと、筆の勢も凡ならず出來て居るので、早速今度は、斯様の圖案にして、數枚御注文になつた様でした。
やがて、御母堂が、今の紋附に相應ふ様な、半襟も求めておかれればと被仰つたので、今度は、小物の在る所へゆき、久子さんと御母堂と二人で、あれや、これや、撰つて御出になる間に、私は、其隣の、帶止の在る所へ行つて、こゝへ來た紀念に、一ツおごつたのです、時代杉の箱に入れて在つて、表面には、新意匠あたりじめとして在るなどは一

寸氣が利いて居る樣ですが、中は私の事ですから、ほんの御粗末千萬なもの……。

かれこれして居る間に、日も追々傾いて來ましたので、本野さんが、今晩は〇〇伯爵家の晩餐會に往かればならぬから、買物には又來る事に仕樣と被仰つたので、惜しき二階の花園を見殘して、再び三階の竹林中へ戻つたのです。さて、二階の縱覽であんまり疲れましたから、大きな安樂椅子へ、御母堂が先づ腰をお卸しになる、續いて、久子さんも、私も、みんなで同じ椅子に、一緒にかけて、休息したのですが、此時、私は、先刻求めた帶止を取り出して、



「私も一ツ大ふんぱつで求めて參りましたよ。」

と、いつて、久子さんに御目にかけますと、

「まあ一寸おもひつきれ、何程？」

「あてゝ御覽遊ばせ。」

「〇十△錢位？」

「おまけ申しておきませう、オホホ……、たつた〇十錢！」

「まあお安い事。」

「どうせ、私の事ですから。」

「それに止め金には、阿方の御友達の、達磨さんが着いて居て、恰度よいのね。」

「達磨樣でも、お釋迦樣でも、銅ではどうも子……」

これを聞いて居らした御母堂が
「どれ〳〵私にも御見せ！」
「どうぞ御覧下さい。」
「成る程、止め金がよい、勿論組もよいが、このまた達磨さんの形狀がなか〳〵おもひつきです。」
イヤハヤ、安物の帶止が、とんだ評判になつたものです。
其内久子さんが、例の壁際に寄せて在る、鹿の皮の椅子に正札が下つて居るのを見つけて、
「ア、あれは賣物ですね。」
「左樣ですね、なあに、もしも札が附いて居らないでも、此部屋に在る外の物にしても、御所望みなら、みんな賣るのでせう。」
此時此際向ふで此話を聞いて居られた高柳さんが、
「これも賣物です―」
と、頗る滑稽な顔をなして、自分自身を指されたのは、時にとつてなかなかの御愛嬌‼　高柳(陶造)さんは、久しく米國へ往つて居られた方ださうですが、昨年以來、三越の通譯員になつて居られるとの事。
本野さんは、三越から歸途直に〇〇家へ御出にならうといふので、先刻御求めになつた、松葉織の帶を、締めて居らしつた、へこ帶と御取替になつたのですが、此際に、ガチヤンと卓子上にお置きになつたのは、御秘藏の御粗末な銀側時計、といふては、失禮に當るか知れませんが、何しろ、七十フラン(三十圓ばかり)といふ代物で、十數年前に御求めになつたのを、平氣で用ゐて居らつしやるのですから、まあ、現今の御身分に對して、御粗末と申上げて、格別御異存はあるまいとおもふのです、今日、午頃、御屋敷を出がけに、私は此時計を「外交官樣には不似合だ」といふて、しきりに不審がつて眺めて居りましたら、
「外交官だからといつて、必ずしも贅澤な物を用ゐねばならぬといふ事はありません、此時計は、なか〳〵狂はなくつてよい時計です…………尤も、通譯官でも入用な外交官樣は別ですが……」
と。一寸擦つたのを、意趣におもふて、敢えて、こんな素破拔をいふ譯ではありませんが、總てに於て、本野家の御家風が、質素な御流儀ですから、自然本野さんも、無頓着で居らつしやるでせう。嘗つて、駈け出しの外交官殿が、巴里で六十フランの杖を買つて、本野さんに叱られた事が在るさうですが、ステツキなども、本野さんのは、十フランかそこらの、極ざつとしたものださうです。隨つて、久子さんなども。「到底他の大國の外交官さんと張り合つても駄目ですから、まあ〳〵禮を缺さぬ丈でやつて居ります」などゝ、話して居らした、事も在つた樣におもひます。
其内、また〳〵「アイスクリーム」やら、他の御菓子やらが出ましたので、一同おなじ卓子に倚りましたが、私が、
「こゝでは、特別來賓でなくても、普通客でも、茶菓を喫べて休憩が出來るさうですから、いたづら者の書生連などは、休んだ上に、電話まで濫用する事が在る相ですよ。」

と云ひますと、本野さんが、

巴里でも「ルーブル」や「ボンマルシエー」あたりになると、店も常店よりは、數層廣大な組織になつて居て、其上へ、新聞雜誌縱覽室もあれば通信室も在りますから、途中で起つた俄の用事や、秘密の通信など、其所へ寄つて書く者もあるさうです。」



「秘密の通信？」とは妙な事が在るものだ。と私が小首を傾げて居りますと、本野さんがしきりに笑つて居らつしやるので、私も笑つて、その通信の追求は止めたのです。

御母堂は、

「併し、越後屋時代の薄暗い土藏造りに比ぶれば、實に〳〵魂消る程立派になつたものだ。」といふと、さも今昔の感に堪へぬ顔容で居らせられる、さても、人のおもひは樣々なれや。」

久子さんに、三越店に就いて大體の御感想を伺ひますと、「まあ圖案などに一番骨を折つて居る樣におもはれる。」との事でした。

私は又、竹の間の壁を再びよく〳〵眺めますと、どうも、下部の煤竹よ



上部の絹地に調和が缺けて居る樣におもはれまして、違和な氣持が致しました、もしもあの竹を、唯々、竪に羅列せずに、一網代にでも組んだらもう少し落ちつきが出は爲まいかと思ひましたが、これも、或は素人考へかも知れません。私が曾て見ました珍らしい壁の中では、子供の時に〇〇家の珊瑚樹壁(枝さんご)のすり込みの御茶席を拜見しましたのと、京都で螺鈿の壁を見ましたのと、それから、近來淺草今戸の某寺で、名左官、伊豆の長八の、鏝繪の四君子の壁を見たのですが、長八は、もう世に亡き人として已を得ぬとしても、その息子とか、弟子とかいふ者が、居るとの事ですから、螺鈿か、もしくは鏝細工を、暖爐の周圍あたりに應用する事は出來ないでせうか、どうも、暖爐の上部に茅葺屋根の模型では、どうやら、直に火が燃え移りさうな感じがせらるゝのです、店を出てから、吳服橋の所で、私は本野さんの馬車を降りそれから、電車に乘つて、小石川の寄寓所へ歸つた頃には、もう町には、燈火がちらほら見えて居りました。(完)

急速の場合に要する看護の智識

大關和子

△黴菌

一般の人々に解り易い樣に主要の看護法を説かうと思ひますが、其の順序として先づ黴菌の事に就て聊か申し上げて置きます。黴菌は肉眼を以て見る事の出來ぬ程至微至細なる動物又は植物性を有する生物で、此れが肉體に浸入するから多くの疾ひを引き起すのだと云ふ事で御座い升。故に看病するには全力を盡して此等の黴菌を體内に入れない樣につとめるのであり升。黴菌は唯消毒藥や沸騰せる湯の中には棲んで居りませんが、其他は何處にでも至る所に居り升。淸潔なる空氣中にさへ居ると申しますから、況して不潔なる空氣、臭氣ある所、殊に傳染病の病室なぞには最も多く棲息して居り升。そして之れは空氣、溫度、滋養の三つ揃つた處を好みます。それには人體は黴菌の棲息するのに最も適當な處で、機會さへあれば浸入しようとして居るのです。併し健康體に浸入する事は出來ませんから、外皮が破傷するか、又は内臓に障りあれかしと始終附けねらつて居ります。故に外皮を傷ける時は直ちに其傷口より侵入して、疼痛、發赤、腫脹、發熱、等を前驅として、遂には化膿いたし升。又内臓の弱き人は空氣中の黴菌を吸入し、又は食物によつて黴菌を胃中に送り、其弱き障りある部に侵蝕されて、種々の疾病を發します。例令ば傷が出來ても之れに適當の所置を施さずに捨てゝおけば、直ちに黴菌が侵入して、腫脹、發赤、疼痛、發熱して、遂には前申す樣に化膿致し升、之れをも打ち捨ておけば、病毒は遠慮なく血管に依つて體中の至る所に傳搬され、遂には死に至ります。

△流行病

流行病の病毒が食物、又は空氣中より胃腸に入つても、内臓の諸機關さへ健全であれば、如何なる黴菌も

侵蝕する事は出來ません。啻に侵蝕出來ぬのみならず。反つて消化されて仕舞ひます。それが胃腸が弱いと直ちに感受するのです。故に虎列剌、腸窒扶斯、赤痢等の流行期に於ては、第一に食物に注意し、消化不良の物や、腐敗し易き物、又は下痢を誘引する樣な食物は決して食べぬ樣に致さねばなりません。下痢が起るのに既に胃腸に加答兒を起して粘膜の一部分が患ふてゐるのですから、食物或は空氣中の黴菌を吸入すれば、直ちに其患體部に侵蝕して、種々の疾病を引き起します。

去れば常に充分食物に注意して決して黴菌の入らざる樣になし、生水は申すに及ばず、一度沸騰したものでも久しく時をすぎるか又は蓋を取りはずして置いた物などは決して食べない樣にせねばなりません。例之小兒に用ゆる牛乳の如きも、一度殺菌したからとて、呑み殘した物とか、又は蓋に穴か、隙があつて空氣の這入つた物などは決して食べさせてはなりません。魚の刺身、肉類等は空氣中の黴菌が其中に侵入して肉を食として棲息するから早く腐敗します。其腐敗したのを知らずに食べると下痢を起します。つまり下痢は黴菌が胃腸中に這入つて動作するから起るのです。併し人間の身體はこれに抵抗する丈の力を持つて居り升。吐瀉するのは即ち此の働きの一つであり升。故に自然に吐出する時は、尚ほ人工を加へてこれを完全させる樣に吐劑を與へますし、又瀉出する時は尚ほ之を全ふせしむる爲に下劑を與へ升。斯樣にして黴菌を驅除して後ち胃腸を丈夫にする所の藥を用ゐます。是より看護法中の救急法の大略を述べます。

人間は心臟、肺、腦神經、此三つが揃つて好く働いて居て初めて健康を保つて行き升が、若し此中の何れかゞ其働を休む時は忽ち假死におちいります。此狀態が永く継けば遂に眞死の不幸を來します。然れば此中の何れかゞ不完全になつた時は直ちに醫師の診察を乞はねばなりません。

△人事不省

人事不省の病人が出來た時は、其原因が酩酊か、打撲か、或は腦溢血にあるか、等をよく注意して見定め總て、衣帶の緊迫を緩め、頭部及上身を稍高くして安臥させ、頭部には冷罨法を施し、面部に冷水或は常醋を撒灌し、足脚部に芥子泥をはり、足蹠部、胸部に摩擦を行ひます。尙之れで醒覺せざる時は人工呼吸法を施します。醒覺の上は病室をやゝ暗くなして安靜を保たしめ、物音のたゝぬ樣に注意し、腦神經の刺戟を防いで安眠を促さねばなりません。そして若し兩便の排泄の惡い時は、灌腸又はカテーテル排尿を爲す事が肝腎です。

食物は流動性のものを良といたします。藥は主に興奮劑及び下劑を用ゐますから、怠たらず進めねばなりません。

△創傷

創傷した者がある時は、直に醫師を迎へにやり、應急の手當として傷所を改め、其の傷が面部、頭部、胸部、腹部、四肢等何れにあるも、出血なる時は止血法を行はねばなりません。面部頭部にある時は何にても有合せの布にて壓して繃帶を施して置きます。創傷が胸部腹部にある時は先づ衣帶の緊迫をゆるめ、同じく止血の方法を行はねばなりません。創所が四肢にある時は、動脈管出血ならば速に傷と心臓との間を固く壓し、靜脈出血ならば反對の方向を壓します。申すまでもなく血管は一つは心臓より全身組織に營養を與ふる鮮紅色の良血を有し、一つは全身より歸る暗紅色の廢血を有するものですから其方向を誤らぬ樣止血法を施すのです。

血液は血管を出づれば凝結する性を有つて居ます。故に少しの出血ならば局部を高くして安靜にして置けば自から閉止いたします。然し大動脈出血では安靜高位ぐらゐでは止りません。故に局部を壓迫し、或は本幹を壓閉致さねばなりません。假令ば腕關節上部の出血には肘を屈曲して固定し、上膊の出血には腋窩動脈を壓迫いたします。又下腿の出血は膝關節を屈曲し

て固定せしめ大腿の出血は股動脈を壓迫します。壓迫するには拇指を以て強く壓するのです。

△火　傷

身體に火が移つた時は蒲團を覆ひて火を消し、後ち衣を脱せて軟和製の油を塗り、外氣に觸れしめぬ樣に綿を覆ふて繃帶を施し、醫師に治療させます。外氣に觸るゝ時は非常なる痛みを感じます。

輕き火傷の時は石炭酸水又は鉛糖水を以て罨法を施し、又重傷なる時はザルチル散軟膏、又は沃度吻軟膏等を貼ります。

腐蝕藥によつて損傷を受けたる時は速に殘留する藥物の害を防がねばなりません。假令ば酸類によるものならば、白堊、木灰、石鹸、マクチシーム、等を撒布し、又は乳汁を注ぐが宜しう御座います。又亞兒加里性のものは稀醋を注ぎ、次で清水をもつて洗ふが宜しう御座います。熱物にて口中を火傷したる時は直ちに冷水を以て度々含嗽を致させます。

△凍傷及び凍瘡

凍傷に依つて倒れし者は、先づ冷室に入れ、雪の軟塊を以て覆ひ、又は雪水に浸せし布にて靜に摩擦を試み、知覺が回復したら雪に代るに冷水を以てし、自然の肌溫に復するに及んで極めて新鮮なる緩和性の油を塗ります。決して刺激性のものを用ゐてはなりません。

又凍死假死に陷りし者に直に人工呼吸を行ふ事は可けません。骨が凍て居りますから靜に冷室に入れて肌溫回復の後之を施さねばなりません。

凍瘡は霜やけと申しまして身體中特に寒氣に侵され易い指、趾、顏面、鼻端及び耳輪等に發して痒痛を感じます。其の治法は、鉛糖水罨法か、沃度丁幾或は樟腦精を塗るが宜しう御座います。

△中　毒

物に中毒した時は速にそれを吐出するが宜しう御座います。人間の體は自然に惡しき物は體内に置かずに

直ちに吐瀉しますが躊躇して居る塲合でありませんから、尙ほ人工を以てこれを助けねばなりません。夫には微温湯に油若くは牛酪を和して多量に服せしむるが宜しう御座います。私は常に微温湯に生卵をかきませて五合計り呑せますが、之れでも吐出いたします。

患者が咽喉や腹部が灼く樣に覺えて嘔心、嘔吐、下痢の甚しきのは砒石强酸類の中毒ですから、斯かる時には不敢ず緩和性の油石鹼水若くは砂糖水、蜂蜜等を水に和して用ゐるが宜しう御座います。

酸類の中毒と、亞兒加里性の中毒とは、治法が正反對で、双方相違ひに解毒薬となります。假令ば强酸類を呑んだ時に亞兒加里性の物を多量水に溶解して服用すれば無毒となります。即ち重炭酸曹達、那篤僧謨、炭酸痲偈涅失亞、石灰、石鹼、白堊水等が、よろしう御座います。之に反して强亞兒加里性の物を呑んだ時は酸類、假令ば、醋、枸櫞酸、其の他總て酸味あるものが宜しう御座います。

昇汞水の中毒は卵白を多量に飮せると、其の藥毒が卵白に結び付て瀉下いたします。

麻酔性中毒は、患者を醒覺させるため、濃厚なる黑色珈琲、或は茶と飮ませるか、又は濃厚なる珈琲を灌腸して、頭部冷罨法を施し、尙ほ芥子泥を胃部、及び腓腸部に貼ります。

菌の中毒は咽頭を刺戟して吐せるが宜しいけれども二時間以上經つ時は下劑を用ゐます。

△氣道異物

刺戟性の流動物が誤て氣道に入つた時は、直に微温湯を以て充分に含嗽して水蒸氣吸入をいたし升。

食物の小片、又は吐出物が氣管に入つた時は、通例咳嗽し、或は噴嚏る等して脫出するものですが、指頭或は羽毛を以て咽喉を攪擾し、嘔吐を起させて、異物を排泄する法もあります。

稜角形の固形物が氣道に入つたのは、實に危險ですから醫師の施術を受ける迄極めて安靜にし、咳嗽を忍びて、粘滑油性の飯料を與へ、頸部に微温罨法を施し

決して粗暴な事をしてはいけません●軟きもち、或はまんぢう等の爲に窒息したのは、單だ喉頭を閉したのですから、口を開けさせて異物を取てやります。

△氣毒吸入

氣毒にあたるのは酸素が全く缺乏してゐる所へ行くからです。即ち鑛坑、又は古井戸、酒窖、若くは燈瓦斯の充ちたる密室中に入ると、爲めに假死に陥る事があります。斯樣の際に其れを救はうとして、其處に入ると自分も同樣な容體に陥る恐れがありますから、注意致さねばなりません。其樣云ふ處へは入るには先づ火を點して其處へ出して見るのです。火が消えて仕舞ふのは酸素がつきたのですから這入てはなりません。故に古井戸であれば梯子をかけて火の燈れてゐる處まで入つて、何か方法でも考へて救ひ出すのです。坑穴でも其通り、氣毒中より救ひ出したる患者は空氣の流通良き處に移し、衣服を脱がせ、上身を裸呈し、人工呼吸法を施行するのです。其効を奏して天然の呼吸機振起する時は、直ちに嗅藥を以て醒覺を促し、旁ら胸部手足等を摩擦し、或は冷水を胸部及び心窩に劇射し羽毛を以て鼻中を攪擾し、患者の嚥下作用を起し、後ち冷水に葡萄酒、或は火酒等を加へて飲ませます。

△假死

溺沒者は水若くは泥が氣道中に這入つて窒息したのですから、患者を水中より救み出して、水及び、泥土を除き、次で人工呼吸法を行ひます。

即ち先づ中指に布片を纏ふて深く口中に入れ、泥土を拭ひ、それより氣道中の水を除去する爲に溺者の衣類を脱がせ、之を卷きて圓柱狀となし、患者の心窩に當て、俯臥せしめる時は氣道中の水は自から流出するものです。

△人工呼吸

之を行ふには先づ患者を裸體にし、床下に厚き毛布

か或は蒲團かを敷きて患者を仰向にさせ、且つ低き枕を以て頭部及び上方を稍々高くし、兩脚を並行して眞直に伸させ、患者の舌を少しく口外に牽出して舌の退縮を防ぎ、開口器の代りに何にても固き物を布にて包みて口にかませ置き、脊部に小さき枕を入れ、術者は患者の腰部を跨で坐し、兩手を肋骨の處に當て、徐々に壓し、肋骨を脊髄に近づかしめ、我身體を延して壓迫を止めて我呼吸に合せて呼吸を促し、胸部の自然の彈力に由て開張するに從つて大氣を肺中に流入いたします。これを數十分時間續くれば醒覺するのであります。我々女子の腕にては十分位しかつゞきませんから度々交代して行はねばなりません。





貯金管理所に於ける爲換事務競技會を見るの記

交叉された國旗がいかにも晴れやかに翻つて居る管理所の門を入つて、受付へ招待券を出すと、袴を着けた女の方が二階へと導かれる。婦人休憩室、來賓休憩所、競技者控室などゝ筆太く貼り出してある室の前を通りて廊下を行くと、つき當りが會場なのでした。入口の處で今しも退場する競技者の出拂ふのを待つて中に入ると、これから第六回の封緘競技が始まらうとするところ。順序書を見ると卅枚の封皮の證據書を納入し、糊封をなし封印を施さしむと說明がしてある。成程競技席の卓上には封皮と證據書とを一束にしたものが既に配布せられてあります。一番二番と順々に呼び入れられた競技撰手は大凡男女半々位の割合で卅六番まで着席し終ると會長は立つて競技に就いての注意を與へられる。一鈴で用意をし二鈴で競技を始める。出來上つたならば机の上の番號札を片手で高く擧げる、（競技者の前には各自三角尖塔形の席次票があつて、それと共に同じ番號の木札が置かれてある。）早くして完全に出來たものを優等とするといはれたが、間もなくリ、ーンと其の所謂第一鈴が鳴つた。競技者はまづ封皮の束を解いて證據書を大體二つ折にして置く。と第二鈴で愈ゝ競技が始まつたのです。左の手で封皮を支へてフーとふくらますと同時に右の手で證據書を一枚づゝそれにさし込む手際の巧妙さ、瞬く間に卅枚を入れ終ると直ちに封皮の口をうまい工合に揃へて糊をなすり付ける。それを一枚づゝ封緘し終つてトン／＼トンと封印をする。其の早いこと／＼見て居る目の廻るばかり、一分廿秒にして札はもう上り初めたのです

何うも女の方が手早いやうだと見て居ると、やがて發表せられた優等者は女が多い。流石に味方が勝つたやうな氣がして嬉しい。いつしか手に汗を握つてきばつて居つた私は、まづホッと息して思はず微笑んだのでした。

さてこの樣な鹽梅にそれから次ぎ次ぎと演せられた廿六回迄の各競技は何れも感嘆に値するものでありました。證據書獨算競技といふのは五位以下或は一數位二數位の金額を記入した證據書百枚を入算するものですが、其の左手で證據書を翻開し右手で算盤の珠を弄するの早さ、素人では其の一方を右手で專門にしたとて到底及ぶ處ではないと思はれました。まして讀上算に於ける算盤上の指頭の活躍に至つては眞に驚くべきものでありました。さては讀上三面算競技といふて算盤三面を用ゐ、一面に對して約十五口位合計四十五口位の金額を各盤面に配分讀み上げて入算せしめるなどの難しい競技もあつたが、それにも立派に合格者があるのです。人の手も熟練に依つては斯程まで巧みに動くものかと感心いたさゝるを得ませんでした。それにしても當日の競技に於て注目すべきは優勝者の女子に多かつた事であります。旣に頭の禿げかゝつたやうな人や



お髯を生した嚴しい男子が漸く十五六歳位かとも思はれる少女に負けて引き退る處などは一寸面白い圖でしたが、更に當日最も稱讃を博した暗算競技に於ける月桂冠もまた女子のものとなつたのです。この暗算競技の撰手は初め男子九人に女子三人の十二名であつたのが第一次の違算で八名退場し、殘つたのは女子と男子と二名づゝ、都合四人で第二次の競技は行はれた。そして結果は實に清水おみき子一厘の差なくして一等賞を受け、長崎孝子僅かに一錢の違で二等賞を授けられ、滿堂の觀者をして讃嘆の聲を禁じ得ざらしめたのです一體暗算は管理所の仕事にはないもので、いはゞ餘興とでも見るべきものだとの事。其の問題は特に新聞記者から提出したもので、奇數の最も不整なる三位以下の金額廿口と、四位以下のもの十口とでしが、其の讀み上げ方は呼吸をも繼かずといふ有樣で、讀上算に於ける速度にも劣らぬ程であつたに拘らず、一厘の違ひなくしてそれを當るといふに至つては實に驚くの外ありませぬ。當日來觀せられた心理學者の福來博士は心理的に研究して見たしとの思召で第二回目の暗算競技には自ら問題を提出して試みられたやうでしたが、果して如何なる心理作用の發見がありましたものか、實際これには心理的に何かゞあるのでせう。迚も一に二を足して幾らなど〻考へて居つて出來る話ではありません。この暗算競技の優勝者は二人とも至つて若く、打見た處まだ二十歳前と思はれる肩上も下さぬ妙齡の婦人ですが、清水おみき子といふ方はたゞに暗算に於て月桂冠を得たのみならず、なほ他の競技に於ても數回優等賞を受け、當日第一の選手を以て呼ばれました。計算的天才とでもいふものでせう。

兎に角當日の事務競技の結果は、計算的事務に於ける女子の技能の甚だ侮るべからざるものなることを事實の上に證明したものでありました。(婦人記者)

教育界より實業界に身を入れたる私の感想

廣瀬武子

△入店の當時

私の仕事は女店員の監督といふやうなもので、いろ〳〵品行上やその他の事を取り締る役なのですが、何が扨て入る前までは可成な意氣組みでゐましたものゝ、いよ〳〵その中に入つて見ると、却々思ふ樣にゆくものではありません。先づ第一に周圍の事情は全然ちがつてゐるし、見るもの、聞くもの皆不馴れな私には、只もう何うして可いやらその當時は途方に暮れてるやうな事もありました。

何んな事情？と云ふがものは御座いますまい。單に一個人の家庭としても皆それ〴〵に違つてゐるし、隣り合つた家庭でも、主人の職業に依つて各々異つた家風が作られて居りますのに、別社界から初めて入つた私が、妙な感じを抱いたのは無理ないとです。が、強ひてその事情を申上げるとなると、勢ひ他人に向つて家庭の秘事を打ち明けると同然なわけになりますから、これは格別に申上げないとしておいて……

△女店員の配置

只今のところ、店内に使つてゐる女子は、大凡の總勢で四十人位です。これを大分にすれば、

販賣部　二十名　　事務　二十名

の割ですが、販賣部の方は之を更に、「雜貨部」、「呉服部」の二つに分けます。これは皆階下の賣捌場にあつて、各自の受持と定まつた箱棚々々を取り締り、物品の整理をなし、又來客への應接をするのです。

それから事務の方は、二十名の女子を、「會計部」、「地方部」、「帳場」、「賄へ方」、「電話」、「それに休憩室の茶番」、とこの六箇處に配置してありますが、この他に小さなお子樣方を預かつてお守をする爲め、遊戯室には「保姆」の備へと、も一つ「裁縫部」といふものが御座いますが、注文の仕立物は、ずつと昔から出入の職人の方で仕立てさせますので、店の方のは只その仕立上りを檢閲して、惡い點のあるのを直すといふ丈けであります。

以上四十名の女店員が出勤時間は、毎朝七時半です。各自に受持ちの席に就くと、塵を拂ひ、物品の位置を正しなどして直ちに其の日の事務に取り掛ります。

執務中は決して他の店員と冗談をしたり、不謹愼な態度のないやうにと、これを第一の條件として取り締つて居ります。此の二つさへ確かに守れば、自ずとその業務が熱心に務まります。

かくて、一日の業務は午後五時に終るといふ規定で、店の方は五時になるとすつかり閉めてしまひますが、各店員はそれからその日に取り扱つた物品の整理をなし、塵を拂ひ、塵除けの布を掛けなどして、さて退

出の報を待つて後に初めて解散するのですから、どうしても六時頃になりませう。

休日は定まつてあるわけではなく、たゞ一ケ月に二日の休日權を與へて御座います。ですから、自分の都合上隨意に二日なり、或は半日宛四度休んで可いのですが、若し休みなく皆勤すれば、相當の賞與を與へるとになつて居ります。

△自分の方針

此等店員を養成する私の方針――などゝ云ふと一寸仰山に聞えますけれど、私にはこれに就いて大した理屈とか、主義などをお話しする程の事は御座いません。たゞせめて私がこの道に携はつて今後力ある女子を出す事が出來ましたなら、それで滿足なのです。然し、それとても一圖に何うする、といふわけに行くものでもなし、また一息に理屈を注ぎ込んでも効果のあるものでもありませんから、只今の處では先づ、業務に熱心に、その職に忠實ならん事を第一とし、それにはまた精神の修養が必用で御座いますから、私は「心を淸く正しくし、行ひを愼しみ、何事にも溫順に、靜淑に」と常々申してゐるのです。只これだけのとで平凡な古い事のやうですけれど、併し婦人に取つては何日になつても新らしい敎訓です。實業界と云へば、何事にも目覺ましく立働かればならぬやうに思ふ方があるかも知れませんが、女子特有のやさしい柔しい性質を失つて了つては、何の有難たい事がありませう。淸い、やさしい心がなければ來客に對しての親切も薄くなり、勢ひ失禮な行爲をする場合があります。

店員養成の極く初歩として、私は常々右の心懸けでゐるのです。そしてこの點は割合に成績よくいつて居りますが、皆年若い人達ですから相應に心遣ひは御座います。それに學校などの敎育ですと、一定の規則に當てはめてすることですから割合に樂ですが、此處では皆それ〴〵異つた學校に異つた敎育を受けた者の集まりですから、統一などは却々の困難です。けれども又自分の育てた子供にしても、同じ性質にするわけには行かないのですから、それだと思へば致し方はありません。で、何事も自分の家庭でわが子を敎育するといふやうな氣になつてゐるので御座います。又思へば、學校などで敎へると異つて、旣に社會に立つて着々効果も見えて來るわけなのですから、苦心の多いだけそれだけ、また樂しみでもあります。

△小僧からの積り

何分まだ入つてから日の淺いことではあり、經驗だとか、苦心だとか取り立てゝ申上げる程の事は御座いません。女店員の成績なども、果して何んな學校出の者が最も結果が好いとかいふ樣な事も申されませんのみならず、私が入つた當時と只今とでは結婚や何かの事情で辭職して殆んど半分以上も人が變つた樣な次第ですから、總て新らしく入つた人でも充分に養成し自分も小僧の樣な積りで力めたいと思つてゐます。

衛生問答

娘の頬は何故赤きか及療法

問　私は皮膚の白い方でありますが頰の兩方のみは燃ゆるが如くに赤く候、何故に斯く赤きか及び之を如何にせば褪色せしむることが出來ませうか。

答　顔面は血管に富んでる所であるから、他部分よりは紅色を呈するもので、而も妙齢の人は盛んに血液の殖える所より、殊に赤くなるは生理の然らしむることである。去りながら人並はづれて赤きは、多血なるにも拘らず血液の循環が悪くて、上部に血液の滞るからである。故に之を下部に導かせるやうにせればならぬ。然うするには（一）從來よりも運動を盛んにすること。（二）便通に注意し、便秘せぬやうにすること。（三）精神を齷齪させずに、悠々迫らざるの態度で暮す可き事。（四）月經にも注意し不順なる時は醫療を受く可き事。（五）毎々申すことながら臨臥の服瀉を爲さる可き事。この五ヶ條を守られたら頰の色が褪めるばかりで無く、健康にもなられませう。

肺病を未發に防がれるか

問　私は肺病の素因を受け居り父も三月に本病にて死去致し候、其節看護は殆んど私が致しました事に候へば、今の處健康に候へども、行末案じられ候、何卒未發に防がれる方法も有らば御教示下され。

答（一）深呼吸を一日に數回施行ふ事。即ち普通の呼吸では肺臟の空氣を十分に新陳代謝せしむることが出來ぬ、然るに身を反らし或は屈めて深呼吸すれば、肺臟の空氣を大いに清潔にすることが出來る。（二）滋養食物殊に脂分を含める食物を多く取つて、酸素を吸收するやうにする事。（三）精神を爽快にする事。鬱々日を送るが如きは肺病の原因を作るやうなものだ。（四）餘り冷たき空氣を呼吸せぬやうにする事。（五）常に鼻呼吸するやうにする事。（六）日光に觸れるやうにする事。

頭が痒くて髪が抜ける

問　母五十五歳は頭痛に惱み候揚句に、頭部が痒くなり、櫛などにて掻きますと、皮が剝け、從つて髪毛も次第に薄くなり結髪も出來ぬやうに相成候。相當の齡に候へば髪飾は何うでも宜いとは云ふやうなものゝ、何とか治療法あらば御敎へ下され度。

答　加里石鹸を塗けて、度々洗ひ、洗ひたる都度阿列布油を毛根に塗けておけば治る。然らざれば5%の食鹽水に布片を浸し、之を以て頭皮を摩擦するも可なり。

産後の月經

問　廿九歳にて八ヶ月の早産をなし、嬰兒は死去致し候處産後の肥立は甚だ良好にて候が、産後二ヶ月にて月經を見るやうに相成候打捨ておきて、差支無之候や。「下文略」

答　乳汁を與へざれば月經を見るやうになるは生理の然らしむる所、更に憂ふるに足らず。然れども「下文略」の御問は一應産科醫の診察を受けられたし。

腹の大なるは何の爲か　問　私事何の病氣も無けれど、特別に腹部が大きくて、恰も角力取の如くに候。これは何故に斯く大きいのでせうか、及び小さくする方法を教へ下され。

答　姙娠腹、水病で無くて、腹部の特別に大きいのは脂肪沈着であるか、或は幼少の折から植物性の食物を多く取られたる爲かでせう、前者ならば大いに運動して痩せる樣にするが宜く、後者ならば動物性の食物を從來よりも多く取り、植物性の食物を從來よりも減すこと肝要である。

運動すると姿が惡くならぬか　問　先生は毎度本誌で運動せよと御勸めになりますが、成程運動は身體を健康にしませうが、それが爲め筋骨が瘤々に發達し、優しき姿が取れはせぬかと心配致し候如何なるものに候や。

答　決して筋骨が瘤々となるやうなことは有りませぬ。女は如何に身體が健康になつたからとて、本來の圓滿なる風は失ひませぬ、却つて肉締り丈が眞直になつて、優美な風になるばかりで無く、精神も亦高尙になるものである。

姙娠疹の療法　問　長女を姙娠し、且つ分娩したる時は、別に異常なかりしも、次女を姙娠したれば顏に薄黒きしみ生じ、分娩後も未だ取れ申さずこの療法を教へ下さい。

答　炭酸加里　五・〇　硼砂　一〇・〇　僞里設林　二〇・〇　水　三〇〇・〇

右混和して一日數回塗布。

安知必林疹の療法　問　昨年熱病に罹り、安知必林を服用致し、其後も折々用ゐ候處、身體の處々に斑點生じ、外藥用も塗け申候が癒えず、如何にせば除かれるものに候や。

答　アルマトール　〇・五　亞鉛華　五・〇　澱粉　一五・〇

右混和して布片にて包み、之を以て一日に數回疹部をたゝく可し。

なまづと癩病　問　なまづは癩病の素因あるものに生ずとやら、果して然るや。

答　決して然らず。

異樣の發汗に就いて　問　私は、常でも人並より發汗の多い方でありますが、殊に敬ふ可き人の前とか或は式場などに出ると、腋の下などに非常に多く發汗し、之を純白なる手巾にて拭ひ取ると、黃色を呈し、且つ臭氣があります。之は何病でせうか、及び其の療法を御教示下され。

答　矢張俗に言ふ腋臭でせう。されば、

撒里矢爾酸　一・五　澱粉　五・〇　滑石　四五・〇

右布片に包み之を以て腋の下を一日に七八回もたゝく（畫問）

ナフトール　一〇・〇　酒精　一五〇・〇

右は夜になつてから二三回も塗布。

右の方法を責ては半年も續けて試みそれで効が無かつたら又教へて上げませう。



明治母の會にて私の感じたる事ども

◎夫人の熱心に感激す

木下泰子

私共數人の婦人が相謀りまして明治母の會を設立いたしましたのは、今から六年前で御座います。日本人の癖でありまして始めは一同熱心に盡力もし出席もいたしましたが、月日を重ぬるに從つて其等の人々は漸く疎遠になつて參りました。それならば會は無益な會合であるかと云ふに、決して左様ではない、一同の心の内に母の會は、嬉しい會である、有益な集會であるとは思つて居るのでありますけれど、つまり熱し易く冷め易い私共の惡習で御座いませう。つひ忙しいの、用事があるのと口實を設けまして、一寸逃れに其責任を逃れてなります、私なども確に其一人で御座います。

私がこの會へ出席いたす毎に、一つの尊き光が自分を襲うつて、我身の腑甲斐なさを責める樣な氣がいたします。私は其がために絕えず勵まされ慰められ、日常の生活にも非常なる勇氣を與へられて居ります其光とは他でもありません、コーツ夫人の始終變らざる熱心と忠實で御座います。

明治母の會は宗教を離れ、位置とか職業とか云ふ束縛から脱して、婦人のため、家庭のため重要なる修養を積みたいと云ふのが目的で御座います。されば私共日本婦人は全身の力を盡して、其責任に當らなければならないのであります。料理會でも、洋服裁縫でも、幼稚園でも、英語會でも、皆殆んどコーツ夫人の盡力に依つて成立しました次第で、夫人はこれが爲めに絕えず、時間と金錢とを犧牲として、喜んで働いて居られます。それではこの夫人は家に格別係累のない方かといふに決してさうではありません、夫人は當年十三歲の男兒を頭に六人の子供を有てるお母樣です。僅かに二人の雇人を置かるゝ丈け其ばかりでも隨分忙しからうと思はれますのに、每朝九時から十二時迄、お子樣に普通學をお授けなさいます。私共お恥しい譯ですが學校から歸つて來た子供に、充分復習してやる事が出來ない樣な次第で、自分の手許で其子の性質、趣味、生理上の關係等を能く考へながら、其子に適する敎育をしたならばと思はないではありませんが、其を遂行する事はとても出來ません、然るを夫人は容易に其をなして居らるゝのみならず午後には會員の子供の爲めに英語を敎へて下さるので、五十人以上の腕白者がお宅へ押懸けて行くので御座います、大抵の者ならば之だけにさへ耐ゆる事が出來ません、然るに尙ほ日本婦人のため、會員の爲めに絕えず盡力して居らるゝ私共が忙しいなどゝ申ますのは全く横着の次第で御座います、若し食堂、應接間は勿論物置の隅まで、整然として秩序あるお住居のさまや、淸楚として愛らしきお子樣の御樣子、御夫婦仲の睦しいとこ

ろなど拜見しますと、能はずと云ふ字は愚者の辭書にありと云はれたナポレオンの言葉を思ひ出さずには居られません。

◎母の施す催眠術

内山豊子

四五年前山口三之助氏が催眠術に付いて講演せられました時に、毎夜母たるものが將に眠りに入らむとする子供の枕頭に坐つて、己が希望を語つたならば、子供は必ず其言の如く自由に變化するに至ると云ふお話をなさいましたが、この時私はこれは催眠術を說く人の、我田引水ではないかと云ふ感じがしました、けれども此頃或學者の說に人間の知覺は醒めて居る時に五プレセント働き、眠つて居る間に九十五プレセント働くと云ふことがありました、又他の雜誌にも人は心身共に睡眠中の作用に於て著しく變化すると云ふ、同樣な記事が出て居りました、それに依て考へますと山口氏のお談は歐米に於て行はれて居る最新說であつたらうと云ふお談を、ゴーツ夫人から承ました時私は今更ながらこのお談の興味ある事を思ひまして、早速友人に談しますと、その方も非常に感心された樣子で御座いましたが、一月ばかりして、その方が、突然「貴女は春子のために救ひの神樣だ」と仰有るのでございます、藪から棒の樣なお談で私には何の事だか、さつぱり解りませんから怪んで尋ねますと「實はいつぞやのお談しに感動しましたので、毎晩春子が眠らうといたしますと、彼娘の耳に口を寄せて、恥しい惡い癖を矯める樣にとはなしをいたしました、勿論これは死人に物をいふ樣なわけで何の感念もないやうですけれど、毎晩幾夜繰り返して居ります内に、不思議にも段々と其が直りまして一ヶ月ばかり經つ内に全くなくなつて仕舞ひました、此迄數年間夫婦とも〳〵頭を痛めていろいろと有名なる醫師の治療をも受け、絶えず藥をも呑ませて居りましたが、更らに其效が見えませんでしたのに、僅々一ヶ月間に謎の解けた樣に、全治致しました、全く以て夢の樣でございますと淚を流して喜ばれました、病氣と申すのは外でもない、寢小便と云ふ惡癖でございます、今年九歳になる可愛らしいお孃さんが毎夜床を海のやうになさると云ふのですから、兩親は勿論當人も非常に困つて居られたのでせう、其が全治せられたので其喜びは譬やうもありません、若し世間のお母さん達が其子の惡習を矯正しようとお思ひでしたなら、徒らにこの稚氣ある心を捕へて訓め罰するよりは、無邪氣なる愛らしい寢顏を眺めながら是に善を獎勵した方が却て良結果を得るかも知れません。

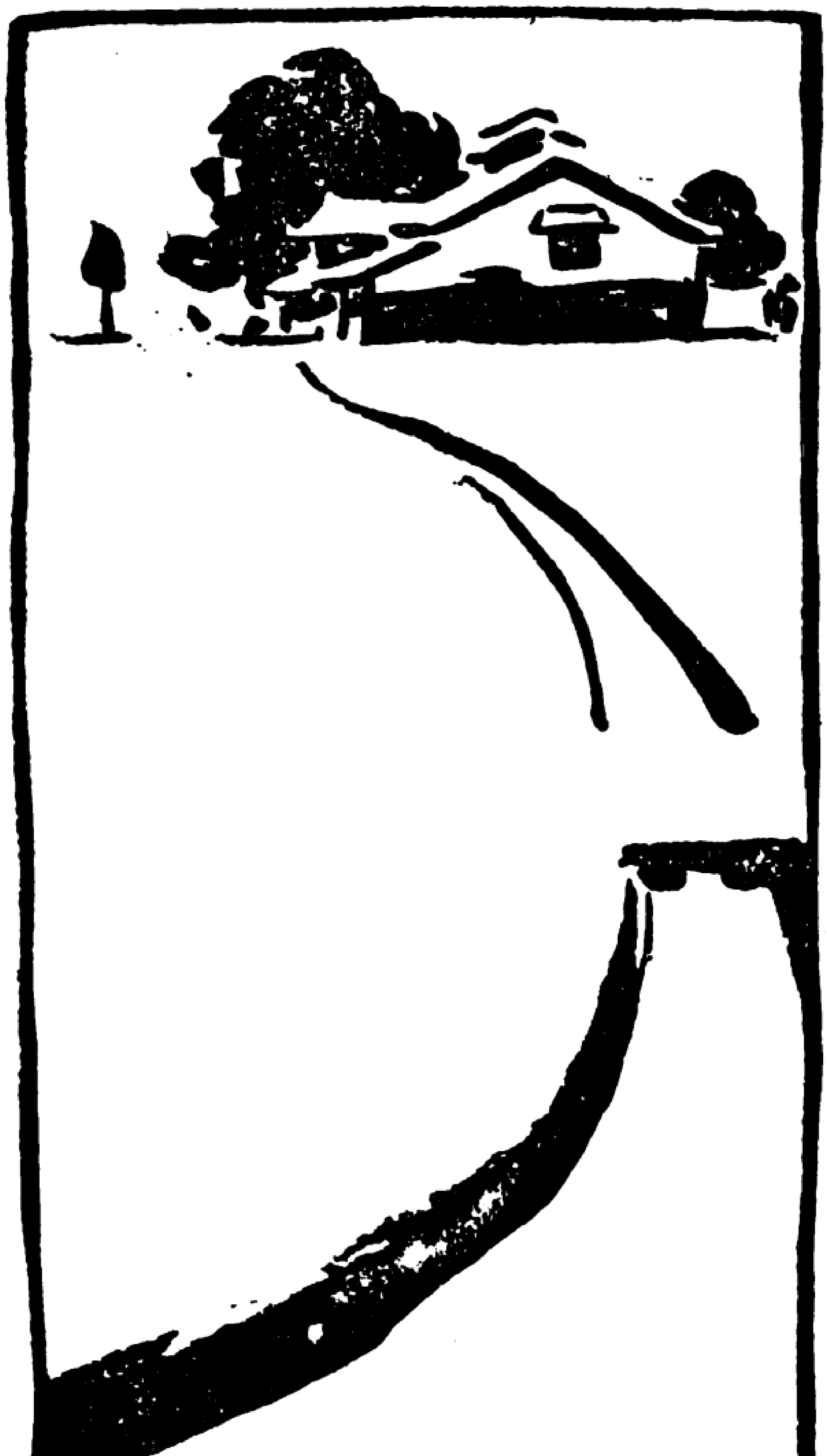
◎便利なる小兒服

高橋母登子

私が母の會へ參りまして一番羨ましく思ひましたのは、西洋人のお子供の洋服で御座います、日本服の袖や裾の長く不自由なのに引換へ洋服の輕くキチリとして、身のこなしの自由なのを見ますると、彼腕着物を着せましたなら、體も心も健全になるだらうと思はれました、そこ

でコーツ夫人が洋服の誂習をさるゝといふ事で、早速參つて三ヶ月間稽古を致しましたら、曲りなりにもどうにか一通りの物が縫へる樣になりました、そこで大英斷をいたして子供等の衣服を一切洋服と云ふことにして、日本服はなるべく着せないと云ふことにしたのです。ところが初めは精神上生理上衛生上にのみ着眼して衣服の改良を計つたのですが、圖らずも意外の點に思はぬ利益を發見しましたので、一擧兩得どころか三得も四得も効能のある結果を得たのを喜んで居ります。

先づ經濟上から申しても洋服は非常に利益があります、西洋人はさすが考へたもので、小兒の衣服には決して洗濯のきかない、色の褪め易いものなどは用ゐないさうです、日本の子供服には友禪とか模樣つきとか、兎角色のあせやすいものを用ふるのですが、西洋人は是を嫌ひます、其れのみならず、華美を競ふ家庭の外、絹類を用ゐないさうです。これは申までもなく子供等が衣服のために束縛せられて、自由に活動することが出來ないと云ふ恐れがあるからです、時々私は幼稚な女の子に振袖に立やの字の厚板帶や、大な花簪に高いポックリの下駄などを穿いて身動きも出來ない樣な恰形をさせて、喜んで居らるゝ親御樣を見て、さう思ひます、あれでは生きた衣紋掛れみた樣なもので、人間が衣服を着たのか、衣服が人間を着ふて居るのかわからない、左樣な次第で服地は決して高價のものを用ゐません、其で堅牢な染色を撰ぶのですから容易に破れたり變色したりすることがない、其を日本服の晴着を一と重ね拵へる價で洋服ならば幾枚もつくることが出來ます、其に綿を入れたり下着を重ねたり、爲しませんから縫ふのも簡單で、洗濯も容易にすることが出來るのです、私は子供に洋服を着せまして以來、時間の上にも金錢の上にも餘程の利益を得たやうでございます。



◎老人の啓發

アグチス、コーツ

いつぞや母の會の席上に於て高崎平四郎氏のお話をうかゞいました時、成程と感心した事が御座います。

日本の今日の狀態は新舊思想の混沌時代で、新教育を受けた若い人も永年の習慣と風習に抵抗して、俄にこれを打破する事は出來ない、其故新思想を抱いた婦人も、嫁しては其を實行するの餘地がなくて、空しく迷信的なる老人の言葉に從はればならぬやうな次第、特に出産の際、育兒法等に於て斯樣なる例を澤山見るのは困つた次第である、されば老人は絶えず嫁に向つて物足らぬ樣な感情を抱き、嫁はまた心中安からざる思に驅られて、一家が何となく樂しからぬ、狀態に陷ることがあります、かゝる塲合に於て大抵の人々は互に忍耐すべしと教ふるのでありますが、忍耐といふものは決して心からの滿足を買ふ事ではありません、若し是等の老婦人に向つて、新思想を與へたなら、一家は忽ち春風の如く、互の感情を融和せしむる事が出來ます。されば母の會は母たらんとする婦人、母となりつゝある婦人に必用なる會合であるのみならず、既に永年母として其の務を終へた老婦人にも最も必要なる會であると云ふのが大意でありました。

私は日本の老婦人方が斯樣な修養をなさつたならば精神上、肉體上非常なる益を得らるゝであらうと思ひますけれど、日本の習慣で御座いませうか、御老人の方で斯樣な會へお臨みなる方は至つて尠うございます、毎年母の會で催ほす家族招請會は、御老人は勿論、良人なり、妹方なりお招きして家庭の趣味を一層深く味つていたゞきたい、老婆心より出た催で御座います。

次に又この會で木下博士の仰せられた事がございます、婦人の職業の増加するに從て、次第に女中の缺乏を生ずる樣になつて來る、されば婦人は在來の奥樣氣取りで、安閑と日を暮す事は出來ない、勞働は卑むべく恥しき事の如く思ふて居た風習を破つて、家事萬端の事は可成他人の手を借りないといふ、勇々しい決心を抱く奥樣を作らればならぬ、何時の時勢に於ても最も尊重すべき人間は、思想を直ちに實行に現はすものであると、云ふ事でおります、私は絶えず博士のお言葉を思ひ出して、身の戒めとしてをります。

◎臺所趣味

木下操子

私が母の會々員となりまして、コーツ夫人のお宅へ參りました時に、最も心を動しましたのは、臺所の小瀟洒として心地よい事であります。日本の家庭に於きましては、臺所は厠に次で不潔なる所の如く考へられて、來客などに見らるゝのを此上なく恥かしく思つて居ます、實際臺所と云へば壁がすゝけたり、障子がくすぶつたり致して、何となく濕つぽい嫌な感じのする所です、けれども西洋人の家では、臺所は應

接間と異る感じもなく、皿部屋は書齋と趣を異にしないと云ふ樣な次第で、主婦たるものは却て臺所の立派なのをその身の誇として居るさうです、熟々考へて見まするのに、臺所は一家の幸福を主宰する場所で御座います。如何に衣服の改良、食物の改良、生理、衛生と六ヶ敷い理屈を申しましても、身體を營養する、食物の調理を司どる臺所が、依然として進歩する事がありませんでしたなら、佛造つて魂いれずのたとへにもれず、私は髮の結方や、衣服の流行につきて焦慮するよりも、先づ第一に一家の健康と快樂の源となる臺所に就て考ふる事が急務であると感じました。　註(明治母の會は小石川區上富坂町ミセス、コーツ宅にて毎月一回集會致し毎會學者名士方の有益な講話がございます)



◎衣服流行に對する觀念の變化

村山壽々子

お洒落とお笑ひなさるか知れませんけれど、婦人が一番氣を揉むものは、衣服、調度、裝飾で御座います。私も婦人の片端、衣服のことを考へずには居られません、それがため親や夫から絶えず叱られますけれど其苦しい間に居ながら流行に遲れまい、友人にひけを取るまいと始終焦るので人知れぬ苦痛を致したり又爲めにお義理を欠いたりする事が度々あります、其故「お前は衣服のために生てゐるのか」などゝお小言を頂戴することが珍敷ないので、悲しかつたり口惜しかつたり、とんだ滑稽劇を演ずることが往々あるので御座います。是は私一人ではない、知人

の内にも澤山あるので御座います。ところが昨年色の配合といふ事につきて、田添幸枝女史のお談をうかゞひましてから、私の衣服に對する觀念は一變して仕舞ました、是まで流行といへば善悪共に考へるひまがなく、直ぐそれを欲しいと思つたので御座いますが、只今となつては自分の顔の色や、身體の恰形などに考へ合せて、調和如何と云ふことを思ふのでございます、其故矢鱈無性に欲しいと云ふこともなく、元來持ち古した衣服でも其の調和が整ふて居ると思ひますれば、其方が遙に優て居る様な感がして參ります。また一懸けの半襟を求めますにも、リボンを一ツ結びますにも、其心を持つていたしますと、非常に趣味があるので御座います、先達コーツさんのお宅へあがりました時、メリー(姉孃)さんは牡丹色の洋服、ライラ(妹孃)さんは薄青色のを召して被居るのです、日本人の私には姉さんは派手で、妹さんが地味で何となく妙な感じがしました、それでコーツさんにお尋れして見ると「メリーは髪も眼も茶褐色であるから赤味を帶びた色が調和するし、ライラは金髪碧眼であるから薄青色が調和するからだ」とのお答へでした、西洋人は何となく高尚で支那人は下品に見えますので全く色の調和で御座いませうれ、私は時々馬車や俥で、風を切つて往來なさる令夫人、令孃の中に、金錢に飽かせた服裝をなさりながら、下女にも見劣りする様な、下卑たお方を見る事が御座います、これは全く色の配合とか調和とか云ふ事の知識がない、金さへ掛ければ上等と思つて被居る御連中で…………斯く申す私も此頃まではやはり其一人でございました。

◎南天の蔭

菅谷伊和子

私の娘に「何が一番好ですか」と尋れますと「母様と南天」と申ます。本年八歳の幼き脳に此二ツのものは非常なる力を以て印象されて居るので御座いませう。

一昨年の春頃、華族女學校の幼稚園を擔任して被居る野口先生が母の會でお談をなさいました時、「人にして高尚なる趣味のないものは、花のない薔薇の様なもので、富貴に處しては放恣亂行に流れ、貧困に處しては自暴自棄に陷る、故に世の親たるものは其子に向て知育體育を重ずる如く趣味教育を施さればならぬ」と云ふ事を懇切に教示被下いました。私は其後出來るだけの力を盡して、子供に趣味教育を授けたいと勉めて居ります。そしてそれが爲め、自分も嘗て知らぬ種々なる慰籍を受ける様になりました。

先生がお教へ下さいまして趣味教育の内で、最も私どもに成功しました事は、各自の植物を定めると云ふ事であります。私の子供は十二月の下旬に出產いたしまして、丁度床に南天が挿むでありました。また其家の庭園にも南天の樹が數木御座いまして、日當りの善い、椽側に垂れ懸つて居りましたので、彼女の植物を南天と定めまして、誕生日には屹度それを生け。衣服調度にも可成その模様を撰むで與へます、ところが

子供は南天の樹の下へ參りますと、恰も天の默示でも受ける樣に喜んで其を眺めて居ます、衣服やリボン、簪繪畫などでも若し其が附てをりますと、此上なき尊きもの〻樣に大切にして保存いたして居ります、數日前子供と途を歩ひて居りますと、丁度花屋が南天を擔いて通りました、子供は大急ぎで私の手を引きまして、「母樣、私の誕生日はもう直でせう、南天の實が彼樣に赤くなりましたよ、私は南天の樹の下で生れたのですね、神樣は南天の下に私を置て被下ったのですね」と喜んで居ます。私は希臘の神話でも聞く樣な感じがして誠に嬉しう御座います。私は何卒彼女の生涯が雪霜に遇ふて益々其美を發揮する南天の如くわらんとを祈ると共に野口先生のお言葉を難有く感謝して居ます。

四十二年 家庭日記

家庭日常の寶典家事整理の墨繩

博文館發行

この日記は今日の進歩した家庭に最も必要な日記帳で、如何なる家にも日々に起り來る種々雜多な生活上の事柄をそれ〴〵區別を立て〻記入するやうに作られてありますから錯雜した家の務を整理するには缺くべからざる机上の寶典であります。

まづ一年中の行事は申すに及ばず、寒暖の移り變りに就ての心得、季節季節の家務の大要、月々の經濟、金錢出入に關する事項、幷に家計の分類、家族幷に親戚交友間の名簿等、苟くも家庭上の必要なる事柄は一切記入の項目を設けて遺漏なく作られ、猶附錄として各種の日用心得數十件を記載し家計安全法に示せる生活費の内譯は專ら月給生活の家庭に對する指南車となるものであります。定價參拾八錢

古今集詳解

中村秋香著

古今集の詳解は、今に始めず、古きは契沖、眞淵、宣長、景樹を始め其他の碩學先生の深く考へ詳かに調べて説かれたるもの、明治に至りても、諸家の考説甚だ多し、されど新らしき學者によりて古來の註釋に未だ解き盡さゞるところは發見さる〻ものなり。況んや新説の發見に於てをや、古今集は古へより歌のかゞみとたへ〻られ、苟しくも歌學ばんほどの人は、まづ一と通りこれを知らざるべからざる事はいふまでもなし、この書は國學の宿老中村秋香先生が、諸説されしを門人の筆記したるものにて、歌の姿勢性格を説き、意味旨意を説き、古今註釋の異同を尋れ、調、聯合せ、餘韻等に就てこまかに解説したるものなれば初學の人のたよりには最もよき學びの栞となるべし。定價貳圓貳拾錢　京橋區前川文榮閣發行

露國小説 チエホフ傑作集

瀬沼夏葉譯

チエホフは露國小説家中の巨人にしてよく時の風俗を寫すを以て有名なる作家なるよしケーベル博士の序文に見えたり、露西亞の實際を知らぬ者より見ては、説の當否を知るよしもなけれど、此の篇に譯されたる二三を通讀するに、如何にも、さう思はる〻露國の風俗はあり〱と眼に見ゆるがごとく、描き出されたる人物の態度、言語、並びに一般の生活狀態は文字以外に活躍して恰も露國其物を縮圖したるがごときは原作のよき故のみならず、必竟譯文の巧妙なる爲ならん。



座敷の上の賞翫

松蔭子

床に懸つた一幅の書も、心得のあるものゝ賞めるのは其の究所に當りますが、若し心得がないと飛んだ見當違ひの處に感心したりなどして、賞められた方を挨拶に困らせるやうな事を往々ヤリ初めます。這麼滑稽を演じないやうにするには、何事に付けても趣味眼と觀賞力とを養つておきたいものです。近來一般世人の趣味もいろ〳〵な方面に廣がつて來たと共に、盆栽の賞翫も亦廣く行はるゝやうになりました。門外漢は往々例の挨拶困らせの感心仕方をなさつたり、或はそれを恐れて口を噤んでお困りの樣子を見受けたり致します。そこで一寸盆栽の觀賞仕方を申て見ませう。

◎盆栽の二義

廣く申せば盆栽即ち鉢植で、何でも鉢植物を總稱する譯になりますが、然し狹い意味で申す盆栽が即ち盆栽の眞髓なのです。即ちそれは僅かに一尺內外の鉢植で、然も天然の姿を備へて、森々として天に參すると言つたやうな勢がなければならぬのです。從つて栽ゑる所は多く喬木を選んだものです。これが狹い意味の盆栽であります。

で、廣くいふ鉢植即ち草花などのものは、培養も比較的に容易なれば觀賞するにも格別特殊な事はありませんから其れは茲には申しません。狹い意味の盆栽について二三のお話を致しませう。

總じて盆栽について大事な事は、

第一、根張り

で、それが自然の姿があつて深山の大樹に髣髴たるべき事。

第二、枝配り

で、それが疎密宜しきを得て風情のある事。

第三、幹の趣

で、それが古色を帶びて一見幾十年幾百年を經たものと見ゆべき事。のみならず是れには最一つ眼目の點があるので、それは幹尖の止まつてそらぬ事。これは近來殊に注意されて來たので、畢竟は自然の趣を重んずるからの事。然もこれが却々面倒なのです。

以上が盆栽に必須缺くべからざる要件なのです。そして盆栽は其の植方次第で大いにその風致を增減するもの、殊に寄栽の如きは唯植方の巧拙によつて盆栽となるかならぬか、其の死活も決る程のもの。されば植方の手際が又一つの肝要な見所です。

要するに盆栽は風致が天然自然の勢に適つて、纎巧な裡に景色の大様な處が無ければならぬのです。

で、恁樣に尺寸の中に老樹の趣を現はすのですから、從つて培養にも特別の方法を要するので、例へば水を乏しくして十分に與へず、肥料は時々古いものを稀薄にして施すとか、冬は温室にかこひ、春秋は常に空氣の流通のよい處に置き、酷暑には種類によりて日光の直射を防ぐなど、種々な注意を要するのです。これ等も觀る者が一通り心得てゐて然るべきことです。

◎その實例

一、松「螢は景物の最上なり」と也有が云ひましたが松こそ風致の最上でせう。人で申さば美を競はず才を衒はず、少しもケバ／＼しい處がなく、質撲な裡に無限の趣がある。その代り若し下手な植方をしたら又俗で何の長所もないものとなる、これが盆栽家の苦心する所です。されば松に於ては殊に植方を見てやらねばなりません。そして實生から培養したものと、深山幽谷のものを移植したのとある。後者の方が何うしても風雨に曝され苦しんだゞけの風骨がある。こゝらが眼の利かせ所です。

空氣の流通のよい棚に置かねばならぬ。雨を嫌ふ。水なども多くやらず、常に乾いた程がよい。植替は春の彼岸から二十日迄の頃或は秋の中頃。其の際は十分に根を固めて置くがよい。と、まあ此の位の事は心得ておくが宜しいでせう。

二、竹　これは難かしいもの。餘程熟練な盆栽家でも何うかすると枯らして了ふ。で、旨く行つてるのは餘程認めてやらねばなりません。又苦心の効あつてよく仕立て了せたのは、實に楚々たる風韻何とも言はれません。風や露や月や秋氣や先づ逸早く此の物に通ふ。竹にはその淸爽と氣品とを賞すべきです。春に筍を添へたなどに至つては、それは〱愛らしいものです。

三、柏　柏の類は古色を帶びねば見るに足りません。然して葉が大きく延びてはまるでだめなのですから、そこが骨折りどころでもあり又見所でもあります。

四、楓　楓は實生から培養したのが佳いのです。小やかな一盆の紅葉、それに滿山の秋の錦の粹をも留むる。小自然小宇宙の觀の面白さは、今さらに賞めずにはゐられますまい。其處で通をいふと、これは落葉の後にも猶賞觀するに足る程の技振でなければなりません。

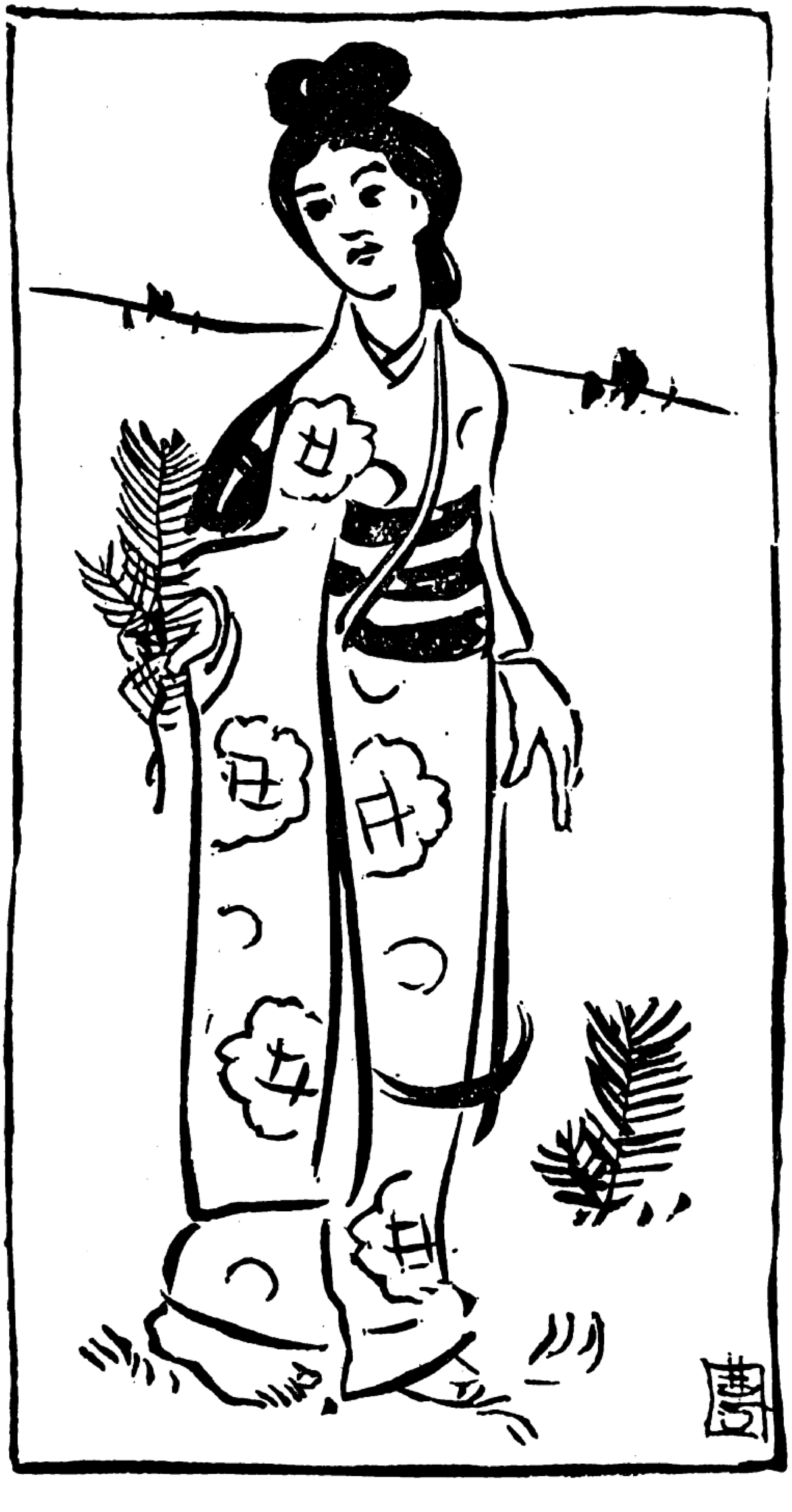
五、欅　これは特更大木の勢を備へたものでなければ面白くないのです。葉の細小なるべき事も勿論です、時に燒野などから發見したものに風致饒かなものも無いではありませんが、多くは皆實生から培養するものです。肥料は極く〱薄いものを時々やる位にしておくので、培養が却々加減物です。楓なども同じこと。

六、梧桐　梧桐で自慢の所は太いものを淺い鉢に保たせる點にあります。あの小さく仕立てたながらも靑い廣い葉が、さも生き〱と目覺めるやうに、そして幹も比較的に太く靑く、それが淺い鉢に立つてゐる。いかにも淸新なものです。培養の法を一寸申すと、この盆栽を作るには先づ初年に根を切つて細い傍根を殘し、次年から又漸々と根を切り縮めて行つて、三四年を經て初めて成就するのです。

七、柘榴　柘榴を古木にして細いのを貴しとします。實を結ばせるには取木に依るので、即ち古木の風致ある枝に土を付けて根を出させ、更に根の振のよいものを選んで接ぐのです。一年にして實を結びます。

◎一般趣味性が本

右の類の事を申せば際限もありませんが、以上で大體の趣は分りませう。けれど畢竟は一般の趣味性が本で、その人に自然を愛する心があれば、おのづから盆栽の觀方も分る。まして園藝趣味でもあれば其の上から或は繪畫彫刻の趣味でもあれば其の眼から、適當に盆栽其物をも觀賞し得らるゝは言ふまでもありません。盆栽趣味の要點といふものも前申した通りで、何も別に拗くつた曲つたものが有るのではないから、一般趣味性さへ饒かならば何處へ出ても心配は御座いません。



手數のかゝらぬ晩餐料理

宇山錄子

△魚のコロツケー

材料　鯖　玉葱　松茸　ケンチ油　牛乳　メリケン粉　食鹽　胡椒　パン粉　玉子　バタ

鯖のゑらとわたとをぬき、鍋へ湯をわかして玉葱の薄切りと鹽、胡椒を入れその中へ丸のまゝ入れて湯出ます。湯出上りたらば皮をむいてよく身をほぐしておきます。別にフライパンにバタをとかしてバター一パイに粉二はいの割にメリケン粉をいれて、狐色になる迄いため牛乳を徐々にさしまして白ソースの堅い位の度にしてシホ、コセウを入れておきます。

又別の鍋にバタをときて、玉葱のきざんだのをいため、松茸の皮をむき細く引いてそれをみぢんにしたのを魚の四分の一の割に前にほぐした玉葱と一緒にいため、これにもシホ、コセウを入れてフライパンにこしらへた白ソースも一緒にまぜて冷して後形をとりてパン粉をつけ、玉子の中へころがして又パン粉をつけて新聞紙の上か何かに廣げてパン粉のかたくなるまで水分を取りてケンチ油であげます。

揚ますには、油を充分わかして這入る丈入れて始のからかへて直ぐに引上げます。そして後を直に入れず一遍にゑたゝせてから入れませぬと、グチヤグチヤしたものになりまして、からりと揚りませぬ。

△ビーフカレー

材料　バタ　メリケン粉　牛肉　牛乳　セリー酒　カレー粉　シホ　コセウ

ソース鍋にバタをわかしてみぢんにきざんだ玉葱をいため、メリケン粉をバタの二倍入れて、よくいため、別に牛肉を丸のまゝにいためておいたのをサイの目に小さくきりて、一緒に入れ、カレー粉を入れる、カレー粉がもし古くなつて居りました時には、炮烙で一寸煎つて使ひますとよろしい、又入れる時に少しメリケ

ン粉をませて入れると色がよく出ます。

それからその中へスープをさします。スープがなくば水でもよろしい、一時間程煮たら、シホ、コセウ、セリー酒、牛乳、燒砂糖少々入れまして下します。

分量は大凡一人前にスープ一合五勺肉十五匁カレー粉は五人前に茶匙一パイ位でよろしい。

△エンドライス

材料　牛肉　松茸　赤茄　米　玉葱　ウスタソース
　セリー酒、醤油、鹽、胡椒

先づ牛肉を小口から薄くきります。松茸玉葱も同じ樣に皮をむきましてからうすくきざんでおきます。赤茄は沸湯につけて皮をむき、これもうすくきざみます。別に米をとぎまして、水をきり、フライパンに白バタをときました中へ入れてサラ／＼になりますまで煎り上げます。

又肉も玉葱も同樣バタでこれはザッといためておきます。松茸と赤茄とは生のまゝでよろしい、而して皆鍋に一緒に入れて醤油、ソース、セリー酒、コセウを入れ、普通の水加減より水を少々少くしてよわ火で炊きます。これは水でなくスープで炊きますと尚結構です。

分量は肉が百二十目位ですと米六合、松茸百目玉葱大一つ、赤茄子一つ、ウスタソース茶飲茶碗に半分、醤油一パイセリー酒八分目鹽コセウは少しの割でよろしう御座います。

ウスタソースとは普通何處の店にでも賣つて居りますソースの事で御座います。

△フーカデン

材料　挽肉　胡蘿蔔　松茸　食パン　牛乳　玉子
　鹽　胡椒

挽肉を擂鉢でよく擂、鹽と胡椒を少々入れ食パンの中身を水につけてしぼりましたのを、假に肉が二百目と致すと半斤位と、それに牛乳五勺、玉子二個の割合で入れて、又能く擂り、別に胡蘿蔔の皮をむき、湯出

たのと松茸の皮をむきまして細く引いたのを前の肉を三分してその三分の二をとりみぞをこしらへて、細長くその中へ並べて殘りの三分の一の肉でつゝみ、形をなほして天パンヘバタを引き、上火を強くして四十分程天火の中でやきまして、冷してからよい程に切ります。

挽肉は何のお料理によらず牛肉計りよりは豚肉と五分五分にまぜまして挽きました方が柔かでよろしいので御座います。又松茸は生のがない時には鑵づめをつかひます。

△スポンジケーキ

材料　玉子　メリケン粉

先づ黄白を分けまして黄身の方に玉子六つ位ならばお碗に一パイ半の砂糖を入れて、根よく白くなる迄すり、それに二碗のふるい粉を入れてまぜます。

白身の方はあわ立器であわ立てます。これはよほど根氣好くあわ立てねばいけません。一遍ふるてそれから又へります。そしてかたくはしでちぎれる迄あわ立ないと、何でもお菓子は上手に出來ません、よくあわ立ちましたら黄身と一緒にかるくまぜ、うつはに油を引き、紙を引きましてその中にうつし、下火をよわくして燒きます。燒加減を見ますには藁蕊か金串をさして見てつかねばよろしいので御座います。

精進揚のいろ／＼

△甘藷

先づ皮をむき厚さ三分内輪位に切り、水につけ、一度又新しき水にて能く洗ひてザルに上げる。

△蓮　根

同じく皮を去り、二分位の厚さにて少し斜に切り、色の黒くならぬ樣に浸けた水を數回も取り換へて、ザルに上げる。

△胡蘿蔔

皮をむきて小口より輪切にし、それを横に細くきざみてこれもザッと洗ひてザルに上げる。

△新生姜
葉を切りて根より三四寸の長さに切り、根の皮をむき一つづゝ離して大きければ二つに縦にわたしてうすく切りザッと洗ひてザルに上げる。

△三つ葉
洗ひて根を揃へ、長さ一寸五分位に切り、ザルに入れてザッと水をかける。

材料のこしらへが出來ましたら粉をふるいにかけて粉三合に玉子一つ、水二合の割合に先づ玉子と水をまぜて後粉を入れて、能く／＼攪き廻す、よく攪きまはしませぬと野菜と衣とが離れます。そしてきざんだ品はお甘藷や蓮根より衣を少くしてかたくしなければ不可ません。さうしましたら胡麻の油を煙の立つ位によくわかしまして、始めに芋の端などを揚げます。これは油の匂ひを取ります爲めで、揚げますには芋蓮根などは先きに揚げ、きざんだものは後になさるがよい。

△かけ汁
鰹節汁が二はいに醤油一ぱい、味醂盃に八分目位の分量にして煮立たせ、それに大根下しをそへて出します。

お碗　けんちん汁

お豆腐を鍋に其の儘入れて少し水を入れて三四本のはしで弱い火にかけてたぎる迄よく攪き廻しましてたぎりましたらザルに上げて水を切り、別に胡蘿蔔をせんに切りて、湯をわかし柔かになる迄湯出ます隱元も細く斜に切り洗つて鹽を振りかけて暫時してそれを洗ひ落してザッと湯出ておきます。椎茸を小口から二分位にきり、これもザッと湯出ます。出來ましたら別の鍋に胡麻の油を少々わかして、前のお豆腐を入れよく箸で攪きまはして、油の能く染みた時に煮出しを入れ、たぎりましたら胡蘿蔔と椎茸を入れます。そして鰹節汁一升に大凡お醤油を七勺位に鹽少々に鹽加減しまして一番後で隱元を入れて下します。



しのぶ艸

（紅葉山人の未亡人を訪ふ）

婦人記者

一代の文豪故紅葉山人の事を思ひ出でゝ、その夫人喜久子さんを芝新堀町の瀟洒なるお住居（里方なる樺島氏の隱宅）に訪問致しました。――芝園橋を渡つて左へ折れると、陶製の門札に尾崎夏彦と書いた家があります。

案内を請ふと出て來られたのは十三歳位のお孃さんお標緻のよい方で笑を含んで應對なさる擧動がいかにもハキ〳〵してゐる。

通されたのは庭に面する八疊の室。火鉢が出るお茶が出る、程なく隔の襖が靜かに開いて夫人がお洗ひになつた後と見えて、癖のない爽々とした眞黑な髪が兩の肩から後へ垂れてゐる。その黑髪と對照して劃然と色の白いのがわけて鮮やかに見える。

御挨拶が濟む話の糸は其れから其れへと手繰られて思はず時を移しました。

夫は御存じの通りの食物には八ケまし屋で御座いましたので、平生から最う食物の工夫が私の仕事のやうになつて居りまして、それでも稀には叱られるやうな事がありましたのに、歿くなられて見るとパタリと其れも不要になり、何だか總べてが手持無沙汰で張合がなく、一寸他へ出て歸つても、さて其の見聞いた事を話すべき人も無い。ホンに詰らない張合のない思ひばかり致しました。

歿つたのはもう六年のむかし、當座は舊の宅に居りましたが少し沈静いて、人の出入も尠なくなつて參ると、とかく種々の事が胸に浮んで來て、そして目に着く物が總べて思ひ出す種になつて不可せんから、別れ

た翌(三十七)年——此方へ引移つて參りました。

それでも矢張牛込が懐かしいので御座います。こちらにも兩親や兄が居りますが、折々話の序には牛込の贔負ばかりしてゐると言つて笑はれます。横寺町の舊の家の前を通つて見ますとどうも矢張懐かしい氣がしてなりません。それも然うで御座いませう、私が十九歳で嫁いてから夫に別れるまで、十二年間あの家に住みましたから。

次の居間の方には銅製や油繪の故人の像がある。この客室にも石膏の大きい肖像を置いてある。室の隅の小やかな書棚には「紅葉全集」。見る物が一々胸に泌みるやうな氣がする。

別れた當座は私が病まねばよいが〱と衆人が心配して下さいましたが、でもまあ何うやら恁うやら續いて參りました。愈ゝこれからは自分で行つてゆかねば——子供でも何でも一切引受けて行つてゆかねばと覺悟すれば、如彼いふ弱々しい人でもカラリと氣込が違つて來る。最う物を一つ言はない内に、大變確乎なすつたなと見て取られると、門下の婦人が申されたさうです。それは溢美で御座いますが、それでも「愈ゝ子供を引受けたのだな。」と思へば、幾分か覺悟が違ひます。當時その婦人に、「最うこれからはズン〱自分で出歩きもしなければならないと思つて、衣服の裾も悉皆此の通りメリンスに付け換へました」と話した事が御座いました。

まあ私のやうな者でも此の通りで御座いますから、大抵氣の弱い方でも子供を引受け一家を引受けて、愈愈一人でやつて行かねばならぬとなれば、ずつと覺悟が違つて來るもので御座いませう。私なども其の氣の張一つで、些とは神經衰弱などを起しながらも、まあ大して弱り込みもせずに、今日まで何うか恁うか子供を見て來ました。

お茶の代りを戴いてゐると、廊下をバタ〱と馳けて來た男の子が「叔母さん」と聲を懸けるその廊下はずつと長く、御兩親や兄さんの居られる方へ續いて居ります。夏ちやんはお庭と言つて、又バタ〱と廊下

を驅けて行く。

庭は平庭で大概二百坪位。離のやうな此の室の中からは、斜めに其の一部分しか見えない。傘松の疎らな間を鷄頭の眞紅になつたのや、コスモスの色麗はしいのが綴つて見える。やがて庭の奥の方から書生や植木屋と一緒に夏彦さんが歩いて來られた。

私の手に子供を皆遺して歿つて了はれましたが、その子供が皆弱い方で……元來女の子ばかりの處へ最後に男が生れたので、夫も寶物でも得たやうに喜んで居りましたが幼少い間に早くも自分が歿つて了ひ、又その子が弱い方で……。

でも幸な事に兄が二人とも醫者で御座いますから、醫者に事を缺かないだけは幸福と存じてをります。夫は子供が少し不加減だと直きに大騒ぎをする方で、直ぐに兄へ電報を懸けるものですから、仕方なしに飛んで參りましたが、『どうも恁うやられては降參する。此方も病人を預かつて居るのに……。牛込へ來ると終日取捉まつて了ふから叶はない』と兄が嘆すやうな有様でした。で、『離れてゐられては心配でならないし、それに不便で仕方がないから』と申されるので、言はれる儘に隱宅へ參りましたが、お蔭で諸事好都合で御座います。親の泣寄りとか申しますが、どうしても骨肉ほど力になるものは御座いません。

學校は弱い爲に一年延ばして、今年八歳で上りました。『早く學校へ行かれるやうになると好いにねえ』と始終申して居りましたのが、愈〻此の四月から入學れて喜んで居つたのに、又休まねばならぬ樣になりました、でも兄共の盡力で、最う庭へ遊びに出る位にはなりました。

『學校のお友達がお父樣の事を知つてゐて話しかけた』などゝ歸つて來て申します。『それだから確乎して貰はなくちや困るよ』と私が不覺申します。父や兄などは『甚麼事を今から言つたつて不可から』と申しますが、然うと知りつゝ不覺言ひ出すのも女の愚痴で御座いませう。

『たとへ腰が拔けてゐてもいゝから、筆だけ執れるや

うになりたい』と夫は申しましたが、歳もまだ若う御座いましたし、仕殘した仕事も澤山御座いましたからこの執着は無理もないと私共も殘念に思ひます。又思ひ出しては隨分泣きましたが、それも天命ならば仕方が御座いません。兎も角も世間に記憶して戴くだけの仕事をして行つたのを、せめてもの心やりに、子供を何うか勵ましてと思ひますが、弱いのには一番苦勞を致します。

　先程からお孃さんが折々何か聽きに被入しやる。切角の日曜を長くお邪魔するのも心ない業と辭別をして出ました。繊婉い夫人の樣々のお心盡しを思ひ、さては一本殘つた女郎花の、氣の張一つで風に耐へて被在しやる姿を思ひ、限りなき深い感じを催ほしながら芝園橋の方へと辿つた。





婚禮の一夜

清子

松の木の間より月のあらはれて打水して、緣滴るゝ樣な若葉の上や、敷石の上にきら〱と光つて、其上をそよ〱と吹きくる風の涼しさ、何にともたとへん樣なく、あまりの心地よさに晝の暑さも何處へやら、しばしうつとりと月の光をあびて、たゞずんで居ると春ちやん〱とお母樣のお聲「ハイ」と緣側までかけて行く、お客樣にお茶をとの事であつた、すぐ茶の間に行き、茶を入れてお座敷に持つて行き、御挨拶をするとお母樣が此方は山岸樣と仰有る方ですよ、これが妹で御座いますと御引合せ下さる、夫からお菓子をといはれて菓子盆に羊羹を持つて行く、茶の間にかへつて鐵瓶に水を少しさして、又庭におりた山岸樣て此間から何度も入らした樣に思ふ、それにお母樣がきのふ山岸樣がどうだとかつて兄樣とお話して居らした、何處の方なのかしらと又何の氣もなく座敷の方へ行くと、お客樣のお聲でお妹樣の事ですか、それは少しも御心配に及びません、先きのも一番末子で、小さいのがないものだからいつも餘所の子供をあい手にしてるやうな子供好な方です、さういふ方ならとお母樣のお聲眞個に何によりで御座います、悴は何にも不足を申ませんし、あとは私が少し氣を附けますれば先づ圓く治まる事と思ひます、私も隨分年をとりまして、毎日々々細々した事ばかりしていつまでも暮したく御座いません、早く嫁を貰つて隱居になりたいと思つて居りました。どうぞあなた樣から宜敷く御話下さいます樣にと、その中兄樣が緣側づたへにいらした、兄樣今夜はいゝ風よ庭へおりて御覽なさいませんかといへば、ほんとにいゝ風が出て來たねと客間へはいられた、私も家に上つて、湯わかしにお湯を持つて行つた、それから茶の間でお母樣の着物を解いて居た、そのうちにお客樣もかへられた樣、兄樣は御部屋にいらした、私はあと片附けて茶の間に來るとお母樣も入らしてた、先きの解きものをしながらお母樣山岸樣て、何處の方なの此間も入らしたでせうと尋ねるとお母樣が實は兄樣に嫁を世話して下さる方なの、お前の姉樣をいゝでせうと、いはれた私はその時急に嬉しくなりました。

◎次の日

今日はきのふの樣に暑くない、風があるので餘程凌ぎよいお母樣は十時頃から山岸樣の所にゆき、二時頃おかへりになり、すぐ兄樣のお部屋で何か御話して居らしたが、しばらくしてから茶の間に入らした、春ちやん今日はいゝおみやげ見せてあげませうと、小形の寫眞をおだしになつた、あらこれ姉樣なのと思はずさけんだ、二十歳位のお島田

に結ふた美しい半身の御寫眞何んだか私を見て笑つてる樣、私うれしいわ姉樣いつ來て下さるのと聞へば、二三日中に御祝儀があるとの事、兄樣はモー知つてるのときけば、知つてますともとお母樣がいふ私はいつまでも、あかず寫眞をながめて居た。

お母樣は今朝はやくから親戚の方へお出かけ、十二時頃おかへりになり、明日いよ／＼御祝儀すると仰有つた、それから私はすぐ庭の御掃除をはじめた、草をとつたりはいたり二時頃にはきれいに出來てお風呂に行く歸つて來た時、お母樣は兄樣のお羽織やお袴のしつけをとつて居らしたお母樣私はどの着物あの矢絣の透綾ときけば、あゝ、あれを着なさいといはれて只々うれしかつた、姉樣はどんな着物を着て入らつしやるかしらと、そんな事まで考へた、夜に入りお母樣と買物に行きかへりて明日の用意少しばかり手傳ひ、十一時頃床に入る姉樣は今頃どんな心持で居らしやるかしら、私を可愛がつて下さるかしら、などゝそれやこれや思ひまはしつゝいつかねむりにつきぬ。

◎當日

今朝は早く起きて座敷から家中奇麗に掃除をする、九時頃から澤田（親類）の叔父樣と叔母樣と入らした。髪結が來てお母樣はお髷に、私は桃割に結つた、叔母樣が春ちやん姉樣が出來ていゝでせう、といつた時、お母樣はいきなり兄樣より此子がうれしがつて待つて居るんですよといふ、叔母樣はほんとにこんな小姑なら嫁さんは仕合だといふ、それぢや私今日から小姑さんになるのときくと、小姑さんなんてだれもよびませんよ、そんな事をいふ人があるものですか、春ちやん／＼と可愛がつてくれますよ、といはれてうれしかつた、それから煙草盆やランプのお掃除をする、お母樣はお臺所で何にかと準備して居られた、其中兄樣もかへつて入らした、お母樣と私と着物を着替へる、其中仕出し屋がくる、私は何度も玄關に行つたり來たりしてゐる、お母樣まだ卸々入らしやらないのと茶の間へくると、兄樣がお母樣から着物を手傳つて着せて頂いてる、仕立おろしの黒羽二重に、白を重ね薄色のお袴をおつけになつた、何つもの兄樣と見違へる樣に立派になり、叔母樣もお立派ですことゝほめられる、お母樣が春ちやん／＼あの兄樣はいくら見てもいゝけれども、姉樣をあんまりのぞくんでありませんよ、モー家の人になるのですから、ゆつくり見ればいゝのですよとよくきかされた、それからお座敷に座布團をしくやら、煙草盆に火を入れたりして居ると、山岸樣がいらした、澤山の荷物が來た、三十分位してから四臺車がついた、山岸樣の叔母樣と姉樣とお兩親とであつた、お母樣が御案内してお座敷に通る、其中兄樣も入らした、私はそれからお料理を運んだり、お銚子をもつて行つたりして茶の間へ來ると、澤田の叔母樣が居て春ちやん、姉樣が見えたでせう、と言はれる私は藤色の着物と錦の樣なぴかぴかした帶ばかり見てよといふと叔母樣はくす／＼笑つて居らした、其中高砂のお謡がはじまる、卸々おにぎやか、モーお開きになるでせうから、春ちやんは先きにおやすみ、あとはお母樣と叔母樣でするからとい

はれて先きに床にはいつた、こと〳〵音がして却々ねむれぬ、明朝はやく起きた方がいゝと考へて無理に目を閉ぢた。

◎次の日

目がさめるとお母樣は起きて居らしやる、姉樣はときくととうに起きなさつたよといはれて、そこ〳〵に顔を洗ふ、座敷ではたきの音がする、お母樣姉樣のお座敷へ行つていゝのと訊くと、あゝいゝともと仰有つた、夫からすぐ座敷に行く姉樣お早う御座いますと手をつくと、そんなに丁寧な事をしては、あなた春ちやんて仰有るのといはれ、どうぞこれから妹にして可愛がつて下さいと思ひ切つていつた、すると姉樣は私も此家の人になつたのですから隔てなくして下さいといはれて、うれし涙がほろりと落ちた、姉樣は餘程はやくお起きになつたのでせう、きれいにお化粧が出來てお寫眞よりも何倍てうつくしい、私の姉樣になつて下すつたの、ほんとにうれしいわと思はずさけんだ、姉樣はいきなり私の手をとつてお庭へ下りて見ませうと、櫻の木の下まで行つたお母樣が米ちやん(姉樣)春ちやんとおよびになつたので、家に上ると兄樣もお起きになつて居た、皆一緒に御飯を頂いた、今日は日もはれ〳〵して雲一つない好天氣、兄樣と姉樣は、九時頃から寫眞を撮りに行かれた、午後から山岸樣の叔母樣御出になつた、其中兄樣姉樣もおかへりになり一同食事にむかひぬ、叔母樣も夕方おかへりになり、夜に入り姉樣と買物に行く、かへりて皆茶の間でお話して十時頃やすむ。

◎次の日

今日は日曜とて、いつもより一時間位おそく起きた、私の起きた時は姉樣はモー朝の御用が濟んで居らしたので、何んだかきまりがわるかつた、今朝は姉樣の御焚きになつた御飯や汁で一つテーブルを圍つて皆で頂いた、急に家の中が長閑な春になつた樣な氣がする、お晝は兄樣の發起で姉樣のお料理の五もくが出來、お母樣と私はお客樣でおいしく頂いた、午後から姉樣と御風呂にいつた、夕飯を濟んでから兄樣と姉樣につれられて散歩に出かけ九時過にかへり、皆でお母樣にいろ〳〵な面白いお話をしておきかせ申し大笑ひ、十一時頃皆床につきぬ。

新年の女學世界

内容のあらまし

▲人生五十年の追懷（數奇多難の生涯を經來りし老婦人の實話）

▲小間使の書いた田舍富豪の生活日記

▲新年の寮舍生活（女子大學寄宿舍に於ける生徒の新年の樂み）

▲都の女と阪東の女

▲頭腦鍛錬に就て苦心したる我が經驗（時勢に遲れざらんとする人に對する實驗的の敎訓）

▲顏の色を白くする法

▲禮法家の見たる女學生の動作

▲正月の重詰料理

▲處女時代に於てのみ見らるゝ女の美點（春の胡蝶の如く美はしき娘時代の特色を遺憾無く描ける快文字）

▲幸福なるべき結婚を十二回取逃がせし女

新年附錄　新撰名媛かゞみ（双六應用）極彩色美裝石版五色刷



婦人に關する俚諺

淡水

△女童の言ふ事用ゆ可からず

隨分婦人を侮辱した俚諺だから、或は柳眉を逆立て給ふ君も在さうが、之れは管子の「婦人事を言ふ賞罰當らず」と云ふ格言から出たもので、固より私の知る所では無い。そしてこれは感情に支配され易い女性の人物月旦は當てにならないから用うるなと云ふ事で、何も婦人の言ふ事は一々採用してはならぬといふ譯では無い。即ち人事に關しての女子の鑑識は兎角公平を缺くから容易に用ふるなといふに過ぎないのである。

△女の張る弓は射られず

出處定かならねど、修養なき女子の感情は激烈なもので、往々其の意識を支配して、冷靜の態度を缺くから、事を處するに往々切迫して、却つて仕損する意を表はしたもので、恰も矢を放つて其の目的に當らないといふやうなものである。

△夫に對して唾をかへすな

良人に叱かられて妻君が、花々しく打つて返せば、未來永劫小言の絕ゆる時は無い、此處は消極的に打消して仕舞ふより外はない、之が抑ゝ家內平和の基である。

△夫あれば親忘る

新婚旅行、さては、新郎新婦のさゝめ言、太平の春には候へど、さりとて親を忘れ給ふな孝は妻を娶りて衰ふとやら一家の風波を起こす暗潮は蓋茲に流がれてゐるのではあるまいか、新夫婦は呉々も舅姑に事ふるの道を忘れてはならぬ、姑の涙汁と云つて嫁に對する同情の乏しいのも、一面から云へば嫁の親に對する情愛の冷淡なる結果と云はなければならぬ。

△借着より洗着

主婦の心掛如何によつて、「一家は清々とした洗着に清潔を保つ事が出來る、此諺は啻に衣服の上のみに止まらず、其の意味を押し擴めば、家事經濟の上に深い教訓を含むで居るのである、「借る八合濟す一升」と云ふ俚諺と並べて味ふ可きことなり。

△似たもの夫婦

人は境遇の兒、良人放逸なれば妻は自から亂れ、妻君不經濟なれば良人は自から奮鬪の勇を欠く、言はゞ夫婦の間は暗示の作用で互に同化するもので、「夫婦は從弟ほど似る」と云つた、諺



は、要するに箇中の消息を道破したもので、周圍の境遇ほど恐ろしいものはない。

△秋茄子媳に食はすな

夫木集に秋茄子早酒のかすにつけませてよめにはくれじ棚におくともと云へるより起つたもので、よめとは鼠をさしたもの、今日の解釋とは全然違つてゐる、即ち秋茄子は早酒の粕につけて棚に置いてもよいからあの鼠に喰はすなと云ふ意が、今日では文字通りに解釋せられて居る。

要するに、我國從來の俚諺は、全く男子側

から女子を觀察した敎訓で、女子側から抗議を申し立つる節があるかも知れない、が、男子の評は全く他山の石で其玉を攻く材料となるのではあるまいか、尙、育兒に關する諺には、却つて面白いものがある。

△娠める時に火事見るとあざが出來る

といふ諺の如きは、全く感應の作用を言ひ表はしたもので、其理は今日の心理學上の暗示に基くもので、人によれば全く事實となるから、迷信として一概に排斥する事は出來ぬ。

△怒つて乳を呑ますな

と云ふが如きは、最有益な敎訓で、母親が非常に立腹してゐた當時に授乳した爲に、其兒が死んだと云ふ事實もある、此外。

△三歳兒の魂百までも

と云へるが如きは全く少年時代に記憶した事物は一生其の頭腦に殘る事を云つたのである、即ち小兒には善惡を辨別する能力がないから、何事でも模倣するものである、で、善い模倣を示さなければなりませぬ、殊に小學校時代に入つて、物事を見聞して記憶に止めた事は生涯に遺るもので、彼の老人が近日起つた事すら忘れてゐるにもかゝはらず、却つて小兒の時の事を覺えて居るといふのも、要するに三歳兒の魂百まで殘る理であるから、此の時代の子供に敎へる事には愼重の態度を取らなければなりませぬ。





封建時代に訓へられたる主婦の嗜み

足立栗園

主婦とは一家内政上の主人公、所謂家庭内の女王といつてもよい程の言葉であるが、然し我が家族制度の下に何百年、何十年間其家を傳へ來り、尚ほ幾百年、幾千年も之を後世に傳へんといふ家其ものを本位とする國柄にあつては、主婦は決して絶對唯一の權力を有するものではない。すべて主人でも主婦でも何れも家なる名の下には服從して働かねばならぬのであつて、其家名を重んじ、家系を尊ぶ點よりいへば、主婦の如きは寧ろ之を家婦と呼ぶの當れるに如かないのである。

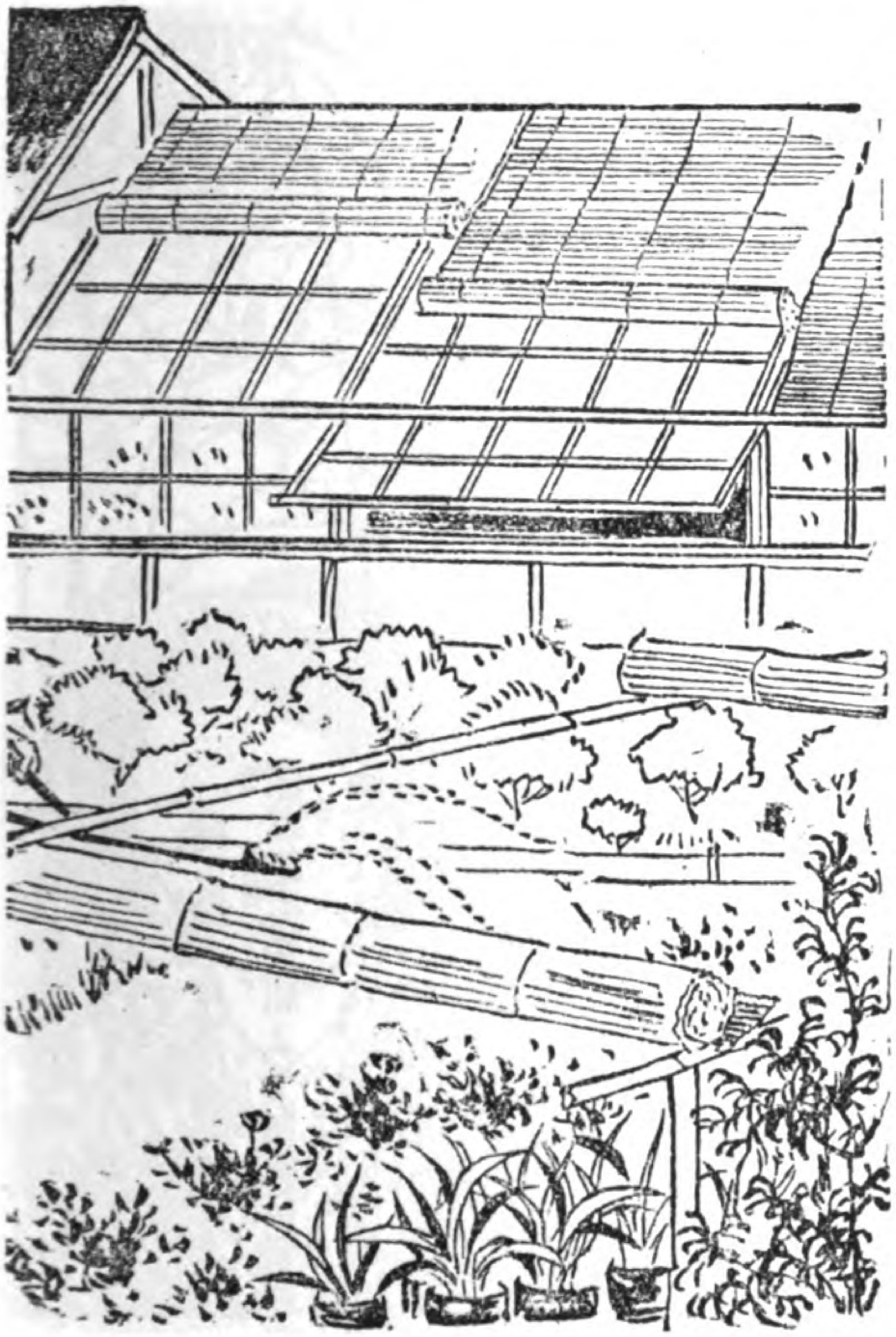
然らば家とは何ぞや

家は即ち先祖より血統を傳へ來つた無形の系圖に冠する名であつて、自分は父より受けたる此家を隆盛にして更に之を子孫に傳へねばならぬといふ義務が子には附隨して居るのである。これが即ち家に對する主人主婦の大なる責任である。此點より言ふと、主婦は決して家庭の女王ではなく、從て絶對唯一の權力を有するものではないけれども、之を主人に對比して決して其資格や權力に優劣あるべき筈のものではない、さればこそ徳川時代の發達したる武士道の家庭にあつては、夫婦互に禮を厚うして連れ添ふことを男女の道としたもので、決して男子を揚げて女子を抑へるといふ如きことはなかつたのである、女訓みさこ草に、

およそ士としては、己が同輩の女子を禮を以て迎へぬれば、禮を以てつれそふべし、婦も又禮を以て來りぬれば、禮を以てつかふべし、輕しめ侮ることな

かれ、家の亂るゝは、すべて無禮よりおこる云々と記して居るのが其證據である、然しながら一家を統一する上よりいつても、又家系を重んずるといふ點よりいつても、どうしても家には一人の主人公を定めねばならぬ、正系といふものを立てねばならぬ、それが終に男系を重しとし、男子を主人と定むるに至つた原因で、此に於て婦人は主婦といふ條、男子に對しては從といふ關係となつたのである、そこで夫に從ふ妻といふ所より、家婦を稱して夫人といふに至つたのである。元來夫といふ言葉は妻が一家の主人を呼棄にせぬといふ敬語を意味したもので、ソレ樣と敬ひ稱へたものである。さればこそ神代の昔より我國にては妻は己が夫の事を背といひせなと呼び、せことも唱た、此せといふ語はソレといふ言葉の約まつたものである。萬葉集に、

我せこ(夫)は物な思ひそ事しあらば
火にも水にもわれなけなくに



といつて、夫に對する婦人の貞操を言ひ現はして居るのである。それが即ち妹と夫の道の始まりである。此に於て妻は夫と共に同心協力して一家の繁榮を期すべき責任を有し、從て我家に對して、從順の旨を體し、

よく夫に從ひて家事を取扱ふに至つたのである。必ずしも夫と己れとの資格や權力の優劣を比較しての後の服從ではない。そこで女の道は順を本とし、敬を以て之を全うすることを期するに至つたものである、一重衣に左の言がある。

女の道は順ふの一にあり、而も其よく順ふ事はもと勇の氣なり、如何にとなれば勇なき時は、よく物を堪へ忍ばず、或は破り、或は背き、死ぬべき事にも時を失ふ、(男のみ理にあたりて死ぬべきにあらず、此御國の風俗として、理をせめ、いきほひを失はざるは、女も然り、況して仕する女達は殊更なり)、しかは勇の一つぞ人の心の寶なり、將たこれ此御國の國がらになむありける、云々



これは婦人の從順も畢竟勇氣あつて然る後之を完うし得べしと說くもので、頗る根據あり且つ活潑なる言辭である、又曰く

女の身ををさむるは敬に如かず、強きに堪へなんは順ふに如くはなし、故に敬と順の二つを女の上の大道とす、それ敬ふときは久しくたもち、順ふ時は穩かなり。

それ妹夫の道は事を和すを以て、相したしみ、又其よしみを以て、相さからはず、よく之を辨へ知れとぞ云々

此文字によつて家婦の從順なるべき本旨を明かにすることが出來るのである、即ち男女の權力や資格を比較して、己れ夫に及ばずとて服從するのではなく、家の平和を保たん爲に妻は夫に親み、夫に逆はぬのである、決して夫に屈從するのではない。

さればこそ修齋訓の中にも夫婦の道を叙べて、左の如く示して居る。

夫婦の道は、夫に在ては和して禮あるべし、樂んで淫せず、邪に流れざるべし。婦に在ては柔にして禮あつく、媚に近づかず、順にしてよく敬ひ、譏るに至らざるべし、かくの如き時は家道自ら昌ゆる也

これにて夫婦の關係を知るべく、且は一家の統一制馭の爲に夫は主人と立ち、妻は主婦として其夫を補佐して家道を昌えしめんと勉めたものなることを明かにすることが出來るのである、然るに此夫婦の關係を明かにせざる家婦は、往々にして唯だ何事も夫に屈從するを以て妻の本分の如く誤解するに至つたのである。これは實に自ら卑うするものといはねばならぬ、此點に就て大和女訓には婦人を鞭撻して曰く、

形に男女のかはりあれども、心はさのみ劣るべからず、性もと善なり、幼より道にうつらば、あしきに流るゝことなかるべし、書を讀み、理を辨へ、心を正くし、身を修め、苦樂に惑はずして、天命を樂むべし、男女共に形を美しくせんことを思ひて、心をうるはしくせんことを思はず、内をすてゝ外をとる、惑へるにあらずや、つとめて胸裏の明鏡をみがかば、萬事の分別掌をさすが如くなるべし、古歌に

くもりなきいにしへ今もへだてぬは
心にみがくかゞみなるらん

とよめり、然るは男は左もあらん、女はいかでかはといふものあり、これぞ諺にいふ、金身を泥土に投ぐるたぐひなり、古歌に

わりなしや人こそ人といはざらめ

　　みづから身をやおもひすつべき

とよめるに似たり云々

これ婦人の自ら賤うするを難して、眞に其本分天職を明かにせんことを奬勵した言辭である、所が世の中には妻も既に其本分を誤解して居れば、夫も亦從て其本分を誤了し、婦人なるものは之を無理にでも壓抑すれば可なりとするに至つた、此に於て夫婦互の間に禮儀といふものゝ認むべきものがないやうになつたのである。

抑ゝ夫婦の別といふのは此相互間の禮儀を指したものに外ならぬのである、此點に就ては水戸西山公（德川光圀）が明かに吾人に語つて居る。

各ゝ妻もたる身は覺え侍るらん、嫁娶の夜、媒人侍、女房饗膳なにくれと種々の禮をつくし、互に衣紋つくろひ、たしなみ深く、九献の盃かはし、新まくらとりどりに、後朝の對面も何となく物はづかはしく、たしなみあへる心もち、やがて別なり、これ自然の道理にして、他の敎によらず、其心もちゐを後後までも忘れずば、夫婦ながく睦まじく、愛相よかるべし、されど年月ふるまゝに、心やすさの過ぎて、互に物はづかはしき、たしなみ失せて、氣隨になりもてゆくより、さまざま、さるまじきふるまひをもし、むくつけき詞をもいひあひ侍るぞかし、聖人そこを憂ひたまひて、かの自然の道理なる、物はづかはしき、たしなみの情にもとづきて敎をたてたまへり、夫婦の別のみならず、すべて人倫の交りは、たしなみの情第一なり、たしなみは敬の意にもかよふべし、物はぢせず、たしなみなければ、禽獸にもおとりて、ゆくものなり、よくよく辨ふべし云々

夫婦の別はかくも敬意に基づきたる相互の禮儀を言ひ現はしたものであるが、併し異性にして一心同體となり、以て一の家道を護り立てるといふことは抑ゝ佛家の所謂深き因縁でなからねばならぬ、それゆゑに夫婦日常の交際には此敬を以て相待つのであるが、其情合に至ては古語に所謂膠漆も啻ならぬ關係を有して居るのである、即ち一旦偕老同穴を誓ひ、比翼連理を契

つた以上は、前に掲げた萬葉集の歌の如くに、婦は夫の爲には水火の難も辭せぬといふのが其貞操でなければならぬ。

即ち世に夫婦の情といふのは此處の事であつて、所謂言ふに言はれぬ微妙なる點を存して居るのである、かの播州三木城主別所長治が羽柴秀吉に攻められて、落城に及ばんとし、士卒の命を助けんとて夫婦共に自殺した時に、其妻のよみし歌は

もろともに消はつるこそうれしけれ
おくれ先だつならひなる世に

といふのであるが、其覺悟のほどの健氣なるのみならず、夫婦間の情合の如何にも、かくあらまほしい模範を後人に示したものと思はるゝのである、又かの昔語りに、大江匡房の學生たりし時、極貧にて參内の衣服がなかつたのを、其妻自らの髮を切つて金に換へ、衣服を調へて夫を參内せしめた事や、又は明智光秀が浪人であつた時、生計の困つたのを見て、其妻が自らの髮を切て米に代へたといふ如きは、如何にも夫婦の情合を盡して居るのみならず、世に貞操の鑑として稱へらるゝを怪しまないのである、蓋しこれは必ずしも夫を愛するといふばかりではなく、其夫を佐けて其盡すべき家道を昌えしめんとの赤心より出でゝ此健氣なる振舞となつたものである、これが抑ゝ家婦たるものゝ務めで實に、

主婦の任

でなければならぬ、かの夫の腑甲斐なきを見て容易に離別し、更に他に嫁ぐといふ浮草の如き翩々たる輕薄の志は決して之を婦德の全きものと稱することは出來ぬのである、みさこ草に曰く

人の妻としては、我身艱難にあふとも、其家をいとひ嫌ふけしきもなく、我が衣裳、手道具までも、しろがへても夫をたすくべし、殊に夏衣のうらなく睦びては、たとへば爐火たく屋にすぐすとも、いとふ氣色なかるべし。

この言は實に二十世紀の我國婦人の服膺すべき金言と思はるゝのである、殊に古語に女工一月四十五日と

いふのがあつて、冬の夜長に妻が其家の爲に女工を勵むことは、殆ど半月にも値するので、所謂一ヶ月の三十日に十五日を加へて四十五日にも當るといつたものであるが、かくて妻にして其夫を佐けたならば、良人の出世は固より言ふまでもなく、家道は必ず富み榮えるに相違ない、古人が家貧うして良妻を思ふと言つたとあるのは、如何にも尤も至極で、畢竟此内助を希ふたものである。

要するに自己を本位とするといふことが、抑ゝ主婦として間違つた考である、自己を本位とする所より家庭の何たるをも忘れて、「家を成すは自己の快樂を盡す爲なり」などゝいふ淺薄なる考を起すに至るのである、之が爲に藝人を家庭に出入せしめて其子女の將來を誤まり、或は夫妻互に觀劇や茶屋酒に耽つて、自ら墮落の因を爲すのである。若し夫れ家の爲め主人主婦であつて、其家名を高め家道を榮えしめて、先づ己が先祖に對する面目を高め、又其家を後昆に傳へる子孫の榮を期さねばならぬ義務責任あることを了解したならば、此に始めて夫婦共稼ぎの必要を知り互に心力を合せて勤勞することを辭せぬのみでなく、我家の爲に健全なる後繼者を得ねばならぬといふ點に眼が着くのである。かくてこそ良妻賢母としての素地を作ることが出來るのである。





娘を嫁に遣る母の凡惱

美江子

朝飯の箸を置くと直ぐお芳の衣服の手入れに懸る。派手になつた長襦袢の半襟をかけ換へたり、袖の行丈を直したり、まだ齡から云へば漸と數へ齡の十八、而かも男の中のしまひ子なのでヅブお孃樣育ちにそだつたものを……。

何ぼ人の女房になるからと云つて斯うした赤いものの多く入つた襟迄俄に外して了ふのは何だか盛り咲の枝をもぎとる樣な一層可哀さうな氣もする。

可哀さうといへば僅か三個の荷物はお芳にとつて少しみじめだ。當人の娘がどんなに肩身が狹からうと察する親の身として殘酷な仕打の樣にも思はれてならぬ先方には立派な親類合もある事だし、兩親の手前もある。例へ其場切りお開きにする迄も五個位にはしてやりたいと、とかく見榮の張りたいがちの私は思ふけれどお父樣はさうでない『何だクダラない、嫁入道具がイザと云ふ場合何の益にたつ、賣つたつて二足三文だ家の娘風情には三個の荷だつて勝ちすぎる。釣臺にも何にも及ばぬ、風呂敷包で澤山、家の娘は衣服や荷物で貰つては貰はぬ、何ぼう先方が大學出の秀才にしろ博士にしろ身分の立派な親類があるにしろ、當人には乍憚しかと教育が仕込んである。教育が娘の唯一の財產だ、例へ藝者買せうと、茶屋酒飲まうと、乃至は學問の研究に凝つて身代をすりはたく樣な事があるとしてもそれしきにビクともしやせぬ。其外、花だつて琴だつて女一通りの道なら事欠かぬ筈、それで嫌なら貰つても貰ふまい、呉れてもやらぬ』とたゞ〳〵一點張の頑固に被仰るけれど、さう物事は理屈計りで成立つ譯の物でない。そこは女であつて見なければ眞底の味はかみ分けられぬもの、私なんぞの嫁入りした時を

考へると今でも汗が出る位、温かい母親の手にも懸けられず、冷たい兄嫁の針の樣な指頭で製らつて貰た嫁入支度、長襦袢なんかと來てハベラ〳〵になつてゝ式の時の立居にさへ、ビリリとなりはすまいかとどの位氣を揉んだかしれやしない其時つく〴〵あゝ娘を持たら怪我にも此樣な思ひはさせまいと染々感じたつけ、お父樣はあの黒縮緬の裾模樣一枚こさへるのだつて、私が泣く樣にして願つて漸とお許しが出た位、私が嫁入當時の羊羹色で間に合はして置けつて被仰るのだもの……。眞に男といふものは同情のない事……。

何ぼ當人には教育が仕込であるにしろ、女一生の晴ではないか、昔なら旗本の家柄だ、義理にも五個位ははづんでお駕のお檜の……こんなヿをお芳にでも聞かれると、『又阿母樣は繪にかいた狐のお嫁入りの樣な他愛もない事を被仰ると笑ふだらうが、女生涯の大體なんだから思ふ存分に仕度がさしてやりたい先方へ行つてから肩身の狹い事のない樣に……、それなのにお芳と云つたら……彼の娘は眞に何と云ふ無頓着なのだらう、學問の出來る處丈け私に似ないでお父樣に似たのは何よりだが、呑氣極まる處迄あゝそつくり似られてしまつては困る。女の子の癖に何て慾のない子であらう。三越から裾模樣が染まつて來ても、白牡丹から誂らへた帶留や花簪が出來て來ても、一向、嬉しがる處か、どこを風がと云ふ調子。

『まア阿母樣、勿體ないぢやありませんか、いくら此樣にいゝ衣服を着飾らせて頂いた處で、私に價値がまさうぢやなし、……』つて、何と云ふにべも素氣もない娘なのだらう。年頃盛りの娘の癖に殆で男か何ぞの樣だから乳母や迄が、『まるで阿母の方がお嫁にでも入らつしやるやうです』といつて笑ふのだ。

然し又考へ直してみると、あれも欲し、これも欲しでなけなしの兩親が、ヤレあしで模樣の、寶石飾りのと贅澤娘にせびられ騷がれたつて、仕方がないのだけれど……。結句さつぱりして居てうるさくない丈けも得な譯なのだが、親は親で矢張り折角當人が喜こぶだらうと思て拵らつて遣つた物は喜んで貰はぬと張合が

ない。けれど、阿父樣のお詞だつて御尤な處もある。衣服や手廻り道具計り立派にして行くのが必らずしも當人の仕合せではない、よくお父樣は、高臺院のお話をお芳にお聞かせなさる。

强ち學者といふ迄ではなくとも女一通りの敎育なら縫針の道なら料理の事なら隨分よそのお娘と肩並べても敗けはとらぬつもり、親馬鹿の慾目ではないが、第一、物の聞き捌けがよくて、柔順な性の娘だから、奉公人一人だつて、拙いつかひ樣はしまい。それに今時のハイカラ女學生の樣にヤレ舅姑があるから窮屈でいやだの、うるさいの、小姑が居るから面倒くさいの、別居する約束でなければ行かないのなぞと我まゝは云はぬ。お父樣お母樣さへ行けと被仰る處なら、火水の中でも參りますと云ふ溫順なしほらしい心掛けが好もしい。あの心がけ丈けでもきつと辛棒しとげるに相違ない。

然しどつちかと云へばゆるやかに育てた方であるし兄弟と云つても男計りの中だつたから自然氣まゝに成人したと云ふもの、それに先方には氣むづかしいと評判の兩親や、年盛りの……ピアノ自慢の小姑が居るのだもの、而かも一度出戻つたとか何とか……。將來は嘸苦勞もある事だらう、家に居た樣に氣樂でも濟まされまい、全體が身體の弱いと云ふのではないけれど、頑丈と迄は行かぬ方であるから餘り心配した結果病ひでもして吳れねばいゝが……さりとて又、餘り呑氣に振まつて甘やかした親の子だと後指さゝれる樣でも困る。何と云つても衣服より道具、道具よりお金、其お金より、人にぬすまれもとられもせぬ腕をこしらへさして置くとが當人にとつて一番の仕合せであらう。

＊　＊　＊　＊　＊

「奥樣マア御覽遊ばせ、何てよくお似合遊ばすので厶いませう、此お美いとと申したら……」襖の際で甲高な乳母やの聲が、頻りにするので針の手をとめてふりかへると、芳が高島田を重たさうにうつむけて居る。平素束髮に計りして居て碌に油もつけなかつた位だからどうかとあやぶんで居たが、まんざら乳母やのおせ

じでもない大層いゝ。さし櫛の金蒔繪靑貝ずりも癖のないふつくりした前髮によく榮えて居る。文金には何と云つても切りはなした元結が一番だ、上品であでゝ人柄で、根に卷くのは白もいゝけれど餘り淋しすぎるから矢張り、當日は銀丈にさせませう、私の丸髷の根掛であつたさんごを實にさして誂へた根あらひおもとのさし込みは飛んだいゝ、島田にかけては流石名うてのお辰だ、實際腕が冴え切ッて居る。

先方の人はあの通り、風采は立派だし、學問はあるといふし、私共が見た處では至極實直さうな固人らしくて、無論お芳の聟には似合の緣であるに違ひないけれど、齡が四十だと云ふのは少々心細い、後あたまの少し薄れかゝつて居る處なぞはお芳と並べて情けない樣にもある。



小春日和のとけさうな程長閑な日、庭先に初元結とか云ふ濃紫の菊が、なつかしい色でさき亂れて居る。何とはなしによそ事ならぬ花の名が床しい。風がソヨリと晴々した空を渡る百舌鳥が何處かで幽かに鳴く。其れに應じて椎實がパラ〳〵と葉音を立てゝ四五粒庭の永山苔にこぼれる。

運動會參觀記

▲東京高等女學校　及び東京技藝女學校の運動會は十月廿四日三田四國町なる同校校庭に於て催された、記者がそれに臨んだのは開會に後るゝこと凡そ一時間許りの頃。運動は今七回目の書字競爭といふので、赤よ白よの聲援なか〳〵盛んな所であつた。やがて赤の勝で彼方の黒板上に出來上つた文字は質素勤勉の四字、これは恐らくこの學校の主義方針をあらはしたものであらう、生徒の風裝や活きぶりにもこの字の意味を認められたのは結構であつた。

それから次ぎ〳〵と演ぜられた數番の競技は何れも上出來であつたが、遠慮なくいへば稍々單調で變化に乏しい氣味があつた。唯一つ異彩を放つて目ざましかつたのは第廿回目の二分間體操といふので、合圖と共に全體の生徒が四方から馳せ集つて整列したと見るうち、いつしか中部左右の三縱列に別れて運動をはじめる、それが各々異つた手ぶり足ぶみをしながら、而かも全體の上に於て一致調和する處はなか〳〵見事に、二分間にしてまた忽ち列を亂して離散したのは、見て居て誠に氣もちがよかつた。

▲東京府師範學校・及び東京府立第二高等女學校第八回秋季運動會は同廿五日に擧行された。この學校のはさすがに見ごたへのあるものであつた。いづれの體操にも、いづれのダンスにも、練習の功が充分に見えて、立派に整ふたものと見た、競技にもなか〳〵趣向を凝らしたものが多く、ことに日米同盟、米國艦隊歡迎などは時節柄面白き思ひつきで、非常に喝采を博し、それにまた附屬小學校、幼稚園の生徒の、いかにも無邪氣活潑な運動ぶりは一層の興を添へて居た。

當日の運動會を見て面白く感じたのは、師範の生徒と高等女學校の生徒とは矢張り違つた處があつて、運動の上にもそれ〴〵特色を發揮して居たことで、師範の生徒はおしなべて衣服の袂も短く、紫紺の袴を胸高にはき、其の襷がけの體操迄がいかにも質實であつたが、高等女學校の方は、髮の結び方からまづずつとハイカラ式で、身裝擧動すべてこれに準じ、巾廣のリボンや長い袂は翩々として美しく、輕妙に舞ふ其のダンスは中々見事なものであつた。



不遇女の述懐

おぼろ

今宵從妹の久代は嫁ぐといふ。

父を亡なつて私は僅ばかりの親の遺産と共に恰も荷物のやうに運ばれて、叔父の家の寄食人となつたのも已に二昔も以前の事である。今日限り明日からは私一人の部屋になる二階の六疊の縁に彳んで暮れゆく秋の夕空を眺めて居ると、雁が鳴いて過ぎた、下座敷では廊下を馳け出して歩く音や、人々の多忙しさうに立働いてる聲々が手に取るやうに聞える。

『お町さん、お町さん』と叔母の呼んでゐる聲がする、私は急いで障子を閉めて梯子段を降り、化粧の間へ入ると、最う悉皆おつくりが出來上つた久代が澄して姿見鏡の前に立つてゐる、羽織も脫ぎ捨てゝ仕舞つて忙しさうに世話を燒いてゐた叔母は湯呑のお茶を一息にぐうつと呑みながら、漸つと仕度が出來たからまア見て呉れと云ふのであつた。今日を晴れと母が念入りの化粧に一段と美しくなつた。私は二十久代は十九の一つ違ひだけれども斯うして並んで見ると三つも四つも久代の方が若く見える。

祖母樣は前へ廻つたり背後へ行つたり、腰に兩手を組んで、只もう貌中を皺だらけにして嬉しさうに莞爾莞爾して見とれてゐる。

『久代が嫁つて仕舞つたらお祖母樣落膽して腰でも拔かすと大變ですよ』と久代の兄が云ふ。

『莫伽な事を聞えると惡いよ』

『鳥渡久代さん此方を向いて御覽と兄に云はれて、久代は黑のお振袖に長い房の扇子を持つたまゝ云ふなりに彼方を向いたり、此方を向いたりしてゐる、何の事はない生人形だと私は心の中で思つた。

坐ると着崩れがすると云ふので久代は立つた儘で居

るから、私は次の間から安樂椅子を持つて來て坐褥の代りに唐縮緬の座蒲團を載せてやる。叔母はまだ氣になると見えて水眉刷毛を持つて來て又貌を直す、直しては少し離れて首を傾しげて見入つて居る樣是れも亦人形師が貌を造るのに異りはない。

叔母は全然夢中になつてゐて自分はまだ着物さへ着換へないでゐる、昨日迄お揃の銘仙の着物に、くしやくしやな束髮に結つてゐた時は知らぬ人は皆私の妹だと思つた、夫れが斯うも見違へる程美しくなつて全く衣裳髮形は馬子ばかりではないと思つた、久代の姿を見てゐるに自分は何とも云へず胸が一杯になる、それかと云つて久代を羨しく思ふのでも何でもない、私が一年間心懸けて漸と買つた指輪も久代が襟に輝いてゐる襟留の珠の一粒にだも劣つてゐる、那麽物を大切さうに嵌めてゐるのさへみそぼらしく物欲しさうに見えたから、そつと拔いて帶の間へ挾んで仕舞つた。

指輪で思ひ出したが昨日も久代の仕度の話から叔母が云ふのに『お町さんも成る丈儉約して一枚でも着物が增えるやうに心懸けなくつちや不可ない、夫れや若し何處かへ嫁くといふ段になれや、叔父樣だつても無言つて見ても被居るまいけれども』と云はれて、私は唯はアと答へたものゝ、誰れしも若い女の着物を欲しがらぬ者もあるまいにと思つた。某人の話に半襟一懸でも自分の獨力で得た品だとなると、例令品は良くなくとも何となく嬉しいやうな、好い氣持のものだと云ふ夫れは一種の小さな誇りとでも云ふのだらう、併し夫れがいかに誇りにならうとも、是れは自分で買つたのですつて逢ふ人每に云ふ譯にも行かず、尙且夜光珠は夜光珠で水晶と比べものにはならぬ。

恁麽事を思ひながら久代を見ると造り付けたやうに身動きもせず、眼をぱちく〳〵させてゐる何にしても久代は幸福者だと思はずには居られない、第一久代と自分とどれだけの相違が有るのか知らと思ひ始めるといつでも俄に不滿らないと云ふ感じがする、名門に生れた久代のやうな者は只だ凝として家に居さへすれば、兎に角も立派な御令孃として人の尊敬を拂はれるの

だ、社會の習慣を破らずに同じ道を踏み皆と同じ程度位の學問をし、怪しい哲學や禪學等は忘れてもせぬ事で、着物やお化粧に浮身を窶して三越の賣出しにはかかした事は無いの、生れて始めて木綿の着物といふのを着て見たら三日肩が凝つた事の、膝をすりむきました等とトンとお米の直段も知らぬといふやうな事ばかり云つてゐれば夫れですむのだ夫れに引き換へて自分の身はどうだらう、名も無い一官吏の娘、叔父の厄介者、例令婦人としては久代に劣つては居なくとも、第一名家と云ふ武器を持つてゐない、社會の人達が名譽や地位ばかり重んじてゐる間は私のやうな者は隅の方に小さくなつて居なければならない、夫れを思ふと名も殘さず此世を去つた父が恨めしい、恨めしいと思ふ父よりも更に私を捨てゝ他家の人となつた母を思ふと悲しくなる、齡若く美しかつた母は父が此世を去ると間もなく他から望まれて嫁いだ、未亡人になつたからと云つて昔氣質に忘れがたみを育てゝ地下の夫を慰藉めるといふやうな儚ない生涯を送るよりは寧ろ恰悧かも知れぬ……、併し私に言はせれば……而して現今は地位有る人の夫人になつて幸福に暮してゐるとの事、……それを思ふと溫順しくしてゐる者は不滿らない、社會といふものが好い加減なもので有る以上、運命の手に任かせて勝手にあやつられてゐるやうな私のやうな者は兎も角も馬鹿だ、某る人の云ふのに、男は門を出れば七人の敵あり、社會に出て活動するのは恰も戰場で戰ふのと同じ事だといふが、然うすれば女も亦同じ事で殊に大袈裟に云へば結婚は分けても戰ひと同じでは有るまいか、好い味方を大勢持つて武器有る婦人だつたらば名譽ある地位をも容易く得られよう、日本一の美人に當選しなくとも侯爵夫人位にはなられないとも限らぬ、其處に至ると自分のやうな親は持たず、武器も持たぬ者はどうして戰が出來よう。……噫!私はどうしてこんなに意志が薄弱なのであらう。

社會が完全になつた曉はいざ知らず、自分で武器を造つて戰はなければならぬ、女と生れて一生夜光珠の指輪の光一つ放てないやうでは餘り情けない、未來に

再び生れ返れるものとたしかに分つてゐるまでは現世で思ひきり樂しく面白く暮が得策だ、女優も可なり慾の富豪に嫁して金庫の番人で終るよりも、更に〳〵趣味ある人生を送りたいものだ、一度舞臺に顯はれゝば滿場の視線は悉く一身に集まつて、女は嫉しさの眼を凝し、男は恍惚として其美に醉はしむるといふやうなのも面白い、例令夫れが一時にせよ、夢の間の榮華でも好い、英雄の末路は望まないので今日あつて明日は土に返つても差支ない。……といつの間にか私はこんな事を思つて居るのである、噫！　私は墮落したのか知らぬ、噫、恥かしい噫、良心に恥かしい。實に穴にも入りたいやうな氣がする。

斯麽事を考へてゐる間に叔母の仕度も出來た、久代は未だ腰掛けたまゝでゐる、待ちあぐんでゐる迎ひの馬車の嘶く駒の聲がする。

『お町さん』と低聲で久代が呼ぶから傍へ行くと、何も云はずに私の手を握つて無理に笑顔を浮べようとしたが、笑へなかつた、反つて夫れが心細さうな泣き出しでもするのかと思はれるやうな、云はれぬ淋しさだつた、手が少し震るえてゐたやうだ、恁麽お目出度い時にも尙悲哀の蔭はつきまとつてゐるのかと思つた、『久代さん忘れちや可厭よ』と云ふと久代は一寸唇を動かしたが聞えなかつた。

仕度が揃つて皆玄關まで送り出した時にはもう日も暮れかゝつてゐた、あみ上げ靴で往來を濶歩してゐた久代も今は全然子供見度いに叔母に手を引かれて辛じて歩き得るといふ風だ、斯くして人形のやうな令孃は一歩進んで人形のやうな貴夫人となるのである、と思ひながら久代のかげを見送つた。





和歌

三宅花圃女史選

（天）月前雁　名古屋 高取ふさ子

山松をはなれし月の影きよみ
横ぎるかりの數もみえけり

（天）愛兒墓上の鷄頭花を見て　本郷 佐川セツ

まかなくに花さく草もあるものを
ありしなでしこかれにけるかな

（地）折にふれて　神戸 横田壽美

暮てゆく年はわが身に積れども
花にたのしき春もまたれつ

（地）失題　宮城 山形さち子

水あれし川原の穗蓼うらがれて
薄き夕日に蜻蛉飛びかふ

（地）燈映水　在米 なほ子

島かけに夕日はおちておほ海原
あまかたく火の影そうつれる

（人）冬月　大阪 沖ふく子

風ましりふりし時雨ははや過ぎて
おち葉か上につきそこほれる

（人）河舟　相摸 山田武子

夕汐は今みちくらしすみた川
下る小舟の棹おもけなり

（人）霜　山形 町田秀子

梅もどき色づく里の垣根みち
朝風さむく霜おきにけり

（人）農家　福島 遠藤ゆう子

米俵くらにをさめてのきばには
たきゞもつみし心やすけき

（人）霧中鹿　名古屋 瀬木せき

をしかなく野末遙かに日はおちて
夕きりふかし三山へのさと

佳調

宮樹紅　美濃　牧村桑子
れきことのぬさとばかりにみやしろの風にまかせてちるもみぢかな

柳　大阪　杉田はな
玉たれの小簾と見るまに雨やみて風に露ちる青柳の糸

櫻の秋になりたるを　山梨　武井貞子
身一つに花のほまれを集めたる櫻も秋はあはれなりけり

立秋　三河　鈴木道子
暮れぬる朝げの風に露ちりて秋立つ空はものぞかなしき

紅葉　神戸　桑畑たみ
夕日さす峯のもみぢ葉かゞやきて花にもまさるながめなりけり

夕顔　臺灣　林　峯子
となりより蔦り／＼て我庭の垣根にも咲く夕顔の花

折にふれて　對馬　安河いし子
埋火に文殻燒きてあすよりはまた世の人を戀せじと思ふ

炭竈　東京　白島昌子
しづの男か竈つられてふゆかれのやまもときめき煙り立つなり

秋夕見たるまゝを　能登　栗倉一子
柿の實にてりし夕日の影うせていよ／＼白き庭のしら菊

ゆく秋　鳥取　せい子
秋かぜに尾花が袖もやれはてゝかれゆく蟲の聲あはれなり

折にふれて　大阪　清水たよ
月すみてちぐさにすだく蟲のねのいとゞあはれをよそほひにけり

故郷の母よりの便りを得て　大阪　なか子
こま／＼とのたまひつけし玉づさの身にしみ／＼と嬉しかりけり

蟲　神戸　鶴溪女
賤の女が糸くる小屋に月ふけてあはれも深しはたおりの聲

霧　東京　梅月子
蜑小舟いかにわくらん八十島をたちへたてたる波の朝きり

失題　牛込　平塚いと子
苫舟のともし火ふけて時雨する入江にさむく千鳥なくなり

題しらず　大阪　梅村薫花
亡き人の歸ると見つるゆめさめてなほ面影のまぼろしにたつ

失題　姫路　木村白子
少女等は甘葛採ると深山路をこえてゆきけり霧深き朝

落葉　麻布　中村翼
露をおもみ梢はなるゝひと葉より下枝もろくちりてける哉

失題　下野　きく女
芋の葉におく白露のほろ／＼とこぼれて涼し野邊の朝風

菊　越後　伊倉田鶴子
一株の黄菊の花がさかりにてかほりみちたる庭のおも哉

同　同　同
一日のつとめをはりてわが庭にむつくしの菊を見る哉

失題　名古屋　山根しげ子
うれしさはこゝにもみちぬきのこ狩山の紅葉も折りそへてまし

秋の海邊　靜岡　初江子
白浪の寄する汀のそなれ松なれても淋し秋の夕ぐれ

嫁ぎてのち友に　本郷　増淵絲子
秋つられわらひ折りせし古里の山こひしくもなれるけふかな

折にふれて　越後　長澤孝子
かれを思ひこれを思へば今更にうきふししげき世にぞありける

嵐山にて　大阪　近藤ます

紅葉狩けふを暮して歸るさは月と二人や橋渡らまし

歳暮　須磨　有村とみ子

なにとなく心はかりはせわしうてうたもよみいてぬとしのくれかな

失題　群馬　稲島春野

病む母の枕の許に乙女子が神に紅葉の手を合はすなる

友　埼玉　宮倉錦子

敷島の歌のあらす田とも〳〵にすきかへすへき友そ我友

失題　筑前　高松ひで代

父君のやまひみとりて夜もすがらしばしきゝぬ雁のなくこゑ

殘菊　山形　伊藤のぶ

おほかたの草木はしもにしをるれど色もかはらぬ野邊のむら菊

冬月　岩代　木口よし子

冬の夜は火守がよばふ聲ふけて霜になりゆく金山の月

失題　栃木　岡部ゆう子

訪なへばなつかし人の影みえてひとりほゝゑむ破れ垣の菊

失題　東京　上野眞子

ふる郷秋にうけて興がりてふと氣づきしよ吾は早や母

蟲　横濱　大久保とく子

我がせこの衣や縫はん秋ふけてつゞれさせてふ蟲の聲する

菊　赤坂　成富矢須子

妹にはじめて結ひし稚兒髷にさしてほゝゑむ白菊の花

初霜のおける朝菊を見て　名古屋　江原たつみ

しら菊の花のうへにはみえれどもはつ霜さむき朝ぼらけ哉

失題　廣島　松山勝子

うす墨の繪にせまほしき景しきかなおほろにかすむ月のまつしま

折にふれて　名古屋　星野ふさ子

咲きそめし黄菊白菊折まぜてあはれやみふす友に見せばや

失題　攝津　和久かつ子

うらかれし尾花か末に日は落ちて蟲の音細し野路の夕くれ

失題　豐前　加藤こと子

茶の花の露もしらめる朝ぼらけ霜かとみつる有明の月

柿　神奈川　岡部あや子

破れ垣の家のかなたに柿見みて夕日さし入り秋風そ吹く

みなしご　遠江　石塚政子

小夜更けて我が身をしのぶ思ひ出に衣の袖もうるほひにけり

海上霞　近江　中川はる子

青たゝみしきたる如き海のうへにをりゐるくもゝうこかさりけり

初しも　名古屋　高橋かき

むらさめの夜半よりはれてありあけの月にさえたるけさの初しも

逸題　伊豫　渡邊椿子

いつこゆか筧の音のたえ〳〵にひろ靜かなり白萩の庭

歳暮述懐　同　同

戀ならす名ならすこゝにうらふれてまたこの年もくれんとすらむ

失題　土佐　小島ます子

我のほる玉のきさはし一段は一段ことに廣き國見て

紅葉　兵庫　平井榮太郎

嵐山秋きにけらし紅葉はの風のまに〳〵散りそめにけり

暮秋蟲　大阪　久子

くれてゆく秋の木の葉のちりづかに聲もたえ〳〵蟋蟀のなく

失題　大分　安部富士子

三年振り歸りしわれに柿むきて給へる母は年老ひにけり

菊の露　周防　小野木貞子

おく露の玉もひかりて匂ふなり大みしるしの白菊の花

失題　岩代　木下はる子

杣人の斧のひゞきも大杉の梢にくれて夕がらすなく

失題　岐阜　中村梅子

ひとりすむ今におもへばたらちねにありのすさびの昔くやしき

初霜　仙臺　北郷照子

散り敷ける落葉が上にふりつみて初霜ながらふかくみえけり

栗　仙臺　吉田貞子

おき出てとく拾はまし夜もすからふき落されし軒の柴栗

白菊　大阪　中野富子

秋ふかくなりゆくまゝに美しく垣根を飾る白菊のはな

失題　千葉　榎本房枝

亡き妹に黄菊たむけてかへる夕秋の枯野に鳥なきしきる

父上の六十一に神詣して　大阪　八千代子

父上のみとし祝ひの神詣千歳をかけて祈るなりけり

天長節祝　相模　高梨久

かど每に朝日の御旗なびかせて君が千代をばことほぎまつる

失題　大阪　大塚政子

宵の船の幸多かれと磯に立ちて夕日おろがむ漁師が妻哉

落葉　香川　三村琴子

散り積る木の葉の上も木の葉にて踏む音高し山の下道

友の御墓に詣でゝ　本所　木村歌

去りがてに友のおくつきみかへれば手向けし花に置くは涙か

砧　横濱　三木かな子

旅寐する夫を思へば小夜砧打つ手もしどろ亂れがちなり

失題　須磨　有村紫芳

大かたの山のけしきにくらぶればにはのもみぢはかぎりありけり

秋月　芝　智惠子

人見えず車も行かず秋の夜の都大路は月に更けゆく

失題　伊賀　服部春江子

秋の夜や旅なる君を思ひねのまくらにちかくこほろぎのなく

折にふれて　岡山　萬喜子

五年の旅を歸れどうらぶれの妻に泣かん母もなき身よ

秋夜　金澤　寺西華子

一しきり雨戸に騷ぐ雨風のやめはかすかに蟲の音ぞする

失題　茨城　人見溪水

秋の夜の長き別れを忍ぶかな夫戀ふ鹿の聲を聞つゝ

少女の都へ修學にいでたつ折によみて送る　筑前　木村こま

あしからのみねにそひゆる老松のみさをなる人のこゝろともがな

秋のはじめに　大阪　里井柳枝子

花を見て僅にまきしなさなすの朝顏さきぬはつ秋の空

失題　三河　神谷しげ子

蟲の聲月のさやけさ思はれてふしどに入れど夢もむすばず

落ち栗　名古屋　中島とみへ

漸々にねさせつけたる幼な子をまたもさましぬ軒の落ち栗

失題　熊本　山崎くに子

水汲むと美しき花見出けり手入れせざりし井のもとの萩

失題 奈良 豊田晴子
島山の松に夕日の影落ちて濱にくるゝ浪の色かな

初冬時雨 伊豫 越智千代子
秋もはやすぎの板戸に風あれてふゆを知らする初時雨かな

紅葉 山口 末田貞節子
そばの花ましろに咲ける山里の夕日に匂ふはじもみぢかな

川上霧 名古屋 土屋玉枝
早瀬川舟路なれたる身にもなほ棹さしなやむけさの霧かな

秋夜 靜岡 執行きく子
秋の夜は子等が拾ひし栗やきて遠つ御親の勳かたりぬ

失題 岩手 佐藤さと子
はれつるべきする音してたそがれの野路の一つ家秋の風吹く

旅に宿りて 長岡 櫻井とよ
矢叫びの昔語りに夜を更けて川中島の月かたぶきぬ

皇太子殿下 東北御巡幸の御折我が縣御通過ましまし御
召給ふ御汽車を遙に拜して 下總 田中のぶ子
へたてなく世をしろしめす日の皇子のみかけおろかむ今日の嬉さ

過し十五夜を思出して 千葉 吉野りう
戀しさに一人月見る今宵かな君と語りし秋の下道

外國なる兄の許へ 信濃 登美子
こひしさのいとゞ増りぬかりがねは霜夜を分けていづちゆくらん

山路たどりける時 鴻巣 鈴木琴子
みすごしてまた來ん人にゆづらましあまりに若きはつしめじかな

失題 熊本 山崎くに子
秋の夜をなく蟋蟀聲きけば故鄕に居ます母ぞ戀しき

鄕 近江 中川はる子
賤のをかまくさにかりてすゝき原ほにいてたるはすくなかりけり

折にふれて 神奈川 飯田榮子
めづらしき都の君にもてなしと落葉くすべて栗をやくかな

暮秋 大阪 大平晴子
夕日かけ木の間に落ちて門の邊の稻葉の露に秋風ぞ吹く

月のいと清きに亡き夫の愛吟など今更に思ひ出でられて 佐賀 白百合
松が枝の月はありしにかはられどめでにし人は今あらずして

浦雪 香川 三村早子
打ち寄する浪に消えつゝ降る雪のつもりの浦は名のみなりけり

歳暮 濱途 森深溪女
目に見えて行く物ならば關すへてとゞめまほしき歳の暮かな

蟲 大阪 大月美香子
露深かき淺茅の宿の蟲の音は並々ならす淋しかりけり

青年易老 大阪 みどり女
明日ありと心ゆるすなあづさ弓ゆきてかへらぬ月日とおもはゝ

見紅葉忘歸 金澤 安原外子
いへ路をもわすれけるかなそめ渡す立田の紅葉くれなゐにして

落葉 上總 安西琴子
深山路は落葉しきりて杣人か往來のあともとゝめさりけり

失題 神奈川 飯田白露子
いかだ舟紅葉一と葉を打のせて流れゆく方やいづこなるらん

暮秋 宮崎 三枝子

里ことにはつ穂よつりにみたみらがよろこぶこゑに秋はくれゆく

蛙　京都　遠藤孝
牛ひきて賤の童が歸り行く山田のあぜに蛙なくなり

冬の月　京都　高橋ヨシ
雪さそふ嵐はなきてあと清く照る月影のものすごき哉

秋夜　金澤　簑地他美子
なり〳〵に引かぬ鳴子のおとつれて秋の夜ふかく雁なきわたる

失題　臺灣　林華子
高砂の島まで秋は來たるなり紅葉色ます夕暮の庭

川氷　豐前　賀來文子
いさゝ川岸邊の水の動かぬをむすびて見ればうす氷せり

殘紅葉　豐前　賀來作子
こゝのみはよきて木枯ふきにけん一村のこる谷のもみぢば

旅の歌の中にて　伊勢　佐々木らく子
母思ひはらからおもひ旅枕ねられぬ夜半を雁なき渡る

千鳥　香川　三村早子
風寒み里の小川に友呼びて霜夜の月に鳴く千鳥哉

名所紅葉　山梨　歌田秀子
濃きはちりうすきは染てむらもみち風にあや織る賤機の山

折にふれて　京都　上田ふみ
一人ゆく小松ヶ岡に月すみてありしむかしをしのばするかな

秋日和　下野　齋藤まつ子
野の水はゆるう流れて青空に鳶の輪をかく秋日和哉

すゝき　長野　山岸靜江
行きくらし一夜かりねの旅人をまねくに似たり野邊の小すゝき

失題　廣島　池田千代子
空こがす山火事のあかり背にうけて山を下りゆく猿のむれ

紅葉淺深　伊豫　越智千代子
うすくこくたかれの樹々の見ゆるかな秋のもみぢ葉色ことにして

失題　大阪　前澤初芽
おく霜に草のしとれや冷にけん琴ぢにすかりこほろきのなく

失題　大阪　福田その
霜しろき庭のかきねに山鳩のつばさにちりし紅葉みるかな

はからずも富士の高ねをゆめに見て　東京　山本富子
思ふこといつかかなはむうらかたの見るもうれしき富士の夢かな

故鄕よりもの送らせたりければ　東京　清子
おくられし柿のはつなり見るにだに母のなさけの身にぞしみける

折にふれて　京都　いく
しのびねにたえぬ涙と見ゆるかな萩の葉末におもき白露

失題　京都　上田いく
わが思ひ燃える紅葉の一ひらを添へて戀しき君におくりぬ

天長節　高岡　島とち
菊日和ふるき戸びらに身をよせて東の方をあふぎ見るかな

親の恩　小倉　松尾その子
ふくる夜の寒さはさすが冬なれど冬としもなき父母の御めぐみ

紅葉　京都　片岡操子
みちもせにちりしくもみぢつとにして深山のけしきかたりけるかな

懸賞募集 こゝろの日記（第貳回）

〔眞實にして欺かざる日記文の懸賞募集〕——締切十二月二十日

今回更に第二回の日記文を募る、こゝに前回の諸君は勿論、新手の諸君も又其文を惜み給はず續々寄稿あらん事を希望す。抑もこゝろの日記たるや、これを古へに徴せば萬葉集あり、萬葉は時の民性の自然の聲にして、有の儘の心を言ひ顯はしたるもの、誠に不朽の文字なり、これに依つて隱れたる人情を知り隱れたる生活を知り、これに依つて潜める思想を知り、潜める風尚を知る、眞に活ける世の面影にして、時代の心を映せる明鏡といふべし、江湖の諸賢冀くば萬葉の作者となりて不朽に活き給はん事を。取材の方面其他は前回に傚ふて隨意投稿あるべし。

賞金

等級	賞金	人數
壹等	參拾圓	壹名
貳等	貳拾圓	貳名
參等	拾圓	五名
四等	五圓	拾名
五等	貳圓	拾名

▲紙數は長短隨意なれども凡そ十枚位までを程度とす
▲當選したる文は明治四十二年一月十五日發行定期増刊として掲載す
▲賞金は發表の當日爲換券にて送達の事
▲原稿は「こゝろの日記」と表記して女學世界宛の事



短文

甲賞　碁客

東京　清香

電車の轟きも絶えはてゝ月影白く、都大路も更けては流石に寂しきもの「アヽ、、中押とは情けないな、君は如何しても三目置く可きなんだよ」、「ナア大分氣焔だな、どうも餘り打ち込むと腦が混亂してくるからな、時にまう何時だ、そろ〳〵歸へるとせう」、二階座敷の主客の對話が手にとるやうに聞ゆ、やう〳〵終ひになつたらしい、いざとて燭をとり玄關に待つ、北向の板敷へ颯と吹き入る初冬の風は、ふりの袂をそゝのかし、朧げなりし眼は冱えたり、階段の音もやすると耳を澄す、暫し寂寞、軈て又パチーリと音す、胸の奧までひゞき渡りぬ。

甲賞　戚る夜

東京　友子

柱時計が六ツ打つ、日はもうとつぷり暮れてしまつた、立ち上つてランプに火をつけるとパツと高島田に被布の私の姿が、大きく後の壁にうつる、火鉢に手をかざして外を眺めて何か考へる、地蟲の聲が微かに聞えるばかりで、それは靜かな夕である、風もないのに桐の葉の大きいのが落ちた、あゝもう秋は行くのである、今年も暮れる、私はまさに過ぎんとする今年を想ひ、今更壁に映つた十九歳のその私の姿を、なつかしくふりかへつた。

乙賞　嵯峨野の秋

京都　松井衣子

龍田姫の手染の錦うつろひ初めて、嵯峨野わたりいたづらに秋老ひぬ、霜枯れし草を心あてにふみしだき、大堰川に沿ひ行けば、河千鳥の波に遊ぶ椽淋しう、艫のきしる音秋の寂寞を破りて餘韻長く波の上を漂ひ、水を青く渦卷き、楓の老木は幾百年の昔を語る。

平家の公達が、榮華の内に沒落を思はず、龍頭鷁首の船を浮べ、詩歌管絃の宴に耽りたる其の上の事ども思ひ出でられて感深し。

山は緑を紅もて綴ひ、行きつくる所は山相接し、コバルト色の空いよいよ濃く、緑あざやかなり。

小督の墓をおとのへば、今更の如く秋てふものゝ我が胸に迫まるを覺えぬ、墓の側には霜にやけし野菊一本、局がやさしき心の花にうつりしがうれしかりし。

乙賞

夜長

大阪　中村玉枝

井戸端でみゝづがヂーと悲し相になく、夜廻りの拍子木がかすかに響く、けたゝましい犬の遠吠が寂寥を破る、母様のお顔に殘る數々の淋しい苦勞のあとや、日々にまさりゆく頭の白髪が、今宵は、一入目に立つ、二三年前迄は、斯うでもなかつたにと、云ひ知れぬさびしさが胸にせまつてくる、母様の手は餘念なく私の春着の上をたどつて居る、漸くけが終ると、片袖に手を通してあかず眺めてニッコと微笑まれる、綾羅の小袖ならねど、母様のお心の温かさが身にも袖にも滿ち充ちる。

乙賞

あゝ此の夢

布哇　羽田村子

小皺の寄つた婦人が、餘念なく愛らしい友禪の改良服のヘチ孔をかゞつて居たが、ふと其兒が我膝を枕に轉寢して仕舞ふたのに氣付いて、自身の羽織を脱ぎて其上に被せ、足の先の方まで念を入れて包んでやる、其向ふにランプを隔てゝ白髪交りの男が、啣へた煙管に火の消えて居るにも氣付かず、鉛筆片手に小首を傾けて、頻りと机の上を見詰めて居る、それは、一女學校入學迄の教育費、一女學校卒業迄の學資、一結婚費、と書き付けたノートブックで、尚ほ傍らに尋常小學讀本の第七が置いてある、其讀本にはムラ子と書いてあるがそれが私の筆蹟だ、これは如何した譯かと驚くと夢が醒めた。

丙賞

墓參日記

牛込　秋の人

父の命日に、母様が手造りの萩の餅を持つてお墓に行く、落葉の靜な石の道を行くと、言ひしらぬ幽韻が身にしみる、花をさし、水を灌らせ乍ら、胸には佗しい悲しい思ひがわく、和らかい草の上に膝をついて、母様がお拵へになつたのですと胸に云つてお萩を上げる、秋の雲はゆるゆる流れて、落葉は聲もなく散つた、去り難い思ひを殘して立出る苔の道に、うら若い墓參の人にあふ、相見て無言の中に堪らない樣な寂寥を感じた。

丙賞

霜の朝

駿河　天野ふじ子

ポタリ〳〵と落つる雫が、水晶のやうに明るい障子へ映る、排けてみると屋根の霜の融けるのであつた、庭一面に水蒸氣が微かに立昇つてゐる、向ふの田圃ではモミを燒いてゐるが、紫色の煙がすーつと昇つて高く空に消えて行く、霜のふつた日は必らず朗らかな日和になるらしい、雀がチュー〳〵囀りながら樋の中でコトン〳〵と踊つてゐる。

丙賞

冬の夜

牛込　平塚白百合

こほろかと思はれるほどさえた月が山の端にかゝつて、冬の大河は音もなく月影をくだいてゐる、入江に夜どまりの苫舟が一艘、ともし火がしらけてぼんやりと水にひらめいてゐる、川ぞへ五戸の村でつくのであらう、霜夜の鐘が餘韻ながくひゞく。蘆の茂みから水鳥が羽音さむげに舟の火をしたつてよりそふて行く。

丙賞

秋の日

筑前　高松ひでよ

南の縁に日向ぼつこりして、私はお祖母様のおつむりを白い前垂れ掛の膝の上にのせて、はへかゝつて居るまだ短かい白髮を一本一本ぬいで上げてゐると『年を取ると白髮までがいぢが惡くなるでの……』とお祖母様は玉やのおゆだれのとこを拭つてやりながらこんなことを仰有つたが、いつのまにか玉やと一緒にスヤ〳〵と眠つておしまひなすつた、お庭のコスモスの花を渡つて吹くやはらかい風が、軒ばのつるし柿をゆら〳〵と動かす、裏庭に張物して居た　お母様は『もう乾いてしまつた』と仰有る。

丙賞

伯母さん

京都　[illegible]　智子

『お前は一體いくつにおなりだつたい、十九だと、まあ、私よりも背が高いぢやないか、着丈はいくらだい』『さうだれ、別れたのは、たしか十五年前、祇園會のおまつりさわぎの最中にお前が迷子になつたれえ、ホヽヽ、あれからまなしだつたかられ』御寫眞でわづかに覺えてゐた伯母様が、めづらしくも東京からかへつていらしたので、喜んで迎へると、こんな事を仰有る。

半年振り

前橋　渡邊松子

夏人の許しが出たので長野の共進會に行つた、午後の七時頃着いたが、共進會場はイルミチンシヨンで眩しく輝いて居る、豫て約束して有つたから親しい友の宅をさして行つた、半年振りで逢つたので、嬉しくて互によく挨拶もせず、手を握り合つて二人共膝に露を帶びた、夕飯を終へ、色色な話をし、十一時床を並べて寢に就いたが、眼が冴えて眠られぬ、歌でも作らうと思ふても何もまとまらぬ、十二時、一時、二時と過ぎ、三時頃より眠つたが、五時には目が醒めてしまつた、電燈の光を浴びて自分の床の中に寢て居る友のいとし子を見ると、殆で天使の樣な顏付をして居る、其愛らしいこと、自分もこんな子供が有つたらと沁み〳〵思ふて寢顏を眺めて居る内に、電燈が消えて雨戸の隙間が明るくなつて來た、子供は目をさましてにつこり笑つて、おばさんと確り抱き付いた。

ゆふべの嵐

札幌　伊佐敷清子

一片の雲は見るまにひろがり、それに風さへ加はりて、空一面に黒布もておふた樣になつて來た、今宵も亦雨かと縁側に腰打かけし母様と二人

で空を眺めて居ると風はだん／＼と荒び、大つぶの雨ばら／＼と降りだし、遠くには雷が聞える。母様を促し、内へは入つて雨戸をくる。雨風はいよ／＼烈しく、物凄い程戸をたゝく。いつもよりはやくふしどに入る。あくる朝目さむれば、昨夜の嵐は夢の様、青空高く、雀の聲も豊けき小春日和、さりとて、林檎の枝の折れたる、母様の培ひませし菊の、姿のいたはしや。

夕暮　　大阪　しづえ

夕飯を終つて例の通り火の見へ上つてみる。この寒いのに、火の見へ上つてゐる様な物好は、見渡した所一人もない。

水色に澄み切つた空に、ウッスリあらはれた月をかすめて、鳥の一とむれが北へ飛んでゆく。

お隣のお庭の桐はスッカリ落葉して、見違へる程さびしくなつた。

梅田で汽笛がなる、つゞいて轟々たる響と共に、汽車の烟が西になびく。

監獄署のアーク燈が一齊に點る、と云ひ合せた様に、近くのお寺で入相の鐘がゴーンとなる。あたりはだん／＼暗くなつて行く。

夏と秋　　芝　和田すみ子

今日は朝から大そうよいお天氣で、お隣りでも、うちでも、庭にしこたま洗つた着物を干した。日がだん／＼照りつけて來ると氷屋の小僧さんが忙しさうに往來をかけまはる。家の中ではあつちでもこつちでも「オヽ暑い／＼」と盛に團扇をあほつて居る。自分は例のごとく縫物を持ちだして一生懸命に針をはこばす。「どうしても今日のうちに縫ひ終はらねば」と思ふと、暑いのも忘れて又ひとしきり針を動かす。姉様もまけずに早く縫て居らつしやる。祖母様は明るい所に座をかまへてときものに餘念がない。やがて思つた通り縫ひ上げた。時計は四時を打つた。自分はこれで心もからだも涼しくなつた。

これは夏休中の日記の一節。その團扇もどこへしまつたやら、今はもう秋である。

虚榮心　　淺草　雪村操

丁度學習院女學部の運動會の日で有つた。皇后陛下と妃殿下の御成りと聞いて御道筋は拜觀の老若男女が集まつてゐる。妾も思はず足を止めた。折柄二頭馬車ゆるやかに、何れ高貴の姫様方であらう、御兩方共麗はしい御召物、思ひ切つた廂髪に、巾廣のリボン、指にはめられたダイヤの光はあたりまばゆきばかり、噫妾も彼の様な身に成れたらと我を忘れて恍惚と見てゐると、耳元でアイタヽと言ふ。驚いて我に返ると、妾は人の足を踏んでゐた。ハッと思ふともう顔から火が出さう。詫もそこそこ群集をぬけ出で我家に歸へつた。

最愛　　下關　兒玉ひさ子

今年、二つになつた妹が、まるで人形の様に可愛い／＼口元をして寐て居るので、おぼえず、そつと「キッス」をしたら、ポカッと目をさまして、嫣然とした。

おなじ服裝　　京都　上田いく子

あゝお兄さんはとう／＼死んでしまはれた、忘れ形見の美穗ちやんはや

つと未だ三つ、パッチリした目、しまつた口元は、兄を生寫しである「美いちやんのお父さんは？美ちやんのお父さん何處？」或日彼方に來給ひし一將校を見て、「やあお父さんおかへりだ」とかけよつたが、おかほが違つてゐたので、變んな顏をして、かう、むつかり出した、あゝと私は胸がせまつた、あたりの人も「そなたのお父さんは遠い〳〵かへらぬ旅路へお立ちなされたことはしらないのか、おなじ服裝のかたを見てあのおやさしかつたお父さんを思ひ出したのか、――あゝお兄さん」、草葉のかげのみ佛はこのいたましい子の嘆う聲を 何とお聞きなさるだらう。

無邪氣

羽前　秋庭園子

私の妹に今年やつと四つになる千代といふのがある、今日も學校のおさらひをしようと思つて机に向つて居たら、何時の間に來たのか、千代ちやんは私の机の下に散らして置いた寫生帖を可愛らしい手で むざ〳〵碎いて居る、私は無理とは思つたが「千代ちやん、 そんなことして何うするの、折角姉ちやんが書いたものを」と少し聲高に叱かると、めそめそ楓のやうな手で目を蓋ふてなき臥した、私は可笑しくもあり、可哀さうでもあつたが、そしらぬ風をして再び讀み始むると、こんどは碎いたのをまま〳〵に付けようとして、とう〳〵眠つてしまつた、私はその愛害しい寢顏を見て寫生帖のことはすつかり打忘れて了つた、あゝ無邪氣なる妹は如何んな夢を見て居るだらう。

立腹

静田　新村基子

「おばさん今日は、」退屈晴しにお向を訪ふた、「呀被入い、さあお上り」と例の輕い調子、「よいお天氣ですれ」と緣に腰を下すと、「私もう今日といふ今日は忌々しくて〳〵」と舌打さへ交へて叔母さんひどく御腹立の樣子、「まあどうして」と思はず眼をみはれば、「何れあの苦學の乳母さ」と凝と私を御覽になる、「えゝあの感心な」と言ひかけるを、「私もさ感心だと、思へばこそ、食べ物なぞも不自由だらうと、れえ餘計な麩し汁して、今日來た時に、丁度お汁粉の出來てゐたを幸ひ、どうです一杯と勸めるとれ、まあ聞いて下さいよ、「サンキユ」とか何とか云つた儘駈け出して行つて了つたぢや有りませんか、此麼な氣だから、あたしや腹が立て〳〵、もうむしや〳〵して來たのよ、れえ餘りでせう、「有難う」とか何とか云はれゝば、食べて吳れぬ迄も氣持の良いものを、早口でよく分らなかつたけれど、私のまあ考へでは、多分「嫌だよ」とでも云ふ符牒だらうと思はれるの、本當にもう憎らしいから、乳も何も斷つて了はうと思つてゐるの」と自暴に前髮をおかき成すつて、私に加勢をお求めらしい。

朝のながめ

美濃　楠くに子

まがきの朝顏大かた咲きつくして、昨日今日は子か孫ばかりなるいとささやかなるが二輪三輪淋しげに咲き殘れるはいと哀れ深かり、東雲の空明け行くまゝに、物ひさぐ聲々巷に滿ち、遠く近く聞ゆるはいとたかし、しばし目枯れつるほどに、園の芭蕉いたくたけ伸び繁り、いと生ひ〳〵しきが秋風に窶やつれたるさへ眺めをかしきに、まいてそが下に去年挿木なしゝ白薔薇の花ほゝゑみ出でたるはいと愛らし、あはれ美しき此花！人知らぬ木隙にほうむられんと名殘惜しければとて、先づ姿がかざし

にさしつ、今一花とりて妹が文机の花瓶にと思ひ手折らんとせし一瞬、情れなき風吹き來て、二片三片衣の袖に散りかゝりぬ、今日なかしくも亦なか〳〵に哀れふかきながめかな。

都の妹へ

牛込 高木きん子

靜ちやん御無事？、私はれ今それは〳〵靜かなところに居るのよ、お山へ登るとれ、いろ〳〵な花が奇麗に咲いて居るの、赤い花ばかり澤山あるところは、まるで靜ちやんのお人形樣を飾るあの毛布のやうよ、そしてれ、秋の七草といふけれど、百も二百も種々な草があるの、之れは靜ちやんも知つてゐる女郎花よ、よく押せて居るでせう、歸へりには栗をお土產に持つて行きますよ。

手紙

麴町 澁谷米子

夫は軍隊と共に韓國の人に成て了はれた、其も私が嫁てから僅か二日目の午前、如何に國の爲とは云ひながら、悲しくて〳〵一時は茫と殆で夢でも見たかの樣、其れからと云ふものは、每日々々思案のみ、まだ話もろくにせず、氣心もよくは知らぬ。

暫くすると從軍が着た、云ふ迄も無い夫の安着知らせ、それより十日計りの後又待ちに待つて居た手紙が來た、其れは〳〵嬉しい事計り書いてある、然かも風俗論まで添へてある、常には左ほどに思は無かつた手紙が此頃では實に有難いものとなつた。

天長節

群馬 福地隆子

チン〳〵と玄關の格子戸が開く、おばちやんと呼ぶから「ハイ」となたと言つたが、返事がない、そと襖を開けると、プーンとよい香りがして、演の蔭に友禪モスリンの元祿袖に海老茶のお袴を短くはき、赤い靴下を見せて兩手で顏をおさへて立て居る見るから愛らしい姿、花ちやんマア美しい事、天長節で學校へですかと訊くと、ハア行て參り升とニコ〳〵しながら出て行く。とき色のリボンはうつりよくヒラ〳〵する。

或る夕

神戶 喜代子

木犀の薫る御庭の方から床しいヴアイオリンの音が聞えて來る、ちつと耳を澄して聞くと、それは御好きな故鄕の小川！、餘り懐しいので、知らず〳〵萩の袖垣の邊を傳つて、いつのまにやらヴアイオリンの主なる勝世樣のお庭先迄來て仕舞つた、曲は高く低く何だか胸の底へひゞく、「あゝあの小川あの小川夜每の夢に流れ行く……」、月はいつしか松の梢をはなれてボンヤリと輝いてゐる。

友の墓

福井 藤田かほる子

苔むすおくつきに、川原撫子一本、哀れにしほれて見るかげもなし、たづさへ來りし活々したる白菊を、取り替へてわれはひざまづきぬ、おゝ友よ！、眠りませる年子の君よ！、

われは今、姉とも睦みし君と別るゝの止むなきに至りぬ、慈愛厚き父母親しき君、さては、溫き眞情もて、迎へくれし、此故鄕、此山河に、今

離別の悲しみは來りぬ、われは、見も知らぬ、都の空に嫁ぐなり、君よ、さらば眠りませ、安らけく、……さらば君よ、永久に安らけく……●木枯一陣木立を動かして夕暗の空に消え行く、われは泣きぬ、暮も動けと。

アカの出産

大阪　秋菊女

歩むと左右にぼと〳〵動いて、さも重さうなアカのおなかよと思つてゐたら、おひる前から縁の下でキヤン〳〵と泣いて居た、出産期が近づいたのであらうかと人間に變りない苦痛を察して腹部をなでゝやると、さもうれしさうにヂツと顏を見る、一聲キヤンとないたとたん一疋がうまれた、全身薄い透明の皮で掩はれて居る、アカは甲斐〳〵しく口で皮をとるやら、へその緒を切るやら、なか〳〵忙がしい、此世の空氣を初めて呼吸すると同時に、頻りにあちらこちら頭を動かしながらもう食を求めて居る、今更天のなさる妙工には驚かれた、暫くして又一疋かくして都合四疋が無事にうまれた、親子の愛情は人間と更に變りはない、然し之が大相當に成長してしまつたらどうであらうか、時には敵視してかみ合ふ事もあるではないか　之がさすがに畜生であるよと思はしめるのである。

朝の漫歩

前橋　渡邊松子

漸く寢醒した樣な物靜な田圃路を漫歩むと、淸々しい朝風がそよ〳〵吹いて來る、思はず胸を掻き合せながら佇んで居ると、きぬ〳〵を叩つ樣なきり〳〵すの鳴き聲が尾花の蔭から聞ゆる、足許から吃驚した樣にこうろぎが飛出す、芋の葉が搖れてダイヤモンドの樣に輝く露を惜げもなく落す、千町田の稻は、滿作の穗波を打つて、御代萬歳をさゝやく樣な音がする。

小春日和

姬路　尾田四鶴子

暖い昼下りの秋の陽を脊に、私は日當りのいゝ縁側で裁縫をしてゐる、鋏を使ふ毎に結び付けてある鈴がチリン〳〵と鳴るのを玉が聞きつけて自分の首の鈴もチリン〳〵と鳴らし乍らきた、そして私の前で、前足を大きく伸して、仰向く樣に欠伸をしゴロリと横になつて、次第々々に眼を細うして寢て仕舞つた、日光は氣も溶ける樣に肌に泌み込んで實に心持がいゝ、廢通ひのがた馬車の喇叭の音が遠くで聞えると、柿の樹の梢で思ひ出した樣に百舌鳥が啼き出した。

軒に干してある大根は餘程萎れ、畑に殘つた種茄子は黑濟老茶に光つてゐる、高く澄んだ空にはうらゝかな聲して鳶がほう〳〵と鳴いてゐる、軒端に吊るしてある串し柿は乾ききつて、影を長く障子の桟に曳いてゐる、何處かで長閑な牛の鳴き聲が聞える。

悠々自適

埼玉　大澤光子

世の幾多の悲慘なる出來事は多くは境遇の束縛を感ずるから來るのであらう、之れよりして己が地位を嫌忌し、上を責め、天を怨み、果ては自暴自棄に陷るのであらう、然れ共是れは境遇に服從する事は知らないのではないでせうか、誰でも自己の地位境遇に願嘉せず、唯是れに服する所以を知るならば、たとへ陋巷の中、破屋の下なりとも必ず盡きぬ快

繰があると思ひます。

クリスマスの送物

仙臺　北郷照子

桐の葉が散る頃からとりかゝつて 編み上げた毛糸のシャツと靴下とを紙に包み、別にブリキの箱へ、バタで煎つた御砂糖をからんだ南京豆一升餘を添へ「クリスマス御目出度う、兄様何うぞ何時も御身體をまめにして、まめに御勉强遊ばして頂戴ね」、と書いて小包で出した、兄様はさぞニコ〳〵あそばすであらう。

思ひ出

本郷　原弘子

私の母は、もう天國へ逝かれたのです。冬は私が母を思ひ出して、悲しみの種となる季節なのです。 おう忘れもせぬ去年の冬の事、私は朝から降り續く雪に濡れて學校から歸つたのです。しかも侘い心で……御友達の繁子様が内の抱へ車に召して御歸りになるのを羨ましく思ふの餘り、自分の境遇を呟いたのです、「只今」と私が力無い聲で言ひますと、床に臥され、獨り淋しく私を待ち遊ばされた母は、 目に一ぱいの涙をためて「おー寒むかつたらう早く御あたり」此の優しい情深い母の詞を聞いた私は、假令一時心にもせよ、 何うしてあんな心になつたのだらうかと、思はず聲を立てゝ泣いたのです。 けれども今の自分の境遇はどうか、もう此の熱い母の愛情に浴せ得ぬ不幸な孤兒なのです。

午後の一時間

四谷　中村さと子

だん〳〵とさむくなるばかりなので、母様は御座敷で英ちやんや父様の綿入の御仕立に忙がしい、 兄さまは御机に向つて 本を見て居らつしやる、枝折の房に小猫がヂヤレテゐる、 まるで小春日和のやう、 私は御友達が二人入らしつたので色々と御話を初める。

可愛いゝ姉

廣島　長尾勝子

挙子様には、今年五ツの濟子様と云ふ、 まるでお人形様のやうな、 可愛いゝお子さんがある、昨日、 又、 男子を產んだから喜こびに來て呉れとの事、早速伺つた、 見れば誠に玉のやうな坊ちやん、 奥から、濟子様が、かけて來て、鈴のやうな目をみはり「あたい、 もー姉ちやんよ、ねえ、かあちやん、赤ん坊姉ちやんが抱つこ」と楓のやうな手をひろげられた。

田舎の夜

宮城　大町さだ

月は愈々冴て限なく下界を照して居る、足頃山のボーッとしてゐるのは恰度蒲生が濱から金華山を見るかの樣である、向ふの竹籔の間から漸く灯がちらつく、何處からか藁打つ杵の音がトン〳〵と微かに聞える、 冷たい風がサッと衿元を掠めて行く、何時もの子守歌が今宵は又一層泌み泌みと聞える。

讀者文藝　投書歡迎（締切四十二年一月十五日）

▲和歌（一人一首）

▲短文（三百字以内）

▲小說（二十枚以内）

▲日記文（十枚以内）

◎和歌、短文は必ず端書を用ゆる事◎字體は楷書にて鮮明なるべき事但し鉛筆にて認めたるものは採用せず◎住所姓名は必らず原稿に記しおく事◎投稿は博文館女學世界宛の事……

◎賞品

▲一等一圓▲二等五拾錢▲三等參拾錢（圖書切符）▲小說と日記文は詮考の上相當の謝禮を呈す

毎月一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内（定刊數　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）	十二册
郵税 一册	二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	……	五十五錢	四十七錢
半頁（卅二行）	二十三圓	十九圓五十錢	十六圓五十錢	十三圓五十錢
一頁（六十四行）	四十五圓	三十八圓	三十二圓	二十六圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十一年十二月一日發行（第八卷第拾六號）

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

豫告

博文館發行 十五大雜誌 新年號

第十五卷

太陽

毎月一回 一日發行

●大判（四六判二倍大）本文紙數二百五十六頁
◎寫眞版 光澤紙四頁一色刷二頁 普通…十二頁 ◎外に本文中寫眞版數十箇挿入す
▲正價一冊金參拾錢郵稅一冊（本號に限）三錢五厘

▲空想的成功熱より覺醒し、輕浮なる教訓談に飽きたる新時代を代表するは本誌也▲世界の縮圖は本誌也▲世界の雜誌界に帝國を代表するは本誌也

◎時事評論（不偏不黨▲遠慮なき評論▲未知の新事實多し）
◎人物月旦（解剖刀の如し▲顯微鏡の如し▲惡罵に非ず▲阿諛に非ず）
◎論說（新時代を代表する名家の說を集む▲日本論壇の最高府也）
◎文藝（新興文學の代表▲清新の趣味を發揮す▲文壇の木鐸）
◎學藝（月歩の新知識を蒐す▲科學的知識を養成する最良機關）
◎雜纂（幻燈の如くパノラマの如く社會一切の事象を網羅する小天地）
◎口繪（寫眞版の精巧印刷の美麗材料の豐富なる無比の特色也）
◎懸賞寫眞……（第一號の締切は十二月五日）

▲新年大附錄

史的悲劇 三七信孝（山崎紫紅）
喜劇 まぜつかへし（巖谷小波）
劇界近來の大傑作

第二巻

冒險世界

毎月一回
五日發行

◎新年號に限り一月一日發行
●大判(四六判二倍大)本文紙數百二十八頁
●三色版口繪一枚●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十五錢郵税一冊(本誌臨)二錢

新年大附録

●全世界英雄番附
‖冒險世界讀者投票撰定‖ 本誌八倍大 彩色極美麗

冒險世界は健闘男子の戰友、英雄的の一大壯快男子である。猛進！ 猛進！！ 大猛進！ 本年空前の大發展を爲せし本誌が、來春劈頭、如何に破天荒の光彩を放つかを見よ！

●古今東西英雄豪傑逸話 本誌十六頁増加、英雄の面目躍如

第四巻

幼年畫報

毎月一回
五日發行

◎新年號に限り一月一日發行
●菊判美麗畫本 ●石版極彩色刷十六頁
●活版寫眞入二度刷十六頁●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢郵税一冊(本誌臨)一錢

見いさいな、見いさいな、みんな來て見いさいな、お正月のお祝いに、皆様おなじみの、幼年畫報は美しい、お衣服を着飾つて、お目出度うとまゐります。表紙の奇麗な、畫話のおもしろい、書き初もあれば、羽子の遊びや風あげ、お神樂も來れば、お馬もはしる、お伽噺もおもしろい、お菓子を食べるより、どんなに愉快で御座いましよ、お菓子わお腹の毒になる、畫報わお腹の爲になる、みんな來て見さいな。お正月のお年玉、お年玉にわ●●鷄合せ、切り抜ばバラバラ！ 組めば大きな鷄がコケコッコーと鳴きましよう『オヤ坊ちやんお目が覺ましたか、お待かねの畫報が來ています。

新年大附録 四六判八倍大
鷄合せ
さゝなみ案
けいしう畫

第十五卷

少年世界

毎月一回　一日發行

●菊判本文紙數百三十六頁（內十六頁着色二度刷）●石版數色刷一枚
●原色寫眞版一枚
●光澤紙寫眞版二頁挿入
▲正價一冊金十錢　郵稅一冊一錢五厘

本誌は現今少年雜誌界の思潮に卒先して、內容外觀の改善發達に勉め、今や第十五卷を迎ふるに際して、空前の大發展を試みんとす、即ち◉表紙 は杉浦非水岡野榮兩畫伯の名作にして、光輝燦爛たる

新年大附錄　日本十五少年双六　巖谷小波立案　尾竹國觀揮毫
極彩色石版四六判十六頁大

栴檀章の下二名の少年は何事を談ずるか◉口繪標本畫 は本誌獨特西野氏の實寫圖にして、主として世界の奇動物を集め◉水彩畫 には和田橋本中澤の諸氏每號交代執筆すべく偉觀舊年の比にあらず。

記事　主筆小波氏は 松實太郎 と題して、十六頁に亘れる長篇お伽噺を艸し 桂舟氏の挿畫 又大に振へり、十五歲當時 と題するは本誌の年齡に因みて上は 貴顯をはじめとし當代著名の大家の十五歲時代の感想を記し岸上博士 岡村博士 松村博士 鶴田博士上田博士など皆各專攻の學術を平易に說かる。

少年欄 には每號二三種宛の懸賞問題 を出し益々其發達を圖るべく、時事問題の解釋を丁寧にして、社會に接觸せしむるに至るべく、寫生習字等の募集も怠らざるべし。

第四卷

少女世界

毎月一回　一日發行

●菊判本文紙數百廿八頁（內十六頁着色二色刷）
●石版口畫二頁 ●光澤紙寫眞版四頁
▲正價一冊金十錢郵稅一冊（本號別）一錢五厘

新年大附錄
榊原蕉園女史筆
少女年中行事双六

縱二尺六寸横一尺八寸の大判に極彩色を施したる美麗なるもの雙六として面白いばかりでなくなほこの上に一年中の繪ごよみとして壁に飾るやうに出來てゐます

▲お伽小說 六の花片　巖谷小波作
△感心な女學生……宮川壽美子
△少女冒險小說……押川春浪
△とりどり物語……武田櫻桃

▲フランスの花の少女　文學博士姉崎正治
△一番鷄……木村小舟
△少女小說……西村渚山
△寄宿舍の新年……永富小[illegible]

この他、面白くて有益なる

●かるた會（彩色口繪）……鏑木清方筆
●あさ日（同上）……吉田ふじを筆

◉紙數を增し、少女會報を廣くします

△好きな少女……石橋思案
△紀念のピン……沼田笠峰
△山茶花の作り方……白崎やなの
△雪中松……佐々木信綱
△とりどり草……竹貫直人
△懸賞編物……當選者

記事頗ふる多し

▲少女世界の歌　小波作、鐵笛曲　▲少女世界の徽章

第九巻

女學世界

毎月一回 一日發行

◉菊判本文紙數二百八十頁◉毎號美麗繪葉書
◉寫眞版（光澤紙四頁 普通…四頁）◉石版（三色版風景畫 鉛筆畫毛筆畫）
▲正價一冊金貳拾錢郵税一冊（本誌）貳錢五厘

新年大附錄

水野秀方畫
双六應用
新撰名媛かゞみ
大判極彩色
紙類の美影

（內容）

▲婦人が一人前となる能力を試驗する機關
▲內親王殿下新春の御すさび
▲新時代の教育を受けたる新奥樣の面影
▲虛榮の奴となりし女の音づれ
▲數奇の生涯を渡りし日本の名媛
▲私が見てつく〴〵呆れたる事實
▲嫁と姑の反目日記
▲有栖川宮家と德川公爵の御家庭
▲學問を如何に處世に應用すべきか
▲上流社會の松の內
▲人生五十年の追懷
▲頭腦鍛錬に就て苦心したる我が經驗
▲新年の寄宿舍生活
▲小間使の書いた田舍富豪の生活日記
▲禮法家の見たる女學生の動作
▲幸福なるべき結婚を十二回取逃せし女
▲最高學府を出でたる女の行衞
▲處女時代に於てのみ見らるる美點

第十二巻

中學世界

毎月一回 十日發行

◎新年號に限り一月一日發行
◉菊判本文紙數二百四十頁◉毎號美麗繪葉書
◉寫眞版（光澤紙…四頁 普通…四頁）◎（水彩畫、ペン畫 鉛筆畫三色鉛筆畫）五頁
▲正價一冊金貳拾錢郵税一冊（本誌）貳錢五厘

新年大附錄

●私の經過したる學生時代

現時學生崇拜の標的となれる十有餘名士の談話●

▲新年號の本誌はその編輯の體裁に於て、內容の記事に於て面目一新せらるべし
▲劈頭に二箇の新工夫あり、其一は中學世界メダルの製作なり。他の一は中學世界の社會的活動なり
▲この二箇の新福音が事實となりて顯はるゝの時學生諸君の血と感興とは、泉の如く湧くを禁ずる能はざるべし
▲乞ふ新粧の中學世界一部を手にせよ。

●短篇小說數品

作家は新進者の粹、四十二年文壇の新粧に與る所あるべし●

（內容）

▲卷頭評論…▲修養…▲講話…▲學校々話…▲談叢…▲受驗界…▲文藝…▲繪畫…▲運動界…▲衞生顧問…▲苦學顧問…▲學事顧問…▲英獨語學…▲懸賞文の募集…▲繪葉書の募集…を始めとし面白き編輯上の新趣向は、機に應じて續々顯はるべし。

第四巻

文章世界

毎月一回十五日發行

●菊判本文紙數二百四十頁
●寫眞版（光澤紙…四頁 三色刷…二枚） ●石版刷水彩畫二枚
▲正價一冊金貳拾錢郵稅一冊（本國に限）貳錢五厘

▲論説 朝野の名家大家の高論卓說を收む◎文章界の新問題及びこれが評決は獨り本誌の此の欄に依つて知るを得べし。

▲創作 短篇小說、小品、紀行文、寫生文、史論、時論、詩歌俳句等、何れも中央文壇に名ある人の新作を掲ぐ。

▲飜譯 西洋近代の新作にして、最も價値あるものを選擇し、可及的原作に近き國語より飜譯すべし。

▲談叢 時事に觸れたる諸種の問題について各方面の大家の高話を聞くべし◎座らにして大家の風丰、口吻を偲ぶに足るべし。

▲月旦 各方面の文學者、文章家、もしくは文壇の新運動に對して徹底せる評論を試むべし。

▲時評 中央文壇の新思潮 新機運は勿論、月次の新作について責任を以て批評の筆を揮ふべし。

▲文章講壇 専ら文を作る上についての心得を說くべし◎時評の一般文壇的なると兩々相俟つて本誌の主張を見るべし。

▲文範 東西古今の名文を擧げて註釋を施すと共に批評すべし。

▲評釋 文章詩歌俳句等各其の道の大家に囑して懇切なる評釋を揭ぐべし。

▲資料 名句新選、詩語、雅語、俗語、科語其の他諸種の難解なる熟語の解釋文章顧問等此の欄に收む。

▲評傳 東西古今の文豪を傳し且つ評す◎執筆者は論壇の大家。

▲文叢 文叢は滿天下の青年文士の錦心繡腸の文字を集む◎其の選者は親切丁寧を極む。

（◯新年大附錄（四十頁）） 島崎藤村、高濱虛子 正宗白鳥 小山內薫 田山花袋の諸氏が苦心に成る新作を收む。明治四十二年文壇初頭を飾る最も價値ある讀物也。

第三巻

英語世界

●英國皇居ウヰンゾル城（口繪） ●齋藤秀三郎氏筆蹟（寫眞版）

毎月一回五日發行

◎新年號に限り一月一日發行
●菊判本文紙數 六十八頁
●光澤紙寫眞版 二頁
▲正價一冊金拾錢 郵稅一冊金壹錢

◎（譯註）次郎叔父さん
◎（講義）コナンドイル
◎和文英譯作例
◎英國の新年
◎新年の會話

熊本謙二郎 今井信之 武信由太郎 平田喜一 高橋一知

◎商業用英語
◎イデオム研究
◎慣用句の使ひ分
◎士官校試驗詳解
◎解釋の栞

今井友次郎 佐川春水 前田忠義 深澤由次郎 橫地良吉

●偉人の戀物語（譯註）
●一高英語評判記
●ナショナル講義
●初等英語講話
●英字新聞の研究
●中學校內の英語
●西洋笑話倶樂部
●懸賞文發表
●英語慣用句の形式
●家庭內の少年英語
●英語珍世界
●自然と科學（譯註）
●英譯君が代數篇
●英文書葉書通信
●讀者ノートブック
●懸賞新課題

▲新年大附錄＝ペルシヤ双紙……長井氏最譯註▼


脳病
神經病全治良劑
健脳丸
醫學博士島村俊一先生有効御証明
迷ふ勿れ脳病患者
脳病藥の覇王
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持藥として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき脳充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記憶力を増進する特効あるは獨り健脳丸のみである
本舗 大阪市心齋橋 東京市箔屋町 丹平商會藥房
効能
脳充血
脳膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円 郵税 十六銭
三週分 壹円廿五銭 仝 十銭
二週分 八拾五銭 仝 六銭
一週分 四拾五銭 仝 四銭
三日分 貳拾五銭 仝 貳銭
一日半 金拾五銭 仝 貳銭

女學世界
(明治四十一年十二月一日發行 每月一回一日發行) 第八卷第拾六號 (明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)

(定價金貳拾錢●郵稅貳錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版64
明治41年11月（第8巻第15号）、12月（第8巻第16号）

2009年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3622-3　C3321